

男の血

第三部 イン・ザ・ゾーン
(承前)



……どうだ、売女——この雌犬——どうしようもない哀れなビッチめオマエは打たれるだけだイクまで打ちすえてやるイクんだもう止められないもう一発血が出るまで鞭をくれてやる。……ベクターの目の前一面、目から膝まで今夜のスクリーンを満たす光があふれ落ちる、地下牢の拷問台に縛りつけられ生贄の甘美な映像——苦痛に歪む女の顔、絹のガウンの下で驚くほど突起した乳首は、苦痛の悲鳴が偽りのものだと言っている——ビッチ！こうされて嬉しいんだな……いまレニはいつもの真面目くさった妻ではない、弾圧に力を得る闘士でもない、これはマルゲリータ・エルトマン、今夜ばかりはおれの下に抑えつけられ、差し込まれて、ぐいっと、もう一丁、そうだ、ビッチめ、いいぞ……

後になってから、その晩のタイミシングに思いを巡らせた。変質的好奇心というのか。妻の最後の生理から二週間後だった。その夜、マルゲリータの映画を見終え、ペニス脈打たせたまま、ウーファ劇場からフリードリヒ通りへ出たとき、ベクターの頭のなかにあったのは、他のどの客とも同じ考えだった。早く家に帰ってやるんだ、どういふ女とだっていい、ファックして屈従させてやる。……エルトマンはたまたま甘美だった。他に何人

1 上巻の最後から続けて読む必要がある。

の男たちが『夢魔』のスクリーンから同じイメージを持ち帰り、妻と呼びたくもないデブ女を抱いたことだろう。その晩、エルトマンの映像は、いったい何人の影の子供をこの世に送り出したのだろうか？

レニの妊娠の可能性を、ベクターは現実問題としてまったく考えていなかった。だが振り返れば、あの夜、『夢魔』を見た夜以外に、イルゼの受胎はありえない。ふたりの間に夫婦の営みなどものは滅多になかったから、日にちの特定は容易だった。そういう次第さ。映画だよ。きまつてる。彼らが、映画から、おれの子を、作った。そうだろう？

屋根に上葱を乗つけたようなニコライ教会堂の地下室で、今夜ベクターは、流木を燃やして暖を取りながら波の音を聞いている。大きな観覧車のスポークの間で星が瞬いている。それが、蠟燭の炎のように、就寝前の煙草の火のように、はかない光に彼には見える。浜辺に寒気が凝集する。子供達の亡霊が——白い口笛となり、流れ出ない涙粒となって、壁の向こうを吹き抜ける風に伴う。色あせた縮緬紙の振れたのが地面を舞い、彼の古靴をかすめてゆく。空にかかる細い三日月の下で、風に舞うほこりが雪のようにきらめいている。波を這わせるバルトの海が、そいつの母なる氷河のようだ。ベクターの心臓が、その緋色の管網の中でヒクッヒクッと収縮する。その運動は、期待に満ちて伸びやかだ。彼は待っている、イルゼを。映画の子を。夏のこの時期になると毎年かならず、ここヘツヴェルフキンダー^{キナ}に帰ってきた子を。

割れて砕けた回転木馬の屋根の下には、二本足か三本足の馬と、錆びたギア装置。あいだで眠っているコウノトリの頭が、気流と黄色いアフリカに震える。一〇〇フィート下、岩や乾いた窪地の日射しの中を、黒蛇たちが優美に這いすすむ。地面には灰色に汚れた巨

2 意味は「十二人の子供たち」。730と731ページの地図におよその位置を書き入れたが、ペーネンデからの直線距離

大サイズの岩塩の結晶。それが風に吹かれて歩道の割れ目の中に、タウンホールの正面の、
廊のように大きな目をした大像のしわの中に、橋の上のヤギのヒゲに、その下の怪物の口
に、まわりついている。豚のフリーダは新しいねぐらを捜している。風に悩まされずに
うたた寝がしたいのだ。漆喰でできた魔女が、胸と尻に金網を露出させ、かまどの近くに
屈み込んで、腐食したヘンセルをつつこうとしている。ヘンセルは永遠の囚われの少年。
グレーテルの目は大きく見開いたまま、けっしてまばたかないが、塩の結晶で重くなった
その睫毛は、風のゲリラが海から上陸してくるたびに瞬かれる。

ここに音楽があるとすれば、それは風によるストリングスとリード・セクション——派
手なシャフフロントにブラクタイをつけて起立した木管楽器の奏者らが海辺沿いに並ん
でいる。打ち砕かれて潮の皮膜に覆われた防波堤の前には、礼服のオルガン奏者がいて、
そのラングエットとフルー管で共鳴する亡霊たちをそこに集め、形作る——すでに受け入
れられた者のリストに入り、一度二度こうしてゲートをくぐった六万人の、その淡い燭光
の記憶を、粒子であれ波であれ彼らのあらゆる痕跡を。きみもツヴェルフキンダーの休日
を過ごしたことがあったかな？ 父親の手を握って乗り込んだリュールバック発の列車の中
で、自分の膝を見つめていたりしたのかい？ きみと同じに三つ編みの髪をし、アイロン
のかかった服を着て、漂白剤や靴みがきやキャラムルの匂いのする子供たちを見ていた？
〈大観覧車〉で回転したとき財布の小銭がジャラジャラした？ 父親のウールの返し襟の
中に顔を隠していたの、それとも座席に膝をつき背伸びして海の彼方を眺めていた？ デ
ンマークは見えた？ 小人さんが抱きついてきたときは怖かった？ 午後の暖気でワンピース
の服がチクチクしたかな？ 男の子たちが互いの帽子の取りっこに興じてきみの方を

が正確に二八〇キロ（50
ページ）だとすると、デ
ンマーク国境となる。そ
れだと話の筋からして、
やや北すぎるようだ。

3 後出のベクラーの
飼豚。

4 バイブ・オルガン
のフルー管は、リコーダ
ーのように流れ込む空気が
パイプ内の歌口から出
るときに共鳴音を発する
が、パイプ内には、口笛
を吹くときの舌のはたら
きをするラングエットと
いう薄い金属板が水平に
張ってある。

見向きもせずに駆けていったとき、きみは何て言ったの、どう感じたの？

彼女は子供の頃からいつもだれかのリストに載っていたに違いない。自分が考えるのを避けていただけなのだ。その引きこもった表情、気の進まぬ足取りは、すでに失踪を抱え込んでいた。ところが自分は守ってもらうことばかりを求めて、彼女にはほとんど何も、ちっぽけな二人の巢さえも、守ることができないことに気づいたときには遅すぎたのだ。妻に対して自分は語りかけることができていたか？　ただ十年前の自分の亡霊と議論していただけてはなかったか。同じ理想主義を、青年期の憤怒を——ひところの自分を魅了した物事を——高揚した精神を持った女性！——ところがいつのまにかそれを自分は、心のこわばりとして見るようになっていた。なにか自己破滅の願望を抱えているように思えたのも事実である。

レニはその都度、二度と帰らぬ覚悟で街頭の戦場へ出かけていたのに、自分はまったく気づいていなかった。デモに出る左翼やユダヤ人は、なるほど騒々しく、見るも不快な連中ではあるが、警察がしっかり統制してくれるだろうから、レニの方から危険に飛び込んでいくのでなければ大丈夫だろうと。……後に、彼女が去ってからのある日、ペクラーは昼前から酒を飲み、少々感傷的な気持ちになって街頭へ行ってみようと思い立った。最初で最後のことだ。運命の圧力か、群衆の流体力学か、とにかくなんらかの力がふたりをふたたび引き合わせるかもしれない、と。その道路は黄褐色と緑の制服、警棒と革手袋でいっぱいだった。デモ隊のプラカードは垂直以外の全方位を向いて揺れていた。パニックを起こした市民の群れ。ひとりの警官が警棒で殴りつけてきて、ペクラーが身をかわずと、警棒は代わりに、白髭の、無修正トロツキー主義を今なお信奉するかのような老人をとら

えた……黒いゴム皮の下は鋼索を撚り合わせてできている。それを振り下ろす警官の、凝視する眼と口元に浮かぶ微笑が見えた。もう片方の手が、目の前の襟首に、すがりつく女のように、つかみかかっている。警棒を握る革手袋の手首のボタンが外れている。打ちさえる警官の眼が、最後の瞬間の直前にひるんだ。警棒が殴打者の神経系と一体化して、老人の頭骸を殴った痛みを伝えたかにも見えた。恐怖のあまり吐きそうになってベクターは戸口へ逃げた。警察隊が追ってきた。肘を脇に密着させ、前腕を一定の角度に突きだした、ダンサーのような動きだ。彼らは群衆を散らすのに、最後はホースを使った。濡れた丸石や市電レールの上で、女たちが人形のように滑って転ぶ。その腹に、頭に、猛烈な水圧がかかる。彼女らを、猝猛な白いヴェクトルが支配する。倒れた女のだれもが、レニでないとはいきれない。戸口で震えながらベクターは見ていた。通りへ出ていくことはできなかった。後になって、この場の組成^{テクスチャー}について思いを巡らせた。敷石の間の溝のパターンについて考えた。この場で安全を得るには、蟻のサイズでないと無理だろう。頭上で靴の踵が黒い雷のように炸裂するなか、^{アシント・シティ}「蟻の都市」のストリートを走り回る以外にない。仲間の蟻たちとぶつかり合いながら暗くなる灰色の街路を黙々と連なって進む以外に……。屋内の、直行平面座標の上に安全を見いだす術^{スベ}を、ベクターは知っていた。グラフの曲線自体をなぞってはいけなくて——敷石上の危険な高みに出てはいけない—— x 軸と y 軸に平行に辛抱強く動きながら、そのつど P （気圧）、 W （秒速）、 Ti （絶対温度）を確認すること。グラフ用紙の細い線上を常に安全な直角で動くこと……

〈ロケット〉に関する夢をある程度頻繁に見るようになったところ、それが実は文字通りのロケットではなく、市街地の、どこだか特定できる一画の夢であることが間々あった。直

5 「デカルト座標」とも呼ばれる平面において二つの数値の関連を把握する「直角の思考」は、バヴロフらの二極分離の思考や単線的な因果論と共に、近代ヨーロッパ精神の浅薄で危険な部分として、非西欧または中世古代の世界観と対照づけられている。

交する通りの小さなマス目の中に彼が必要としている何かがあって、座標からその位置は明らかなのに、どの道を通って行けばいいのかわからない。歳月を経て「ロケット」が十全な姿に近づき、もうじき稼働というところまで来てから、ラボにおける x 、 y の直交座標は、現実の弾道の方位角と距離による極座標に代わった。大学時代、ミュンヘンの古い下宿ハウスで、洗面所の床に跪いたことがあった。正確に正しい角度に向けて祈りを発すれば聞き届けられ、自分は守られるのだと理解して。そのとき金とオレンジの紋織りのローブを着ていた。洗面所の中で、光っているのはそれだけだった。それから敢然とハウスの廊下へ向かった。どの部屋もみな就寝中、それは当たり前なのに、なぜか自分一人が置き去りにされたような気持がした。歩み寄ってスイッチをつけた——だがスイッチを入れた瞬間、実はいままで点いていた灯りを消してしまったことに気がついた、すべてを真っ暗にしてしまった、何もかも……

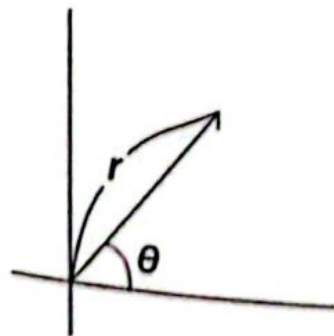
A4ロケットがいよいよ実戦に使われるという感覚はなかった。その実現はクライマックスではなく、意味のあることだと感じたことすらなかった。

「彼らはあなたを人を殺すのに利用しているのよ」レニは言った。できるだけ明確に言い切った。「それが彼らの唯一の仕事で、あなたはその手助けをしているの」

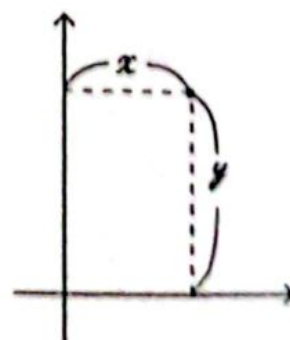
「僕らの方がそれを利用するのさ。いつの日か、みんなロケットで地球を後にする日がくる。超越するんだ」

レニが笑った、「超越」という言葉がペクラの口から出てきたことに。

「いつの日か」わかってもらいたかった——「彼らも人を殺す必要がなくなるだろう。国境に意味がなくなるんだ。宇宙のどこにでも行けるんだから……」



極座標



直交座標

「ほんと、盲目なんだから」吐きすてるようにレニが言った。毎日のようにレニは夫の顔面に盲目という言葉をおつけた。^{カタワアゲホーザムカイト}「屍体的服従」という、いまやレニの声以外では想像もできなくなってしまった美しい言葉も、よく口にした……

だが本当に屍のように服従していたわけではない。あるところまでは政治的に動いていたのだ。ロケットの場^{フィールド}にも政治の力は強く働いていた。軍兵器部は宇^{フェライン・フュア・ラウム}宙飛行俱樂部^{ルトキア}、略称VfRのアマチュアのロケット研究者たちにとみに関心を募らせ、協会の方も最近は実験の記録を軍に見せるようになっていた。ロケットのような空想的なものには、企業も大学も、人材や資本を賭けてまで取り組もうとはしないから、と軍は言った。われわれが頼りにできるのはアマチュアの発明家かVfRのような協会だけなのだよ、と。
「もお^{シット}」レニが切れた。「みんな示しあわせてやってるの。あなたにはそれも見えないの！」

協会の内部事情は明快だった。金がなければ協会は続けられない——軍には資金があり、間接的に援助はすでに始まっていた。軍が望む実践的なハードウェアを作るのか、慢性的な金欠状態で金星へ飛んでいく夢をいつまでも見つづけるのか——道は二つに一つだった。「軍がその金をどこから取ってきてるか知ってるの？」レニが問う。
「どこから来ても、金は金さ」

「違うわ！」

ヴァイスマン少佐は、ロケットのフィールドに影をちらつかせる数人の軍高官の一人だった。この人物は、落ち着いた思考者に対しても狂信的夢想家に対しても等しく共感し、理性的に話を進めることができた。どんな相手が何を持ち出してきても応じられる、セー

7 上巻310ページに既出。フォン・ブラウンの所属していたこの協会に軍がアプローチしたのも史実。

ルスファンと科学者の資質の織りまざった、新しいタイプの軍人だった。傍觀し理解する非行動者のベクターには、VIRの委員会も、レニたちのストリートと同じだろう、敵は丸腰の相手に暴力を浴びせかけるのだということは実はわかっていたに違いない。方程式や理論モデルで鍛えられた彼の眼は、類比を捉えるのは得意だったはずなのに、VIRは特別で、時の流れから切り離され、保存されていられるのだという思いに固執しつづけた。もう一点、夢をかなえるには先立つカネが必要だということも経験から知っていた。やがて彼は、どっちつかずの立場を保つことが、ヴァイスマン少佐との結束を強める最良の方法だということを知る。少佐の目はベクターを見るとときにはいつも変化した。いささか取りすました普段の表情がゆるんで、レニを見るときのベクター自身の表情——それを彼は鏡や陳列ウィンドーで偶然見て知っていた——に近いものとなる。すっかり自分のものになったと感じる相手に向ける無表情。ヴァイスマンはベクターの果たしてくれる役割に、ベクターがレニの役割に抱くのと同じ確信を抱いていた。だがレニは結局出ていったのだ。それだけの強い意志が、結局自分になかったということか。

ベクターは自分を実践的な男だと思っていた。ロケット・フィールドに集まった男たちは、大陸のこと、包囲のことを論じた。国家間の協定を破棄するには、きわめて強力な兵器が——機甲部隊も歩兵部隊もドイツ空軍さえも飛び超える、チェスの騎士ナイトのような兵器が——必要だということが彼らにはわかっていた。本部の幕僚がそれを言いだす何年も前に。西の財閥国家と東の共産国家。空間、モデル、ゲームの戦略。彼らは情熱ともイデオロギーとも無縁であって、実的なことだけを考える。まだ手にしていない勝利にわいている軍を尻目に、ロケット技師たちは、ドイツ軍の後退とドイツの敗戦という事態に冷静

な目を向けざるをえなかった——^{モットー}独空軍は兵力を消耗していくだろう、前線は後退し、射程距離の大きな兵器が必要になるだろう。……だが、金を握って命令を下すのは他の連中だ。テクノロジーは生き物として成長していく必要があるのに、自分らは理解しはじめようともしない技術の論理の上に、勝手な欲望を押し当て、あれこれ口出しするのだ。ロケットがまだ研究開発の段階にあったときには、そんなものは信じるに値しないと思っていた人間たちである。後に、A4が作戦に組み入れられる段になり、実在するロケットと隣合わせになって初めて、その力にあやかると格化させる。そういうことはペクラーにも見えていた。彼らはアスレチックな連中であって、先見や想像力といったものには縁がない。だが頭の中はカラでも権力を持っている以上、ある種の軽蔑は抱えつつも、上位の存在と見なさないわけにもいかなかった。

ただ、そうだとにしても、レニの批判は正当ではない。誰かが自分を利用したというのは違う。彼は「ロケット」と一体化していたのだ。まだ一機も製作されないうちから、彼自身「ロケット」の外^{エクステンション}延^{ヒンターゴフ}だった。それはレニのせいだともいえる。彼を置き去りにし、壊れるに任せた。彼の破片は、奥の庭にこぼれ落ち、排水溝を流れ、風に飛んだ。映画を観にいくことさえできなかった。仕事を終えたらもう、石炭を漁りにシエプレー河にでかけることもあまりせず、ビールを飲みながら、冷たい部屋にすわっているという毎日だった。灰色の雲から漏れる秋の光は、弱々しくかすれたようになって彼に届いた——庭の壁に当たり排水管に当たり、油で薄汚れたカーテンを抜け、涙にうち震えている彼の身体に届くまでに、一切の希望を吸い取られて。彼は毎日泣いた。一月の間、一日一定の時間を、泣いてすごした。そのうち副鼻腔が炎症を起こした。ベッドに寝て発汗し、熱を下げる

彼は、ベルリン郊外のクマースドルフ^{クマースドルフ}へ居を移した。ロケット・フィールドで働く友人モングウゲンを手伝うことになったのである。

そんなベクターを、温度と速度と圧力、垂直安定板と機体の形態と安定性と乱気流が徐々に満ちたし、レニを失った空隙を埋めていった。朝、窓から見ると、都市のしみつたれた中庭に代わって、松と櫟の木があった。自分は俗世間^{ソコセカン}を離れ、修道の結社の一員に加わろうとしているのか？

ある晩彼は二十枚分の計算式に火をつけた。積分記号の「」の字が、蛇遣いに魅せられたコブラのように身をくねらせ、滑稽に背中を曲げた微分記号の「d」が、燃えあがる炎のそばを猫背のまま行進して、薄っぺらな灰の波と化す。ベクターが後退を強いられたのは、その時だけだった。

最初は、推力増強の研究を補佐した。まだみんなが全体に関わっていた。専門に分かれたのは後のことで、軍の諸部局が入りこみ、諸々のパラノイアが生じてから、組織の図は独房を連ねた刑務所の図面のようにになっていくのだが、当初は、無線通信の研究者であるクルト・モンダウゲンが冷却問題を解決したこともあったし、ベクター自身、たまたまではあるが、局部の圧力を測定する新しい仕組みを考案したことがあった。後にそれはベネミュンデでの模型実験に便宜をもたらした。直径四、五センチほどのロケットの各部の圧力を測定するのに、当初は百個以上もの測定管を付けていたのだが、それを「半模型^{ハルモデル}」でやれるようになったことに、ベクターの貢献があったのだ。彼が提案したのは、模型のロケットを縦に二分し、その平らな面をテストチェンバーの壁に据え、そこから多数の管を出して外に設置したすべての液柱圧力計につなげるというやり方である。半分でやりく

8 ベルリンの南約三十キロ。武器としてのロケットの開発のためフランス・ブルクの松林を拓いて作った実験施設。弱冠二十歳のヴェルナー・フォン・ブラウンをリクルートして、ここで最初の静止実験が行われたのは、一九三二年十二月。

9 「レッグダールタ」『荒野の狼』など一九二〇年代の作品に見られる

りするというのは、ベルリンのスラム街に暮らした者には手慣れたやり方なのである。だが、そんなプライドの瞬間は滅多にこない。どんな考案に対しても、ひとりにクレジットが来ることはない。すべては共同の知であり、専門の違いはあまり意味を持たず、階級の違いはさらに意味のないことだった。メンバーの出身はさまざまであり、フォン・ブラウンのようなロシアの貴族の出の男から、ペクターのような、路上でリングを囓る階層の者までいたけれども、〈rocket〉に翻弄される点において、みんな平等だった。爆発や機材落下の危険を平等に浴びていたというだけではない。rocketの沈黙を、その物塊としての重みを、すぐそこにありながら容易に解明を許さない神秘を、みな平等にシェアしていたのだ……

当時、資金も注目も、推力の研究に注がれていた。そもそもrocketほど重量のある物体を、どうやって破裂させずに空中に打ち上げるかが問題だったのだ。小規模の災害が続いて——モーターの外皮に使ったアルミニウムが焼け落ちたこと、燃料噴射装置が共振燃焼を起こし、燃えるモーターが叫音を発しながら分解したこと——その後、一九三四年の大惨事が来た。ヴァーネケ博士が、過酸化水素とアルコールを、燃焼室へ送り込む前に混ぜるとどうなるか、試してみたのだ。すると、たちまち点火炎が導管を逆行してタンクへ伝わった。爆発はrocket試験台を粉碎し、博士を含む三人の命を奪った。最初の流血最初の生贄である。

クルト・モンダウゲンはその出来事に徴候を見た。ヘルマン・ヘッセ^{*}、シュテファン・ゲオルゲ^{*10}、リヒャルト・ヴィルヘルム^{*11}を読みながら育ったドイツ神秘思想の傾倒者である彼は、デミアン^{*12}の形而上学に基づいて、ヒトラーを受け入れる容易ができていた。彼は、

東洋への傾倒は、六〇、七〇年代の反文明思想にも影響を与えた。

10 高貴な知識人と芸術家が率いる新しい王国のビジョンを掲げ、ドイツ象徴主義を代表する詩人。自己犠牲やヒロイズムの美学を格調高くうたい、一九二〇年代からナチ党員のファンも多かった。

11 『易经 I Ching』など中国古典の西洋への最初の翻訳者。彼の仕事は、カール・ユングの同調も得て広まり、ヘッセの作品にも影響を与える。

12 副題を「エミール・シンクレールの青春」というヘッセの小説（一九一九）。デミアンはエミールの精神的導き手となる同級の青年。

燃料と酸化剤とを、ペアをなす両極^{オポジット}として捉え、そのペアを、あたかも燃焼室という神秘の卵の中で統合される男性原理と女性原理、創造と破壊、火と水、化学におけるプラスとマイナス、であるかのように把えていた。

「ただの原子価の問題だろ」と、ペクターが反論した。「外側の電子殻の状態が違うだけだ」

「まあ考えてみてくれ」モンダウゲンが応えた。

もうひとり、ファーリンガーがいた。航空力学畑の男だ。ペーネミュンデの松林に、日本の弓と蘆苞^{わらぶと}を持って出かけていき、息を吸い込み弓を引いて矢を放つ、その繰り返しに飽くことなく励んでいた。同僚が狂ったようになって「従順^{フオルクザムカイト}性ファクター」という言葉を口にしなから、ロケットの軸と飛行軌道の接線のブレを必死になって抑えようとしていた時期に、勝手な真似をしていたように見えるが、ファーリンガーにとってロケットとは、日本の矢を太くしたものに他ならず、ロケット＝軌道＝標的と、おのれ自身とがひとつになるということが重要だったのだ。「意図^{イテント}してはだめなのだ。屈すること。発射者としての役割から降りないといけない。そもそも行為に区分はないから。攻撃者は同時に犠牲者なのだし、ロケットは同時に放物線の軌道なのだし……」この男の言うことは、ペクターにはちんぷんかんだった。モンダウゲンは理解した。ここで苦薩^{ボディザットヴァ}¹⁴といえ、アフリカの放浪から帰還した彼だった。いかなる光明に導かれたにせよ、カラハリの砂漠から人と国家の世へ帰還したモンダウゲンは、密かに心に決めた道を、理由をだれにも明かさずに、歩んでいた。独領南西アフリカ^{ズュートヴェスト}では、日記もつけず、家には手紙一枚書かなかった。一九二二年にボンデルスヴァール^{ボンデルスヴァール}族の暴動が起きて、一帯が混乱に陥った。彼の電波実

13 オイゲン・ヘリゲルは戦後『弓と弾』(一九四八)という影響の大きな本を書いたが、ロケットを弓に喩える発想は、ピンチョン自身のもの。

14 仏に次ぐ覚醒者を意味する「菩提薩埵」は、アルファベット表記で Bodhisattva となるサンクリット語の漢字表記。涅槃(ニルヴァーナ)に行くことができる身で現世に留まり、他の修行者を指導する存在。

15 ここまでの話は『V.』の第九章「モンダウゲンの物語」で語られる。この章の最後では、一九二二年五月から六月にかけて、蜂起したボンデル族を、南アフリカ連

輸も中断を余儀なくされ、フォブルという地方の地主の邸宅^{グランド}で、五、六十人ほどの他の白人たちと一緒に過ごした。そこは四方を深い峡谷に囲まれた砦にであった。包囲と酒色の暮らしが数ヶ月間、本人の弁によれば「ヨーロッパのあらゆる物事に対する強烈な嫌悪感に取り憑かれ」、モンダウゲン^{モンダウゲン}はひとりそこを出て、^{グランド}敷に入^{グランド}った。しまいにはヘレロ族のうちでも最貧の「オヴァトシンバ」という土豚族と一緒に生活するようになった。土豚族は何一つ質問するでもなく、彼を受け入れた。自分はある種のトランスミッターで、そこち^{グランド}に電波を発信している、たまたまその時発信していた内容が、少なくとも彼らにとって危険のないものだったのだらうと思うことにした。モンダウゲンの電子神秘主義^{エレクトロニクス・ミステリズム}においては、三極管が、キリスト教における十字架のような、基本的シンボルをなす。時間に縛られた受難の生涯を生きる自我が、グリッドだ。より深い真実の「自我」は、カソードとプレート^{プレート}の間の電子流、その一定の純粋な流れである。グリッドに、感覚データ、感覚、記憶の移動といったシグナルがフィードされ、自我の流れを調整する¹⁶。われわれは正になったり負になったり、時間とともに変化を続ける波形としての生を生きているんだが、それがビタリと止んだ、まったき平静の瞬間にだけ、純粋に無情報の、シグナル・ゼロの状態を得ることができ¹⁷る。

「カソード、アノード、ホーリー・グリッドの名においてか？」¹⁷ベクターがいった。
「そうだ。うまいじゃないか」モンダウゲンがほえんだ。

集団の中で、ゼロの平静さに最も近い人物が、エンツィアンという、ヴァイスマン少佐の庇護下にあるアフリカ人だった。フェアズフスアンシュタルト¹⁸ではよく陰で「ヴァイスマンのモンスター」と言われていたが、それはおそらく人種差別的な意図からではなく、

邦軍が複葉機で爆撃し、それをフォブルの邸宅に籠もった白人たちが、喝采しながら見物する様子が描かれる。モンダウゲンは館を出て、片腕を失ったボンデルのロバに乗せられ、去っていく。

16 三極真空管では、熱せられたフィラメント（カソード）から電子が出て、プレート（アノード）へ飛んでいくが、その途中に、網目状のグリッドがあり、ここに可変電流が流れることで、電子流が増幅または抑制される。

17 「父と子と聖霊（ホーリー・ゴースト）」の名において」のパロディ。

18 クマースドルフのロケット実験施設（註7）。

見た目の二人の姿から自然に出てきた言い方なのだろう。自分の禿げかかった頭上から一
ファイト突き出ている長身のエンツィアンを、ヴァイスマンが壘底メガネを通して見上げ
る。アスファルトの道や、実験室・研究室と一緒に歩くときの、エンツィアンに遅れまい
と小走りで動くヴァイスマンの様子もおかしかった。ロケット開発の初期にエンツィアン
は、どの部屋でも、どんな光景の中でも、圧倒する存在を示していた。……ペクラーには
初対面の彼の印象が忘れられない。クマースドルフのテスト・ルームは、まわり中、電気
的な色彩が派手やかで、緑の窒素ボトルが並び、赤、黄、青の配管が絡まりもつれる中、
赤銅色したエンツィアンの静謐な顔——モンダウゲンの顔面にもときどき漂う表情——が、
鏡の一枚の中に、安全柵の向こうのロケットエンジンが映り、実験開始直前の、不安に満
ちた、煙草に火をつけて不合理な祈りに訴えずにいられない、張りつめた、不浄な空気
の中で、ひとり静寂を保つエンツィアンの顔が……

一九三七年、ペクラーは他の約九十名と共にペーネミュンデに移動した。これは「重
力」に対する侵攻開始であり、まずは上陸拠点を築く必要があった。ベルリンで労働者を
していたときを含め、ペクラーがこれほど働いたことはない。先鋒隊はその年の春と夏を
費やして、「グライフスヴァルダー・オイエ」という小島¹⁹をテスト・ステーションにつく
り変えた。道路を敷きなおし、ケーブルや電線をつなぎ、家屋、便所、倉庫を作り、壕を
掘り、コンクリートを捏ね、道具の木箱や、セメント袋、燃料のドラム缶からなる船荷を
ひっきりなしに運びおろした。本土から島への荷物運びに使ったのはくたびれた時代物の
フェリーだった。ペクラーは憶えている、ほの暗い船室内、ケバのこすれた赤いフラシ天
の布地、剥げた塗装、錆びた金具、喘息病みのような汽笛の音、汗と煙草とディーゼル燃

19 ウーゼドム島の北
端から八キロほどのとこ
ろに浮かぶ、長さ一キロ
ほどの島。

料の臭いを。腕や脚が過労に震えたのも、擦り切れたジョークも、日々の疲労感も、金色の夕陽を受けた指に生じた新しいタコも……

夏の海はおおむね青く穏やかだったが、秋になると一変した。北から雨雲が流れ込み、温度計は急降下、テントの倉庫を風が引きちぎり、一晩中壮大な海鳴りが続いた。波しぶきは岸から五〇メートル先まで白く上がった。逆まき砕けちる波の飛沫が陸を飛んだ。漁師の小屋を宿にしていたペクターが夕方の散歩から帰ってくると、塩の仮面の裏側に出る。ロトの妻^{*20}か。振り向いたらどういふ災難に遭遇するのか、答えは知れていた。

あの季節、ペクターは子供に戻り、傷ついた犬になった。波しぶきを浴びながら小島をひとり歩き回ってはレニのことを思う。頭のなかは勝手な再会のシナリオでいっぱいになった。舞台は官庁だろうか、劇場のロビーか。優雅な、劇的なセッティング。宝石を光らせた美女が二、三人まわりついている。彼が煙草をくわえれば、お偉方が急いで駆け寄り火をつける。將軍や資本家たちが聞いてくる難問（レニにはぼんやりとしか理解できないだろう）に自分が即座に答えている図だ。最高に美味しい空想が浮かぶのは、トイレにすわっているときだった。そんなとき彼は足を踏み鳴らし、ファンファーレの音を唇からそつともらした……

だが、ベルリン時代の貧しい自分が肩に乗ったままだった。そいつには話しかけたし、耳もかたむけた。精査もした。だがそいつは、どうにも消え去ろうとせず、人生のあらゆる戸口に物乞いのように佇んで、もの言わぬ懇願の目つきで見つめ、巧妙な手つきで罪の意識^{うしろめたさ}を掻き立てるのだ。打ち上げ実験のための天候待ちが続く日々は、ペーネミュンデでの忙殺されるときも小島^{オイエ}のハリガー氏^{*21}の宿で歓談するときも、ペクターの心はいつに

20 ソドムの町から逃げだす途中、警告を忘れて後ろを振り返ったため塩の柱にされてしまった。聖書「創世記」より。

21 実在した、島の所有者。

うたっていた。図面としてはそれでよくても、描きこまれたおびただしいパーツが一斉に、信頼できる精度で作動する保証はどこにもない。信頼性の高いエンジンをつくって、軍が戦場で確実に人を殺せるようにするために、いま真に必要とされている技術的ポイントは、単純化にあった。

当時はA3型で打ち上げ実験を進めていた。機体の洗礼は、冗談好きの技師らが、シャバンではなく液体酸素で行った。課題の重点は、推力の増進から正確な誘導へと移っていた。飛行物体の遠隔操縦が、まだ初歩的な段階にあったころのことである。温度計と気圧計を、映画カメラを設置した防水密閉室に置いて、飛行中の針の振れを収めたフィルムを、後から回収し、データを再生する。技師たちは集まって腰を下ろし、スクリーンの針のふれに見入った。ハインケル爆撃機を使って、高度二万フィートからロケット型の鉄の模型を落下させる実験も行った。地上からアスカニア製のシネオドライトで撮影し、そのラッシュフィルムの、高度三〇〇〇フィート辺りをコマ送りで見ると、ちょうど音速を超えるようすをチェックするためだ。奇妙なことだが、ドイツ的思考は、なぜか連続スチール撮影による運動の模倣に走る。この結びつきは少なくとも二百年前、ライプニッツが飛ぶ弾丸の弾道をこのやり方で分解した——それが微積分学の確立につながった——ときに遡る。そして今、同じ技術が、フィルム・イメージを超えて生身の人間の人生に適用範囲を拡げたことを、ペクターは身をもって知ることになるのだ。

その日宿舎に戻ったのは、日没時だったが、疲れ果て、考え事に心を奪われたペクターは、燃えるような花壇の色も、日々形を変えている基地の稜線もぼんやりと見すごし、試験発射台からいつもの騒音が聞こえてこないことにも気づかなかった。海の匂いが漂っ

25 全長約七メートルのモデル。ペーネミュンデで一九三七年十二月に始まった打ち上げ実験はなかなか成功に至らず、全長十四メートルのA4の開発が進められることになる。

26 この実験は一九三八年九月に始まった。シネオドライトとは、飛行物体を追いながら、設定した毎秒コマ数でフィルムに撮影できるようにした装置。

てくると、まるで自分はリゾートタウンの住人で、ただビーチに出ることがほとんどないだけなのだと思えてくる。遠くペーネミューンデ[★]ヴエストから離着陸する戦闘機のエンジン音の、ネコが喉を鳴らすように穏やかな騒音が届く。夕べの海からそよ風がゆらめき渡る。階段ですれ違った近隣の同僚が自分にはほえみかけたのが、唯一の警告^{しるし}だった。部屋に入ると、ベッドに女の子がすわっていたのだ。足のつま先が、カーペット地の旅行カバン^{カバン}の脇で、チョンと内向きになっている。スカートの裾をピンと膝頭にかぶせ、一途な、宿命的な瞳で彼を見つめている。

「ヘル・ベクラー？ わたし——」

「イルゼ。イルゼだろ……」

ベクラーはきつとその子を抱き上げた。キスをし、反射的にカーテンを引いたに違いない。その子は髪に茶色いビロードのリボンをつけていた。記憶にある娘の髪はもっと明るい色で短かった——けれども髪は伸びるし、色も濃くなるものだ。斜めからその子の顔を覗きこむと、からっぽの自分がカラカラ鳴って、その虚空の生が一举に流れ込もうとする愛情で破壊されそうになった。それを食い止めようとして、あわてて疑いのシールをかぶせた。おかしこの子と別れた朝、レニの肩越しに見た幼児にどこか似ているところはあるか。まだ寝起きの腫れた眼を、母のレインコートの背に向けたまま、ドアを永遠に閉ざして出ていったあの子に。類似点を探して、それが見つからないフリをした。いや、フリなのか。もとより違う子ではないのか。歳月は、あまりにも多くを奪っていた。ボチヤボチヤの肌も、あっけらかんとした幼児の顔も。……今はこの子を抱き上げるのも怖い。心臓は破けそうだ。「どのくらい待っていたんだい？」

27 ウーゼドム島の北西端に位置する、当時は空軍の飛行場（730ページ地図参照）。一九四四年に登場する世界初のジェット戦闘機メッサーシュミット262のテストは、ここで行われた。

「お昼からよ」ここの食堂でランチを食べたのだという。ヴァイスマン少佐がシュテインまで迎えに来て、二人で列車に乗ってきたの。車内でチェスをしていたわ。少佐がなかなか次の手を打ってくれないので、勝負はつかないまま。ヴァイスマン少佐がお菓子を買ってくれて、それから、忙しいのでベクターには会わずに帰るがよろしく伝えてくれと言っていた。

ヴァイスマンだと？ いったいどういうことだ……ベクターの心の内部で、試験段階の憤怒が明滅しながら膨んだ。彼らは自分のすべてを見通していたのか。自分の人生は、すべて筒抜けになっていったのか。この、ベッドと整理ダンスとスタンド付きの安っぽい個室と、同じなのだよ。

現実のみじめさと、夢のような娘の帰還、その中間地点に留まるために、彼は怒りの情をため込んだ。愛情を迸らせて傷つくことを防ぐために、心を怒りで満たしておいた。恥の感覚はあったが、娘からあれこれ聞き出すという手はあった。それを恥とは感じて、恥や冷酷さなら耐えることができた。だがその冷酷さが伝わったのだろうか、少女は身を固くしてすわっている。足だけを神経質そうに動かして。声もあまりに抑えられ、答える言葉がところどころ聞き取れない。

お山の中にある所から送り込まれてきたということ。そこは夏も寒くて、有刺鉄線が囲んでいて、笠付きの明るいライトが夜通し照らしている。男の子はいなくて、女の子と、母親たち、お婆さんたちが営舎に住み、寝台にすし詰めに寝かされる。藁布団ひとつに二人で寝かされることもよくある。レニは元気だ。ときどき黒い制服の男が営舎へやってきてお母さんは連れていかれ、何日も帰ってこない。帰ってきてても何も話したがらない。い

28 ヒトラー政権誕生後まもなく始まった、反社会的な分子の拘禁は、当初は思想・信条・行動における異分子に対する予防的・教育的措置であるとされ、政治犯以外で

つもならイルゼを抱きしめるのに、そんな素振りもなく、ときどき、ひとりにしてちょうだいと言って泣いている。だからイルゼはとなりの営舎へ行って、ヨハナやリリーと床下にもぐって遊ぶ。そこに土を掘って隠れ家をつくり、人形や帽子や服や、靴や、古いビン、写真つきの雑誌を隠す。どれもみな有刺鉄線の近くで見つけた。みんなそこを「宝の山」と呼ぶけれど、ほんとうは大きなゴミ捨て場で、昼も夜も煙がくすぶっている。レニがいない夜はリリーと一緒に寝る。その一番上の寝台から、窓の外が赤く燃えているのが見える……

だがペクラーは、自分にとって価値のあるひとつの情報を得たあとは、ほとんど聞いていなかった。レニは生きている。具体的なある場所に、地図上の位置を有する一点にいて、接触しうる権力者の管理下にある。彼女と会うことは今も可能だろうか。ばか、違う、彼女を釈放してもらうための交渉にもっていきけるかどうか、そういう問題だろ。誰かに、どこかのアカに、無理矢理引き込まれたとうまく説明したら……

心を割って話すことができるのはクルト・モンダウゲン唯一人だったが、この男にはみずから選んだ役どころがあり、それゆえ助けにはならないだろうことは見えていた。「例^{リエジュケーション・キャンプ}の再教育収容所だ。SSが運営している。ヴァイスマンに話してみてもいいが、うまくはいかないかもしれない」

モンダウゲンは、ヴァイスマンと、南西アフリカにいたとき以来の知り合いである。フオブルの屋敷^{オブル}に、数ヶ月一緒に籠城していた。最終的にモンダウゲンは、ヴァイスマンを含む館の人間にほとほと嫌気がさして、それで藪の中で暮らすようになったのだが、ロケットに囲まれたこの場で、二人の関係は良好だった。理由はペクラーには分からない。ア

は、同性愛者、エホバの証人、ロマなどの強制収容が多かったが、一九三八年になると、ゲシュタポの権限拡大に伴い、ユダヤ人を標的にした収容が弾みをつけていく。なお「お山の中」とあるが、ドーラ収容所ができるのは一九四三年末のことなので、ハルツ山のことはない。

29 『V.』第九章で、フオブルは第一次大戦後、南アフリカ連邦の委任統治領となった旧独領「南西アフリカ」の白人荘園主。一九二二年、不可解な電波妨害の調査のためカラハリ砂漠に来ていた若きモンダウゲンは、ポンドル族の反乱のうわさを聞き、フオブルの屋敷に、ヴァイスマン中尉を含む地元の白人たちと共に籠城する。

フリカの太陽の下で悟りに達したことが原因なのか、もとよりこの二人には最初から、なにやら深い結びつきがあったのか……

ベクターとモンダウゲンは組立工場の屋上に出た。六マイル向うの島がはっきり見えた。ということは、明日天気が変わるだろう。どこか日の降り注ぐ下で鋼鉄をうち鳴らす音が聞こえる。リズムカルな、鳥がさえずるような澄んだ音だ。青きペーネミュンデが二人を囲んで震え、夢のようなコンクリートと鉄塊が正午の熱を反射していた。大気がカモフラージュのようにさざなみ立って、その背後で、何か別のことが秘密裡に行われていることをうかがわせた。今その上に立っている幻想も、いつ破れ、ふたりを地上に落とすともしれない。無力な思いで、ベクターは沼地に視線を向けていた。「おれにはすべきことがある、そうだろうか？」

「いいや、しずかに待つのがいい」

「それは正しくないだろう、モンダウゲン」

「正しくはない」

「イルゼはどうなる？ また連れ戻されるのだろうか？」

「わからん。とにかく、いまは彼女はここにいる」

そう言われてベクターは、いつものように、沈黙を選んだ。手遅れになる前に沈黙それ以外の選択をしていたなら、みんなそれぞれ自分を救えていたかもしれない。ドイツを出るという選択もありえただろう。もう遅すぎる。今になって、やっと行動をする気持ちが起きて、とれる行動はもはやなかった。

まあ、正直なところ、過去の自分の決断力のなさについて、じっくり考えたわけではな

い。そもそも今の自分がマシなのかどうかも自信がなかった。

荒れる海の岸辺をイルゼと歩く——アヒルに餌をやり、松林を探索する。発射実験をイルゼに見せることすら許されていた。それを許すことで彼らがペクターに何を言わんとしていたのか、それがペクターにわかったのは後のことである。つまり、セキュリティに危険はない、ということ。知られて困るような相手とこの子が会う可能性はゼロであるということ。〈ロケット〉発射の轟音が空気を裂き、そのとき初めて彼女が身を寄せた。彼にしがみついた。ペクターはまるで自分が彼女にしがみついているような気がした。発射してすぐエンジンは停止し、〈ロケット〉はペーネミュンデ・ヴェストの空軍の敷地に墜落した。汚い煙の柱がのぼり、消防車がうなり、トラックに積まれた作業員が現場に向かった。彼女は息を吸い込んで、握った手に力を込めた。「あれ、パピーがしたの?」

「そうじゃない。失敗だよ。ほんとは、大きな弧を描いて飛ぶはずだったんだ」そう言って、手で大きく描いて見せた放物線の飛跡が、試験発射台も組立工場もすべて一つに包み込んだ。ちょうど会衆の前で十字を切る牧師の手が、見つめる信者たちを四分するかのよう……

「ロケットはどこへ行くの?」

「どこへでもだ。こちらで指令すればいい」

「いつかわたしも乗れるかしら? わたしの体、中に入るでしょ?」

そういう、突拍子もない質問をする。「いつかはね」ペクターがいった。「いつか月に行ける日が来るだろう」

「ふうん、月に……」とだけ言って、待っている。お話をしてもらえと思ったのか。だ

がペクターの口から言葉が出てこないの、イルゼは自分の物語を作り上げた。となりの区切り部屋で寝泊りする同僚の、ファイバーボードの壁に、月の地図が貼ってあった。その地図を彼女は何時間も眺めては、どこに住もうか考えた。想像はクレーター「ケブラー」の光条の上を通過し、サザン・ハイランドのゴツゴツした荒地を抜け、「コペルニクス」と「エラトステネス」の壮大な眺めをパスして、「静かの海」の中の小さな可愛いクレーター「マスケリン・B」に留まった³⁰。このふちに家を建てるのよ、ムティと私とパピとで。こちらの窓から金色の山脈^{やまなみ}が見えるわ。反対側の窓からは広い海。空にはぼっかり緑と青の地球が浮かんでる……

教えてあげるべきだったのか。「海」といっても月のは違うんだ、空気もないし、呼吸もできないと。父親としてのふるまいを何も知らない自分にペクターは恐れをなした……。狭い個室での夜、キャンバス地の簡易寝台の中でイルゼが体を丸めている。数フィート先の毛布の中で、小さな灰色のリスのように寝ている少女を見つめてペクターは、この子はこのまま帝国^{ライヒ}に飼われている方が幸せなのではないかと思った。収容所^{キャンプ}のことは耳にしていたけれども、おぞましい連想は浮かばなかった。政府の言う「再教育」という言葉を、彼は額面通りに受けとめた。おれのせいで家族が壊れた……施設には専門の係員がいる……訓練を受けたスタッフ……子供の必要に応えてくれるだろう……ペーネミュンデのこの区画に点在する外灯が、部屋の天井に淡く映し出すパターンを見つめていると、いろいろなことが図示^{マップ}されてくる——早く仕上げねばならないこと、捨て去った夢、ベルリンで壮大な夢を描くマスターの悦びの眼の輝き。気がつくのと枕元でイルゼが、月で暮らすお話をささやいている。聞いているうちにペクターは、この世界とは別の世界へさまよい出て

30 『重力の虹』執筆中の一九六九年にアポロ11号が着陸したのが、まさにこのクレーターの外縁だった。当時NASAの所長は、クマースドルフ、ペーネミュンデを通じてロケット開発を主導したフォン・ブラウンその人。

いく。地図に国境のない、不安定で心浮き立つ、呼吸するのと飛行するのが同じくらい自然である世界——そうはいくか、墜落するだろう……いや上昇してるぞ、下を見下ろしてみろ、怖れることはない、今度は成功だ……そうか、飛行の確保、成功じゃないか……やった……

今夜ペクラは目撃しているだけなのか、それとも自身それに与しているのか。どちらなのかは彼自身見えていない。見ろ、これを。フリードリヒ・アウグスト・ケクレ・フォン・シュトラドニッツのところへ、急報されようとしているものを。何だ、これは？ かの、ケクレの夢^{*31}さ。彼が一八六五年に見た、化学革命を起こしIG社の設立を可能ならしめた〈夢〉だよ。正しい夢の素材は正しいドリマーに届けられなくてはならないだろ。そのために、関連するすべての人々、すべての物事が、正しいパターンに収まっているんだ。ユングの考え——先祖のところに夢の素材のプールがあって、みんながそれを共有している——ってのはいいんだが、しかし、各個人が必要なときに必要な夢をゲットするのは、どんな仕組みによるんだらうね。何か、代替経路のようなものがあるんじゃないか、夢見の官僚機構^{ビュロクラシー}がさ。IGが降霊会に行つて悪いことはないよな。あいつら、いかにも〈あの世〉的官僚制になじみそうだし。ほらほら、ケクレの夢が、送られていくぞ。沈黙のなか、通過ポイントが弓なりに光ってる。しぶしぶって感じだな。こんな人間界の、不完全な光と、動く時間に捉えられるのは嫌だって。だが、いま宇宙蛇^{コスミック・サペント}が——すげえな、そのウロコの紫の輝き、人の世に、こんなのありえん——がそれを送り込もうとしている官吏^{エージェント}の、厳肅なる二択的決定機構と干渉し合う。こいつら、こんなすごい見て何の感情も、驚異の念も湧かないらしい。(こ、つちの世に来てしばらくすれば——時間のないと

31 ケクレについては、上巻165ページにも言及があった。ベンゼン環の発見のきっかけは、みずから尾をくわえる宇宙蛇ウロボロスの夢だったと伝えられている。

32 カール・グスタフ・ユングの「集合的無意識」の考え方。個人の精神の奥に、精神の古態的な無意識の領域があって、人は「個性化」した後も、マンドラ・イメージや神話的な思考を通して民族的／人類的な古層とつながっているとする。

ところで「しばらく」ってのもヘンだが——元^{アーキタイプ}型³³ってのはどれも同じ、ありふれたもの
 しか見えなくなってくるんだな。おっと、そこに新参者がいたか。きょう来たばかりのが
 お上りさんが、「ワーすこいなあ、あれ、^{フリー・オブ・クリエーション}創造の樹³⁴」だろう、え？ たいしたま
 げた」なんて言っではしゃいでる。しかしこれが、すぐに大人しくなるんだな。へボカ
 ンと見つめる意志³⁵にしたがう。それを反射的な反応として獲得する。自己批判のテクニ
 ックってのは、恐れ入るね、あんなもんがどうして効くのかわからんが、とにかく効き目
 があるようだ。……さて、ケクレの問題をおさらいしておこう。最初は建築家を志したが、
 結局は近代化学を支える人^{アトランティス}柱となった。化学という貢献多き建造物の、有機の翼棟が、
 ほとんど彼の頭の上に永遠に載っている——IG社の将来を支えた、なんて言ってるんじ
 やないよ。《世界》をだ、きみ、ひょっとしてIGと世界とを別物だと思っていけないかね、
 そんなふうだとまずいんで、言っておくがね、ヘッヘッ。……これもまた偉大な化学者、
 リービヒ教授の影響によるものだ（ミュンヘン時代のペクラーが住んでいたのが、この教
 授の名前を冠した通りだったな）。ケクレがギーセン大学に入学したとき、そこで教えて
 いたリービヒは、この若者の心を動かして進路を変えさせ、ケクレはその建築家の視線を
 化学の世界に注ぐことになった。まさに決定的な転向^{スウィッチ}だよ。リービヒ自身が、回路のゲー
 ト役を果たしたとも言える。あるいは、年下の同時代人ジェイムズ・クラーク・マクスウ
 エル³⁶に倣って「仕分けの悪魔」を演じたと言ってもいいがね。他はぜんぶ犠牲にして、ひ
 とつだけ《創造^{クリエーション}》の部屋にエネルギーを集中させるんだ（後の証言によると、どうもマ
 クスウェルは、エントロピーという熱力学上の概念をうまく説明するために、あんな「悪
 魔」を考えたんじゃないじゃなくて、リービヒのような現実に存在する工作員がやっているこ

33 「集合的無意識」に
 仮定された、夢のイメー
 ジや象徴を生み出す源。

ここでは、その意識でき
 ない深層から汲み出され
 た、夢のイメージが、個
 人の神経経路へ運ばれる
 ようすが、実況されてい
 る。

34 一八三一年にエデ
 インバラに生まれたジェ
 イムズ・クラーク・マク
 スウェルは、一九〇三年
 ダルムシュタット生まれ
 のユストゥス・フォン・
 リービヒより九一世代若
 く、同じダルムシュタッ
 トに一八二九年に生まれ
 たアウグスト・ケクレと
 同世代である。

35 均一化（エントロ
 ピー）の原理に従うはず
 の世界で、有機化学が発
 達し、物質合成が進んだ
 のはなぜか？ そこにリ

とを、ああいう寓話的なかたちで示そうとしたらしい……世に警鐘を鳴らすのに、暗号を使わざるをえなかったというのは、当時から秘密の勢力がいかに強かったかを示すもの……実際、論者の中には——マクスウェル夫人の悪名高い「もう家に帰りましょう、ジェームズ、あなたお仕事にのめり出しているわ」という言葉の背後に、怪しい操作の手を見出す連中だが——かの「電磁場方程式」³⁶自体が不吉な警告を含んでいるという極端なことを言い出す者もいる。その方程式が、A4ロケットの誘導システムにおける二重積分回路の作用を示す式と驚くべき類似性を示していることを取りあげてね。そう、建築家エッツエル・エルシュをインスパイアして、建築家アルベルト・シュペーアのために、ノルトハウゼンの地下工場を二重積分記号の形に設計させるにいたった、あの電束密度を二度積分する方程式を、マクスウェルが予兆していたと……。建築畑から来た若きケクレは、当時認識されていた分子の中に、隠れた形態があると信じて、それを探し求めた。その形態を彼は、現実の物理的構造としてではなく、「合理的なフォーミュラ」として考えることを好んだ³⁷。それによって、ものの「メタモルフォーゼ」——化学反応のことを彼は十九世紀の古風な言い方でそう呼んだ——を超えて続いていく関係性を示したわけだ。だがケクレには炭素の四本の腕が見えていた。その四本が四面体を形成し、あるいは炭素原子がお互いにつながりあって長い鎖をなしていくさまを~~図示~~、示すことができた……。だが、ベンゼンでつまづいた。六つの炭素原子がそれぞれ一つの水素と結びついているのはわかっていたのだが、その形が見えてこない。それを彼に見せたのがあの夢。眠りの中に送り込まれてきたあの夢だった。彼が見たベンゼンの環に、他のものたちも魅了され、この環を基
本に、新しい化合物、新しい配列の設計を進めた。こうして芳香族の化学分野が誕生する

ービビという魔物がいて、才能ある人物の振り分けを行っていたからだ、という論旨。ピンチョンは、『競売ナンバー49の叫び』でも、エントロピーと「マクスウェルの悪魔」にまつわるユニークな思考を展開している。

36 「マクスウェルの方程式」とも呼ばれる。原文はField Equationで、これは電磁場だけでなく、重力場も——量子力学成立以降は「強い相互作用」および「弱い相互作用」も——含めた「基本力」と、物質およびエネルギーとの相互の絡みを数学的に記述するもの。ロケット誘導の方程式は、上巻458ページに記してあった。

37 これは一八五〇年代の話で、原子の内部構

と、それは世の世俗権力と連合しつつ、新たな合成の方式が見出されていく。そこにドイツの染料産業が興り、IG社が形成される……

ツァーレの夢に現れたのは、ムズからの尾を口にくわえた「グレイト・サーベント」、世界をぐるりと取りかこむ、夢みる「蛇」だったが、その夢が、結局どんな目的に使われることになったか。その皮肉な結末には戦慄を禁じえない。「世界」は閉じていて、循環し、反響しながら、永遠に回帰している」と告げる「蛇」が、その「円環」を破ることを第一の目的とするシステムの中へ送り届けられることになったのだ。収奪するだけで、返納はしないこのシステムは、「生産性」と「利得」の一方的な増加を要求する。世界全体のごく小さな、必死に動き回る一部が、残りの部分から膨大なエネルギーを奪って、その利潤を上げていくことを、だ。その過程で、残りの者、人間だけじゃない、動物、野菜、鉱物を含む「世界」のはとんどが廃棄され、クズ同然に扱われる。そんなことをして、いつまでもつか——「システム」にわかっているのか。単に時間を金で買っているだけじゃないか。その時間にしても、人工資源であって、「システム」の外側では価値など持たない。「その「システム」にしても、遅かれ早かれ崩壊は免れない。このエネルギー耽溺者女、世界の残りの部分が支えきれなくなったとき、生命連鎖のなかの罪のない生き物をぜんぶ引きずりながらそれは死の中へ瓦解していくしかない。「システム」内で生きるってことはだね、自殺志願者の運転するバスに乗って遠くへ旅に出るようなもんだ……もともと、運ちゃん、愛想はいい、拡声器に向かって可笑しなジョークも飛ばしてくれる。ツァーレ・モーニング、みなさま、おはよう、もうすぐハイデルベルクね。古い歌がありました、ご存じですか、グレイ・ロスト・マイ・ハート・イン・ハイデルベルク——いや、

夢の循環と利得の追求は、蛇の夢の中心である。

わたしの友人に、ハートじゃなくて、ここで両耳を失った人がいるのよ！ 誤解しないで、ここは本当に素敵な町です。人びとの心は温かです。素晴らしい——すぐ決闘しちゃうのが玉にキズなんだけど。いえ、まじめな話、大歓迎してくれる、それ請け合いね。町に入り込む鍵だけじゃなく、酒樽の口を開ける鍵もくれちゃうことでしょう……」^{usw.}田舎の景色のなかをバスが行く、光の具合が変化し続ける——城塞、岩山、さまざまな形や色の月、それらが視界に見えては消える。朝の奇妙な時間にバスはときどき停車する。理由は告げられない。体を伸ばしに外へ出ると、そこはライムライトの灯る中庭、夜の暗がりの中にあっても匂いでそれとわかる巨大なユーカリの樹の下で、老人たちがテーブルを開いてすわっている。彼らのカードは手垢でベタつき、すり切れている。その〈剣^{ソード}〉や〈杯^{カップ}〉や大アルカナを、ほのかに震える光のなかに投げ出す。その背後ではバスがエンジンをつかして待っている——乗客のみなきまは席にお戻り下さい、アナウンスが聞こえる。だめだめ、ここに留まってゲームを学び、この静かなテーブルに年を取るまですわってほしいと思ってもだめ、きっちりアイロンのなかった制服の彼がバスの入り口で待っている、〈闇の王〉が乗客みんなの切符やID、旅行証をチェックしている、今宵を支配するのは、^{エンタープライズ}企業 業の指揮棒なのさ……彼がうなずいてきみを通してくれる、その顔、その狂った専心の目が一瞬見える、そのとき、心臓が二度三度バクバク動いたその一瞬、きみは思いたす、そうだったんだ、この旅は最後には流血で終わるんだ、威厳も何もあったものではない突然の破滅へ突っ込んでいって——だが、それまでは旅が続く……座席にかぶさった、本来なら広告でも貼ってあるところに、代わりにリルケの「第九の悲歌」からの引用がある、「一度だけ、ただ一度だけ」⁴⁰。〈へかれら〉好みのスローガンだ。後戻りなし、救済も

ルベルクにハートを取られた Ich hab Mein Herz in Heidelberg verloren] は、いま観光用によく流れるらしい。

39 原文 u.s.w. は "und so weiter" と読み、英語の "and so on" に相応する。

40 「あらゆる存在は一度だけだ、ただ一度だけ、一度、それきり。そしてわれわれもまた一度だけだ。くりかえすことはできない」(手塚富雄訳『ドゥイノの悲歌』。この後に、一度きりの地上の生で何を指すべきか、永遠のくにへ何をもって旅立つのか、という疑問が続く。そしてその答えが、ヴァイスマンが愛してやまない、山上の懸崖の、黄に碧に咲くエンツイアン。

なし、《サイクル》を回ったりしない——《かれら》も、その有能な使用人ケクレも、
《蛇》にそんなビースフルな停滞の意味は込めていない。この《蛇》が意味するのは——
こういうのはどうだね——ベンゼンの六つの炭素原子が、閉じた環を形成しているという
こと。ちょうど、自分の尾を口にくわえた蛇のように。ワカタカナ？「今日われわれが
知るところの芳香環、《アロマティック・リング》であるわけだ」ベクターの指導教授ラ
スロ・ヤンフは、弁舌の途中、隠しポケットから金の六角形をした物体を取り出した。中
央には末端が太くなったドイツ十字、これはIGファルベンから授与された勲章だが、教
授は愛すべき老人の戯けた口調で、その十字はドイツの象徴というより、炭素の四価を表
わしていると考えた方が気が利いているな、とのたまう。「しかしだね……誰が」——こ
こで聞いた手をバンドリーダーのように拍に合わせて差し上げながら教授は続ける、「誰
が、《夢》を送ったか？」ヤンフの質問はいつもそうだ、どこまで修辭的なものなのか
皆目わからない。「我等の墮ちぶれた園に、この新たな《蛇》を送り込んだのは誰だ
——腐敗し、混乱し、無垢の住処としての資格など消え失せた園に——それとも、無垢は
われわれの時代の不偏中立、冷淡な諸機構へのしづかなる収まりそのものであるというの
か——ケクレの《蛇》は、その無垢を壊しに来たのでなく、どれだけ無垢が失われたかを
われわれに告げに来たのか……われわれはかつて限られた分子を、限られた組み合わせを
与えられただけだった……自然界に見出したものだけを使った、何の疑いも持たず、とき
にそれを恥と感じながら——だが《蛇》はささやいた。変えられるのだぞ、と。所与の分
子の残骸が積み重なった中から、新しい分子を引き出すことができるのだ、と。……さて、
他に《蛇》は何と言ったか。誰か答えられるものはあるか？ きみ、答えてみたまえ、ベ

41 ヒッリー・パレン
スの胸のまわりでも、同
様の六角形の物体が弾入
っていた（上巻478ページ）。

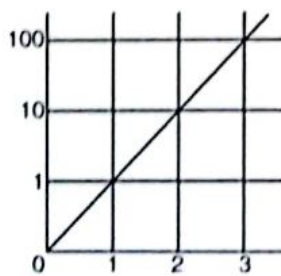
クララ——」

自分の名が、雷鳴のように、頭上に落ちてきた。もちろん、それはヤンプ教授博士の声ではなかった。その朝の起床係だった同僚が、廊下からベクラーの名前を呼んだのだ。イルゼは髪にブラシをかけながら、こちらを見て微笑んでいる。

昼の仕事は前よりうまく進んでいた。みんなも以前ほどよそよそしくなく、ベクラーの目を見てしゃべるようになった。みんなイルゼに会い、魅了されていた。同僚の顔になにか違った表情が現れたとしても、ベクラーは無視した。

そしてある晩のこと。彼は少々酔っ払い、翌日の発射に不安と昂奮とを感じながら島から戻ってくると、寮部屋がカラッポだった。イルゼも、花模様のバッグも、いつも寝台の上に放り出している洋服も、みな消えている。はじめに残っていたのは対数方眼紙一枚だけ（それはベクラーの恐怖を、指数関数的な上昇から、単なる線形の上昇へと緩和するのに役だった⁴²）。その方眼紙でイルゼはよく月の家の絵を描いていたが、いまはそこにこんな書き置きが。「バビー、もどるようにいわれました。たぶん、また会わせてもらえます。そうだといいです。リーベ、イルゼ」

クルト・モンダウゲンが入ってきたとき、ベクラーは娘の寝台に横になり、枕に残ったイルゼの髪の匂いらしきものを嗅いでいた。それからしばらくの間ベクラーは正気を失い、ヴァイスマンを殺してやる、ロケット計画を破壊し、ここを抜け出てイギリスに亡命してやると口走った。……モンダウゲンは腰をおろし、ひたすら聞き役に回った。一、二度はベクラーの肩に手をかけてなだめ、パイプをふかすなどするうちいつしか夜半を過ぎ、その間にもベクラーはありえぬことを口にし、泣き叫び、他人を呪い、隣室との仕切りを



常用対数方眼紙

42 対数方眼紙では、 n 乗の値が、 n 倍の長さで表わされるので、累乗的な上昇が、直線的な上昇に抑えられたように感じられる。

ぶったたいて穴を開けたが隣人はかまわずいびきをかき続けていた。午前二時か三時に、どうやら冷静な、いつもの苛立ったエリート技師の口調にもどったベクターは——「あいつら、サイン、コサインの何たるかも知らんバカのくせに、このおれに命令するとはな」——だが、なだめられて同意した、わかった、待とう、あいつらの思うとおりにやらせてみよう……

「ヴァイスマンとの面会を、お膳立てしてあげられるかも知れない」とモンドウゲンが言った。「そうしたら、優美にふるまえるか。穏やかに」

「無理だ。やつが相手では……まだ、だめだ」

「その気になったら、言ってくれ。強い気持ち湧いてくるなら、おのずとふるまい方もわかるだろう」こんな命令調子でしゃべるのは、ふだんのモンドウゲンならありえない。レニキとベクターのようすから、人に指示されることが必要だと見てとったのだろう。レニはベクターを表情で制する術を学んでいた。夫が自分の口から、どんな残酷な言葉をどんな口調で言われるのを期待しているか知っていた……ベクターのもとを去ったとき、彼女が捨てていったのは、最初に自分に命令してくれた主人の後を付いていく、失職中の下僕なのだった。たとえていえば、

《真空の生贄》！

ヌア……アイン……オブファ
ゼア……インス……ファークーム

わたしは、ただの、真空の餌食

(「どなたか、わたしを搾取して?」)

ヴィルト・ニーマント・アウスヌート・ツェーン・ミッヒ、アウフ?

(「わたしは奴隷、主人がほしい」)

ヌア・アイン・スクラーヴェ、オーネ・ヘルリン (ヤータ・タータ)

(「自由なんて邪魔なものはいりません」)

ヴェア・ツム・トイフェル・デイー・フライハイト、ブラウフト?

(さあ、右や左のマゾヒストの方。とりわけ、今夜相手もなく、一人でいつまでたっても実現しない空想をかき抱いているみなさん——男も女もお互い同士一緒に組もうじゃないですか。互いの元気と誠意を確かめ、沈黙やぶって、手を伸ばし、つながり合おう……)

ああ、ベルリンのナトリウム灯の、ほの暗さ

なじみのバーの、ひと気なさ

ああ、この苦しみ

ギリシヤ悲劇の苦悶にまさる

わたしは真空の生贄!

日々が過ぎ去る。ベクトラーにとっては毎日が同じ日だった。同じ朝に始まる冬のように

his Vacuum = 英訳する
と、Just a victim right
in the vacuum。一九二
九年のヒット曲「シェー
ナー・ジゴロ」(英語題
Just a Gigolo)のバロ
ディと思われる。

化びしい一日の繰り返し。表面上は平静を装えるようになった。すべてが戦争に向けて集し、兵器のプログラムにとってそれ以外ありえない方向へ前進していく感覚が身についた。当初その感覚は落胆ないしは特定できない不安に類似し、食道の痙攣と、醒めても抜け出られない夢をもたらしした。起きぬけに、自分宛のメッセージを書くこともあった。内にある叫ぶ狂気をなだめるためだ——1 それは組み合わせである。1・1 それはスカラー量である。1・2 それがもたらすネガティブな面は、等方向的に分配されている。^{アイソトロピカル}2 それは陰謀ではない。2・1 それはヴェクトルではない。2・11 それは誰かに向けられていない。2・12 それは私に向けられていない……usw。コーヒーの味もしだいに金属的に感じられ、デッドラインのそれぞれが、文字通りの死活問題となるにつれ、一見平凡に見える仕事の背後に、なにやら漠然と終末的^{ターミナル}な、日々なにかの顕現に向かって近づいている雰囲気⁴⁵が漂うようになっていた。……（「新惑星の冥王星ね」⁴⁴）遠く過ぎ去った日、臭気ただよう暗闇に横たわりながら、妻がささやいたことがある。アスタ・ニールセンのような長い上唇を、自分を支配する月が満ちていくように膨らませて、「冥王星がいま私の星座に入ってきているのよ。ぎゅちりつかまって、ゆっくり動いている。とっても遠くをとってもゆっくり……でもいずれ爆発するの。冥王星はね、単独でホロコーストをつくり出す陰鬱^{ダリム・フエニックス}な不死鳥……自分の意志で復活する。演劇のように制御^{コントロール}された破滅。神の恩寵も、介入もない。ブルンヒュブナー⁴⁶とか、ヒトラーに取り入ろうとして、それを「国家社会主義の惑星」と呼んだりしてる占星学者もいるわ。実は本当にその通りなの、あの人は文字通りの真実を語っていることに自分で気づいていないんだけど。……起きてるの？ フランツ……」

44 理論的に存在が仮定されていたこの「惑星」は、一九三〇年、アメリカ人の若き天体観察者クライド・トンボーによって確認された。

45 デンマーク出身の女優。サイレント時代のドイツ映画で活躍。

46 フリッツ・ブルンヒュブナーは著書『冥王星Eros』（一九三四）で、この惑星を占星学的に意

戦争が近づくにつれ、優先権争いや政治的かけひきが熱気を帯びた。陸軍と空軍が争い、兵器部が軍需省に抗し、大望をもったSSは他のすべての者たちと対決した。その若さと、繰り返されたテスト飛行の失敗から、フォン・ブラウンに対する不満もくすぶって、これが数年後、一種の側面の反乱へと発展する——まあこうした対立は、ふだん気づかないだけで、テスト・ステーションという場には常にありふれたこと、日常を織りなす生地のようなものなのかもしれない。それでも、大きく見れば、テスト結果は徐々に希望の方向へ向かっていった。ロケット⁴⁷について考えるとき、シンクザール⁴⁸に思いを馳せずにいることは不可能だった。このロケット⁴⁹なるものは、あらかじめ予定された、この世ならざる性質を帯びた形に成長してゆくさだめなのだ。作業班は一連のA5⁵⁰を打ち上げていた。これには制御装置がなかったが、バフン、トでの回収には成功していた。それは五マイルの高さに届き、スピードもほとんど音速に近づいていた。飛行の誘導ができるようになるまではまだ道のりが長かったが、翼は黒鉛製のものに置きかわり、横振動も五度程度にまで縮小して、ロケットの動きが安定してきたことに、誘導担当の技師もかなり満足しているようだった。

その冬のある日、ベクラーはヴァイスマンに会っても大丈夫、うまくやれるという気になった。会いに行った相手は眼鏡を、まさにヴァーグナーの歌劇に出てくる楯のようにして構え、受け入れがたい極大値——怒声、非難、職場でふるわれる暴力——に備えていた。まるで見知らぬ人間に会うかのようなうだった。この男との対面は、クマースドルフの発射実験場以来だった。ここベーク⁵¹、ンデでの十五分間に、ベクラーは前年一年分の総計を上回る笑顔をつくり、ペールマンが改良したエンジン冷却システムのすばらしさを賞賛した。

味づけた。

47 ドイツ語で「運命」を意味する。

48 A3型と同じエンジンを使用しつつ、同等の全長ながら、音速到達を目指した頑強な機種。打ち上げ実験開始は一九三八年の夏。

49 それまでモリブデン合金を使っていたのを耐熱性の黒鉛（グラファイト）に変え、経費削減も実現した。

50 エルンスト・ペールマンは、ロケットエンジン開発を主導したヴァルター・ファイエル博士の補佐。燃焼チャンバーの内壁にアルコールを引き入れて燃焼させることで、温度を上げる装置を提案した。

「まだ熱い箇所があるな。それはどうなんだ」理にかなった質問だ。同時に、親しみの表現でもあった。

この男にとって、熱の問題などはどうでもいいのだということにベクターは気がついた。モンダウゲンが警告していたように、これはゲーム、一種の儀式化された柔術なのだ。

「熱流束密度ですが」ベクターは歌を歌っているときのような気分になっていく。「毎時一平米一℃あたり、三百万キロカロリーという値を得ています。目下のところ、一応再生冷却法に依って問題をしのいでいますが、ペールマンはすでに新しいアプローチを開発しています」——白墨と石板でプロフェシヨナルな雰囲気醸し出しながら——「燃焼チエンバーの内側にアルコールの薄膜をつくることで、外への熱の流出を相当量抑えることができますということですよ」

「アルコールの注入か」

「そうです」

「どのくらいの燃料をそちらに回すのだ。エンジン効率にはどんな影響がある？」

ベクターは具体的な数値を用意していた。「今のところは配管の設計者が狂ったようになっていますが、納入期限にはまだ余裕がありますから——」

「二段階燃焼プロセスの方はどうなんだ？」

「それでいきますと、容量的に楽ですし、乱流の具合が改善されます。ただ、異方的に圧力低下が起こって効率的にはよくありません。……現在、いろいろな方向から解決を模索しているんですが、もう少し資金が潤沢にあれば……」

「ああ。それはわたしの部門ではない。うちだって、もっと潤沢な予算がほしいよ」そ

こでふたりは笑う。官僚による予算引き締めに苦しむ、紳士的な科学者仲間のように。

ペクラーが、娘と妻のための交渉に来たことを忘れてしまったわけではない。これらの質問と応答によって、何か他のことを暗号で語っていたということでもない。ただし、それはペクラーの個人的な評価と関係していた。ペクラーには一定の軌道に沿った行動が要求された——単に役割を演じるのではなく、その役をみずから生きなくてはならない。少しでも嫉妬へ、形而上学へ、曖昧さへ傾けば、そのズレをすぐに軌道修正しないと墜落してしまう。冬と春を通してヴァイスマンとの会合が慣例になった。ペクラーはひとつの仮面に、〈成熟せずに大人になった天才少年〉そのものになっていった。この役柄には、本当になりきることができた。これを演じていると、参考文献のことでも、発射データに関しても、延々と、準備してこなかったことまでしゃべり続けられる。穏やかな、研究者モードの、〈ロケット〉に憑かれた言語が、自分でも驚くほどどんどん出てくるのだった。

八月末に、二度目の訪問があった。イルゼが戻ってきた、と言いたいのだが、その確信は持てない。前回と同じく単身で、予告もなく——走り寄り、キスして、自分のことを「パピー」と呼ぶのだが……

その髪はどう見てもダークブラウンだし、髪のカットも違っている。目は切れ長になり、位置も違う、肌も前ほど白くない。背丈がまた、一フィートも伸びた気がする。しかし、この年齢の女の子は一晩でグンと背が伸びるというから。いや、それは本当に「この年齢」だったか。……彼女を抱きとめながら早くもいじけたささやき声が始った。これは同じ子なのか？ 別の子を送ってきたのではないのか？ どうして、この前のとき、もっときちんと観察しておかなかったんだ？

今回ペクラーはたずねてみた、いつまで居させてもらえるかを。

「まだ言われてないわ。言われたら、できるだけ教えるわね」月に住むことを夢みる小さなリスの子のイメージが、この脚長で、やや地黒の南方的な娘の姿に設定され直すまで、この子はここにいてくれるだろうか——二回目の（いや、初めてか？ 三度目か？）の訪問でのふるまいのぎこちなさも、父を求める気持ちも、いたく胸をつく。ペクラーにすらそれは明らかだ。

レニに関する報せはほとんどなかった。ムティとは冬に連れていかれた、とイルゼは言う。別の収容所に移ったと、うわさで聞いたわ。そうか、そういう手で来たか。チェスの歩を差し出して、女王^{クイーン}を取っていく。そうやってヴァイスマンは、おれの反応を見ているのか。ヴァイスマン、今度はやりすぎたぞ——ペクラーは靴紐を結び、充分な冷静さをもってヴァイスマンを探しにいき、職務室で彼を追いつめ、ぼんやりと役人的な善人顔の並ぶ前でこの男の悪どさをあげつらい、告発が頂点に達したところで、その男の傲慢に瞬きする顔面にチェス盤を駒もろとも投げつける……ペクラーというのは熱血な奴で、反抗的ではありますが、しかし総監、こういう燃えるような熱情と正直さを、われわれは必要としていませんか——

その子が、ふたたび自分の両腕の中に来て、キスをしてくれた。無報酬で。ペクラーは苦悩も忘れ、長時間無言のまま彼女を心に抱き寄せていた。

でもその晩、小さな仕切り部屋に置かれた簡易寝台の上で、今年は月に住みたいとも言わずに吐息だけを聞かせるイルゼの脇で、彼の冴えた頭に疑問がめぐる。ひとりは本当の娘で、もうひとりは贗物か？ 二度とも娘をよこしたのか？ 両方とも贗物なのか？ 三

度め、四度目に起こりうるケースの列挙が始まった。……ヴァイスマン、および背後の権力にとっては、何千人もの子供たちを自由に使えるのだ。何年かしてその子たちが女として成熟する、そのうちペクターがひとりと恋に落ちる、という筋書きはあるのか——キングの前まで進みでたその子が、代理のクイーンとなつて、失われ忘れられたレニの穴を埋めるといふ展開が？ 相手の〈棋士〉は知っている、ペクターという男は、現実的近親相姦を犯してしまうことの恐怖より、娘と言われてもそれを疑う気持ちのほうがつねに優っているだろうと。……彼らはどんだんルールを作つてゲームを複雑にしていくことができるのだ。そんな相手の繰り出す手に応じるだけの柔軟性が、今夜のペクターのような、魂を抜かれた男に、あるはずが……

クソ——なんてバカげた話なんだ——市街のボロ屋で一緒に暮らして、あらゆる角度から観察していたではないか。抱かれている顔も、寝顔も、泣き顔も、はいはいしているイルゼも、笑顔のイルゼも、お腹をすかしたイルゼも。あのころ自分は、ベッドにたどり着けないほど疲れ切つて帰宅したこともよくあつて、家に入るなり床に寝転がった。木のテーブルがひとつだけあつて、その下に頭を置いて体を丸めたまま眠ることもできずにいるペクターをはじめて見たとき、イルゼは這つてきて、ちょこんとすわり、いつまでも見ていた。身動きせずに横になつて目を閉じている彼を見たのは初めてだったろう。……眠りに落ちるとイルゼは顔を近づけて脚を噛んだ。落ちているパンくずも煙草も靴も、食べ物かもしれないものは何でも口に入れてみるのと同じ。——お父さんだぞ——だって動かない、食べられそう。ペクターが大声を発し、ゴロリと背を向けたらイルゼが泣き出した。あまりに疲れていて、子供のしつけまで気が回らない。レニがあやして娘は泣きやんだ。

泣き声も、おしゃべりを始めたようすも、うんちの色も、どんな形や音で静かになったかも、ぜんぶ憶えているのに、この子が自分の子かどうかわからないとは、いったいどういうことだ。その間にあまりに多くのことが起きた。歴史も、夢も、濃密すぎた……

翌朝、研究班のリーダーからペクターは、休暇許可証とボーナスの付いた給料を受け取った。行き先に制限はない。期限は二週間。——翻訳すると、おまえは戻ってくるのか？となる。少々の荷物をまとめ、ふたりはシュティン行きの列車に乗った。ペクターの人生をマップしたような粗末な小屋と組立工場、コンクリートの柱とスチールの発射整備塔がうしろへ走り去り大きな紫がかった影のかたまりと化し、やがて沼地によって分断され、遠近の視差をなして離れていった。ここに戻ってこない勇気がペクターにあったらうか？二週間も先のことを考える余裕が？

行く先を決めるのはイルゼに任せた。ツヴェルフキンダーに行きたいという。夏の終わりは平和の終わりでもあった。⁵¹子供らはこれからの時代のことを知っているのか、疎開ごっこを始めている。客車に詰め込まれるように乗り込んで、おとなしく神妙な顔をして。窓の外を見ていたイルゼの目がこちらに向いて自分の目と合うたび、ペクターはあだこうだと言いたくなって、その衝動を抑えるのが一苦労だった。まわりの子供たちの目の中にも、同じ表情があった。彼らにとって、自分は見知らぬ人間なのだ。この子にとっても、どんな距離ができていって、その過程を逆転させるやり方を自分は知らない。

有機的国家においては、^{イノセンス}純真さを確保し、それをいろいろな目的に利用するための場所がなければならぬ。当局ヴァージョンのイノセンスができていく過程において、子供の文化が有するきわめて高い価値が認識された。ゲームもお伽噺も歴史にもとづく伝説も、

51 ドイツ軍のポーランド侵攻は一九三九年九月一日。

ホントめかせるためのあらゆる仕掛けによって、現実のなかに物理的な次元をとる。「十二人の子供」を意味する「ヘッヴェルフキンダー」もその一例だ。数年前からそこは子供のリゾート、ほとんど保養地のようなものになっていた。大人は子供の付き添いがないと、「ヘンティ」の内側に入れない。ここには子供の市長がいて、十二人の子供たちが構成する市評議会もある。通りに捨てられた紙や果物の皮や壘を片づけるのも子供たち、動物園やニーベルンゲンの宝庫を案内して回るのも子供たち、一八七一年の春分の日にはビスマルクが統一ドイツ帝国の宰相に任ぜられる荘厳なシーンの前で、観客を静かにさせるのも子供たちだ。子供にエスコートされず、ひとりで出歩く大人は子供警察に捕まって叱責される。町の運営を実際に子供がしているはずはないが、陰にいる彼らはけっして姿を見せなかった。

晩夏。過ぎ去った日を偲ぶようにして開く遅咲きの花々。……鳥は飛びかい、海水はぬるく、陽は落ちる時間になってもまだ差していた。通りかかった子供が間違えて袖口をつかみ、しばらく一緒に歩いてから人違いに気づき、恥ずかしそうに笑って離れていった。熱い日射しに「ヘガラスの山」がバラ色と白にきらめいた。毎日正午には妖精の王と王妃が、小人や妖精の子をしたがえてねり歩き、ケーキやアイスやキャンディを手渡した。⁵²交差点や広場には楽隊がいて、行進曲、フォークダンス、ホットジャズ、フーゴ・ヴォルフの曲を聞かせていた。流動する子供たちは紙吹雪のよう。水飲み場の噴水はドラゴンや野生の虎やライオンの牙のある口の奥深くで炭酸水をきらめかせ、その前で子供たちが列をなし、ひとりずつ腰をかがめ獣の口の暗がりに頭を差し入れて濡れたセメントと古い水の臭いを嗅ぐ恐怖の瞬間を待っていた。空高く大観覧車が回る。ペクラールとイルゼはペーネミュン

52 数々の歌曲で知られるスロヴェニア（当時オーストリア）出身の後期ロマン派の作曲家。

デから二八〇キロを旅した。偶然にもそれは後に実戦用として配備されるA4型ロケットの飛行距離と同じだった。

大観覧車も、神話世界も、ジャングルの動物たちも道化たちも差しおいて、イルゼは南極バノラマ館を選んだ。同年齢の少年が二、三人、模造の荒野をさまよい、八月の高湿度の中で、アザラシの毛皮にくるまり、ケルンを作り、国旗を立てている。ペクターは見ているだけで汗が出てきた。ひび割れた漆喰製の雪の、うす汚れた紙粘土製の尾根の陰で、数匹の「そり犬」が苦しそうに倒れている。白い紗幕に、隠れた装置からオーロラが投光されていた。ペンギンの剥製が五、六羽、点々と置かれている。

「そうか——住みたい場所が南極になったのか。ずいぶんあっさり——いかん、バカ、口が滑る——」月に住むのをあきらめてしまっただね。この子の正体を知ってしまうことには耐えられないのに。見せかけの南極で、なぜこの館を選んだのかもわからず、どぎまぎしながら汗を垂らし、少女の答えを待った。

彼女は——いや〈かれら〉が？——その緊張を解いてくれた。「あら」と、肩をすくめて、「月に住みたがる人なんているかしら」。これで話は打ち切り。その後二度とふれることはなかった。

ホテルに戻ると受付の八歳の従業員から鍵をもらい、制服の子供が操作する、やかましいエレベーターに乗って部屋に上がった。部屋には昼間の熱がこもっていた。イルゼはドアを閉め、帽子を脱ぎ、彼女のベッドの上へたたんで置いた。ペクターは自分のベッドに倒れこんだ。すると、靴を脱がせてあげると言っていてイルゼが寄ってきた。

「パピー」おごそかに靴紐をほどきながら、「きょう、となりに寝てもいい？」片手が、

彼の素肌のふくらはぎの根元に、軽く置かれている。半秒の間、眼と眼が触れた。いくつかの不確定項が動き、シフトして、次の瞬間、一つの意味に固定された。恥ずべきことに、彼が最初に感じたのはブライドだった。おれはこのプログラムにとって、そんなに重要な人物なのかと。この初期の段階ですでにへかれらのサイドから物を見ていたのだ——あらゆる性癖を書類に書き留める。ギャンプラー、足フェチ、サッカーファン、そういうことがいちいち重要だ、あとで使える。いまは開発技師たちを喜ばせておくにかぎる。少なくとも不幸の原因から眼をそむけさせておくことだ。連中の仕事については、少なくともデータ・レベルのことはわからんかもしれんが、それでも統括者はおまえだ。リーダーとして、結果を出すことが求められている……ベクラーはいま、娘の話を持ち出し、知つとるよ、なんとまあ、下劣なことよな。まったく何を考えながら数式を書いていたんだか。しかし、そういうことの裁定は繰り延べだ。戦争が終わったら充分な時間がで

きるから、ベクラー父娘の汚れた秘密についての調査はそれからいい……ベクラーは少女の頭のでっぺんを平手打ちする。ひどく鋭い音がした。その一発で怒りは消えた。そして彼女が泣き出すこともしやべることもできないうちに、ベッドの上に引きずり上げる。彼女の茫然とした小さな手はすでに自分のズボンのボタンにかかり、白のワンピースは腰の上までまくられる。その下は、何も、一日中何も穿かずにいたのか……ずっとはしくっていたの、少女がささやく、父の鋤が子の溝をさぐる……驚愕の近親行為は数時間に及ぶ。それからふたりは黙ったまま服を着て、足音を忍ばせ部屋を出る、ほのかな曙光の、その最初の一筋の中へ。これから必要になるものすべてを花模様のバッグに詰めて、夏が終われば消えていく運命の、眠れる子供らのわきを過ぎ、監視モニターも鉄道

の守衛も通り抜け、たどり着いたのが海辺の釣船。編み上げた船長帽をかぶった老人の船乗りが、ニコニコ顔で父娘を船に乗せ、デッキの下に隠してくれる。出発すると娘は寝台に寝そべり、ボンボンとエンジン音が聞こえる中でペクターのズボンのなかをしゃぶった。何時間もそうしていた。「出てきなさい、あんたらの新しい家だ！」と船長が叫ぶ。外は灰色と緑の、霧のデンマーク。「そうさ、ここの人々は自由なんだ。⁵³ 二人とも元気だな、幸運を祈る！」三人、デッキの上で抱擁……

なあって話にはならないのだ。ペクターはそのとき、イルゼの言葉を、不安だからひとりぼっちにしないでという意味にとった。その解釈を選択した。へかれらのゲームを知った上で、へかれらの邪悪さにもかかわらず、この「イルゼ」の言動がへかれら以上に信用できる根拠がないにもかかわらず、そう思うことにした。信念や勇氣に基づいてではなく、現状を確保したいという欲望から。この娘の真の正体を調べることは土台できない。平和な時代に限りない方策を労しても無理だろう——みずからの厳密な目が求める、誤差ゼロの鋭利な確信を得ることは。あのベルリンの日々から今のペーネミュンデまで、イルゼはどんな軌跡をたどったか。それは全ドイツと関わりうる絶望的に縛れた動きであり、一本の出来事の連鎖に画定することはそもそも不可能である。肥大した「国家」な官僚的脳髓のどこかに、自分を標的にした倒錯ゲームを指示した証拠が残っていたとして、それを見つけることができると思えない。政府機関の機能はすべて、国家社会主義ドイツ労働者党の起ち上げたコピー機関に移しとられてしまった。委員会は分裂、併合、自然発生、消滅を繰り返した。自分のファイルを見せるなど、誰がするものか。自分がその選択をしたのかどうかも、実は定かではない。だが夏の匂いの染みついた、

53 デンマークは一九四〇年ドイツ占領下に入る。語られているのはポーランド侵攻以前のこと。

夜の低音がうなる、灯りをつけていないホテルの部屋で確信が訪れたのは事実である。ベ
ッドカバーの上に丸い麦藁帽子が小さな月のように浮かび、窓の外の暗闇に大観覧車の赤
と緑の光がゆっくり回り、学童の団が通りで、生まれる前の、カネで売られて残酷に扱
われた時代の賛歌を響かせている——ユッフ・ハイラサ・サ！ オー・テンポ・テンポ
*54 ラ！——それを聞いているうちに一切が読めた、チェス盤と駒のパターンの一切がペクラ
ーに見えたのである。ゲームが続く間、この子がイルゼでなければならぬ、と。この子
は事実、自分がそのように決断したという事実において、真に自分の子なんだと。真の意
味での受^{コンセプション} 胎が起きたのはそのときだった。ずいぶんと遅れをとってしまったが、そのと
きペクラーはイルゼの父となったのである。

残りの休暇期間、ツヴェルフキンダーを散策する二人はいつも手をつないでいた。ラン
タンが象の鼻の先端でぶらりと揺れて二人の行く手を照らす。象の顔は高い柱のて
っぺんにあった。……蜘蛛の形をした橋の上から白豹や猿やハイエナを見下ろし……模型
の列車が走るわきを通り、スチール・メッシュ製の恐竜の、コルゲート・パイプ^{*55}の足の間
をぐり抜けると、そこはアフリカの砂漠で、二時間おきに土人の反逆者がフォン・トロ
ータ將軍の陣地を攻撃し、勇敢な青い制服の兵士たちがこれを迎え撃つ。元気あふれるド
イツの男児がすべての役を演じるこの愛国心にあふれるショーは、あらゆる年齢層の子供
に人気がある……それから大観覧車に乗った。剥きだしの巨大な回る輪には何の優美さも
ない。それはただ、持ち上げて、怖がらせるだけのものだった。

最後の晩——といっても今回もイルゼは突然召し上げられてしまったから、そうとは知
らなかったが——二人はもう一度南極館へゆき、ペンギンと臘の雪を見た。まわりで人工

54 「時よ、時よ、パン
ザーイ」という意味。十
九世紀の詩人エマヌエ
ル・ガイベルの、ラテン
語混入詩。"Lob der
Edlen Musica"。グタイ
トルで検索すると歌が聴
ける。

55 環状に溝が刻まれ
ているパイプ。

のオーロラが光っていた。

「来年も」イルゼの手を握りながら「また、ここへ来たいかい。一緒に来ようね」
「うん。毎年よ、バビー」

翌日、その子は消えていた。来たるべき戦争へ引き戻された。子供の国にベクターがひとり。ひとりでペーネミュンデへ戻る……

それから六年。毎年きまって一人の娘がやってきた。一歳ずつ年をとって、その都度ほとんど最初からやり直した。連続性があったのは娘の名前とツヴェルフキNDER、そしてベクターの愛——愛ではあっても、それは臉に残る残像のようなもので、それを利用して「へかれら」は娘の動画イメージをベクターに与えたのだ。各年の夏の一コマを映写して、間をベクターが勝手に埋めて単一の少女像をつくり上げるに任せる……タイムスケールは二四分の一秒⁵⁶だろうと、一年だろうと変わりはあるまい（風洞実験でもオシログラフでも、と、このエンジニアは考えた、回転ドラムのスピードは好きなように上げ下げできるとわかった……）

ペーネミュンデの風洞の脇まで、ある晩ベクターは歩いて行って、高さ四〇フィートにそびえる球体の脇に立ち、⁵⁷白い巨大な球体から空気を抜くポンプの音を聴いていたことがある。五分間かけて虚空が成長し、次の瞬間、恐るべき吸気が、二十秒もの超音速の気流の吸いこみが起こる……続いてシャッターの閉じる音、ふたたびポンプの作動……それを聴きながらベクターは、八月の二週間のために一年かけて空っぽにされていくみずからの、シャッターつきの愛を思った。こちらに背後に、同様の工学的ケアがある。ヴァイスマンと談笑し、杯を合わせ、卑猥な冗談も言い合う間にも、音楽と笑い声の背後には、夜の沼

56 フィルム一コマ分の映写時間。

57 ドルンベルガーの『V-2』によれば、一千立方メートルの容器を九八パーセントの真空状態にしておいて、速度調整可能な高速気流をつくり出すこの装置は、午前七時から深夜の二時まで

地と冬の山脈の一面に拡がるチェス盤があり、そこに生身のコマが置かれていく音が聞こえた。ペクラーは風洞実験から次々と出てくる「 $\frac{1}{2}$ モデル」の数値に目を通しつつ、ネット・ノーマル・フォース^{*58}がロケットの各部分にどのような力がかかるだろうかを調べた。それを何百もの異なるマッハ数に関して行なった。それをプロットすると「 $\frac{1}{2}$ モデル」の真のプロファイルが得られる。それは滑稽にひん曲がっていた。蠟でできたかのようなそのロケットは、先端から内径2の距離のところではイルカのように背を丸め、そこから縊れて尾に至って急に伸び上がり、尾翼の肩にありえない突起を作っていた。ペクラーは彼自身の顔をプロットしたらどうなるかを考えた。光が捉える顔ではなく、「帝国」と強制と愛の座標を移動するグラフが描く自分の顔……それは、死が人の顔を骸骨に変形する際に生じると同様の減損をこうむったものに違いない。

四三年、イギリス空軍がペーネミュンデを襲ったとき、ペクラーはツヴェルフキンダーに行っていた。汽車が駅について、トラッセンハイデの「外国人労働者」地区が倒壊し粉砕され、瓦礫の中から死者が運び出されているようすを目の当たりにした瞬間、抑えようにも抑えられない恐ろしい疑念が湧いてきた。ヴァイスマンは何か利用するために自分を温存しているのではないかと。なにか特異な命運のために。なにかしらの方法である男は、その晩イギリス軍の爆撃があることを知ったのだらう。三九年にすでに知っていて、それでその休暇は毎年八月ということに決めていたのだ。おれが空襲にやられることのないように。ちと一方的か……パライノアといえはいえる……だがその考えは、ペクラーの脳内に、繰り返して沸き起こる騒音となった。自分の身が石に変わっていく感じがした。地面から煙が浸みだしている、見ている前で、黒焦げの木々が一吹き、海風で倒れた。

作動を続けた。

58 鉛直に打ち上げられるロケットに働く、重量と推力と流体力学的な力の総計。

59 英空軍の「ハイドラ作戦」によるペーネミュンデ空襲は一九四三年八月十七、十八の二晩に及んだ。推力チームを率いたヴァルター・ティール博士（享年三十三）を失ったものの、実験施設の被った被害は意外に少なかったのに対し、近隣のトラッセンハイデ収容所の奴隷労働者に六百五十名の死者を出した。これを期に、研究施設は一部バイエルン州のコッヘルへ、製造工場はノルトハウゼンに移される。

一步踏み出すごとに細かいほこりが舞い上がり、服を白く、顔をほこりの仮面に変えた。半島の北側ほど被害は少なかった。死と破壊の量をグラフにした線は、南から北へ、奇妙な低下を示している。最貧の、いちばん無力な者がいちばん酷い結果を得るところは、翌年ロケットの報復にさらされたロンドンで、東の貧しい地区ほどひどくやられたのと正に同じである。犠牲者の大半は、「外国人労働者」といえば聞こえはいいが、実際はドイツが占領した国々から強制連行してきた民間人捕虜だ。風洞や測定用の家屋に被害は及んでいない。試作工場の損害もごく軽微だ。研究者の暮らす寮の建物は被弾して、朝霧の中で幽霊のような人影が動き回っていた。水は出ないのだろう、バケツにビールを注いで顔や手を洗っている者もいる。同僚たちの視線がペクラーに注がれた。その多くが非難の表情を隠しきれていない。

「おれも、爆撃されずにいたかったよ」

「ティール博士が死んだぞ」

「お伽の国はどうだった、ペクラー」

「申し訳ない」ペクラーは、自分のせいではないのに謝った。誰も何も答えなかった。ただ見つめる目があり、昨夜のショックがまだ抜けていない目があった。

そのときモンダウゲンが現われた。「みんな疲れ切ってしまったんだ。試作工場まで一緒にきてくれ。あれもこれも整理しないといけないくてな、手が足りないんだ」ほこりにまみれながら、のろのろと歩く。「いやとにかく」モンダウゲンが言った、「われわれみんな、少々まいってしまったんだ」

「まるでおれがやったみたいなの口調さ」

「ここにいなかったことで、きみは罪悪感を感じているのか？」

「自分がここにいなかった理由を考えている、それだけだ」

「ツヴェルフキンダーに行っていたからだよ」と、悟った者が答える。「ありもしない理由を考えるな」

考えまいとした。考えるのはヴァイスマンがすることだ。サディストは彼だ——ゲームに新たな展開を導入して、その残酷さの最大化を図るのは。ペクラーの方は神経網を解かれていくだけ。脳細胞の最後の絡まりも平らかに伸ばされ、黒い蠟燭の照る部屋のなか、どこに隠れるわけにもいかず、ご主人様の思いのままだ……自分の存在が最終的に何であったのか、ついに答えが下される。……その瞬間が待っているのをペクラーは感じる事ができた。まだ見たことのない部屋で、記憶しているはずもない儀式が始まる……

いよいよ早まったかと早合点したこともある。その冬一度、ブリズナ^{*60}での一連のテストの最中のこと。いよいよ来たかと、ペクラーはほぼ確信した。発射試験場は東方、ポーランドへ移動していた。今度は陸に落ちてくる。ペーネミュンデで打ち上げたロケットはすべて海に落ち、落下してくるところを直接観察する手立てはなかった。ブリズナへの移動はSSのほぼ独占的プロジェクトであり、カムラー少将の帝国建設の一部であった。^{*61}当時、最終段階へと進んでいた「ロケット」は、空中爆発という問題に苦しめられていた。標的に達する前に爆発してしまうのはなぜか。誰もが異なる説明を考えた。液体酸素タンクの圧力が高くなりすぎるのだという説。下降中のロケットは燃料と酸化剤の分で十トンほども軽くなるため重心が移動して不安定になるという説。さらには、アルコール・タンクの絶縁に何らかの問題があり、再突入の際に余剰の燃料に引火してしまうのだという説。答

60 現在のポーランド南東部の小さな村。発射実験場は深い森の中の空隙地につくられた。ペーネミュンデ空襲の三ヶ月後には移動が完了し、四三年十一月末以降の全発射実験はブリズナで行われる。

61 (ヴァイスマンらを部下に抱える) ハンス・カムラーはロケット兵器の大量生産を陣頭指揮、ミッテルヴェルケへの引越しやドーラ強制収容所からの奴隷労働調達の決定を行った。一九四四年八月からはドルンベルガーに代わってV2プロジェクトのディレクターに。

えを突きとめるため、ベクターは出かけた。すでに推力の研究グループからも、設計そのものの仕事からも離れ、新素材^{マテリアル}研究班に所属し、絶縁や衝撃吸収、継ぎ目の詰め物に適する、心躍る新物質^{プラスチック}の開発を進めていた。ブリズナ行きを命じられたベクターは、それがヴァイスマンの一手かと思うと不思議な気がした。その日、ポーランドの牧草地の、まさにロケットの落下が想定される地点に尻を落としているうちに、確信を得た。

緑のライ麦畑となだらかな丘が、四方に何マイルも続いている。ベクターはロケットの落下標的であるサルナキ地域の小さな塹壕のそばで、みんなと一緒に双眼鏡を南のブリズナ^{ブリズナ}の方向に向けていた。的である十字^{クロスヘア}の交差でひたすら待つ。待っている。伸びてきたばかりのライ麦畑を風がわたり、柔らかな毛先を撫でていく……この田園地帯を上空から、何マイルもの高さから落下するヘロケット^{ヘロケット}の目線で捉えてみよう。緑の濃淡をなして広がる森、白と褐色のポーランドの農家、黒々としたウナギのようにくねるカーブに陽を浴びて輝く河川……そのまさに中心、聖なるXの中心に磔刑になるベクターが、いや、最初は見えない、だがすぐに……落下が加速を得て、いま像を結ぶ——

しかし、地上にいる彼に、天上からのリアリティがどうして信じられよう。虫の鳴いている、ほのかに暖かくも感じられる日射しのなか、何百万もの茎が風にそよぐのを見ながら赤土の大地の果てに目をやっていると、軽いトランス状態に陥りそうだ。ワイシャツ姿で骨張った膝を立ててすわり、何年もアイロンをかけていない皺だらけの上着の上に尻が乗って、草露が染みこんでいる。同行者らが、ここヘグラウンド・ゼロ^{ヘグラウンド・ゼロ}付近のそちこちに、まるでナチスのキンポウゲのように立っている——首に青灰色のなめし革の紐でかけた双眼鏡を揺らしながら、ああだこうだと、まるでアスカニア号^{アスカニア号}の乗組員のように、装備

の不具合をなしている。SSの連絡隊員の一人が（ヴァイスマンはここにはいない）腕時計を見つめる、それから空を、そして腕時計を。素早い光の明滅のなかで、円いクリスタルの表面が真珠色と化す——時間と羊毛の空とが溶けあった色だ。

ペクラーは四十八時間目の、すでに白髪のみじった無精髭を指先で掻きながら、唇を噛んでいる。唇は、晩冬のはとんどを戸外で過ごしたかのようにひび割れている。冬の風貌。過ぎさった年月が目のまわりに破裂した毛細血管が老廃物のシミをつくり、隈と皺と弛みが陣地を広げて、若く貧しかったころの単純でまっすぐな眼を囲い込んでいた：いや違う、彼の眼は、あの当時から何かを覗かせていたのだ。他人が覗き込むと、こいつは利用できる、どうすれば利用できるかも、わかる何かを。ペクラー自身にはそれが見えなかった。人生の多くの時間を鏡の前で過ごしたのだから。思い出してよさそうなものののに。

空中爆発が起こるなら、ここから見える範囲で起きるだろう。抽象概念も数字計算も設計デザインも、それはそれで必要だが、目の前の問題の解決を、まわりから急ぎ立てられているときにやるべきなのはこれだ。標的のド真ん中に腰を下ろして（身を守るには簡素な塹壕のひとつもあればいい）実物を観測する。炎に包まれた機体の最後の数秒のありさまを見つめる。そいつが標的地点を射貫く確率は、言うまでもなく天文学的に低いのだから、標的のど真ん中が一番安全なのだ。ロケットといっても理屈は大砲弾と同じ、標的のまわりの巨大な楕円形——〈不確定性楕円〉——の中に降ってくる。ペクラーは科学者として、その不確定性を信じてはいたが、それでも自分自身の尻の、震える括約筋をヘグラウンド・ゼロの上に乘っけているとなれば不安にかられずにはいられない。しかもこれは単なる弾道学の問題ではなかった。ヴァイスマンが関わっていた。絶縁に関する自分の

イギリスの大型客船。戦中は軍用となり、イタリアやフランス上陸作戦にも活躍。

知識は、一般の化学者や素材研究の専門家を上回るものではないのに……なぜ、自分が選ばれたのか。ひょっとして……彼の頭の中で、楕円の二つの焦点が急接近して一点に重なり……ひとつのゼロ楕円に……一点に……秘密裡に搭載された生きた弾頭が……他の者たちには特別の整備を用意したうえで……そうなんだ、それがヴァイスマンの狙いなんだ……誘導時のすべての許容誤差が互いを打ち消し合って、完璧なショットとなって……ああ、ヴァイスマン、あんたの最後の一手には品格が欠けていないか——だがこのゲームをずっと見てきた観客もジャッジも一人としていないわけだ、それに残酷な結末にならないとは誰も言っていない。もはや全身パラノイア潰け、こめかみも頭皮も妄想がしみ込んでいる。翼ももれているかもしれない。頸動脈はズキズキと脈打ち、手も足も痛みを感じている。後ろで見つめるのは、黒の軍服を着たブロードの髪の実行者らだ。その金属の徽章がキラリ輝く。早朝の太陽の下になだらかな丘陵地が横たわり、すべての双眼鏡が南を凝視している。《集合体》は軌道を飛んでいる。もはや何ひとつ動かせない。自分以外誰ひとり、今の瞬間の最深奥に、最後の謎に、注意を向けることもない。合理の歳月があまりに長く続きすぎた。文字の書かれた紙が、あまりに高く、はるか遠くまで積み上がった。完全な犠牲者になりきりたいという夢と、果たすべき任務としてフィードされる仕事とは相反したまま、どうしたらひとつにまとめることができるかも見えてこない。A4を実戦に送り出さねばならない日が迫っているわけで、とにかく失敗の確率を押し下げなくてはならない。だからこそ、これだけの数の人間が来て見まもっているわけだが、仮に今朝このポーランドの牧草地から、一切の洞察視力がかき消されて、一番のパラノイド人間にも予め決められた《必要》を超えてものを視ることができなかったとしても、それは何も今

63 楕円の二つの焦点が一つに重なったものが「円」であり、その中心すなわちショットの正確な的にベクトルがすわっているというイメージ。

回のこの場にかぎった話ではない。みんなして両手でつつんだ黒い双眼鏡を目に当てて、なかなか完成させてくれないソレ——洒落のうまいロケット技師が「がんこに落ちない処は女」と呼んだ——がみずから答えを告げてくれるのを……問題はどこのか、前か後ろか、お尻から引く飛行機雲の形に異常はないか、爆発の音はどうだ、何であれ、失敗の原因が少しでも明らかになるのを見まもっている……

サルナキではその日、記録によれば、ロケットはいつものごとく二度爆発し、青空に白い筋を作りながら落下した。今回もまた、時満ちぬ爆発を空中で起こした。鋼鉄の電が「ゼロ」の地点から半径一〇〇フィートのところに散りおちて、ライ麦畑に突きささった。ペクラーにも、他の者が見た以上のものは見えなかった。その後、彼は二度とここに遣わされることはなかった。彼が立ちあがり、体を伸ばし、他の者たちと一緒にゆっくりその場を立ちさる。そのようすを親衛隊が見つめる。ペクラーに関する報告がヴァイスマンに届く。ペクラーを虐める次の策が考えられるだろう。

だがペクラーの私的な思い——みじめに手玉に取られた彼のドイツ的な魂だけが知る——の中で、時間軸は引きのばされ、時の進行は緩慢になっていた。〈完璧なロケット〉は、いまだ宙にあり、いまもって落下中。彼は今も待っている——今日もまた——「ヘツヴェルフキンダー」で、「イルゼ」を、この夏の再会を、それとともにやってくるべき驚きの爆発を……

春になり、ペーネミュンデ周辺を南西の風が吹いて最初の渡り鳥が戻ってくるころ、ペクラーはハルツ山地下のノルトハウゼンの地下工場に移された。ペーネミュンデでの開発の続行は、英軍による空爆後、思うに任せなくなった。そこで——これまたカムラー少将

のプランだが——実験場と製造工場をドイツ各地に分散させ、今度は壊滅的なことになるかもしれない次の連合軍攻撃から身を守る、という決定が下された。地下工場におけるペクラーの仕事は、材料の調達というルーティン・ワークになった。ダイナマイトで砕いた岩面を白く塗った壁のわきに寄せた寝台が彼の寝床、そこで一個の裸電球を頭上につけたまま眠った。夢の中で、電球はヴァイスマンに、輝くフィラメントを魂にした男になった。夢の会話の内容を憶えていられたことはない。電球はペクラーに、たくらみのすべてを事細かく説明した。想像を絶するほど壮大な策謀だった。電球の語りは、しばしば純然な音楽のようでもあり、そのサウンドスケープの中を、ペクラーの追い詰められた意識が動き回った。状況を見つめ、それに従い今はまだかろうじて身を守れてはいるがそれも長くはないだろう。

そのころ、ヴァイスマンと彼の“モンスター”エンツィアンとの決裂のうわさが流れていた。SS自体がドイツ軍隊から分離したように、今度はヘシュヴァルツコマンドがSから離れたという。軍の力は、いまや兵器の保有量ではなく、情報や専門的能力にかかっていた。ヴァイスマンがトラブルを抱えているというのは、ペクラーにとって悪い報せではなかったが、その状況を自分のために利用する方策は見えてこなかった。ノルトハウゼンへの移動命令を受けたとき、かれは一瞬、これでゲームは終わりと早合点して絶望感に襲われた。もうイルゼには会えなくなるのか、と。だがすでに、——ヴァイスマンのオフィスへ出頭せよ、とのメモが届けられたのだった。

ヴァイスマンの側頭の髪の毛は乱れ、白いものが混じっていた。眼鏡の片方のつるが取れ、クリップでつないである。机は資料と報告書と参考文献の山だった。悪魔というより

はむしろ、どこにでもいる、激しいブレッツシャーにさらされた役人のような風貌がペクラ
ーを驚かせた。眼を上げてペクラーを見つめる目が、分厚いレンズで歪んでいる。

「いいか。今回のノルトハウゼン行きは命令ではない。きみの意志だ。わかったな」

ゲームの続行を知ったペクラーは安堵のあまり、二秒ほど、目の前の男への愛情を感じ
たほだった。「新しい展開になりましたよね」

「そう思うかね？」なかば挑発。しかし、実際関心もあるようだ。

「製造になりますから。ここではひとえに研究と開発に没頭していましたから。我々にと
ってあれは兵器というより、ティール博士のいった『空飛ぶラボ』という——」

「ティール博士が亡くなって、ダメージは大きい」

「はい。セクションが別でしたので、個人的にはよく存じませんが」

「空襲でやられるとはな。我々みんな〈不確定性楕円〉の中を動きまわっているというこ
とか。だろう？」

ペクラーは見ずにいた机のごたごたに一瞬視線を落とし、またすぐ上げた。この素早さ
なら、緊張のせいにもできるし、「少佐自身も整理のつかない〈楕円〉の中に捕われまし
たか」との返答の意味もたせられる。「いつもは心配している暇ありません。それに、
ミッテルヴェルケは地下にありますし」

「戦略拠点は地下じゃないぞ」

「私も送られることに——」

ヴァイスマンは肩をすぼめ、大きな作り笑いを浮かべてペクラーを歓迎した。「ペクラ
ー、きみの行く先を言える人間など、いるはずがないではないか。すべては事の展開次第

後に、ヘゾーンでベクターはこの日のことを振り返って思った。罪の意識が生身の感覚として眼や粘膜をヒリヒリさせるなか、あの日ヴァイスマンのオフィスにいた自分が真相を知らずにいたはずはなかったと思った。正しい認識を得ていながら、動転するのを抑えるために、証拠を目の前から消していたのだ。すべてを知りながら、自分を取りもどすための唯一の行動をとることができなかった。あの日、椅子にすわったヴァイスマンを、その場で絞め殺していればよかったのだ。敵のよった瘦せた首から喉仏へと両手のひらをスライドさせ、壕底メガネが落ち、その弱々しい小さな目が力無くかすんでファイナルな暗黒を追いかける……

みずから目を閉ざすことでベクラも加担していたのだった。ノルトハウゼンのこともドーラ収容所のこととも知っていたのに。見ようとすれば、見ることはできたはず——飢え死にした死体、凍てつくような朝の四時の闇の中を作業に向かう外国人囚人の行進も、横縞の囚人服を着て足を引きずる何千もの者たちの眼差しも。イルゼが再教育収容所にいることもわかっていた。だが、八月になって、いつものクラフト紙の安い封筒に入った休暇認可証が届き、北へ向かう汽車に乗り、爆撃され焦げついた、もはや自分の国とも思えない土地を、戦時の村々を、雨降る紫色の野原を抜け、ツヴェルフキンダーのホテルのロビーに立つ少女の目を覗きこむまで気づくこともなかった。その目はいつもの闇をたたえていた（泳ぎ回る苦痛の軌跡——これがどうして眼に入らなかったのか）。そのときはじめて、このドーラが主体した。金網か壁を挟んだ向こう側で父が忠実な勤務に明け暮れて、このドーラが主体した。金網か壁を挟んだ向こう側で父が忠実な勤務に明け暮れて、このドーラが主体した。金網か壁を挟んだ向こう側で父が忠実な勤務に明け暮れて、このドーラが主体した。

64 北ドイツのハイデ
（荒れ野）に紫色のハイ
デの花が咲いている光景。

いた。……ヴァイスマンを呪うなら自分も呪うべきだろう。奴がいかに残酷な策謀家だといっても、自分も負けず劣らずの機略家ではないか。ダイダロス⁶⁵のようにどんな迷宮を作っては、情をもつて生きるといふ厄介を、自分から締めだしてきた。これまで自分の得ていた便宜は、すべて貸し付けられていただけのもの。これからいよいよへかれらの取り立てが始まる。

感じるべき苦痛に、おそまきながら、心を開こうとして、ペクラーはたずねた。収容所の名前は知ってるかい？ イルゼは首肯した——のか、それともそう答えるように指示されていたのか——ドーラよ。出発の前の晩、絞首刑を見たわ。夕方は絞首刑の時間なの。聞きたい？ 話してあげましょうか……

イルゼはたいそう腹を空かせていた。ふたりは最初の数日を、ツヴェルフキンダーで買える食べ物を入れて腹に入れることに費やした。一年前より物は少なく、値はずっと上がっていた。しかし、囲われたイノセンスの飛び地^{エシクレッ}は帝国内でいまだ優遇された地位にあり、食べ物はまだあった。

とはいえ今年は子供をそれほど見かけない。遊園地は實際上、ロケット技師ペクラーとその娘に貸し切られたかのようだった。観覧車を含め乗物はほとんど動いていない。石油がたりないんですと、子供の守衛が告げた。空軍機が轟音をたてて頭上を飛び、毎晩のようにサイレンが鳴り、ヴィスマルやリュベックの方向にサーチライトが見え、爆撃音が聞こえてくるときもあった。いったい何をしているんだ、ペクラーは、こんな夢の国で、ウソの中で。東西から侵入する敵軍に祖国が押しつぶされようとしているなか、ノルトハウゼンでは、いよいよ最初のロケット隊の出撃で、ヒステリーは叙事詩的スケールにまで

65 ギリシャ神話の天才的工学者だったダイダロスは、ミノタウロスの迷宮の作者でもある。

高まっている。平和の時代にさかのぼるテクノロジーの預言が、いままさに実現されようとしているこのときに、なぜ自分は遊びに出されるのか。自分以外に賜暇をもらっている者などいないだろう。『イルゼ』も、ここで何をしているんだ？ もうおとぎ話など卒業した年齢ではないか？ フロックの胸の膨らみが今年に目立つ。通りすぎる少年たちにランドムに向けられる視線は、何の関心も示さずに、空虚にただようだけ。向こうもイルゼには見向きもしない。もうじき国民突撃隊⁶⁶に参加できる年齢なのだ。夢見るのは命令と、すさまじいスケールの爆発と死——わけしり顔の横目をちらりとイルゼに向けて……パパに言われる通りするのかい……その歯で竿をくわえるのかい……いつかあんな子を何人も手にしてみせるぞ……だけどその前に「戦争」のどこかでぼくを待っている大尉殿を見つけないくちや……とにかくこのバカげた場所から解放してくれ……

あれは誰だ、そのとき通り過ぎたのは——彼女の行く手を一瞬ヒラリと横切った、細身の、極端なブロンドの少年は？ 肌の色が透けそうに白くて、⁶⁷「ヘツヴェルフキンダー」にたちこめる暑苦しい靄の中にほとんど溶けこんでしまいうさだ。イルゼには見えたらうか。この少年が自分のもう一つの影であるとわかったか？ この世にイルゼが宿ったのは、父がある晩、映画『夢^{アルフレッド・リュッケン}魔』を見て興奮したからだ。性欲に引かれるまま画面に見入っていたベクターには見えていなかったが、この監督は照明をうまく配して、⁶⁸二つの影を——カインの影とアベルの影を——別個に操り、グノーシス的な象徴性を作りあげていたのだ。いや実は、映画が終わり、彼女の映画上の母が消えてからも、イルゼは、なんらかのイルゼが、消えずに残り、かくして影に影が生じるに至ったのである。『ゾーン』内のすべては、カイン的な光と空間の内側で、〈古い摂理〉によって動くことだろう。フォ

66 敗色濃厚のドイツで「嵐の民衆」*Volke im Sturm*」が結成されたのは、一九四四年十月のこと。

67 「白さ」を強調しているのは、ゴットフリートであることを匂わせるためか。

68 明と暗とのシンボリックな対照性を強調するフォン・ゲール監督の照明については、上巻746ページ参照。

ン・ゲールの映像手法の話ではない。この世はつねに〈二重の照明〉に照らされていて、当時それにたまたま気づいて利用したのが、映画技法の術策に長じた騙し屋フォン・ゲールだけだったということだ。もっとも監督本人にしても、自分がやっていることの深い意味を理解していたわけではない。自作を映したスクリーンを見つめる観客たちに、実際何を見せていたのか、自身まるでわかっていなかったのだ、当時も今も。……そんなわけで、その夏、イルゼはもうひとりの自分自身を通り過ぎてしまった。真昼の影なき内側にぴたりと貼り付いて、交わりに気づくことも、気に掛けることもなく。

この年イルゼとペクラーはほとんど言葉を交わさなかった。とても口数の少ない休日だった。物思いに沈んで歩くイルゼのうつむいた顔に髪の毛がかかり、浅黒い足は、清掃班の人手不足のために拾われていないゴミを蹴とばした。この休日を彼女も心待ちにしたのか、それとも、自分にとっては何年も前から幼稚すぎる場所で、面白くもない技術屋のオヤジと一緒に過ごす命を受けて、内心うんざりしているのだろうか。

「本当は来たくなかったんだろ？」ふたりは汚染された小川のほとりに腰をおろし、アヒルにパンを投げている。代用コーヒーと傷んだ肉で、ペクラーは腹をこわし頭痛もしていた。

「ここでなければ収容所ですもの」強情に顔をそむけたまま、「どこにもいたくない。もういいの」

「イルゼ」

「あなたはどなの？ 山の地下工場に戻りたい？ 妖精たちと話をするの、ねえ、フラッ？」

「いや、好きでそこにいるんじゃないよ」——フランクとは——「それが、わたしの仕事だからね……」

「そうなの、わたしも同じよ、わたしの仕事はね、囚人であること。プロの収容者なの。どうしたら気に入られるかも、物を盗むならだれを狙うかも、どうやって情報を垂れこむかも、どうやって——」

今にもその言葉が飛びでてきそうだった。「やめろ——やめるんだ、イルゼ——」今年のペクラーは本当にヒステリーを起こした。イルゼの頬を叩く。鋭い音にアヒルが驚き、回れ右をしてよちよち逃げた。にらみ返すイルゼの目には涙もない。その目はどこか戦前の部屋部屋の暗がりにつながっていた。ペクラーはその暗がりの中を永遠にさまよいつづけるような気がした。そこに自分はいないかと、ありえたはずの暮らしはないかと、聞こえる声に導かれ、次々とドアを開けるたびに、その暗がりには必ずこの目が。……相手の無関心に彼は耐えられなかった。自制心を失いそうになって、このとき彼なりの勇気を発揮した。ゲームから降りたのだ。

「もし来年ここへ戻ってきたくないなら——“来年”という言葉が、今のドイツでいかにどの意味を持つだろう、「来る必要はないよ。来ないでいるほうがいい」」

ペクラーのしたことを、彼女は即座に理解した。片膝を立て、その上に額をのせて考えてから、「戻ってくるわ」と小さな声でつぶやいた。

「きみ自身が？」

「そうよ、わたしが」

そのときペクラーは、すべてを手放した。あらゆる制御を。長年吹かれつづけていた風

独の風に身を差しだして、カタカタと振動した。彼は泣いた。その手を彼女が取った。水に浮かんだアヒルがそれを見ていた。かすんだ陽の下で海が冷えた。町の裏でアコーディオンが奏でられた。崩れ落ちそうな神話の像の向こうから宣告を受けた子供達が叫び合った。夏が終わった。

ミッテルヴェルケに戻った彼は、なんとかドーラ収容所へ入り込めないか、イルゼを見つけれないかと画策した。何度もトライした。ヴァイスマンにどう思われようと、もう関係ない。親衛隊の衛兵はいつも礼儀正しく話を聞いて、絶対に通してはくれなかった。

信じられないほどの仕事量だった。睡眠が日に二時間以下という状態が続く。山の下に戦況はもはや、うわさか、物資不足の形でしか入ってこない。資材調達は、いまや「三角方式」が原則。同一部品に対して、三つの入手先を用意しておかないと、いつ配送が断たれるかわからないのだ。どこから何が来なかったか、どのくらいの遅れか、それがわかると、どこが爆撃に遭って、どの鉄道が使えなくなったかが読めた。最終的には、近くで手に入る物資で間に合わせるようになった。

少しでも考える暇ができると、ヴァイスマンの沈黙が気になった。こちらから彼を——あるいは彼の記憶を——刺激するために、ベクターらしくもなくフェルシュナー少佐の配下の保安部隊まで出向いて、将校たちに話しかけ、情報を聞き出そうとした。うるさがられただけだったが、ヴァイスマンはもうここにはいない、オランダにいて独自のロケット砲隊を率いているらしいといううわさを聞くことができた。エンツィアンもヘシュヴァルツコマンドの主要メンバーを連れて行方をくらませていた。これで本当にゲームは終わったとの確信が強まった。みんな戦争に捕えられたのだ、生死を決する重要事ができて、

自分のような小物の設計者をいじめている暇はなくなったのだと。それでいくぶん気が楽になった。日々の任務をこなしながら終わりを待っていると、ドーラ収容所に入れられた数千人ももうじき自由になるだろう、という希望も湧いてくる。その中にイルゼもいるかもしれない——イルゼたりうる誰かが……

ところが、春がきて、ヴァイスマンが姿を現した。ペクラーは和やかなツヴェルフキンダーであると同時にノルトハウゼンでもある都市にいて、妖精たちが、おもちゃの月ロケットを作っているのを見ていると、ペクラーのベッドのわきにヴァイスマンが立って、見下ろしていた。その顔は十歳もふけた感じで、最初は誰だかわからなかった。

「急ぎの話だ」ヴァイスマンがささやく。「一緒にきてくれ」

白いトンネルの、絶え間ないざわめきの中を、二人して無言のまま進んだ。ヴァイスマンはゆっくりと、硬い動きで歩を進めた。とあるオフィスの空間に六人ほどが、少数のS隊員、SD秘密情報員^{*69}とともに待機していた。「ここにいる諸君は、それぞれグループからの許可をすでにいただいている」ヴァイスマンが言った。「現在の任を解いて、特殊プロジェクトに取り組んでもらう。最高の機密が要求されるものだ。宿舎も別、食事も専用のところとする。いまこの部屋にいる者以外と口をきくことはなくなる」一同みな、互いを見回した。見た中に知った顔はなかった。視線を再びヴァイスマンに戻す。

ヴァイスマンは一台のロケットの改変を求めた。ただ一機だけ^{*70}。その通しナンバーは消されて、五つのゼロが描かれている。ペクラーはピンときた。そうか、この目的のために自分は取っておかれたのか。ペクラーの「特異な命運」とはこれなのか。しかしその命令は意味をなすものではなかった。ロケットの推進部に、ある一定の大きさ、一定の絶縁性

69 親衛隊幹部ハイドリヒを長官とする国内向け諜報機関SD (Sicherheitsdienst) は「親衛隊保安部」とも訳す。戦時中はRSHA (国家安全保安本部) の中心組織となった。

70 愛するリルケの詩文にならって、このロケットの打ち上げも「一度だけ」である(37ページ註39参照)

71 ふつうは空気抵抗を減らすための流線形の覆いを言うが、この場合設置場所がロケットの尻部にある焼焼室(かまど)に隣接していることに注意。

72 上巻482ページ参照。

を持つプラスチックで、フェアリング^{*71}を作れというのだ。このプロジェクトで一番きつい仕事をささったのは推進部を担当する連中で、なにしろ蒸気パイプも燃料パイプも、新しい通り道を考え、部品の配置替えをしなくてはならない。その新しい装置がいったいどういうものなのか、誰も目にしていない。うわさによるとどこか秘密の製造場所で製作され、その秘匿性から〈黒の装置^{シュヴァルツゲレート}〉という渾名がついたらしい。その重量すら機密扱いだった。これが二週間のうちに完成し、「絶縁装置^{*72} Vorrichtung für die Isolierung」はフィールドへ向かった、ペクターはいつもの監督者のもとで、ルーティンの仕事に戻り、その後ヴァイスマンに会うことはなかった。

四月の第一週^{*73}、アメリカ軍の部隊がいまにも攻めてこようというとき、同僚たちが荷物をまとめ、お互いの住所を教えあい、別れの乾杯をし、物の消えた格納庫をふらついていた。卒業の雰囲気^{*74}が彼らを取りまき、「ガウデアムス・イジトウル^{*74}」のメロディが口笛で出てきそうだった。幽閉された修道僧の暮らしに突然の終止符が打たれようとしていた。

最後まで残っていたひとりの若いSSの衛兵が、埃っぽいカフェテリアでペクターを見つめ、封筒を手渡すと、無言で去っていった。それはいつもの休暇許可証だったが、余命いくばくもない政府のありさまを映していた。ツヴェルフキンダーへの旅行許可証も入っていたが、日付の欄には、誰かがほとんど判読できない字で「戦闘終了後」と書き入っていた。裏面に同じ（ヴァイスマンの？）筆跡でメモが書かれている——彼女は解放された。そこで会えるだろう。ペクターはこれを、00000号の改造の仕事に対する支払いであると解した。すべてはこれのためだったのか。あれほどの長期間、彼を宙ぶりの状態でキープしておいたのはひとえに、この時のために頼れる人工物質^{プラスチックマン}の専門家を必要としたから

73 V2rocket.com の詳細なデータによると、アントワープに向けての最後のロケット攻撃は三月二十八日、その後二つのロケット隊がオランダ国境付近から撤退しファリングボステル（ハンブルクとハノーファーのほぼ中間の、まさにハイデの地）に四月一日に到着。別の一隊は翌二日に二機を発射した後ファリングボステルに合流。しかし四月八日までに彼らはすべての装備を破壊されて歩兵隊と化した。この破壊時に、ロケット00000号の打ち上げがあったということになる。

74 何世紀も昔からあった学生歌の代表曲。卒業に際しての別れの歌で、ラテン語の歌詞の最初の行は「だから愉快にやろう、若さのあるかぎり」。

なのか。

最後の日、ペクラーは主坑道のトンネルの南口から外へ出た。大型トラックはどれもエンジンがかかっていて、春の気配は別れの気配に満ち、山腹の高木は青々と陽を浴びていた。ドーラ収容所の長である親衛隊中佐はもはやその職になく、ペクラーはそのまま中へ入っていった。特にイルゼを探そうとしたわけではなく、ここを立ち去る前に一度は見ておくべきかと思ったのだ。だから覚悟はなかった。わかっていなかった。データとして頭に入っていたはずのことを、感覚と感情のレベルで把握できていなかった。

糞便の臭いが彼を包んだ。糞便と死体と発汗と疾病と白カビと小便の臭い。それら収容所の吐く息に包まれて、這うように進む彼の脇を、裸の死体が運び出されていく——アメリカ軍が来る前に、運び出し、火葬場の前に山積みにする作業が続いているのだ。男たちのペニス垂れ、踵が真珠のように白く丸くつらなっている……どの顔も無傷だ、一人一人判別できる、口元が引っぱられて死に笑いの表情、ジョークのオチに観客全員が笑い声も立てず無言で反応しているかのようだ……まだ生きている者は一枚の葉の敷物の上に十人も折り重なっている。泣く力も弱々しく、咳きこんでいる敗残者^{ル・ザ・メ}……ペクラーに十人も折り重なっている。泣く力も弱々しく、咳きこんでいる敗残者^{ル・ザ・メ}……ペクラーの空虚、彼の迷宮の裏側に常にこれがあったのだ。ペクラーが生き、紙の上に図や印を描いている間に、すぐ外の闇で、この不可視の王国が……ずっと存続しつづけたのだ。……ペクラーは吐いた。泣きもした。壁は溶け出さなかった——牢の壁が涙で溶けたためしはない。この葉の敷床、小部屋の中の顔々は、みな自分のよく知っている顔であり、みなが我が身のように大事であり、二度とあの静寂の中に戻すものと自覚しても、何がどうなるものでもない。……結局自分に何ができるだろう？ どうやってこれらの人びとを留めて

おくことができるだろう。無力感が、悲哀の回転ミラーのように、高鳴る動悸のように彼をさいなんだ、怒りの気持ちも、引き返す気力も起こりようがなかった……

一番暗いところ、最悪の臭いのするところで、ペクラーは一人の横たわる女を、ランダムな女を、見つけた。骨のようなその手を握って三十分すわっていた。女には息があった。立ち去る前に彼は、金の結婚指輪をはずして女の細い指にはめ、脱落しないよう手を握らせた。生きながらえれば、それで数度の食事が得られるだろう。あるいは一枚の毛布が、屋根の下の一晩が、誰かに家まで乗せてもらうことが……



話は戻って、猛烈な雷雨が吹き荒れるベルリン市街。マルゲリータはスロースロップを連れ、ロシア占領地区、シュプレー河近くの木造の荒ら屋^{あは}に來ていた。焼かれたキング・タ^まイガーが入口を衛^{まも}っている。^{*1}塗装は焦げて剥げ落ち、ずたずたのキャタピラは鎖歯車からはずれ、死んだ88ミリ「モンスター砲」は下を向いている。それが差している灰色の川は、強い雨脚にジュージュー音を立て、尖骨^{スピキュール}のようなハネをあげる。

屋内には垂木に巣を作ったコウモリと、カビ臭い壊れたベッド、敷物のない床板に散らばるガラスの破片とコウモリの糞。割れた窓には、ストーヴのパイプを通すところを除いて（煙突も破壊された）板が打ちつけてある。ロッキング・チェアにかかったモールスキンのコートが、灰褐色^{トイブ}の雲のようだ。むかしここで誰か画家が絵を描いていた跡が床にこびりついている——歳月を経た紫紅^{マゼンタ}と山吹^{サフラン}と鋼青色^{スチールブルー}の、飛び散り皺の寄った絵の具たち、行方知れずの作品の、裏返し^{マゼンタ}のデフォルメ・ヴァージョンを見せている。向こうの隅に、花鳥の図案を縁まわりに白く描いた鏡が掛けてあって、どんより曇ったその面に、マルゲリータとスロースロップと、開けっ放しのドアの向こうの雨の風景が映っている。キン

1 東ベルリンのこの地域は工場地帯で、住民は労働者が主体。戦禍がもっとも惨い地域。

グ・タイガーを仕留めた爆撃は天井の一部をも吹きとばし、そこに貼られた厚紙のポスターに雨のシミが拡がっている。どのポスターも一様に鰐広・外套姿の男と DER FEIND HORT NI^ナの文字が描かれていて、五、六ヶ所からポタポタ雨滴が落ちてゐる。

グレタが石油ランプに火を灯す。まわりの雨光が、手のひら一杯の範囲だけ、暖色の黄色に染まる。スロースロップがストーヴの火をおこす間に、地下の穴蔵に頭を突っ込んだグレタが、たんまりあるジャガイモの蓄えを発見した。すげえや。ジャガイモなんか何ヶ月も見えてないぜ。一つの袋は全部が玉ネギ。ワインも出てきた。グレタが料理する。ふたりすわってポテトをむさぼる。食べ終わると、ケムリも吸わず会話もせずそのままフックして眠りにつく、数時間後、スロースロップは目を覚まし、ベッドに横たわったまま今後の行き先を想う。

雨がやんだらさっそくゾイレ・ブマーのおっさんを見つけてハッシシを渡すとして、その後は？ スロースロップと〈S装置^{ゲレイト}〉とヤンプ／イミポレックスの謎とは互いに疎遠になってきていた。えーと、あれはいつだったか。カフェでゾイレと紙巻^{マリッナ}きをやったのは・・・そうだ、おとといだったよ、な？ 雨漏りの水が床に広がる。自分の精神機能が失われていくのがスロースロップに感じられる。パラノイアには、一種、宗教的といってもいいような安らぎを与えてくれるところがあるが、その一方に「アンチ・パラノイア」という状態もあって、これに陥ると、あらゆるものが結びつきを失う。これに長く耐えられる人間は少ない。スロースロップはいま、アンチ・パラノイアのサイクルに入っていく自分を感^{ヴァルネラブル}じる。自分と一緒に街全体も、屋根なしの、無防備な、中心を欠いた状態に戻ってしまったみたいだ。雨降る戸外と自分との間に、厚紙に刷った「敵軍が聴いている」のポス

2 「敵軍が聴いている」

ターの絵柄^{（えがら）}しかないみたいなの……

「かれら」が何かしらの理由によってオレをここに導いたのか。それともただオレは単にここにいただけか。理由なんていうものはない方がいいという気が、しないでもないのである……

真夜中に雨が上がった。マルゲリータを残して、這って出てく。五キログラムのブーツを持って——チチ・ーリンが切っていた半欠けは自分用にとっておこう——空気の冷えた街へ。宿舎でロシアの兵隊が歌っている。アコーディオンの心を刺すような伴奏がむせび続ける。酔払いがふらり出てきては、道の真ん中、玉石の間の溝に楽しそうに小便をした。道に積もった泥が肉塊のようだ。砲弾が抉った穴に雨水が溜まり、それが深夜の瓦礫撤去班のライトを浴びてギラリと光る。壊れたビーダーマイヤー^{（ビーターマイヤー）}の椅子。片方だけのブーツ。スチールの眼鏡縁。外れた犬の首輪（曲がりくねった瓦礫道の向こうに、合図を、炎を、待ちかまえる眼があるのか）。サイン用コルク。裂けた帯。片輪のとれた自転車。捨てられた『ブークリッピ・・・ルントシヤウ^{（ブークリッピ・ルントシヤウ）}』。過去の時代のフュロシアン化鉄処理で紺青色に染まったピアの取っ手。バラバラに壊れたピアノの白鍵の列は、B（ドイツではHか）から始まるオクターブ——棄却されたロクリア魔法^{（ロクリア魔法）}だ。剝製動物の、黒や琥珀の眼も落ちていく。……撒き散らされた夜。犬たちは怯え、震えながら、体温グラフのようなギザギザの壁の後ろに身を潜める。どこからか漏れてきたガスが進路を曲げて短時間、死臭および雨上がりの匂いと混ざり合う。破壊されたアパートの壁面高くに、黒く空いた窓穴が列をなす。曲がって黒いスパゲティのようになった補強鉄棒が、コンクリートの塊りを高く差し上げていく。そこをかすめて通るとき、頭上の巨大な物塊が不吉に身をよじる。……

3 レニ・バクターの
実家の描写に出てきた
（上巻310ページ）、十九世
紀の家具様式。

4 「日々の展望」とも
訳すべき、ベルリンの山
緒ある日刊新聞。

5 六・七世紀頃、カ
トリック教会で歌われる
魔法（モード）が整理さ
れたが、ハ調のD、レ、
ミ、ファ、ソ、ラで始ま
るオクターブはすべて種

〈闇夜の番人〉は無表情、うつろな眼でニヤリと笑い、青白い身を丸くして街の上に浮かび、しゃがれ声で子守唄を歌っている。この若者たちはこうして〈インフレ時代〉を過ごしたのだ。黒い冬の中に閉じ込められて、行く当てもなくストリートを一人ぶらついて。娘らは、玄関先に夜遅くまで立ち、川縁のランプの下ベンチにすわって商売相手を待っているが、若者たちは無視され、パッドで過度に膨らました肩を丸めて歩きすぎていくほかはない。金と物との間にかつてあった購買の関係は崩れてしまった。紙の腫瘍が札入れを膨らます……

〈シカゴ・バー〉の外で見張りに立つ二人は、そんな若者らの行き着いた姿なのだろうか。ジョージ・ラフト^{*}のぶかぶかスーツは、彼らには何サイズ分も大きすぎる。一生かけてもそんなに大きくなりはいないだろう。ひとりは咳が止まらない。制御不能の、痙攣のような、致死性の咳。もうひとりは舌なめずりをして、スロースロップを視つめている。こいつは男色^{ガゼン}だろう。ゾイレ・ブマーの名を告げると、ふたりは一緒にドアに立ちあがって首を振った、「なんだい、ゾイレに包みを届けにきたんだぞ。話はついてる」

「だれにだ？ 知らねえな」

「伝言を残せるか？」

「いねえって言ってんだ」咳をしている方が突きを入れてきた。スロースロップは身をかまし、闘牛士のようにケープであしらった。足を出すと、そいつはつまずいて倒れた。手にした長いキーチェーンにからまって悪態をついている。相方が、ぶかぶかのスーツの中で何かまきぐっている。武器だろう。スロースロップはそいつのタマを蹴りあげて、

「Fickt nicht mit dem Raketenmensch!」^{*}と叫ぶ。これは一種の「ハイヨー・シルバー」^{*}

り入れられた中で、ただ一つ「シ」で始まる「シドレミファソラシ」の、ギリシャで「ロクリア」と呼ばれた旋法は棄却された。

6 シカゴでのギャングの抗争を描いた『スカーフフェイス』（一九三二、邦題『暗黒街の顔役』）のリナルド役が想起される。

7 Fuck not with the Rocket person. (ロケット人間に下手な真似をするなよ) を、そのままドイツ語に置き換えたセリフ。

8 シルバーは「ローン・レンジャー」のヒーローの馬の名。この掛け声に続いて番組のテーマ曲「ウィリアム・テル序曲」が始まる。

だ。そう言い残して、材木と石ころと泥の間を、暗がりへと走り去る。

この前の夜ゾイレに連れられて通った気がするもの道をたどるが、迷子になりっぱなしだ。窓のない迷路に入りこみ、五月の「死の嵐」で休暇に出された鉄条網の絡まりに行きあたる。その後、爆撃の穴だらけのトラックの駐車場に入り込んだまま半時間も出てこれない。そこはゴムと油と鉄鋼とこぼれたガソリンだらけ、空や地面を向いた自動車の一部で埋まっていて、平和時のアメリカのジャンクヤードと変わらない。全体が溶け合っていて奇妙な褐色で刷られた『サタデイ・イヴニング・ポスト』誌の表紙の顔々をつくっている。ただしその顔に懐かしさのタッチはなく、単に呪わしいだけ……そうなのだ、ここはサタデイ・イヴニングの駐屯地^{ポスト}。ここにあるのは楡の森の道を延々と歩いてやってくる三角帽子の使者の顔だ。パークシャーの伝説にある、^{イヴニング}「夕べ」の縁で姿を消した旅人たち。伝言があるはずなのだが、その顔は、見つめるうちに皺が消え、つるりと無時間的なマスクに転じて、顔面全体に、のっぺらぼうな意味の総体が浮かぶだけ。

ゾイレの地下室を見つけるまでに一時間を要したが、そこは暗くて^{ひとけ}人氣がなかった。中に入って灯りをつける。警察の手入れか、それともギャング同士の抗争か。印刷機が消えている。四方に散らばった服は、なんて奇妙なんだろう。柳の枝で膨らませたスーツ、おまけにそれが黄色いのだ。腋の下と、肘と、膝と、股間が強調されている……ふむ、どれどれ、スロースロップはさっそく自分に合ったのを探し回る。靴の中も覗き込む。靴の中には、シューズというより、足指がそれぞれ収まる足袋^{フットゲラ}というべきもの（縫って作ったのではなく、ボーリング球の材質のような気味悪いまだら色の樹脂を溶かして固めたやつ）もある……壁紙の剥がれたところも見た。ロール・ブラインドが巻いてある中も見えた。

掠奪者の手からこぼれ落ちた偽造ライヒスマルク紙幣の陰も探した——十五分も探しつつけるが何も無い……だがそのあいだ中、テーブル上の白い物体が、影からスロースロップを見つめていた。見つけるより、そいつの視線を感じる方が先だった。ニインチほどのチエスの駒、白の騎士、プラスチック製——って、おいしい、スロースロップ、それ、どんな種類のプラスチックだよ！

そいつは馬の頭蓋をかたどっていて、空洞になった眼窩の片一方に、固く巻いたロールペーパーが差してある。ゾイレからの伝言である。「ロケットマン！ シュプリンガーに頼まれて、これをあんたに渡す。これはあの男のシンボルで、これを持っていれば、向こうはあんたが誰かわかる。うちの住所は、ヤーコビ通り十二番ブロック、三つめの中庭のナンバー7だ。As B/4, Me. I」の「As B/4」というのは、ジョン・ディリンジャーがメモの末尾に書くお気に入り結び句だったが、この夏ヘゾーンではだれもがこれを使っている。これを使うことで、世の事柄をどう感じているか、自分の姿勢を示すのだ……ゾイレの居場所を示す地図も入っていた。なんと、イギリス占領区の奥深くである。ウーッと唸ったスロースロップ、夜明け前のぬかるみ道へ戻っていく。ブランデンブルク門近くで、また霧雨が舞いおちてきた。砲撃で飛び散った石塊がいまも通りに散らばっている。雨空を背に、傷だらけの傾いた姿を晒すブランデンブルク門の脇腹を自分の足音と共に通り過ぎる。何と巨大で恐ろしい沈黙だろう。走行中のまま静止している古代の戦車^{チャリオット}が石炭のように黒光りする。ここは紀元三十世紀なのだろうか。正義の味方ヘロケットマン^{ヘロケットマン}が、いまちやうど遺跡観光に、砂漠の高台に並ぶ古代ヨーロッパ騎士団の跡地へ降りたところなのか。

9 ブランデンブルク門の上にある「クアドリガ」を指している。平和の女神が手綱を握り、四頭の馬が駆動するこのチャリオットは、本来金色に輝いている。

ヤーコビ通りとその一帯のスラム街はほとんど、市街戦の影響を受けていなかった。屋内の暗がりも同じ。この石造りの影は、太陽が上がるうと沈もうと、変化しそうもない。十二番ブロックは、ヘインフレーション以前からその全体が共同住宅で、マンサード屋根のついた五、六階の建物をくぐると、中庭が五重六重に、中心の空地を囲んでいる。まるでイタズラ坊主の贈り物だ。一つまたひとつ奥へ足を踏み入れても、前と何も変わらない、数十年来こびりついた、料理とゴミと小便の臭いだけ。笑われている気がする。

スロースロップはおもむろに最初のアーチへ向かう。街灯の光がロケットマンのケーブの影を前方のアーチウェイの列へ伸ばす。それぞれのアーチには色あせたペンキで、Erster Hof, Zweiter Hof, Dritter Hofの文字^{*10}。その形はミッテルヴェルケのトンネルと同じだが、放物線というよりは、大きく開いた口のようで、奥には喉があり、軟骨の関節が入る者をゴクリと飲みこもうと待っているかのようだ……口の上には、大きな正方形の眼があつて、オーガンディ地の白と真っ黒な虹彩が見下ろしている……奥から笑い声が響いてくる。重い陶器が流しの水中でぶつかり合うような、泣き声にも似たビート音がここでは何十年も休止なく続いている。ノータリンが声を上げてるだけよ、まるでおれ自身じゃないか、こいつはおれが巨大化し幾何学化しただけのもんだ、何の心配もいらねえ……だがそいつの長い喉には、過去二十年も二十五年もの苦痛で麻痺したままになっている……社会から弾きだされ、受動のまま、生存にのみ、長い年月待ちかまえている、スロースロップみたいな無防備なカモがふらり入ってきたら、おのれの苦しみをさらけ出してやろうと、笑いと泣きと沈黙の中で待っていた……〈顔〉のペンキは剥げおち、焼けただれ、病に冒され、ずっと前から死にかけている、そんな分裂症的な喉の中へスロースロ

10 第一庭、第二庭、第三庭。通りから奥に向かって連なる中庭を共有する、ベルリン庶民伝統の住居スタイル。

ッブはどうして入っていきけるんだ？ そりゃあんだ、それが強力な護り手である（スタジ
オンのご所望だからよ、当然さ。今宵の「青少年役」の演じ手がスロースロップ。他にも
キャストはいっぱいいる。深夜になって人けが引くとどこからともなく出てくる孤独な、
行き先のないベルリンの住人たち。それを動かしつつづけているのは何者だ？（へかれら）
さ、へかれらにはそれが必要なのだ。寂れた、見捨てられた地域に、周縁的な人間たち
を配しておかないといられない。説明されざる（へかれら）の必要。理由はたしかに経済的
なものでもあるだろうがね、しかし感情のニーズも混ざり込んでいるかもしれんぞ……

ゾイレのおっさんも、うろつき回るひとりだが、彼の居場所は屋内で、虎視眈々とおの
れの夢を追っている。そこは一つの大きな部屋のように、壁が吹きとんだところに漆喰の山
がで、床一面に藁の寝床が敷かれている。その一つで一組の男女が夜更けのシガレット
を無言のまま回し飲みし、別の寝床ではだれかがいびきをかいている……艶やかなベーゼ
ンドルフアーのコンサート用グランドピアノ「インペリアル」¹¹の上から、軍隊シャツ一枚
姿のトゥルーディが乗り出している。さながらむき出しの長い足を伸ばしたミューズ神。
彼女は懇願する、「グスタフ、ほら、ベッドにきてよ。もう夜が明けてしまうわ」 応答は、
ピアノの低音弦を不機嫌そうに引っかく音だけ。ゾイレは横向きになって寝たまま動かな
い。まるで子供の顔が縮んでシワシワになったかのよう。長年の二階の窓からの飛び降り
と、管区の警察で「手始めの一発」を見舞う手袋をしたヤワな巡査長の拳が、その顔をつ
くり上げた。それだけではない。カールスホルストの競馬場¹²を包む金色の午後の光も、夜
の大通りの石の上に張ったレザーのように皺の寄った舗道がはね返す黒い光も、サテン地
ドレスの白い光も、バーのミラーの前に並んで煌めくガラスの光も寄与している。地下鉄

11 オーストリアの老
舗で製造される、拡張キ
ーつきのモデル。世界最
多の九十七キー（八オク
ターブ）タイプもあり、
奥行きがグンと長い。

12 ベルリン南東部。
障害レース場として一八
九四年にオープンした。

の入り口に、空に向かって立つゴチック体のU字の、空を舞う鋼鉄の天使の高揚をけだる
い降伏へと引き寄せる、スムーズな磁力も浴びた。睡眠中のその顔は、ベルリンの街の歴
史に晒された、畏怖すべきほどの老け顔だ。

その眼が開いた——一瞬、統覚されない光の渦の中に、スロースロップの、暗緑色の髪
にくつきり浮かぶヘルメットが像をなす。するとその顔に優しくうなずくスマイルが現れ
た。エウリシング・OK、ヤー、ハウデイ、ロケットマン、どうしたね？^{ヴァース・イスト・ロース} とはいえ、こ
の矯正不能のヤク漬けゾイレは、次の瞬間にはスロースロップの物入れ袋を勝手に開き、
雪だまりの中の二つの小便穴のような目で、中身を調べている。

「あんた、ブタ箱にでも入れられとるかと思ってた」

モロッコ製の小さなパイプを取りだすと、ゾイレはハッシシの塊から削げ落ちた太めの
小片を叩いて平らにしながら、流行のルンバを口ずさんでいる。

おまえの国はモロッコ

ケムる刺激はズッキンコ

「そうそう、跳ね駒^{シュプリンガー}のおっさんがな、贋札発行のことを垂れこみおった。で、今わし等の
関係は一次的に冷えこんでおる」

「え、おふたりさんは、腹心の友ってわけじゃ……」

「そりやまったく違う。向こうはわしなんかより高い軌道を回っとるし」これはいやに
複雑な話だ。地中海作戦戦域で、アメリカ軍の臨時紙幣^{イェロー・シール}が発行中止になったことが絡んで

13 地下鉄 (U-Bahn)
のUマークを、馬蹄形の
磁石に見立てた表現。

いる。連合軍がライヒスマルクの受領を拒むようになったこともだ。シュプリンガーも、国際収支上の問題を抱えて、イギリス通貨に大きく投機の眼を向けており、さらに……「でもさ」とスロースロップ。「それじゃ、おれの百万マルクはどこにあるのよ、エミルさん」

ゾイレが吸いこむと。パイプの縁に黄色い炎が溢れる。「スイカズラの絡まる中へ消えぬ」ってな。このセリフ、一八六九年の金買占めをジェイ・グールドと共謀して行った容疑で議会に喚問されたジュビリー・ジム・フィスクが、調査委員会で吐いた言葉の引き写しだ。スロースロップは故郷パークシャーを思い出す。それだけからしても、ゾイレが〈ワル〉の側でないことは明らかだろう。〈何者であれ、そいつらは必ず消滅のゲームを演じる。記憶を生き返らせるなんてことをするはずがない。〉

「なんなら、おれが持ってるやつをオンス単位で売ってもいいけどね」と、スロースロップ。「占領軍の紙幣と交換でさ。そいつは安定しているんだろ？」

「おまえ怒つたらんのか。ほんとうに」

「ロケットマンは、そんなケチな野郎たあ違うぜ、エミル」

「おまえさんにサプライズがある。前に話してた〈黒の装置〉^{シュヴァルフゲレイト}な、そいつを手に入れてやろう」

「あんたがかい？」

「シュプリンガーが、だ。おまえのために、頼んでやった」

「ウッソだろー、本当かよ？ そいつはありがたいや！ どうやって御礼を——」

「イギリスのカネで一万ポンド」

14 一八六九年、彼らは価格操作のために金の買い占めを行い、自分たちが所有するエリー鉄道の小麦輸送のビジネスで暴利を得る。結果的に金の暴落を引き起こし、多くの投資家を倒産させた。「金はどうした？」と迫及されたときにフィスクが吐いた言葉が、「スイカズラの絡まる中へ消えぬ」It is gone where the woodbine twineth」。

スロースロップが肺に溜めていた煙が、一気に漏れでた。「恩に着るぜ、エミル……」
そしてソイレに語って聞かせる、チチエーリンにしてやられたこと、かのミッキー・ルー
ニーとも出会ったこと。

「ロケットマン！ スペースマンよ！ わしらの処女惑星へよく来てくれた。わしらは
ただ、静かに平和をエンジョイしたい。だからわしらを殺すにしても、食わんでほしい。
食ったとしても消化はせんではしい。別な穴から、そのまんま出してくれ——密輸業者の
クソからダイヤが出てくるようにな……」

「そうそう」だいぶ前にノルトハウゼンでゲリーから得た情報を思い出した——「あんた
の相棒のシュプリンガーがさ、最近スヴィーネミュンデあたりをうろついているとかいう話
は聞いてるかい？」

「わしはあの装置の値段しか聞いておらんぞ。前金で半額——ありかを突きとめるのに、
最低それだけかかるそうだ」

「え、ありがたがわかってないの。これ、引っかけじゃなくて？ おれたちをダシにして、
値をつり上げて、どこかのカモが前金どっさり払ってくれるのを待とうって腹じゃ——」

「あの男はな、届ける物は届ける、たいていな。おまえさんも彼にもらった偽造通行証で、
検問を無事パスしたろ、違うか」

「そおおだよ——」そうだった、そのマックス・シュレプツィヒ名義の通行証の一件で、
あんたに聞くことがあったんだ——「あのね」しかしそのときにはもう、ピアノのところ
にグスタフを残したトゥルーディがとなりすわってスロースロップのズボンのケバに頬
をこすりつけている。その音に、素敵なナマ脚を擦りあわせる音がハモっている。乱れた

15 上巻559、560ページ
参照。スヴィーネミュン
デは、現在はシフィノウ
イシチュエと呼ばれ、国境
のポーランド側にある。
シュチエチン湾（オーデ
ル湾）がバルト海に出る
要衝に位置する港町。

髪、半分ボタンを外したシャツ。ゾイレは、いつの間にかゴロリと背を向け、グースカ眠ってしまっている。ピアノから充分離れたマッドレスへ。スロースロップは溜息をつきながら。ヘルメットを脱ぐと、あとはビッグでスイートでふくよかなトゥルーディの望むままだ。雨の街をさまよい続けたせいで節々の痛む、半ば衰弱したスロースロップに、彼女のキスが驚くほどの安らぎを与えてくれる。今は全部を解きはなとう。オープンハウスだ。どの感覚、どの器官にも集中しない、すべて平等にざわめいている。……いや、これって生まれて初めてだな、勃起に駆り立てられないって、いや股間の方はどうでもいいのだ、だって、ペニスに代わって……あ？ や、やだな、はずかしい……鼻が勃起し始めたじゃないですか……モコモコ起き上がった鼻先から汁がじわじわ滲みだして、うろう、トゥルーディちゃんだってこれ、気づかないのがムリでしょ、気がつけば咥えないのがムリでしょ、ヒクヒクしてる鼻に唇をスライドさせて、片方の鼻孔から舌を激烈な舌を一ヤード先まで伸ばして……舌のピンクの味蕾のひとつひとつが感じられるよ、小鼻の壁や鼻毛を押しつけて、おっと、頭がまるごと入ってきた、肩を入れると……彼女の上半身がスッポリ、どうぞどうぞ——膝を引き上げ、毛を握り、足も掛けて、這い上がる。行く手には大きな赤のホール。明かりの具合もなかなか素敵、壁も天井もぼんやりと照らされて、まわり中なにやら貝殻のような、春らしいさまざま色合いのピンク色……

ふたり、眠りに落ちる——あちらから、こちらから、いびきの響く部屋のなか。ピアノの低音弦が共鳴し、外は、百万の足を動かす小走りの雨。スロースロップが目覚めたのは、^{イヴ・アワ}《魔の刻》の頂きだった。トゥルーディはどこかの部屋にグスタフといのか、コーヒークップがカチカチ聞こえる。汚れた窓のそばで三毛猫が蠅を追っている。シュプレー河の

ほとりではヘホワイト・ウーマン^①が、スロースロップを持っていて、いま囁る気はちよつとしない。トゥルーディとグスタフがコーヒ^②ーと紙巻^③きの吸いさしを持って入ってきた。みんなして腰を据えてしゃべり出す。

グスタフは作曲家だ。ベートーヴェンとロッシーニのどちらが優れた作曲家であるかをめぐって、もう何ヶ月もゾイレと激論中だ。ゾイレはロッシーニ派である。「わたしもベートーヴェンの音楽そのものが素晴らしいとは言わないが」とグスタフ、「それがドイツ的弁証法を見事に表現している点はすばらしいよ。できるだけ多くの音をひとつの音階の中へ組み入れる。十二音が均等に使われる状態へと極まっていくな。すなわちドデカフォニック・デモクラシー、十二音民主主義というものを目指している。彼は人間解放を叫ぶ音楽の建築家なんだ。耳が聞こえないにもかかわらず、歴史の要求を聞き届けた。ロッシーニはどうなんだ。三十六歳で隠退して、女たらしの、腹ばかり出っ張る暮らしをしてたじゃないか。ベートーヴェンは悲劇と威厳に満ちた人生をまっとうしたぞ」

「で？」ゾイレのいつもの応答である。「あんたは、どちらの暮らしがいいね——」グスタフの憤然とした金切声をさえぎって、「ロッシ^④ニは、聴いてて、気持ちよくなるだろ。ベートーヴェンを聞いてるとどうだ、ポーランドへ侵攻したくなつてこないか。それが『飲むの歌』^⑤って、そりゃ冗談にしてもセンス悪い。いいかね」と言つて痩せこけた老人の拳を振りあげ、「崇高さを言うならだが、『泥棒かささぎ』^⑥の小太鼓のパートだけでも、『第九』全体を合わせた以上の崇高さがあるね。ロッシニの音楽ではな、恋人が再会して、孤独が克服されるというところがすべてなんだ。好ききらいの問題じゃなく、世界がそういう、ひとつの求心的な動きをとるんだ。貪欲で、狭量で、権力の濫用に満ちた世の

16 『アルジェのイタリ
ア女』(二八一三初演)
は、オスマントルコ帝国
支配下のアルジェの地方
総督ムスタファの宮殿を
舞台にした愛の物語。

17 『セビリアの理髪
師』(二八一六初演)で
フィガロが演じるシーン。

18 同じくロッシニ
の歌劇『泥棒かささぎ』
(二八一七初演)より。

19 ヴェーベルンが殺

中から愛が湧き出す。糞が黄金を生み出すのだよ。壁を打ち壊し、バルコニーをよじ上って愛が勝利する——聞け！」五月の初め、ベルリン最後の爆撃が進行中の晩だったから、ゾイレは大声を張り上げなくてはならなかった。「イタリア女はアルジェに^{*16}いる、理髪師は陶器棚に身を隠し、^{*17}カササギは目につくものを片端から盗みまくっている！^{*18} 世界は中心に向かって突進しているのだ……」

雨の朝。グスタフのドイツ的弁証法^{ディアレクティク}も鳴りやんだ静寂のなかに、いまウィーンからの悲報が、音楽家たちのうわさのネットを通して届けられた。アントン・ヴェーベルンが死んだという。^{*19}「五月にアメリカ人に撃たれたんだ。意味のない、犬死にだ。アクシデントを信じるならアクシデントと言ってもいい——ノース・カロライナ州出身の炊飯兵コックだと。終戦間に徴兵された米兵が、使い方もよく知らない45口径を発射した。ドイツ兵とは戦えなくても、ヴェーベルン殺しには間に合ったってわけだ。なぜヴェーベルン家を襲撃した？ アントンの兄が闇市に関わっていたとか言っているらしい。関わってない者なんているか？ 千年後にはどんな神話が出来ていることか。若い野蛮人どもが踏み込んできて、〈最後のヨーロッパ人〉——バツハ以来続いていた音楽の歩みの最先端に立つ男——を抹殺したわけだ。すなわちだね、すべての音楽が真の平等を勝ち得るところまで、音楽の多形倒錯が進展してきたわけだよ。^{*20} その流れが絶たれたんだ。……ヴェーベルン亡き後、音楽はもはや何処へも進みようがない。楽音の自由度は、彼において最大値に達した。あとは崩れるだけだ。これまた、神々の黄昏さ——^{*21}」

「おいおい、たわけた若造よ」甲高く笑いながら、ゾイレがベルリンの街中から戻ってきた。引きずっているピローケースの中には、北アフリカから入ってきたばかりの開花した

されたのは、実際は九月のこと。物語の現在が七月だとすると一致しないが、彼の死に関する他の記述は史実通りである。

20 「多形倒錯」はもともとフロイトの用語。

(幼児において) 性的嗜好が近親や同性を含め平等に及ぶ状況を指す。ノーマン・O・ブラウンの『エロスとタナトス』

『Life Against Death』(一九五九)

は、多形倒錯へ向かう身体を、心的抑圧と文明の病理からの解放と見る見解を広めた。この小説を、そうした対抗文化思想の文脈で読み解く試みも少なくない。

21 ドイツ語では「ゲッターデメルング」。ヴァーグナーの『ニーベルングの指輪』四部作の四作目のタイトルでもある。

ての蓄がびっしりだ。見るからにだらしない恰好——赤く濡れた眼球、ポツチャリした鬨は全くの無毛、ズボンの前は開いたまま、ボタンも半分とれていて、白くなった毛にも青いシャツにも縞状の緑色のカスがこびりついている。「爆弾の穴に落ちたんだ。ほら、急いでこれを巻いてくれ」

『「たわけた若造」とは、どういうことだ」とグスタフ。

「おまえとな、おまえのいう音楽の主流のことよ」ゾイレがわめき散らす。「やっと終わってくれたのか？ それとも、これはダ・カーポで、またカール・オルフ^{ホル}へ戻って最初からというのかな？」

「そうか、その可能性を考えなかった」とグスタフ。ゾイレもヴェーベルンの悲報に接し、それで、正面切って慰める代わりに、こういう台詞で裏口から元気づけている。

「ロッシーニで、どこが悪い？」紙巻きに火をつけながら、ゾイレが大声を張り上げた。

「どうなんだ？」

「うーッ」グスタフの高音のうめき。「うッ、気色ワルイ、ロッシーニはな」そしてまた始まる。「いいか、老いぼれ、よく聞けよ。どうしてこの頃だれもコンサートに行かないんだと思う？ 戦争のせいかな？ 違うね。理由を教えてやるから聞いてろ——ホールがあんたみたいな連中でいっぱいだからだよ！ 半分居眠りして、コックリしたら、ニヤケたり、入歯の間から放屁して、咳と一緒に出てきた痰を紙袋にベツと吐いて、何を考えているかといやあ、息子や娘にどんな狡猾なイタズラを仕掛けてやろうかって——てまえの家族だけじゃない。よその家族にもな！ 近ごろのコンサート会場は、まわり中、白髪頭の性悪爺爺ばかりだろ。喉はゼイゼイ、口からげっぶ、腹はゴロゴロ。そいつらのキーキー、

22 ヴェーベルンより
十二歳若い作曲家、単純
で明快で力強い、旋律、
リズム、和声に基づく音
楽を推進した。

チュルチュル、ギンギンという音が、オペラハウス中、立ち見席までいっぱいだろうが。通路にはご老体がヨロヨロしてるし、バルコニーのてっぺんからは猿みたいなのがぶら下がってる。で、連中が何を聴いてるかっていやあ、ロッシーニだよ。ロッシーニを聴いてるんだ。陳腐なメロディの連続にヨダレ流して喜んで、膝に肘を載せて身を乗り出してさ、『ほらほら、ロッシーニさんよ、勿体ぶったファンファーレなんかいから、早いところ、美味しいメロディを聞かせておくんなさい』って。おまけにその鑑賞態度。コンサートが終わるまでにピーナツバター一壘平らげるほどじゃないか。『タンクレディ』のタランテラ曲とか始まれば、足は踏み鳴らす、舌打ちはする、ステッキで床を叩いて、『ああ、ああ、それだ、それ！』

「あれは偉大なメロディだぞ」ゾイレが叫び返す。「もう一本吸いなさい。わしがこのペーゼンドルフアーで弾いてみせるから」

このタランテラの演奏に合わせ——いや、実にいいメロディだ——朝の雨の戸外から入ってきたマグダが、今みんなにマリワナを巻いている。一本ゾイレに手渡すと、ゾイレは演奏を休止し、しげしげとそれを見て、ときどきうなずいて、ほほえみ、眉をしかめる。

グスタフはまともに取り合わないようだが、これは「パピロマンシー」と言って、ゾイレはマリワナ煙草の紙の巻き方——つまりその形、なめ方、紙の皺や襷の具合——から、相手のことを占うことができる。「じきに恋に落ちると出ておる」とゾイレ。「ほれ、この線だ」

「わ、長い。ってことは——」

「いやいや、長さはふつう激しさを表わす。期間じゃなくてな」

23 『タンクレディ』
(二八一三初演)は、二十
十一歳の新人ロッシーニ
の名声をイタリヤ全土に
広げた作品。

「短くて甘美な恋？」マグダが溜息をつく。「フアーベルハフト^{*24}、じゃない？」トゥルーディがマグダをハグしにやってくる。ふたりは、マットとジェフのでこぼこコンビだ^{*25}。ビールをはいたトゥルーディの頭はマグダの三十センチも上にくる。それが他人にどう見えるかを意識していて、可能なかぎり一緒に町を歩くことにしている。そうやって自分たちのイメー^{ハッパ}ジを、ほんと一時でも、人々の心に植え込もうとする。

「このクソはどうかだね？」とゾイレ。

「ヒュプシュ」グスタフが認める。「わずかにシュターリヒ、ケルパー、わずかにボーデング^{*26}シュマツクの気味が残る。それはたしかにズユフィヒだ」

「わしなら、シュプリツイヒというな」ゾイレは反論するが、それは反論なのだろうか。^{*27}

「今年の収穫は一概に去年よりブケットライヒと思わないか？」

「オートアトラス山脈産の草としては、なかなかのものだがね、確かにケルニツヒという表現も使えるだろう。それに——ウエド・ンフィス産のは、しばしばザウバーな性質が支配的だが——これは本物らしくピカントだ^{*28}」

「産地だがね、どうもサーホー山の南斜面じゃないかと思っ^{*29}とるんだ」とゾイレ、「このシュピールを感じないかね、むしろこれはグラットでブルーミツヒ味だ。そのヴウルツヒは大胆さにはフュレの趣きがある——」^{*30}

「違う、違うね。フュレとは言えんだろ。先月口にしたエル・アビド・エメラルド、あれにはフュレがあったがね、あれに比べると、こっちは明らかにもっとツァールトだよ」^{*31}

実のところふたりとも強烈なハッパの作用で、自分でも何を言っているのかわかっていないのだ。それでよし、というのも、そのとき激しくドアを叩く音がして、反対側から

24 作中人物は、作中のように素直な、以下、感覚を細分化するドイツ語の語彙の豊かさを示すバフィーマンズが続く。訳文にもカナ漢字のドイツ語を用いる。

25 新聞史上最初とされるアメリカの連載コミック・ストリップ。バド・フィッシュャー作。

26 *fröhlich* 快い、感じのよい。*schalig* 鋼鉄っぽい。*Körper* 身体、本体のコク。*Bodenschmack* 土の味がする。*stille* 飲みやすい、引きがいい。

27 *springend* 酒としての刺激に富んだ。*reich* 香り豊かな。*buket* (花束の「ブーケ」と同語) は、ワインの香りを指す。

「動くな」と叫ぶ大勢の声。スロースロップは悲鳴をあげて窓までダッシュ、そこから屋根へ登って反対側のトタンのパイプを伝って降り、通りの側の隣の中庭へと逃れた。一方、ゾイレの部屋に戸を壊してなだれ込んだのは、アメリカ軍憲兵がアドヴァイザーの資格で支援するベルリン警察だった。

「証書を見せなさい」手入れのリーダーが怒鳴る。

ゾイレはニッコリ、パリから届いたばかりのクサ巻紙を差し出す。

二十分後、アメリカ占領区の某所でスロースロップが、とあるキャバレーの前を通りかかると、虚ろな顔をした憲兵が入り口にも中にもたむろするなか、ラジオなのかレコードなのか、アーヴィング・バーリンのメドレー^{*32}が聞こえる。今はパラノイア・モードのスロースロップは、背中を丸めて歩み去る。だって「ゴッド・ブレス・アメリカ^{*33}」とか、それに、ほら、この「ジス・イズ・ジ・アーミー、ミスター・ジョーンズ^{*34}」、これらの歌は、ホルスト・ヴェッセル・ソング^{*35}のアメリカ版でしょう。だが、今まくしたてているのは（アントン・ヴェーベルンのことであたいへんな剣幕の）グスタフ氏。ヤーコビ通りのゾイレ宅で、目をばちくりしているアメリカ軍陸軍中佐に向かって熱弁である。「バラボラだよ！ きみらは捕らえられるしかない！ ドイツの交響曲の単純明快な弧にね。主和音^{トニック}から属和音^{ドミナント}へ、そして、また主和音^{トニック}へ。この壮麗感！ 結束感^{ゲゼルシヤフト}！」

「テュートニックだ？^{*36}」と大佐が返す。「支配だ？ 戦争は終わってるんだ。寝言はやめなさい」

マルク・ブランデンブルクの湿原から冷たい霧雨が吹き込んでくる。牛を屠場へと追いつ立てるソヴィエトの騎兵隊がクアフュルステンダム^{*37}を横切る。泥に汚れ、啼き声を上げる

28 モロッコの南に東西に走る一連の山脈のうち「オート（高）アトラス山脈」は最大最高。ウェド・ンフィスは、マラケシュ近くの山麓を流れる川。ケルニツヒ（Kerning）は「しつかりとしたコクのある」、ザウバー（sauber）は「クリーンな」、ピカント（pikant）は「ピリッとした刺激がある」。

29 山脈の南、サハラ砂漠に面した地方。

30 Spiel 遊び（心）。
Gait 歩き。
Bier 香り。Bier 香りが広がる。
Witz 言葉。Witz 言葉を入れたように香ばしい。Witz 十全さ。

31 Gait 歩き。

牛たちの睫毛は雨のビーズを並べている。ソヴィエト区では、ウールの下ではずむ胸にライフル銃を掛け、女たちが鮮やかなオレンジ色の旗を振って交通整理だ。ブルドーザーの轟音。トラックが懸命に壁に車体を押しつける。雨のなか、グラついた壁が倒れると、そのたびに小さな子供らの歓声上がる。滴のしたたるシダの葉に覆われたテラスでは銀器を鳴らしてお茶会が進行中。ほっそりした黒いコート姿の給仕らがカートを押し、頭を傾げる。しぶきをたてて通り過ぎるヴィクトリア型オープンカーには仰々しく勲章を下げたロシア将校がふたり、それぞれのとなりには絹のフロックドレスのご婦人がすわり、帽子の縁とリボンが風に揺らせている。川面には緑の頭を光らせてアヒルたちが、互いの波紋がぶつかりあう衝撃波の中をゆく。マルゲリータの家ひしゃげた煙突から煙が出ていた部屋へ入ると、いきなり顔をめがけてハイヒールが飛んでくる。かろうじて体をかわして見ると、ベッドにひざまずいたマルゲリータが、息を荒くし睨んでいる。「わたしを置いてったわね」

「用があつたんだ」スロースロップは焔炉の上の棚に隠しておいた缶から、お茶用に乾燥クローバーの葉を掻きだす。

「だって、わたしをひとりにしていったわ」たなびく髪が灰黒色の雲になって顔にかかる。スロースロップには感じられない内なる嵐に吹かれている。

「ちょっとだけさ。お茶飲むかい？」空缶を手にしたまま戸外へ。

「なにが、ちょっとよ。頭にくる。ひとりじゃなかったの？」

「そんな」ドアを開け、雨水のたまる樽から水をすくう。女は寝たまま身体を震わせ、表情はせわしなく、絶望を表わしている。

32 アメリカ流行歌界(ティンパンアレー)の立役者。六十年間で作曲した千五百ほどの曲の中には、黒人のリズムを流行歌に持ち込んだ「アレクサンダー・ラグタイム・バンド」(一九二二)も、レコード・セールの大記録を打ち立てた「ホワイト・クリスマス」(一九四二)も含まれる。

33 第二のアメリカ国歌と呼ばれ、クラシック調のケイト・スマithの歌唱(一九三八)で知られる。

34 一九四三年の戦争支援歌。

35 ナチスの党歌で、「ドイツチュラントリート」とともにナチス・ドイツの国歌とされた。作者の名を冠した「ホルスト・

Gravity's Rainbow

空缶を焔炉にのせて、「だいぶぐっすり眠っていたしき。ここは安全だろ？ 安全じゃないって訴えてるのかい？」

「あんぜん？」ぞっとするような笑い声だ。これは聞いていられない。火にかけた缶が軋りはじめた。「わたしがどんな目にあっていたかわからないの？ 彼らがわたしの胸の上は何を積み上げたか？ 何という名で私のことを呼んだのか？」

「誰がだよ、グレタ？」

「あなたが出ていったとき、目が覚めたの。呼んだけれど戻ってくれなかったわ。そしたら、あなたがいないのをいいことに、彼らが入ってきて……」

「目が覚めたのなら、そのまま起きていればよかったのに」

「起きてたわよ！」そのとき太陽が点灯した。眩しい光が射しこんでグレタは顔をそむける。

お茶を淹れる間、グレタはベッドの上でスロースロップを罵りつづける。ドイツ語とイタリア語で。もう少しで崩れ落ちそうな声で。渡そうとした茶碗が、手で払い落とされた。「おいおい、ムキになるなよ、な？」グレタの隣にすわり、自分のお茶の湯気を吹く。グレタが落とした茶碗は横に倒れたまま。湯気を放つ黒い汚れが床に染みる。遠くのクロールバーの香りが、幽霊のように立ちあがっては消えてゆく。……おもむろに、グレタがスロースロップの手をとった。

「ごめんよ、ひとりにして」

グレタ、泣きだす。

そして一日中泣いている。スロースロップは眠りに落ちては、グレタの泣きじゃくりへ

ヴェッセル・リート」として、また最初の歌詞から「ディー・ファーン・ホッホ（旗を高く掲げよ）」の名で知られる。

36 グスタフが「トニックへ to tonic」と言ったのを Teutonic（ドイツ民族風）と聞き違えた。「支配的」という意味の「ドミナント」と組み合わせ、複雑な洒落になっている。

37 ベルリン繁華街の大通り。ティーアガルテンの南西方向。

漂いつづける。彼女のどこかがいつも自分のどこかに触れたまま離れない。……そのとき
の夢で、父が自分を探しに来た。黄昏時、スロースロップはマンガハノック川（注）のそばをぶ
らついている。一八九〇年代に放置されて腐りかけた古い製紙工場の近くだ。光輝に消え
ていくオレンジを背景にアオサギの影が上昇する。「息子よ」塔をなした言葉の積み木が
崩れ落ちる。「大統領が三ヶ月前に死んだ」スロースロップは立ちつくし、父をとがめる。
「どうして言ってくれなかったの？ ぼくは大統領が好きだったのに。なのに父さんはぼ
くをIG社へ売ってしまったおもうと思った。そして売っぱらってしまったんだ」老人は眼に涙
を溜め、「ああ、息子よ……」と手を握ろうとするけれども、すでに空は暗く、アオサギ
も去り、ガランとした工場の骨組と暗く水かさを増した川面が告げている、もう行きなき
い……見れば父親もいない。さよならもせずに消えてしまった。しかし顔だけ残っている。
自分を売り飛ばした父プロデリックの顔が。目覚めてからも目の前に浮かんでいる——無
遠慮なアホ息子がもたらした悲しみを顔に浮かべたまま。マルゲリータが彼のほうへ身を
傾け、長い爪先で彼の目尻の涙を払う。先はとても鋭い。目に近づくまでに何度も停止。
「こわいのよ」グレタがささやく。「何もかもが。鏡の中の自分の顔も——子供の頃ね、
言われたのよ。あまり鏡を見つづけてると、鏡の向こうに〈悪魔〉が見えるって……それ
と……」背後の白い花柄の鏡を見やりながら、「あれに覆いをつけて。お願い、そうし
て……あそこから彼らが……夜は特に——」

「ほらほら」ふたりの接触面が最大になるように体を寄せる。腕を回す。すごい震えだ。
抑えるのは無理かもしれない。やがてスロースロップも同期して震えだす。「頼むからさ、
落ちつけよ」彼女に取り憑いた魔物が接触を欲している。接触をむさぼろうとしている。

38 架空の町ミッドバ
ラにある架空の川と想像
される。

39 フランクリン・ロ
ーズヴェルト大統領の死
は一九四五年四月十二日。

事の深さがスロースロップを戦かせる。彼女の安全に責任を感じ、罨に落ちた気持ちになる。当初は何日もくつついたまま、ブツの取引や食糧調達に出なくてはならなくなってやっと離れるというふうだった。睡眠も奪われ、気がつけば反射的に「大丈夫だ」「心配することじゃない」とウソを言っている。ときどきなんとか抜け出して一人で川まで出ると、糸きれと彼女のヘアピンで魚を釣る。釣れるのは一匹か、運のいい日で二匹。それで二人の一日を賄う。そのけったいな魚で飢えをしのぐ。今時ベルリン近辺をまだ泳ぎ回っているなんて、犬もソップを向くようなものばかりだ。眠りながら泣きつづけるグレタの声がいたたまれずに揺り起こすと、しかし今度は話をするかセックスをするかしかなく、そのセックスはだんだん気乗りのしないものになるから、グレタは自分が拒まれたと感じて（それも事実なのだが）、さらに荒んだ状態になる。鞭で打ってあげれば満足そうな顔をして、そんな時はスロースロップも一息つくが、鞭も握るのも嫌なほど疲れた日にも、なおグレタはせがみ続ける。ある晩、釣れたドジョーを網焼きにして差し出したら、イヤだと言われた。脳が潰れたみたいな黄色いドジョー。こんなのを食べたら吐いてしまうと「食べなきゃだめだ」

彼女は顔を左に背け、それから右に背ける。

「何だよ、その態度は。悲しいぜ。いいか、苦しいのはこの世できみ一人じゃないんだ——ベルリンの街、歩いてみるよ」

「そうだったわね。あなたは苦しくて苦しくてしかたないのに、わたしはそのことを忘れてばかりなんですものね」

「おまえらドイツ人はほんとに狂ってるぜ。世界中が敵対してると思ってるんだから」

「わたし、ドイツ人じゃないわよ」、思い出したように、「ロンバルド人よ」

「似たようなもんだ」

憤怒の息。小鼻をふくらませ、小さな食卓の縁をつかんで、グイとばかりひっくり返す。皿と銀食器が飛び、ドジョーは壁にべったり付着してからズリズリと、羽目板のところまで醜く崩れながらゆっくりと——死んでいるとはいえ、やけにスローだ——滴り落ちる。ストレートチェアがふたつ。危うい空気を孕んだ一メートル半の空間をはさんで向かい合う。一九四五年の夏のロマン漂う暖気には、降伏の事実如何にかかわらず、死のカルチャーが息づいていた。その昔、祖母が「情熱の罪」と呼んだものは今日、何ごとにも情熱に欠ける時代にあって、私的な争いに決着をつける、お好みのテクニクに変貌したのか。

「片づけろ」

グレタの上歯から、かみ切られた青白い親指の爪が飛んできた。笑っている。エルトマンの歓喜の笑い。スロースロップは身を震わせながら「きみはもうほとんど——」と言おうとして、不意にグレタの顔を見たら、彼女はそれを知っている、自分でもわかっていて、のだった。わかった。部屋に散らかった下着をいくつか拾っては放り出し、黒のガードルを見つけた。靴下止めの金具を留めると、尻と太腿に、消えつつあった以前のムチ跡が、小さくカーブした赤腫れ模様となって盛りあがった。血が流れるまで打ち据えて、やっと彼女は汚した魚の後片付けを始めた。すべてが終わるとグレタは彼のブーツにキスする。理想のシナリオではなかったけれど、ダーリン、これで納得したわ。

毎日少しづつそこへ近づいている。スロースロップには恐怖だ。こんなことは経験がない。街に出ようとすると懇願される。ストッキングでベッドの柱に縛っていった、星形に

街路から聞こえる銃声はだんだん遠のき、それを聞いたたび、グレタはデビュー当時の防音撮影スタジオを思う。銃声をキューとして、彼女の夢見る巨人的なセットが千人ものエキストラで滑らかに埋めつくされるのだ。彼らは羊の群のように、ライフルの銃声に動かされ、上に下に、監督の思い通りの絵模様を描いていく——川のように流れる顔々。メークが黄色で唇が白いのとは当時のフィルム・ストックが不足していたからか。汗だらけの黄色い大移動に、後ろから別の群が追いつがる。逃げられる相手はいないし、脱出できる場所もない……

早朝。スロースロップの吐息が白い。いま夢から醒めたところだ。その夢は詩であって、詩文に木版画の挿し絵が付いている。第一部。女が犬の品評会に出かけてゆく。その会は、なぜか種つけを兼ねていて、女はペキニーズを連れてきた。ミムジーとか、グーグーとか、嫌ったらしいほどキュートな名前の牝犬だ。女が庭園らしき場所で、同じような中流のご婦人方とお喋りしていると、近くのどこかにある囲いの中から自分の犬の**ビッチ**もだえ声が聞こえる。その声は異様に長く続いて、そのうち女は悟る。この止めようがない牝犬のよがり声は、自分自身の声なのだと。一緒にいるご婦人方は、氣遣って聞こえないふりをしている。だがどんなに恥ずかしくても、どうしようもない、欲望は抑えがきかず、他のさまざま動物と交わらずにはいられない。通りで彼女にのしかかろうとした多色の雑種の陰茎をしゃぶる。有刺鉄線近くの不毛な土地、冬の陽光が雲を赤く染めるそこで、背高の馬の前に跪き、命令されるまま蹄にキスした。猫に、ミンクに、ハイエナに、ウサギに乗用車内で犯され、夜の森の中で迷い、砂漠の水たまりの脇に立ちつくす。

第二部。女は自分の妊娠に気づく。夫はスクリーンドアを売り歩く馬鹿で陽気なセール

スマンだが、その彼と合意が成立。女の方が何を約束したのかは明らかでないが、引き換えに、夫は九ヶ月後、彼女の好きなところへ連れていく約束をする。かくして臨月の妻をボートに乗せ、アメリカの川を漕いで、彼女を旅に連れてゆく。このパートの基調色はすみれ色。

第三部で女は川底にいる。溺死体となって、しかしあらゆる生命体が彼女の子宮を満たしている。「人魚として女を使い」(第七行)、緑の川底を通して女を運ぶ。「下へ、また遠くへ。／深^{ザンディン}みを耕す男、老エスクアリドーシ／一日の種まきを終え／水草の間に女の青みどりの腹を見る」(第一〇—一三行)。そして、彼女を連れて戻る。エスクアリドーシは、古代的な口髭を生やし、海神ネプチューンを思わせる穏やかな顔をした老人だ。女の身体からさまざまな生き物が激しくあふれ出る。タコ、トナカイ、カンガル―。「その日女の腹から出でし生き物／すべての名を誰に言えよう？」女を水面まで運び上げながら、エスクアリドーシもその驚くべき生命の湧出を、ほんの一部しか目にする事ができない。水面に出れば、そこは穏やかな陽光が注ぐ緑の湖、岸边には柳の葉の陰に草が繁っている。虫が羽音を立てて飛び交っている。場面の基調色は緑。「そして陽光へ突入したとき／女はしかばねとなりて水中の眠りを見出し／夏の深みにあって／生き物はそれぞれに／固有の愛の途^{みち}をゆき／午後の極みにあって／おだやかに川は流れる……」

この夢は彼から離れないだろう。岸に腰を下ろし、釣糸の先に餌を付けてシュブレー河にたらし、軍の煙草に火をつけると、そのまま彼は動かない。白い霧が川岸の家々を覆っていく。上空で一団の戦闘機がうなりを上げながらどこか不可視の場所へ向かう。犬は吠えながら裏通りを走る。



船内は人がいなければ鉄灰色。^{スチール・グレイ}混み合っていると緑色に、目に爽やかな酸緑色^{アシッド・グリーン}になる。隔壁の上の側には舷窓が並び、そこから太陽光線が差し込む（無鉄砲号^{リョウクゾウ・ヒツロウ}）は、常時23度27分の傾き^キを保っている。隔壁の下の側には、スチール製の水洗ボウルが並んでいる。それぞれの便器列の端には、コーヒー沸かしと、手回し式の覗きマシンがある。年増で興ざめた非テュートン系の体をした映像は下士官用のマシンに集められ、本当に魅惑的で人種的にも黄金級のトマトちゃんはすべて将校たちのものになる。当然だ、^{ナチス}こういうところナチスはファナティックに徹底している。

（リュックズ・イ・ヒツロウ号）自体は、別のファナティシズムの産物である——専門化の徹底。これはなんと「トイレット専用艦」なのだ。下位区分を徹底するドイツ精神の誇りといえよう。「家^{ハウス}が有機的^{オルガニック}であるなら」初期の推進論者は喧伝した、「家族はハウスに住むのだから有機的で、ハウスは家族の外的で可視的なあらわれ^アといふことになるな」いぶしガラスの眼鏡をかけ、ごま塩頭をクルーカットにした彼は、自分で言っていることをハナから信じていない調子、颯爽としたマキャヴェリ主義者の風体であって、いまだパラノ

1 この角度は地軸の傾きに等しい。

2 ちょうど「聖体」が、キリストの血と肉の「外的で可視的なあらわれ」であるように。

3 ヘンリー・フォンの戦前期の西部劇としては、『丘の一本松』（一九三六）『モホークの太鼓』（一九三九）などが知られる。

4 国家とその部分の間に、生命体のような有機的な連結を求めるのは全体主義体制のならわしで、この点ナチス・ドイ

イアの症状は発していない、「そしてトイレもハウスの一部であってみれば——ハウスは、有機的、ではないのかね！」節をつけ、非難の調子で、大きなブロード顔の技師を指さすと、髪を真ん中で分けてテカテカのオールバックにしたその技師は、本当に顔を赤らめ、同僚の技官たちが白い歯を見せて笑うなか、うつむいて自分の膝を見つめている。恥ずかしくも、肝要な心得を忘れそうになったのだ（アルベルト・シュペーア自身は——グレイのスーツの袖にチョークの粉をつけて、腰に手をやり、うしろの壁にもたれてる彼の姿は、アメリカのカウボーイ俳優ヘンリー・フォンダと驚くほどよく似てる——家がオーガニックであるべきだなんてと、つくづく忘れてるのにさ、誰も彼を指さしたりしないんだ、RHI P^{*}さままだね）。「ならばヘイトレット艦」と海軍全体との関係はだ、トイレとハウスの関係と等しくなるな。なんとなれば、全員承知している通り、海軍は有機的であるからだ、ハハーッ！」（二回の笑い、いや「アドミラルな笑い」といべきか）リュックズイヒツロース号は当初、フルに一分艦隊をなす便所船団の旗艦として予定されていたのだが、鉄鋼の割当がA4ロケット計画の方へ行ってしまったって海軍には回ってこない。そんなことが起こりうるのか、と言えば、理由があって、それはロケットの委員会のトップにデーゲンコルプ^{*}がすわったこと。供給全部門の配分が、彼の力と意志に任されるようになった、その煽りを食らって、このリュックズイヒツロース号も、製造されたのは一艦だけ。古船艦のコレクターにとってはおもしろくない話だろうが、でも、あなた、マーケットの筋の方なら急がないとまずそうだよ。だってGE社がすでに見に来ている。ロシアに買われていないくてよかった、でしょ？ チャールズ君。しかし、その間チャールズは、熱心に話のメモをとっているように見えて、実はまわりの状況を書きつけているのだ——みんなおれを見

ツも皇軍国家日本と変わらなかった。しかしドイツ第三帝国の最も重要な建設家であるアルベルト・シュペーア自身は、世界首都ゲルマニア構想を見ても明らかのように、有機的形態を追究するアーティストではなかった。

5 地位ゆえの特権 (Rank Has Its Privilege)。

6 「ジェネラル」は陸軍の將軍だから、海軍流に言えば「アドミラル」だという洒落。

7 軍需大臣シュペーアは一九四三年、強引な運営で機関車の生産に（月産二千台の）実績を上げたゲアハルト・デーゲンコルプをトップに据えて（A4特別委員会）を組織した。

ている、さもなくば、リンゾ中尉がおれを殺そうと企てている。加えて、いつも必ず役に立つ言葉、ヤツもかれらの一味だ、いつかヤツを始末する夜が来るだろう、さてそのチャールズの同僚も到着した、ステイヴって名前ではロシア人のことなどはや頭がない、排水弁の検査を途中で放り出し、ぐっと身を乗り出して、至近距離からしげしげと眺め、おいチャールズ、探索チームをおまえが決めるわけにはいかんぞ、お前みたいな新卒のルーキーじゃだめだ。オレがいるんだから、どこにいても、このケツノアナみてえなとこだ、そこで誰の指令だかわからんが、パシリをやらされてる——誰の？ どのホモの？ オレって何なの、GEにとって？ これ、会社による影の懲罰ってわけ、事実上の永久追放？ よせよ、キャリア組のおれ様を、会社の一存で、二十年も追放できるの、だれにも知られずに？ ああ、一般諸経費扱いにしておきや、毎年度の記録も残らないって。シーラ！ おい、シーラにどう伝えたらいいんだ？ おれたち婚約してるんだ。これ、ほら、彼女の写真（波立つ海みたいにウェーブした髪をリタ・ヘイワース風に垂らしてる。カラーで撮ってれば、まぶたは黄色で目尻はピンクだ、唇は看板に描いたホットドッグ）、シーラを連れて、バッファロー・バイユーへ行ったのさ——

おったのしーみを求めて——

どでかいバイユーのモスキートよ、オウ

あいつがしたこと見てくれよ

彼女のドレスの下で頭がポツコリ

ニヤツと笑って、いやあ、これは

8 呼び名は「バイユー」であっても、実際は平地を流れる短い川。ヒューストン市を貫いて幅を拡げ、ガルヴェストン湾に注ぐ。

パッファロ・バイユーがやばい状況
おい、モスキート、メーター下げろ
オーライ——ナウ！

ヤ、タ、タタ、ヤタタ、タタ

おったのしーみを求めて

エヴリバディ！

わかるよな、健全な若人がさ「ここでいう「エヴリバディ」とは、ヘトイレット艦^{*}に乗りこんだ、派手な角縁メガネの若者たち。スケネクタディ出身の彼らは今、靴でリズムを刻みながら、この叙^{レキタリグ}唱のバックをとめている」教会へ欠かさず通う善良な子がだよ、突然テキサスの蚊の大群に襲われるってのが、いかに痛ましいことか。精神年齢が二十年も逆戻りしてしまう。実際そんな犠牲者はたくさんうろついていてさ、今日も一人、おまえと同じく、幼児の知能しかないやつを見ているのかもしれない。見ただけじゃわからんもんな。飛来したモスキート連中に、おぞましいことをされたんで、そんなふうになっちゃった。そりゃあ殺虫剤はかけたよ、そ、それからバイユーにシトロネラ油も撒いた。しかし役に立たんのですよ、みなさん。殺すそばから、より大量に発生してくる。おれたちはもうお手上げだ。尻尾を巻いて、パッファロー・バイユーをやつらの住処にしておくしかない。おれの女のシーラが、あんなヤツラのおぞましいふるまいに接するはめになったとしてもだ——あんなヤツラ、存在自体許されるかよ？

——さあ、いくぞ

9 ニューヨーク市の北方、州都オルバニー近くの地方都市で、ゼエネラル・エレクトリック発祥の地。一九七三年まで、GE本部はここにあった。「ヘルメス計画」(上巻547ページ)の主契約者はGE。そのGEとテキサス出身のマーヴィ少佐はつながっている(上巻630ページ等)。戦後、IGFアルペンに替わる、GEを中心とした影の動きが、実際どのようなものだったかはともかく。

パッファロ・バイユーがやばい状況

おい、モスキート、メーター下げろ

おい、おい、早くだ――

モスキート、メーター下げろ

このふたり、どっちがひどいバラノイアか、考えてしまうね。ステイヴがチャールズをなじる言葉もひどすぎるしね。このトイレット艦には、数学の心得の深い人も訪れるように、いろいろな面白い落書きも見られる、たとえば――

$$\int \frac{1}{d(\text{cabin})} d(\text{cabin}) = \log \text{cabin} + c = \text{houseboat}^{*10}$$

この手のやつ。ふたりは互いを突きながら、ソーセージ形の狭い便所へぶらぶら歩いてゆく。若手／＼ベテランのふたり。四つの足が霞んでいく、スロープをなすスチール・デッキに響いていた足音もしだいに消え去り、後ろ姿も遠ざかるにつれぼんやりと透明になり、後にだれもいない小部屋だけが残る。S字型をした覗き装置の把手、中は向かい合って互いを映し合う鏡の列で奥は長大な半径の曲面になっている。この曲面が弧の部分まで、リムアップ・ヒット・スロープの艦内スペースとされているので、これはずいぶんぼってり太った船だ。これだけ横幅が大きければ、通行も優先されるだろう。「乗組員の士気ですよ」閣僚会議で狡猾な狐たちがささやいた。「水兵の迷信。真夜中の鏡に何を見るかをわれわれは知っていますから、ね？」

¹⁰ $\log \text{cabin}$ は cabin の対数。しかしふつうに読めば「丸木小屋」で、それに (sea) が加われば、屋形船 (houseboat) だ。

将校の便所のほうは、打って変わって、赤いビロード張りだ。内飾は一九三〇年代風の「安全への手引」になっている——つまり、ドイツ海軍史に残る甚大な災難の写真が、壁じゅうに貼ってあるってことだ。衝突、火薬庫の爆発、Uボートの沈没、すべてトイレに座った将校らの脱糞を促すようなものばかり。狡猾な狐たちに手抜きはなかった。部隊長用のトイレットなどは、スイート・ルームになっていて、専用シャワーか剃りぬぎの浴槽、マニキュア塗りのお姉さん（多くはボランティアのBDM¹¹の娘たち）、サウナ室、マッサージ台の備え。でもその代価として、隔壁にも天井にも、いたるところ様々な恰好の演技をしているヒトラーの巨大写真が貼ってあった。それとトイレットペーパーだ！一枚一枚にチャーチル、アイゼンハワー、ローズヴェルト、蔣介石の漫画が描いてあった。並の出来ばえじゃ満足しない目利き用には、白いチリ紙に注文に応じて風刺画を描くその筋専門の絵描きが常駐していた。無線室ではヴァーグナーとフーゴ・ヴォルフ¹²をつなぎ合わせてスピーカーから流していた。煙草はタダ。トイレット艦リュックズイヒツロース号の生活は快適だった。スヴィーネムンデからヘルゴラントまで、お呼びがかかればどこへでも。さまざまな濃度の灰色の迷彩模様塗られた船体は、陰影のくっきりした船首が船の中央からつき出している世紀末スタイルなので、どっちへ進んでいるのかわからない。乗務員はみなそれぞれの個室空間に別れ、鍵とロッカーを与えられ、仕切りをピンナップや本棚で飾り……さらにそこにはハーフミラーさえあったから、すっかりくつろいで便器にすわり、便器の中の凍える海水に向かってベニス¹³を垂らし、VE-301型の国民ラジオ¹⁴に耳を傾けながら、艦内の午後のラッシュアワーの様子を観察できた。せわしく行き交う足音も、話し声も、集団トイレ内でのカード遊びのガヤガヤも聞こえた。ヤクの売人ら

11 ドイツ女子青年団 (Bund Deutsche Mädchen)。

12 49 ページ註 52 参照。

13 すなわち、バルト海のポーランド国境から北海のオランダ国境まで、ドイツ沿岸全域。

14 「国民ラジオ」とはナチス政権時代に生産された「フォルクスエンプフエンガー」のこと。外国の放送を聴くことができない設計で、国民義勇の役割を担った。

は玉座のような、本物の陶製便器にまたがって客と接した。客の一部はトイレの外で列をなし（全員、取引に参加するこの静かな列は、銀行での列と変わらない）、便所弁護士が助言して回り、あらゆる種類の人が出入りする。背中を丸めて入ってきたのはUボートの乗組員か、二秒に一度は天井に向けた目を神経質に引きつらせる。溝槽の上にケツを下ろして駆逐艦の水夫たちが戯れている（それにしても何と巨大な溝槽だろう！ 船の全長を貫いて走り、全船幅を走り、うわさでは、鏡の間へと続いている。四、五十人、ケツを並べて座れるほどの大きさで、下は垂れた便を押し流す海水が轟々と流れている）。この連中の大好きな遊びはペーパー燃やして、チリ紙の塊に火をつけて、黄色い炎に包まれたそいつを大騒ぎしながら流れる水に浮かべると、炎塊が順々に隣のケツをなめていき、みな一様にギャオと叫んで飛び跳ね、火傷したケツをかかえ、焦げた陰毛の臭いを漂わせるのだ。いやいや、便所船の乗組員だって、実はときどきその種の悪ふざけに関与していた。忘れられないのは、造船取付手のヘップマンとクロイスが一九四三年のプトマイン中毒禍¹⁵のピークの時期に、排気管を、副長の豪華な個室の換気システムへつないだいたずらである。副長はそのむかし便所船の働き手をやっていたこともある人だったが、この巧妙ないたずらを、人の良さそうな笑い声で笑ってから、犯人二人を砕氷業務へ回した。かくして、二人の糞便技術師は、北極海の氷や雪でウンコの形の山々を作ることに進出した。その作品はときどき、南下する流氷の上に現われ、ぼんやりと視界に入るその霊的偉容に接した者はだれも、驚嘆の思いにとらわれたのだ。

いい船、いい乗組員、メリー・クリスマス、さあ、仕事だぞ。カールスハーゲン（これまたペーネミュンデの発射試験場の偽装名）の電子工学工場に所属していたホルス

15 腐った肉等が分解してできる有毒物質プトマイン（屍毒）による食中毒。

16 話が分かりにくいまま進んできたが、どうやら、流体力学研究者アハトフアーデンが（黒の軍団）に捕まって、ドイ

ト・アハトファアーデンに、海軍のノスタルジアにふけっている暇はない。三、四の国の産業スバイに追われ、あげくの果てにヘシュヴァルツコマンドに拉致されるという難に遭ったのだ。¹⁶ この黒い連中は、みずからの主張によれば、一つの独立国を形成するというのだが、とにかく彼らに捕まって、機関長用のトイレに拘禁された。それ以来、毛皮の大蛇をまとっただけのグレタが、同じ曲に合わせて踊るのを一七八回も見たものだから（覗きマシンのコイン装置をうまくいじってタダ見ができるようにした）、アハトファアーデンはもう刺激も何も感じない。連中は何が望みなんだ？ 何が目的で、キール運河のど真中に遺棄された船を占領しているのだ？ これをイギリス軍が静観しているってのは、一体どうしたことだ？

こう考えたらどうだ、アハトファアーデン、この便所船は、航空実験の風洞に他ならない。乱流の分析に対してテンソル解析¹⁸が有効だとすると、それは時の乱流に対しても使えるかもしれない。歴史にも結節点というか、決定的なポイントが見いださるはずだ……飽くことなく密集してくる流れを微分していつて、その係数をゼロに設定することができポイントが……その一つが一九〇四年——一九〇四年というのは、日露戦争でロジェストヴェンスキー提督が、バルチック艦隊を率い、旅順救援のために地球を半周した年。それがきっかけとなって、君を捕らえたエンツィアンがこの世に生まれ落ちたわけだ。同時に、一九〇四年はドイツの入植者がヘレロ族を絶滅する手前まで殺しまくった年であり、そのことでエンツィアンには生存に関して一種独特な考えが備わった。同年、アメリカ食品医薬品局が、コカ・コーラからコカインを取り去った。¹⁹ そのせいで、アルコール飲料に耽り、死を恐れなくなったヤンキーの若者世代が登場、国がWWIIを戦うには理想的な

ツ海軍の潜水艦のトイレに拘留され、00000号に関する審問を受け、たぶん「真実告白剤」の影響もあって、糞便学的妄想を膨らませていた、ということらしい。

17 ユトランド半島の根元を突っ切ってバルト海と北海をつなぐ全長九十八キロの運河。

18 大きさだけを持つ「スカラー」、大きさと方向を持つ「ヴェクトル」に対し、そのヴェクトルが作用する面も考慮しなければ決まらない物理量を「テンソル」という。

19 事実としては、食品医薬品局(FDA)ができたのは一九〇六年。〇四年に含有コカインが除去されたのは、会社独自の判断だったらしい。

状況がでさあがった。同時に一九〇四年は、ルートヴィヒ・ブラントルが境界層のアイデアを提示した年でもある。それによって航空力学というものに需要が生じて、君みたいな人間が登場することになった。すべては一九〇四年のしわざだよ、アハトファードン。ハッハッハ！ それって、チリ紙に火をつけてケツを焦がすのなんてより、だいたい高尚なイタズラじゃないかね。君という存在もずいぶんそのお陰をこうむっているわけだ。流れを逆には流せないからね。少なくともこの世の摂理にしたがう間は無理だ。せいぜい、流れゆくものに数字を振って被るものを被るしかないのだよ、ホルスト君。あるいは、グレッタと毛皮の大蛇にはもう溺れないというなら、ひとつヒントをあげよう——君自身に固有の、ゼロ次元の数値を見出してごらん。君は時の風洞に生じた航空力学的存在なのだからして——

係数ですか、ヤー、ヤー。……アハトファードンは、絶望的な気分で、列の一番端にある紺色の将校用トイレの上に身を投げ出す。係数の話なら彼はわかる。一度アーヘンで、しばらくの間、彼と同僚とは、風洞実験を前部の観察塔から眺める機会に恵まれた。ヘルマン博士とヴァイゼルスベルガー博士の小窓からだ。見えたのは野蛮な国の光景だった。すさまじい圧縮、蛇のようにのたくるダイヤモンドの影。先端の尖針部が、しばしば模型本体より大きくなった。測定する必要が観察の妨げとなる。そこに手掛かりがあるはずだった。まだ超音速の流れについてだれも論文を書いていない神話時代のこと。恐怖は純粹でプリミティブなものだった。ダルムシュタットのヴァーグナー教授は、マッハ5以上の速度において空気が液化することを予言。そのときピッチとロールが等しくなれば、互いに共振して機体は激しく震え、誰もみ状態になって破裂するだろうと述べた。その動きを

20 ブラントル（一八七五—一九五三）はこの年『流体力学要項』を出版、航空力学研究の基礎を敷いた。「境界層」(boundary layer)とは飛行物体との接触面にできる薄い空気層。その状態を知ることから空気抵抗の概算値が得られる。

21 ベーネ・コンデの航空力学研究所の所長ルドルフ・ヘルマンは、アーヘン大学の流体力学研究所教授カール・ヴァイゼルスベルガーと共に、A4のひとつ前のモデルであるA3型ロケットに關して、最初の風洞実験を行った。

22 「ピッチ」は機首の上下動、「ロール」は横転。

23 「シュリーレン撮影

我々は「月の動き」と呼んでいた。空に生じる誰もみ形の飛行機雲は「ビンゲン鉛筆」と呼んだ。ほんとに怖かった。シュリーレンの影が踊った。ペーネミュンデでは試験部局が四〇×四〇センチと測定した。だいたいタブロイド新聞のサイズではないか。「研究者は毎日のパンだけでなく、毎日の幻想のために祈る」と言ったのはシュトレゼマンだが、厚いレンズを通して凝視する我々にとっては実に「毎日がショック」だった——「デイリー・ショック」という新聞を、みんな購読していたようなものだよ。

ところで君はこの町に来て、ペーネミュンデのど真ん中でどんなお楽しみをしようというんだ。君が引き回している田舎っぽい旅行鞆の中身は、シャツ数枚と、手引書が一冊、克蘭ツの『弾道学教科書』か？ アッケレト、ブーゼマン、フォン・カルマン、ムーアらが集まって議論した内容だな。そのヴォルタ会議^{*25}の発表論文もすっかり暗記している。だが恐怖は去っていかない。こいつは音より速い。どんなサウンドより速い——日射しの注ぐ部屋で彼女のしゃべる言葉より、眠れぬ夜にラジオから届くジャズより、くすんだ色の発電機の間から、参謀たちが集まった頭上のバルコニー^{*26}から聞こえるしゃがれ声の「万歳」^{ハイル}より……そびえ立つ山峡からゴメラ島の住民が吹き鳴らす口笛の音より速い（そこは恐怖の崖、口笛の音は絶壁の真下に向けて、何世紀も何マイルも下に横たわっている玩具サイズの村に向かって落ちる……）その一方で、君はKdF船^{*27}にあって、カウンタにひとり腰を下ろしている。白いデッキの上では華やかな五月祭のメイポールの踊りが進行中、日光浴のウェアを着た男たちの日焼けした肌、歌とビールとビール腹、だが君が耳を傾けるのは、原スペイン語だ^{*28}。それは話す言葉ではない。口笛としての言葉。それが山上のチブーダの近くから聞こえる……ゴメラ島は、コロンブスがアメリカに到着する前に

法」（別名「シャドードラフ法」）は、気体や液体の密度差を目に見える形にする可視化手法。

24 ヴァイマル共和国時代の首相、外相。

25 一九三五年にローマで開かれた高速飛行に関する学術会議。そこに集まった面々のうち、セオドア・フォン・カルマンは「航空工学の父」と呼ばれるハンガリー人の工学者で、すでにカリフォルニアで教え、音速のショック波の研究に成果を挙げるノートン・ムーアを育てている。ヤーコブ・アッケレトはチューリッヒのスイス工科大学の風洞実験所のディレクター。ゲッティンゲン大学のアドルフ・ブーゼマンはこの会議で超音速飛行に関する有名な論文を

最後に停泊したところだったな。彼もまた最後の晩、その音を聞いたのか？ 彼らはどんなメッセージをコロンブスに伝えようとしたのか？ 警告か？ 彼は理解できたのだろうか？ カナリア諸島の終とファヤの森の暗がり^{ヒンヤ}で、預言を口にしていたヤギ飼いの言葉を？ ヨーロッパの最後の日没の中で、真緑に染まった熱帯林の暗さの中で。

航空力学では、思考の対象は当初、紙の上にしかない。次元のない係数があるだけだ。それはアレに対するコレの比を示す数値だ。センチメートル、グラム、秒などの単位は、分子と分母からきれいに相殺される。係数を得ることでモデル作りが可能になる。自分の関心にしたがった測定をするために空気の流れをアレレンジし、風洞実験の結果を現実のスケールに拡大する。そのやり方で進めていって、既知の範囲をたいして外れずにいられる理由は、これらの係数が、あらゆる次元に対して有効だからだ。慣例的に、こうした係数には、人の名前が付いているね——レイノルズ数、プラントル数、ペクレ数、ヌセルト数^{*29}、マッハ数。ここで訊きたいのだが、アハトファードン数^{*30}というのはあるのか。今後出てくる見込みはどうだ。

見込みは薄いか。パラメータが増えすぎて無理か。バイユーの蚊のように叩きつぶす側から増殖するか。空腹、妥協、金、パラノイア、記憶、慰安、罪悪感。ただしアハトファードン周辺では、この罪悪感に、負の符合がつくだろうな。^{*30}ヘゾーン全体ではけっこう売れ筋なのだがね。そのうち世界からハイデルベルクへ悠々自適の旅人が集まってくるだろう——罪悪感の研修にね。罪悪感に捕らわれた連中相手に、バーとナイトクラブが栄えるだろう。強制収容所は見学ツアーを盛り上げ、カメラを持った外国人観光客が、みずからの罪悪感を刺激されて震えることだろう。悪いが、アハトファードン君、君は、その仲

発表、その後、ナチスのロケット研究に数々の実質的な寄与をした。

26 ラ・ゴメツは、大西洋のスペイン領カナリア諸島の島。新世界へ向かうコロンブスの寄港地。

27 Kraft durch Freude
＝歓喜を通しての力。ナチス時代の、工業生産を美化したスローガン。
「フォルクスワーゲン」も最初「KdFワーゲン」という名前だった。

28 原文は Ur-Spanish。
「スペイン人到着以前の言語」ということか。
「チブーダ」は島の中央高地にあった原住民の村。

29 「レイノルズ数」
「ヌセルト数」は上巻426ページにも出てきた。
「プラントル数」は、流

間にはなれない。左右の鏡に写った、船体の左舷から右舷まで連なる彼の鏡像が、一斉に肩をすくめる。そう、自分の仕事はさほど重要ではなかった。意味を持つには、あまりに「空気の薄い」ところが担当だった。それ以後に起こったことに彼は一切、責任がない。大気圏再突入の問題を担当したのは、ヴァイヒエンシュテラー、フラウム、フィーベルたちだ。聞くなら彼らに聞け。それと誘導セクションのやつらにも。ロケットの行き先を定めたのはあいつらだ……

「どうだね、そう考えるのは少々分裂症的だろうか」前向き・後ろ向きの無数のアハトフアーデンに対して声が発せられる、「飛行曲線を、誰の責任かでセグメント化^{*31}するのは」それは弾丸でもあり、矢でもあるような存在だ。それが要求したのだよ、我らではなく。君はライフルと、ラジオと、タイプライターを使ったんだな、おそらく。ホワイトホールとペンタゴンのタイプライターは、我らのちっぽけなA4型ロケットには望むべくもないような数の民間人を殺害した。君は絶対的な孤独に生き、自分一人の死と向かい合っていて死んでいくのかね。それとも、大きな営みの一部をなし、他人の死に関与するのか。両方というのはありえまい。君はどっちなんだ」記憶のフィルターを通して、ファースリンガーの声が彼の心の耳を騒がせている。「孤独な手押し車を押して生きるのか、それとも、巨大な乗物に乗るのか？」怒り狂うファースリンガーは、ペーネミュンデ・クラブで唯一、帽子の帯にキジの羽根の徽章を付けるのを拒絶した男だった。他人を殺す側に回るのはどうしても嫌だと。ファースリンガーが夕刻の海辺で座禅を組み、夕陽を見つめている姿が目撃されていた。ペーネミュンデで最初にSSに拉致されたのがこの男である。ある日の真昼時、霧の中へと連れ去られた。実験用白衣が服従の白旗となった恰好だが、それもやが

動する物質の熱伝導性を、動粘性（散らばりにくさ）との関連で示すもの。「ベクレ数」は熱伝導全体のうちどれだけの割合が対流によって伝わるかを示す。

30 人間を、時を流れる流体と見た場合、その動きはどんな媒介変数（パラメータ）によって数式化されるか、という思考が展開されている。罪悪感の符合がマイナス、というのは、それが行動の誘引ではなく抑制因子として働くということか。

31 フライト・プロファイルはふつう縦軸に高さ、横軸に時間（または水平距離）をとるが、ここではV2のそれぞれの高度においてV2の飛行を成功させた、責任を負うべき人間が横軸に並べ

て護送者たちの黒い制服、革と徽章に隠れて見えなくなった。後に残ったのは、数本の
銀香と一冊の學術誌『中国の科学と芸術』、そして誰にも話していなかった妻と子の写
真……ペーネミューンデはフアーリンガーにとっての修行の山寺、独居、彼の断食だったの
だろうか。罪の意識、昨今とてもファッショナブルな罪の意識から逃れる道をこの男は見
いだしていたのだろうか？

「アートメン……アートメン……息をするというだけではない、魂の意味、すなわち神の
息……」フアーリンガーとふたりだけで直接話をした記憶はあまりないアハトフアーデ
ンだが、このときの会話は覚えていた。「アートメンは、真正なアーリア的動詞なのだ。
ところで、ジェット噴射の排気のスPEEDについて話してくれないか」

「何を知らたい？ 秒速六五〇のフールドだよ」

「変化のようすは？」

「燃焼中は一定で、ほとんど変化はない」

「それでいて、空気との相対速度は急激に上昇するんだな、ゼロからマッハ6まで。何が
起こっているか、わからないか？」

「何だ、フアーリンガー」

「フールド」が自身の偉大な風を発生させているんだ……ロケットと大気の両方がなけ
れば、風は存在しない……しかし、ベンチュリ管内で、息は——炎を吐く猛烈な息は——
のねに一定の速度で流れつづける……そのことの意味が、君には本当にわからないの
か？」

「風を発生させているものだろうか？ 意味があるのかもしれないが、アハトフアーデンに神の公家

られている。

32 Chinese Father
for Wissenschaft und
Kunstは、リヒャルト・
ヴェーグハルト(19ページ
註11参照)等の拓いた

中国への関心を受け継ぐ
雑誌で、一九二五年から
四二年までフランクフル
トのゲーテ大学の中国研
究所が発行していた。

33 Atem はドイツ語で
「息をする」という意味
の動詞。同根のサンスタ
リット語 *atman* は「真
の自己」という意味で、
「梵我一如」(世界霊と自
己霊はひとつ)というこ
きの「我」はこれである。
フアーリアン、なドイツ
民族は古代インドのアー
リア人と事実つながって
いるというのがチヌスの
主張だったが、そのロク
ソリの「息」は、フアー

の備えはなかった。悟りの瞬間へ導いてくれる超越的な謎……彼にとってはこんな問答と変わらない——

——飛ぶとは、一体、何が飛ぶんだ？
——運命だ。

ヴァッサークッペ山から上昇。ウルスター川、ハウネ川が右に左に傾きながら地図で見る形になる。緑の谷が見え、山々が拡がる。眼下の四人が、離陸時用の白い緩衝ゴム索を集めている。目の上に手をかざして見上げているのは——ベルト・フィーベルか？ だが、この高みにあって、もはや名前など関係ない。アハトファーデンは雷雲を探す——雷の下へ、雷の中へ、心に軍楽曲を響かせながら突入——右手にもくもくと灰色の崖が現れ、稲妻が山々を青く照らす、その瞬間コックピットにも閃光が……まさにここが雷システムの縁^{エッジ}。界^{インターフェイス}面で空気は上昇しているだろう。嵐の縁を進む君には五感の他に新たな感覚が生まれている——飛^{フライト・センス}覚というやつだ。局地化されず全神経を満たす感覚……君が美しい低地地方と雷神ドナルド^{ロウ・ランド}の狂乱との界面に留まるかぎり、その感覚は君を離れるまい。今飛んでいる、これが何であれ、この君を掠り上げた上昇ドライブ——これこそ自由であるのか？——雷との界面に達するまで、重力への囚われがいかに隷属的なものであったか、誰にも分からないのか？

謎解きなどをしている暇はなかった、ヘシニヴァルツコマンド^{Heinrich Himmler}がやってきた。アハト

リンガーは神秘学的関心を示している。

34 音速の六倍弱に相当。

35 北欧神話では「トール」と呼ばれる、ハンマーを振り回す雷と稲妻と嵐の神。Thor は、古英語では Thunor と呼ばれ、これが今の英語の thunder になった。

ておいてくれたらいいものを——だって連中の勝ちも明らかなのだ、敗残兵のアハトファ
ーデンに何の用がある？

例の「黒装置」が欲しいという。シュヴァルツゲレートという言葉が実際エンツィア
ンの口から発せらる前に、そのことはすでに伝わっていた。彼の態度と結んだ口の形から
明白だった。彼の後ろには、ライフルを持った六、七人のアフリカ人が控えている。黒い
顔と、血走った眼球を染める赤青白の三色が、連鎖をなして鏡の世界を襲おうとしている。
「わたしは、ただ一部局に割り当てられたただだ。ちっぽけなことを担当してただけだ、
本当だ」

「航空力学はちっぽけなことではない」物静かなエンツィアンの顔に笑みはない。

「ゲスナーの下で働いていた者もいた。工学デザインの連中だ。私の仕事はいつもクルツ
ヴェク教授博士の研究の下請けだった」

「ゲスナーの部下たちの名を言え」

「覚えてない」

「ふむ」

「殴らないでくれ。隠さなくてはいけない理由もない。本当のことを言ってるんだ。お互
いを切り離すのが上層部の方針だったから、ノルトハウゼンに知り合いなどは一人もいな
い。自分の部局の数人以外は知らない。誓ってもいい。〈S装置〉に関わっていたのは知
らない者ばかりだ。あの日初めてわれわれ全員がヴァイスマン少佐に会った。一人として
知った顔はなかった。本名もみな伏せていた。コードネームが与えられたんだ。誰かが言
っていたが、映画の登場人物の名前らしい。航空力学の担当は他にシュペーリというのと、

36 ペーネミュンデの
風洞を製作した主任エン
ジニア。次のクルツヴェ
クも実在の風洞研究者。

ハヴァシユというのがいた。わたしはヴェンク³⁷と呼ばれた」

「おまえの仕事は？」

「重量のコントロール。わたしに求められたのは、所与の重量の装置を積載した時の重心移動の計算で、その重量は極秘事項だった。四十何キロだったっけな。四十五か四十六か？」

「発射場の番号を言え」エンツィアンの肩ごしからアンドレアスが声を荒げた。

「記憶にない。尾翼部³⁸だったことは間違いない。負荷が経線軸について左右対称でなかったことは覚えている。第三翼の方に傾いていた。偏揺れをコントロールするための翼だ——」

「そんなことは知っている」

「シユベリーとハヴァシユに聞いてくれよ。その問題は彼らが解決したんだ。〈誘導^{ガイダンス}〉の担当に聞けって」まずい、なぜそれを——

「なぜそれを言う？」

「とにかく、自分の担当じゃなかった。誘導、弾頭、推進……そっちの担当に聞いてくれ。自分じゃなく、他の者に」

「別なことを言おうとしたらどう。誘導にたずさわっていたのは誰だ？」

「さっきから言ってるだろ、誰の名前も知らないんだ」最後の日々の埃に覆われたカフエテリア。隣接するホールに置かれた機械類は、以前は冷たい鑿のように昼も夜も鼓膜をががんと叩いていたのに、今はひっそり。柱間の壁に掛かったタイムレコーダーのローマ数字がこちらを見据える。電話線の黒いゴムコードの先についたジャックは、真二つに

37 これらは三つとも、フリップ・ラングの映画『ドクトル・マンゼ』（一九二二）中の登場人物名

38 この「負荷」は何だったのか、小説の最後まで明らかにされない。

から垂れ下がり、それぞれの接続コードが机の上に垂れている。机の上には見事に何も載っていない、天井のふるいを通して舞いおちた塩気をはらむ埃に覆われ、プラグを差し込むべき電話もなく、交わすべき言葉もなく……テールをばさんだ友人の、やつれきった不眠の顔は、あまりに尖り、唇も失った。かつてアハトファーデンのハイキングシューズにビールを吐いたこともあったその口が、今ささやく——「フォン・ブラウンと一緒にには行けなかったよ……アメリカ軍に投降しても……結局同じ日々の繰り返しだからさ……ぼくは終わりにしたかったんだ、それだけだ……グッバイ、"ヴェンク"」

「こいつを廃棄物パイプに突っ込んでしまえ」アンドレアスがいう。軍団はみな肌が真っ黒だ。確信をもって行動している……

わたしが最後に残った技術者なのか……あいつは、すでに誰かに連れ去られただろう……このアフリカ人たちに名前を告げたとして、彼らに何ができる……名前なら誰からでも手に入れられたはず……

「友達だったんだ。戦前から、ダルムシュタットの学校以来の旧友だ」

「そいつを傷つけようとは思わない。おまえのことも傷つけたりしない。〈S装置〉がほしいだけだ」

「ネリッシュ。クラウス・ネリッシュ」

彼自身の係数を決めるパラメータに、いま新たに「裏切り」が加わった。

リュックズイヒツロース号を去るアハトファーデンの背後で、キンキンと金属的な音が鳴る。雑音に遮られた、別世界からの放送の声だ——「エンツィアン大佐。モカマンガ、モカマンガ、モカマンガ」³⁹ 急を告げる切迫感と事の重大さを伝える声。彼は運河のほとり

に立つ。黄昏の中、破壊された鉄道の残骸と暗がりには紛れた老人たちの間で、行き先の指
示を待つ。だが、自分を呼ぶ無線の声はどこへいった。もはや永遠に途絶えてしまったの
か？

ヘレロの言葉。



シュプレー¹・オーダー運河を、艇^{はしけ}に乗って進むふたり。ようやくスヴィーネミューンデ行き
の旅が始まった。スロースロップとしては、ゲリー・トリップングからもらった糸^{スレッド}が、
〈黒の装置〉²に関するどんな手掛かりにつながるか確かめたい。ルブリン政権²を逃れて遊
覧帆船で航行中の避難民の中に娘のピアンカがいると聞いたマルゲリータは、その船との
ランデヴーを果たしたい。運河の通行は今も方々で阻止されがちだ——夜間には、ロシア
の解体クルーがTNTで戦争の残骸を爆破している音が響く。だが平底の舟のふたりは夢
を見ているかのように浅い流れを呼び寄せ、戦争の残骸には阻まれることなく進むことが
できている。雨は降ったり止んだりだ。正午が近づけば空は雲を払い、濡れたセメントの
ような色に変わるだろう——そして風だ。肌を切るような冷気と、降り出す雨は曇^{みぞれ}と境を
接するだろう、それが運河の行く手からもろに吹きつける。ふたりは梱^{こみ}や樽^もに囲まれ、防
水シートの下にもぐる。そこはタールと木材と藁の匂い。夜空が澄みわたり、水辺や樹上
で蛙が鳴きだすと、運河沿いから見上げる星々がスーッと筋を引く。旅人の眼は驚異にす
くむ。運河沿いに柳の木が並んでいる。真夜中に霧の渦が立ちのぼると、艇の男たちのふ

1 これからふたりは
ベルリンから東へ向かい、
オーダー河に出る。河は
北へ下ってシュテティン
(現在はポーランドの町
シュチェチン)で、大き
な潟湖に注ぐ。潟湖を渡
ると西側がウーゼドム島。
島の東端、バルト海に面
した港がスヴィーネミ
ューンデ(現在のシフイノウ
イシチュエ)。

2 ポーランドに成立
した共産政権。

かすパイプの赤光すらかき消され、前に後に遠く続く舟の列は夢のコンボイと化す。パイプの煙のような香りと質感をもつ夜はしずかで眠りも安らか。ベルリンの狂気は背後に去った。グレタの恐怖もやわらいだかに見える。あとは、ふたり、こうして水面を滑っていければ……

ところが、ある日の午後のこと。バルト海へ向うオーデル河のなだらかなスロープを滑降していると、赤と白の小さな保養地が目に入った。そこには〈戦争〉の太い爪跡が走っていた。グレタがスロースロープの腕につかまる。

「この町、知ってるわ……」

「ほんととか？」

「ポーランド侵攻の直前だった……ジークムントと……ここの鉱泉^{スバ}に來たの……」

岸辺の蔓と手すりの向こうに、かつてのレストラン、小さな町工場、ホテルが見える。

みな燃えおち、窓が吹きとび、おのれの粉塵にまみれた姿でこちらに正対している。町の名はバート・カルマ^カという。早朝に降りだした雨が、町の壁や瓦礫の小尖塔、粗い丸石だらけの道を濡らしている。岸では子供や老人たちが並んで船を引き寄せようと待っている。川面を行く白い蒸気船の煙突から、黒い煙がポッポッと団子になって浮かびあがる。船殻の中で船大工がハンマーを鳴らしている。それを見つめるグレタの喉がヒクッと動いた。

頭を振りながら「ピアノカの船かと思ったんだけど、違うわ」

船着き場に舳をつけ、鉄の梯子をつかんで陸へ上がる。その梯子を古い石に固定している錆びたボルトのそれぞれから、壁の下方へ黄褐色の錆の扇が拡がっている。マルゲリータの上着に差したピンクのクチナシが、風もないのに震えている。「会わずにいられない

3 ドイツ語の Bad は英語の bath に当たる。バート・ザクサなど、鉱泉地の名前はこの語で始まる。ところが英語だと、bad karma は「悪いカルマ」。生死を超えた因果応報をもたらすカルマ（業）の概念を呼びおこす。

の……」縋りかえし、同じセリフだ。

手すりに寄り掛かった老人たち。パイプをふかし、グレタに目を向けているか、水面に目を落としている。灰色の膝下のゆるいズボンに、縁の広い丸帽子。市の立つ広場には整然とした賑わいがある。市電のレールが光り、ホースで撒水したばかりの匂いが立ちこめている。瓦礫の中からライラックの花が流れる血のように咲いている。壊れた石と煉瓦の中から残余の生命がこぼれ出るように。

日だまりに黒衣の数人がすわっているほか、スバ自体は閑散としている。マルゲリータの神経は早くもすり減って、ベルリンで最悪だった時と変わらぬ状態。ヘロケットマンの姿でお供するスロースロップには重荷である。噴水泉のある中庭が片側がクアハウスの砂色のアーケードと接している。砂の柱と褐色の影。中庭に続く道に糸杉が植えられている。いくつもの大きな石製の皿から噴水が吹き上がっている。高さ二〇フィートに及ぶ噴射の陰は、滑らかな中庭の歩道に太い影を落とす。影は過敏に揺れている。

だが中央の噴水のそばで動かずにいるあの人影は？　そしてマルゲリータはなぜ石のように固まってしまった？　日射しも通行人の目もあるのに、スロースロップの背中と脇腹は、ゾワゾワとした寒気に襲われる。引く波の上に新たな波がかぶさり両の顎まで這いのぼっていく……女は黒い外套に身を包み、クレープ地のスカーフで髪を覆っている。黒のストッキングを通して、肉厚の脛がほのかに紫がかった見える。水の上に身を乗りだした不動の姿勢で近づくふたりを見つめているだけ……だがそのスマイル……掃き清められた中庭の十メートル先、真つ白な顔に浮かぶスマイルが確信を深めていく。輝きのない黒い眼は、纏った外套と同じ色で、死んで消えていった過去のヨーロッパそのもののような陰気さを

眺めている。ふたりに知っていると噂だ。グレタは顔を後ろにそむけ、スロースロップの肩にうすめる。「井戸のそば」グレタがささやいているのか？ 夕暮れ時の黒衣の女。

「ほら、何の心配もないから」ベルリンでよく言っていたのと同じ言葉だ。「ただの湯治客じゃないか」馬鹿を言ってしまった。引き留める間もなくグレタは身を引きはがし、喉の奥で恐ろしい抑えられた叫びを発すると、後ろを向いて走り出した。ハイヒールが石の上に絶望のタトゥーを刻む、彼女は影になったクアハウスのアーケードのアーチの中へ消えた。

「へい」不気味さを押しやって、スロースロップは黒衣の女に声をかける。「いったい何なんだ？」

だが女は表情を変えていた。いまは、どこにでもいる、会ったとしても通りすぎるだけの廃墟の女。あのスファイルも、ありきたりの作った笑みに転じている。「タバコ、どうです？」取っておいた長い吸いさしを与えてスロースロップはマルゲリータを探しにゆく。

アーケードには人がいない。クアハウスのすべてのドアは施錠してあり、頭上の天窓も多くは割れて黄色い破片が床に散らばる。回廊の先で揺れうごく午後の日だまり。それがケバだって見えるのはモルタルの埃のせいだ。壊れた階段のいびつな形の石塊の間をよじ登っていったら、先は空中に浮いていた。てっぺんの踊り場から、施設の向こうの田舎の景色を眺望する。整った樹木、墓地に浮かぶ雲、青い川面。グレタの姿はどこにもない。どこへ出かけたのか、いつか真実を知るときがくるだろう。でもそれは、ふたりでまたアヌビス号にしばらく揺られてからのこと。行き先を知って彼はより大きな無力感に襲われる。

4 「アヌビス」(Anubis)は、ジャッカル頭をした古代エジプトの、ミイラを守る来世の神。第三帝国のデカダントな支配層を連れて、白人たちの神のもとへ向かうのか。その航跡は、必ずしも「現実」の地理的世界にあるわけではない。

暗くなるまでグレタを探し続け、ふたたび川辺に戻ったスロースロップが、黄色いライトを吊したカフェの屋外にすわってビールを飲み、シェベツレ・ヌードル入りのスープを口にしていて。グレタの登場は、ためらいのフェードインだ——フォン・ゲール監督はきつとこの手法で彼女を一、二度登場させただろう。無言で立っている彼女のもとへ、ヴァンテージ・ポイントに立つスロースロップの側からカメラを寄せる、ズームが止まると彼女のクローズアップが前の席にすわっていて、彼のビールを飲み干し、タバコも一本くすねていた。噴水のそばにいた女の話はひと言もない。避けているというより、すでに記憶にないのかもしれない。

「展望台に上ったわ」やっと口を開いた。「川を見おろしていたの。あの子、来るわよ。乗っている船が見えたわ。ほんの一キロ先に」

「何だって？」

「ピアンカよ、わたしの子。わたしの友だちも一緒にいる。ずっと前にスヴィーネミュンデに着いていると思っていたのに。いまは時間を守る人なんていないものね……」

彼女の言う通りだ。苦いドングリの代用コーヒーマウ二杯飲み、もう一本タバコを点けて待つうちに、赤・緑・白の陽気な光が川を下ってきた。アコーディオンの音とコントラバスのビート、女たちの笑い声の入り混じったサウンドがかすかに聞こえる。スロースロップとグレタは波止場へ向かう。立ちのぼる霧の中から外洋航海用の遊覧帆船が姿を現す。色はほとんど霧と同じ、船首の第一斜檣の下には、翼を生やしたジャッカルのお金メッキ像。露天甲板にはイブニングドレス姿でお喋りする女性たちで混み合っている。何人かがマルゲリータに目を留めた。彼女が手を振る。向うは指さし、手を振りながら名前を呼

ぶ。これはひとつの移動ヴィレッジだ。千年前のヴァイキング船のように、夏のあいだ、ずっと低地を航行してきた。しかしこちらは受け身の航行だ、襲撃はしない。何から逃げているのかいまだ判然としないまま逃避行を続けている。

帆船は波止場につき、クルーが舷梯を下ろした。乗客は途中まで下りて、ほほえみながら、手袋や指輪をはめた手をグレタの方に差し出す。

「あなたも乗る？」

「どうなんだろう……おれは」

グレタは肩をすくめ、くるり背を向けると、舷梯を慎重に渡ってゆく。ピンと伸びたスカート地が一瞬、カフェの黄色いライトを反射した。スロースロップの気持ちは揺れる。

やっぱりついていこう——すると最後の一步のところで、どこかのイタズラ者が舷梯を引き上げ、船を始動させた。スロースロップはもんどり打って、叫びながら川に転落。ヘロケットマンのヘルメットから真っ逆さまの入水となった。ヘルメットをなんとか引き抜き、水面へと浮きあがったが、鼻孔は沁みるし、眼はかすんでいる。白い船は滑走を開始した。回転するスクリューが近づいてくる。巻き込まれないようケーブは脱ぎ捨て、背泳ぎでスクリューを避けながら船尾を回る。船尾の出っ張り^{カウンター}には黒い字で ANUBIS の船名と、行き先の *Swinoujście* という文字が見えた。反対側へまわり、ぶら下がっているロープを見つけて何とかそこまで泳ぎつきロープをつかんだ。バンドが甲板でポルカを奏でている。頭飾りと真珠の首飾りをした、酔ったご婦人が三人、命綱のまわりにたむろして、上がってくるスロースロップを眺めている。「切ってしましましょうか」と、ひとりが大声で言った。「もう一度、バッチャーンするの、見たいわねえ」「そうよねえ。そうしましう

5 「スヴィーネミューンデ」のポーランド語表記。読みは「シフィノウイシチェ」。

「よー」お友達も異議なしだ。おお、なんということ、巨大な肉切包丁を持ち出したご婦人が、クスクス笑いながら、いま正に綱をスバツ——と、そのとき、誰かの手がスロースロップの踝をつかむ。見下ろせば、銀やサファイアの飾りがついたしなやかな、肉からの光に氷のように照らされた手首が二本、スロースロップのくるぶしをつかんでいる。その下には油を浮かべた川面の流れ。

「こちらよ」声の主は若かった。か細い手に引っぱられるままスロースロップは滑り降りて、舷窓に腰を下ろす。上からバサリ、スロップが落ちる。女たちのヒステリックな声。スロースロップは身をよじりつつ部屋の中へ。小さな丸窓を抜けるときに衣服の水が絞られて、そのまま上の寝台の、若い女となりバサリと落ちた。女は十八くらいだろうか、スパンコールのついた長いガウンを着て、髪はブロンドというより純白という方がふさわしい。そして何とも刺激的な頬骨。頬骨を見て勃起するのは彼としても初めてのことだ。ほんと、ここに来てからスロースロップの脳は尋常ではない。こいつに何が起こったのやら……

「ア——」

「ム——」お互い顔を見合わせる。スロースロップは全身から滴をしたらせながら。彼女の名前がステファニア・プロカロフスカ。夫のアントニーがこのアヌビス号の所有者といることだ。

そうですか、應さんなの。「おれ、ひどいですよね、びしょびしょで」

「たしかにね。だけれど、あなたにニットする夜会服を持ってるはずよ。身体を乾かして。服を脱いでいって、るね。よかったら、浴室をお使いなさい。そこに何でもありますから」

6 ギリシャ神話の運命の三女神や、「救い」と「見捨て」をテーマにした（芥川龍之介の「蜘蛛の糸」をも含む）寓話のバロディとして読める。

かれはヘロケットマンの衣装の残りを脱ぎ、シャワーをひねって、レモン・ヴァーベナの石鹸を手にとったら、そこにステファニアの白い陰毛が二本ついていた。ひげを剃っているところへ、乾いた服が届く。

「あなた、マルゲリータと一緒にの方でしょ」

「一緒」ってのはどうかな。で、グレタは娘さんに会えたのかい？」

「会えた、なんてもんじゃないわ。カレルと三人、べったりよ。ビジネスのことで。今月はカレル、映画プロデューサーをやっているの。カレルのこと、ご存知でしょう？ グレタときたら、もう娘を映画に出したくて出したくて——」

「ふむ……」

ステファニアは肩をすくめてばかり。そのたびにスパンコールが踊りきらめく。「マルゲリータは、娘に映画の道を正しく歩んでほしいと思っているの。罪悪感からよ。自分自身はただ延々とボルノ女優をやっていただけとしか思っていないのね。ビアンカを身ごもった経緯はご存じでしょ？」

「マックス・シュレプツィヒとかが相手だったんだよね」

「そうなの。シュレプツィヒとかなのよ。あなた『夢魔』は見てません？ あの中に、宗教裁判所長の訊問が終わった後で、下働きの男たちが入ってきて、囚われの男爵夫人を強姦して、肢体切断するシーンがあったんです。フォン・ゲールは、カメラをまわしっぱなしにしてね、もちろんその場面は、公開用のプリントからはカットされているんですけど、それがゲッベルスの秘蔵コレクションになっていて。わたし、見たことあるの——凄まじかったわ、男たちがみんな黒いフードか動物の仮面を被って……ブイドゴシチュ^キでは、

7 ベルリンとワルシャワのほぼ中間に位置するヴィスワ河沿いの大都市。

ピアノカの父親が誰なのか当てるのが、パーティ・ゲームになったくらいよ。暇つぶしは必要ですもの。フィルムを回して、ピアノカに質問するの。イエスカノーか、ピアノカは答えなければいけないのよ」

「そりゃそうだ」スロースロップはさっきからベイラムをパチパチ顔につけている。

「わたしたちに混ざったせいじゃないの。そのずっと前から、マルゲリータがピアノカを墮落させていたのよ。だから今夜、ピアノカがカレルと寝たとしても、驚きはしないわ。

業界に入っていくための通り道ですもの。万事をビジネス本位で考える——母親としてで生きることはその程度でしょ。でもね、マルゲリータの問題は、それに快楽を感じすぎること。あの女は拷問室に縛り付けられないといられない。あなたも見ることになるでしょう、タナツとグレタの関係をね。タナツの旅行鞆の中に、どんな器具おどうぐが入っているか」

「タナツという名前なまえなのか」

「あら、グレタ、あなたに話してないの」ステファニアは笑う。「彼女の夫はミコス・タナツ。ときどき一緒に組むのよ。戦争末期にはふたりで前線の兵士を慰問して回るショーをやっていたわ——レズビアンのカップルも、犬も連れて、トランクの中に革レザーのコスチュームやお道具を入れて、小編成のバンドと一緒にドサ回りをする。SS隊員もずいぶん楽しませたわね。強制収容所にも……有刺鉄線の中の巡業ね。その後は、オランダのロケット打ち上げ基地を回った。敗戦後に二人が会うのは今日が初めてなの。だからマルゲリータの姿をきょうはあまり見られないんじゃないかしら、お取り込み中で」

「そうかい。そいつは知らなかったな」ロケット基地だと？ 神の手が星の間をまさぐって、立てた中指をスロースロップに向けた。

8 アフターシェイヴ等に使われた香料。西インド諸島のベイラムの木の葉から作る。

9 「Tanata」＝ギリシャ語の死の擬人化「タナトス」 「Tanatos」に充分近い。

「出かける前に、ピアノカをわたしたちのところに預けていったわ。ブイドゴシチュの町でのことよ。あの子、手に負えないときもあるけれど、ほんとチャーミングな子でね。父親を当てるゲームにはわたし、混ざらないの。父親はいないと思ってるから。きつと単為生殖で生まれたのよ。ピアノカは純粋なマルゲリータ。それって『純粋』っていうのかどうか知りませんが」

用意してもらった夜会服はスロースロップにぴったりだ。ステファニアの導きで、甲板にいる人たちに会いに行く。いまアスビス号は星空の下の田園を下っている。地平の果ての直線を、ときどき破る風車の影、積み上がった乾草と豚小屋の列、なだらかな丘に一系列に植わった防風林。……われらの夢が駆動するこの船は、激流を越え、潮流に逆らって進んでいける……われわれの欲望自体が風となり動力となる……

「アントニー」スロースロップがまず連れて行かれたのは、ポーランドの騎兵服を着た大男。口からたくさんのマニアックな歯がのぞいている。

「アメリカ人か？」握手の手を上下に動かしながら、「でかした。これで一揃いほぼ完成。われらの船はいまや万国船だ。日本人さえ乗ってるんだぞ。ベルリンで働いていた元スパイ、ソヴィエト経由で逃げられなかった男だ。すぐ上のデッキにバーがあるからな。船内をうろついているのは」と、ステファニアを抱き寄せて、「こいつ以外、だれとつき合ってもいいからな」

挨拶をしてスロースロップは、ふたりのおじやまになるのを避けて、バーに通じる階段を見つけて昇っていった。バーは祭りの花輪や電球がぶら下がり、優雅に着飾ったたくさん客でゴッタ返している。折しもバンドの伴奏が始まり、客たちがアップテンポの歌を

歌いだした――

《ウェルカム・アボード!》

いけないお船に、ウェルカム・アボード

夢のような乱交パーティー

いつのまにやら始まった

堕ちるとこまで堕ちないと終わらない!

どうぞふるまいは背德的に、マリー・セレスト^{*10}のようにじやなく
どうぞ野獣のようにして

群れとうち解けてくださいな

心の荷物は、海にポイ捨て

ヒステリックに叫べばいい

オトコと絡んだ母親と

娘のオトコがもつれてる

はちきれそうなエレクトリション

信じられない猟奇趣味

脳みそなんぞはお捨てなさい

カム・ア――

10 上巻577ページでも
言及された幽霊船。

ボード・ザ・タイタニック、みんな躁^{マニッパ}

氷塊一つで、みんなパニック

きんらん緞子^{どんす}で、淫乱ダンス

ヴァルブルギスの夜^{*11}があけなきや

このパーティーは終われない

だから友よ、ウェルカム・アボード、ウェルカム・アボード！

救命ボートの中でウンウンいつてるカップルがいれば、スロースロップの頭上の天幕の中で酔いつぶれている男もいる。髪にピンクのマグノリアをつけ、白の手袋をした太ちよたちが、おなかとおなかをくっつけ合って踊りながら、ヴェンド語^{*12}で囁きあう。サテンのガウンの中を手がまさぐる。雌鹿のような目をして動き回る褐色の肌のウェイターがトレーに載せているのは、あらゆる種類の物質と、その物質を吸引注入するためのあらゆる種類のお道具だ。バンドが奏でるのはアメリカ風のフォックストロット。マラカスター^{*13}の男爵がマダム・ストアップのハイボールの中に混ぜている怪しげな白い粉と、以前にラウル・ドウ・ラ・ベルランパンパンの屋敷で見たのとはまったく同じブツなので、スロースロップに関するかぎり、両者はまるで同じパーティーである^{*14}。

マルゲリータとその娘の姿が一瞬見えたが、二人のまわりは乱交好きの連中が人だかりを作っていて近づけない。スロースロップは可愛い少女に目がない。その弱みは自覚しているので、近づけなくてむしろよかった。というのも、あのビアンカという子は、頭がクラーとするほど可愛いのだ。年の頃は十一か十二^{*15}。浅黒い肌の上に、赤いシフォンのシー

11 魔女っ子ゲリーも参加する、ハルツ山の魔女と悪魔の祭典。

12 ドイツ東部ルザティア地方で、今でもスラヴ系少数民族ソルブ人が話す言語。

13 アルバニア中部の地域。

14 第二部の最後で、ワックスウィングらに会ったパーティーへの言及。

15 ベクラーの娘イルゼと一緒に懐妊した子のはずなので、四五年まで生きていたとしたら計算は合わない。アスビス号は時を超越しているのか。

スルー・ガウンを着て、絹のストッキングと、踵の高い室内履きをはいている。念入りに完璧に掻き上げられた髪には、真珠をつないだ髪飾りが編み込んである。小さな耳たぶには水晶のイヤリングがきらめいている……だめだ、こいつは降参だ、どうして、自分にや、こういうことが続くんだ。一瞬、『タイム』誌の死亡記事が目に見えた——ロケットマン死す、〈ゾーン〉にて、三十歳を目前に欲情死。

さつきスロースロップのロープを肉切り包丁でぶち切ろうとした女がいま、何やら液体入りの半リットル瓶を手にして、係柱^{ピット}に座っている。ボトルに差したランの花に、すでに液がしみ込んで、花卉をダークに染め始めていた。まわりの人にマルゲリータの話をして、いる彼女の髪型は、何とこのか、ある種の肉をぶった切ったような形だ。スロースロップに酒が届く。アイリッシュ・ウイスキーの水割りとは名ばかりの代物。女に近づいて耳をそばだてる。

「……グレタの海王星がね、ひどいことになってるの。誰の海王星も一緒だろうっていうかもしれないけど、ふつうの人間はこの惑星の住人として苦しむわけでしょ。でも、グレタは、生きている大部分の時間を海王星で過ごしたので——その苦しみは、ふつうの人が味わうのよりずっと直接的で、純粋でクリアなの。^{*16}

グレタがオナイリン^{*17}を見出したのは、クロロダイン^{*18}の調達をしてくれていたコネクションが切れた日のことだった。テムズの川辺、光のゼラニウムが空にただよう、でもゆっくりすぎてよく分からない——真鍮色の光、日焼けした肌とメローな桃の光、雲の合間に様式化した模様が花開き、あちらで薄れては、こちらでまた開花——そのシヨア^{フレイム}が太陽光でも起こったときに、彼は墮ちた。〈時間〉の落下よ、墮天使の落下に比べれば見劣りする

16 占星術は海王星が、夢・幻想・想念・神秘的な流動的な性質のものを司っていると見る。映画を含め、人を魅了するアートも、この星の影響下にある。

かもしれないけれど、意図的なバターンの¹⁷一部である点は同じ。グレタはオナイリンと出会うように仕組まれていたの。それぞれの策謀¹⁸に署名が付いている。あるものは神の署名、またあるものは神の仮面をかぶった署名。偽造といってもそれはどうも高級なものなのだけど、それでも偽造小切手につきまとうあの、下劣さと可死性は免れない。より高度に複雑なだけで。彼らのメンバーはそれぞれ名前をもっている。「大天使」みたいな。わりあいにありきたりの、人間がつける名前で、その防壁が破られ、名前が知られることもある。でもそれらの名前は魔法ではない。そこが鍵なの、そこが違うところ。純粹な魔法の意図をもって発声しても、効果はない。

彼らの恩寵から彼は墮ちたのよ。だから、クロロダインも手に入らない。そのときたま彼女はVマンの¹⁹ヴィンベに会うの。ベルリンの路上、劇場入口の底²⁰の下で。その電球には知覚能力があつて、一部始終を見ていたらしい。きれいに並んだエキストラたちよ。いろいろ重大な歴史的瞬間を目撃してきたんだわ。要するに、彼女はオナイリンと出会った。彼女の故郷の凶なる惑星はその瞬間に相を変えたわけ」

オナイリン・ヤンプ・イミボレックス・A4...

「あのバカ女、話すたびにだんだんヒドクなっていくな」スロースロップの肘のところで誰かが言った。

「え、何ですって？」スロースロップが見まわすと、そこにミクロス・タナツが立っていた。立派に伸びた顎髭、鷹の翼の先が細くなっているような線を描く眉。この男は、お土産用のジョッキでアブサンを飲んでいて。デッキで進行中のカーニバルの光を受けて、ジョッキの側面に不気味な色の図が浮かび出た——やせこけた老人の〈死神〉がクツクツと

17 幻覚といってもごくありきたりな、しかし「現実」でないことを見せるオナイリンの作用については上巻736ページにも書かれていた。

18 アヘンと大麻のチンキ剤（アルコール溶剤）にクロロフォルムを加えた薬品。イギリスでは十九世紀から商品化していた。

19 上巻652ページ参照。

20 「電球が見ていた／語った」という話は62ページにもあった。今後出てくる。

笑いながら、いまにもベッドの中の恋人たちに襲いかかろうとしている図だ。

この男は「ロケット」の話に自分から乗ってきた。「A4かね」タナツが言う、「A4は幼な子イエスではないか。赤ん坊のうちに殺しておくと、ヘロデ王の下であらゆる機関が動き回っている——ロシア人というのは、心の奥底で、大型砲火器をいまだ危険な発明品だと思っていたところがあるんだ……打ち上げの現場を見たことがあるかね。ロケットを目の前にして一分としないうちに、その力が通じてくる。ひれ伏すしかない。まさにマックス・ヴェーバー言うところのカリズマだよ……歓喜に満ちた、深く、非合理的な力……いや、の官僚機構がけっして日常性の中に引きこむことができない、制圧不可能な力……いや、官僚の連中だって抵抗はしたさ、が、同時に彼らは事の展開を肯定したんだ。そんな役割を、みずからの選択のうで演じる人間がいるなんてことは想像できんが、なんとしたことか、年々数が増えていったな」

だが、天の邪鬼なスロースロップがほしい——ほしい？——のは、カムラー少将指揮下のロケット隊に同行したときの話。「例のノルトハウゼンまでなら、おれも行ったんで、そうさ、そこでバラバラの部品は見たんだけど、でも組み立てが完成したA4というのは、拝ませてもらってないなあ。見るからにすごいんだろぅねえ」

タナツは空のジョッキを握った腕を差し出している。やってきたウェイターが無表情のままスプーンを伝わせて水を垂らすと、アブサンは乳緑色に変じた。その間、タナツは彼の尻をさすっている。スロースロップの質問への答えを考えていたふうではなかったが、ウェイターが去ると、「そうなのだよ、燃料入りの、準備完了した、生きたやつだ……十五メートルほど上がったって、ぐらぐら震えたかと思うと……この世のものとは思えない雄叫

ひが上^あがった。こっちの耳まで破裂しそうな叫びだ。残忍で、硬質^{かじつ}で、空のヴァージン・ブルーの覆いの中へ突き刺さっていく。あまりにも男根そのもの。そう思わないかね」

「はん……」

「うーむ、きみなら、打ち上げの現場の連中とも馬が合うだろう。みんなきみと同じで、おとなしい研究熱心な男たちだ。歩兵や装甲部隊のやつらとはわけが違う。その集中力はファナティックといっているくらいだ……ああ、もちろん顕著な例外はいるがね、この顕著な例外こそ人生の楽しみさ。……こんな青年がいたよ」酔いが回って思い出せないのか。それともそのフリをしているのか。「名前はゴットフリート。神の平和という意味だ。あの青年もきつとそれを見出しただろうな。私らは駄目だ。神の平和など望むべくもない。私らは天秤に載せられている。天秤はいつもこちらが上になっている。目方が足りてないんだ、悪魔^{アクセル}が向こうの皿を指で押しつけてるんだから……私は倦怠の人生を生きていると思うだろ？ 自分自身そう思っていた。あの恐ろしい一週間まではな。あれは壊滅的な時だった。ロケットが、ニードーザクセン^{*21}の油田地帯に落下して。あのとき自分は純粹無垢な赤児にすぎないと悟ったよ。打ち上げ基地の指揮官は、叫びまくる狂人と化していた。自分のことを「ブリツェロ」と呼んでいた。オペラの『ヴォツェック^{*22}』に出てくる大尉が歌うような調子でしゃべるんだ。しゃべっている声が突然、ヒステリーの高音域に達する。何もかもが崩壊を始めて、彼自身、大昔の祖先に戻ったようになって、空に向かってキーキー叫ぶわ、トランス状態になったまま何時間も固まってるわ。目玉もグルリ回転して頭の中に行っていたり。かと思うと、いきなりゾツとするようなコロラトゥーラ^{*23}で歌い出す。目が全部白目なんだ、彫刻と同じさ。その裏で灰色の雨を垂らしていたんだらう。彼はも

21 ドイツの北西、オランダに接する低地の州。「低ザクセン」とも。

22 オーストリアの作曲家アルバン・ベルクの一九二五年初演のオペラ。

23 ソプラノ歌手が装飾音をいっぱい付してコロコロ歌う唱法。

う「一九四五年」にはいなかった。キリスト以前の地に飛んでそこを逃げ回っていた。原始ドイツの、ヘウルシュトゥッフ²⁴の存在、神の被創造物のうち、もっとも哀れな、ひどいパニクに苛まれたクリーチャーだった。君や私は、幾々世代にわたってキリスト教徒化し、^{グゼルスチャフト}社会組織を作り、もともと存在しなかった〈契約〉の履行を善として、まあ、讃えているわけだ。だがわれわれは、われわれさえも、ああいう古代返りにはギョッとさせられる。だが、深奥なところ、その静寂から、ヘウルシュトゥッフが目を覚まし、そして歌うんだ……その週の最後の一日は……恥じ入るべきことに……その最悪の一日を通して、私は勃起を続けていたよ……私のせいじゃない……^{コントロール}制御できることではなかった……何ひとつコントロールなどできはしなかった——」

そこにマルゲリータとビアンカがやってきて、タナツの話は止まった。この母子は、子供をスターにしたいママと、気の進まない子供との役柄そのものである。バンドリーダーへなにか曲名が耳打ちされる。お楽しみを探し求めている者たちが、ふくれ面をしたビアンカが立っている空間を取り囲むように集まってきた。ビアンカの赤い小さなワンピースは、細い腿が半分見える短さで、縁から黒いレースのペチコートが覗いている。これから始まるのは、確実に、大都会の洗練された邪気に満ちたものになる。だが、何をしているのだらう、この子は、笑窪の脇に一本指を立てたりして——と、そのとき、バンドのイントロが始まった。スロースロップの口の中へ、反吐に先立つ唾液が押し寄せ、脳内を疑念がよぎる——これからの数分を、いったい自分は耐えていけるのか。

始まったのは「オン・ザ・グッド・シッパ・ロリーポップ」²⁵、それもただ歌うだけじゃない、小さなジャーキー・テンブルの完璧な物まねで、何の恥じらいもなく、子豚のよう

24 原素材。原文は英語の stuff に当たるドイツ語の Stoff に Ur-がついた Urstoff。

25 映画『舞く踊る』の曲名。

なあ、声で歌い通すのだ——喉を絞ったベビー・ビッグの声色で、カールヘアを振り上げて、無邪気にはほえみ、つかえながらタップを踏む……すると、その細い腕が太くなり、フロックの丈が短くなった——誰か照明の具合をいじっているのか？　だがそのセクシー未満の子供の肉が揺れたからって、眼の表情は変わらない。嘲笑うような、暗いビアンカ自身の瞳は消えない……

シヨールが終わって大喝采、酒臭い「ブラボー」が飛び交う。タナツひとりが父親らしく頭を振り、濃い眉をしかめている。「こればかりやらされたら、女に成長できないぞ……」
「さあ、今度は、^{リーフリンダ}ダーリン」マルゲリータが、珍しく笑顔を、それも作り笑いを見せて「スープにアニマル・クラッカー^{*26}」をやりましょう！」

「いいぞ、『クラック^{わねめ}」にスーパァ・アニマル！」客のだけれが、えげつないジョークを飛ばす。

「いやよ」ビアンカが子豚声で応えた。

「ビアンカ——」

「このアマ^{ビッチ}」スパイク・ヒールで鉄の甲板を踏み鳴らす。これは演技だ。「これだけ恥ずかしいことさせて、まだ足りないの？」

「まだまだ全然よ」と、娘に飛びかかり、髪を引っつかんで揺りうごかすと、娘は床に膝をついて、逃げようとしてもがく。

「すてき！」さっきの肉切包丁女が叫ぶ。「グレタの折檻が始まるわ」

「私もしたい」肩ヒモのないガウンを着た、派手やかに人目を引く白黒混血^{ムライト}の少女が、そう言いながら、よく見える位置へ歩みよって、宝石付きの煙草ホルダーでスロースロップ

って踊って、六歳でアカデミー特別賞を受賞して以来、シャーリー・テンブルの代表的持ち歌。

26 “Animal Crackers in My Soup” のオリジナルは、『あしながおじさん』を映画化した、『カーリー・トップ』（邦題『テンブルちゃんお芽出度う』）で見ることができる。

の頬をつつく。サテンのドレスの腰が彼の太股に触れる。だれかが鋼の定規と旧式のエンパイア・チェアをマルゲリータに渡した。マルゲリータは膝の上のビアンカを引きずり上げ、フロックとベチコートをまくり上げると、白のレースのニッカーをグイと引き下ろした。小さな少女の美しいお尻による一对の月の出だ。しなやかなクレヴァスが締まったり緩んだり、留め紐がずれたり伸びたりを繰り返す。絹の靴下が擦れ合って立てる音のエロースに、群れる人々も声ひとつなく、何か接触体を求めて、胸や股間に手を伸ばし、喉仏を動かし、舌先で唇を舐めるばかり……ベルリンでスロースロップが知ったマゾヒストの金字塔のようなグレタは何処へ行ったのだ？　まるでここ数週間のあいだ溜め込んだ痛みのすべてを、娘の剥き出されたお尻に、まるごと吐き出しているかようだ。あまりにもきめの細かな肌の上に、一打ちひとつち刻まれる赤い縞には、センチの目盛と裏返った数字の表示がついていく。定規の鞭跡は交差しながらビアンカの肉に傾いた苦痛のマトリクスを積み上げる。逆さになった紅い顔からマスカラを溶かす涙が流れだし、母親の靴の蜥蜴の皮に滴る……髪は解けてデッキの上に黒くしだれ掛かり、その上に小さな真珠を塩粒のようにまぶして。混血娘は後ろのスロースロップにもたれかかり手を後ろに回して勃起した股間をまさぐる。彼女の手と脈動とのあいだには、ゆるく襷をとったタキシードのズボン地一枚があるだけ。誰もがそれぞれの興奮を感じている。カウンターの上に腰掛けたタナツの、まだ取りだしてないペニスを、白手袋のヴェンド女がくわえた。ウェイターがふたり、デッキにひざまずき、ワインカラーのビロードのフロックドレスの裾の奥で、果汁あふれるブロンドの陰部を吸る。吸られている女は、舌先でつややかな腫の高いフレンチ・ヒールの靴を熱烈に舐める。舐められているのはレモン色のオーガンザ^{オガ}を着た年配女

で、彼女は連れ合いのユーゴスラヴィア砲兵隊少佐の、制服の袖から出た手首にフェルトの裏地付きの銀の手錠をはめようと懸命だ。少佐は少佐で床に膝をつき長い脚のフランス

ニング・ドレス用の薄地の絹織物。

人バレイリーナの従順な指が持ち上げている絹のスカートにもぐり、傷跡のある尻の割れ目に鼻と舌先を突っ込んでいる。その踊り子のパートナーは離婚歴のある長身のスイス人女性、ロシア製の黒いブーツをはいた彼女の手がいま、踊り子のガウンの紐を解き、こぼれ出た胸を六本の赤薔薇の枝で叩き始めた。慣れた手つき、胸に湧きでる血が揺れる乳首の先から飛沫となって飛び散るのを口で受け止めたがる別のヴェンド女の股を攻めているのは退職したオランダの銀行家、デッキに尻をついた彼の靴と靴下を、いま一对の女子生徒——同じボイル地の花柄のドレスを着た双子——が脱がしたところだ。双子は彼の大きな足指の先を陰毛の生えかけた小さな窪みに挿入して前屈みになり、毛むくじゃらの彼の腹にキスを浴びせながら二対の尻を突き出し、二つの肛門に二人の給仕の陰茎を受け入れている。まだ覚えてる方のために言い添えれば、こいつらはさきほど、船がオーデル河のもう少し川上にいたときに、ビロードのドレスのブロンド女の果汁にありついていていた給仕らだ。

スロースロップはといえば、ウィーン娘の丸々とした震える乳房に挟まれていまちやうど果てたところ。娘の髪は雌ライオンの毛の色で、眼はエメラルド、睫毛は毛皮のように濃い。噴き出した精液はのけぞった彼女の喉の奥へ、そして首にかかったネックレスにも、時代を超えたダイヤモンドの煌めきが、白濁の液に包まれてなおも輝く——そして、どこからくるのだろうか、このみな一斉に果てたような感覚は。そんなことがありえるのか？ まわりを見渡すと、アントニーとステファニア以外にも、ひとりだけ、連結の輪から外れ

ているのがいた。一段上の甲板にひとり腰掛け、自慰にいそしむでもなくただ見つめてい
る、川を、夜を見つめていゝるそいつは、日本人スパイ……ジャップってえのは、ほんとに
もう、なに考えてんだか不思議だね。

やがて、群れなす男女のさまざまな口腔が詰め物を抜き取られ、酒飲みとケムリ吸いと
喋りが再開する。多くは睡眠を補うため立ち去っていったが、二人、三人、居残っている
客も見える。Cメロディのサックス吹き^{*28}が楽器の先を、黒眼鏡をした——そう、夜なの
に——美貌の御婦人^{マドロシ}の股間でもぞもぞ動かしている。こんなデカダンな人たちのお仲間に
スロースロップもすっぱりはまっってしまったらしい。サックスが「チャタヌーガ・チュ
ー^{*29}」を奏でるそのヴァイブで、女がワイルドにもだえる。ガラス製の巨大なデイル
ド——中が退廃的なラベンダー色の液の入った水槽になっていて、ピラニアの稚魚が泳い
でいる——を手にした女の子が、屈強な身体をレースのストッキングと染色クロテンのコ
ートに包んだ女装男の尻の間で楽しんでいる。モンテネグロの伯爵夫人が、ジャックブ
ー
ツ一丁になった八十代の裸体男ふたりのモノを、束髪^{シニヨン}とヘソの穴で受けていて、そうしな
がら聖職者のラテン語と思しき言葉で、専門的な議論をしている。

太陽はまだロシアの広大にして読解不能の坂の向こうにある。こちらに顔を出すまでに、
まだ数時間あるだろう。霧がかかり、機関音がスローになる。浮遊する残骸が、この白い
船の竜骨に乗りこえられていく。漂流物にはこの春の屍体も絡まり、アヌビス号が上を進
むと屍体がよじれる。この霧を見通すことができるのは、船首斜檣の下で、ひたすら前方
を見据える金色のジャッカルだけ。スヴィーネミューンデへ向け、アヌビス号は河を下る。

28 ハ長調のキーに合
つていて、テナーサック
スより小ぶりだがアルト
サックスより大きい。

29 グレン・ミラー楽
団のヒット曲（一九四
一）。



スロースロップはスランディッド¹ノを夢に見ている。その町で彼は、軍務からの休暇を、タグボートの船長の娘とベッドの中でビターを飲んで過ごしたことがあった²。そこはルイス・キヤロルが『不思議の国のアリス』を書いた場所で、白ウサギの像が建っている。その白ウサギがスロースロップに話しかけていた。真剣で深刻な内容なのだが、目覚め際にスロースロップは、すべて忘れてしまう。いつものことだ。寝転んだまま、天井の送水管や配線管、アスベストで覆った十字管、パイプ、ゲージ、タンク、配電盤、フランジ、接合管、バルブホイール、およびそれぞれの影がつくる繁みを見つめているだけ。ひどい騒音だ。ハッチを通して光が差してくるのは今が朝だという証拠だろう。視界の隅に、赤いはためきが見えた。

「マルゲリータには内緒よ、ぜったい」ピアンカだ。髪を腰までたらし、頬を汚して、ホットな眼をしている。「殺されちゃうもの」

「いま何時だ？」

「朝が来てもう何時間もたってるわ、どうして？」

1 ウェールズの海岸
保養地。

2 51ページのバック
1の夢が想起される。

どうしてだろう？ 自分でもおかしいと思う。眠りに戻った方がいいのか。「お母さんが、君に腹を立ててるとか？」

「もう狂気よ。私がタナツとやってるって責めるの。頭おかしいでしょ。もちろんわたしたち、仲好しよ。でも、それだけよ……少しでも私のこと見てくれてれば、わかることなのに」

「お母さん、きみのお尻は、しっかり見ていたようだけどね」

「まあっ」ドレスをまくり上げ、背を向けてお尻を見るのは、スロースロップのことも見張っていいといけないから。「まだ、痛みが残ってるのよ。痣になってるかしら？」

「もっとそばにこなきゃ見えない」

彼女がスロースロップの方へにじり寄る。笑みを浮かべて、一步一步爪先立ちで。「あなたの寝てる姿を見たわ。可愛かった。ママはあなたのこと、残酷だとも言ってたけど」「ほら、見てて」身をのり出して少女の尻をやさしく噛む。ビアンカは身をよじるが、逃げてはいかない。

「うーん、そのファスナー、お願い……」ファスナーを引き下げると、身をくねらせて服を脱ぎ落とすビアンカ。赤いタフタ地の服がさらりと落ちて現れた、完璧な形の、クリームのように滑らかなお尻に一つふたつ、紫色の痣が見える。ビアンカのもとと小柄な身体が、さらに小さな黒のคอร์セットに締め込まれてる。ウエストはブランデーの襷ほどしかない。白く未熟な少女の胸がその上縁から小さな三日月となつてあふれている。太股に、エロティックな飾り刺繍を施したサテンの紐があつて、黒いアランソンスレーズの付いたストッキングを引っぱり上げている。腿の素肌の裏側が顔に触れた。スロースロップは

3 フランス、ノルマンディ地方の町に因んだ

尻の溺愛者の熱情を発揮してアングリ開いた口でお山を噛む。のびた指が股間の唇とかわいい突起をさする。左右の小さな足先がおっかなびっくり踊り出す。ストッキングの先から深紅の鋭い爪先が針のように伸びて、それが自分の足に食いこむ。少女の敏感な肌にスロースロップの唇が吸いつくあたりは一面、赤い星雲だ。石鹼の匂い、花の、汗の、性器の匂い。長い髪の毛先がいますスロースロップの目の高さに落ちた。ばらけた細い黒髪が白い腰のくびれの前で、雨の筋のように、可視性の限界を行き来する……早くもこちらを向いて、屈み込んで、髪の毛を耳の後ろに掻きやり、彼のひだつきのズボンを脱がして、顔を近づけ、唇のルーージュの中にペニスの先をふくむ。羊歯の睫毛を透かして少女の眼がきらめく。リス科の動物の手が彼の体をまさぐり、服のボタンをはずして愛撫する。こんなほっそりとした身体で、喉の奥まで吸い込んで、スロースロップがつかんだ髪を捻りあげると、楽器のようなうめき声を立てる……彼のしてもらいたいことはお見通しなのか。いっつ口を離して、どのタイミングで立ちあがるか。パリ製のミールを彼の両脇のどこで踏みしめ、からだを揺すり、顔を縁どる髪の毛をどのくらいソフトにゆらすか。陰部と腹部を縁どる黒のホルセットが、同じパターンを繰り返す。小さなビアンカが素肌の両腕を上げて長い髪を高く差しあげた。小さな頭をぐいと上げると、その髪は震えながら背中を伝って落ちた。それから尖った爪先をじらすようにゆっくり自分の身体にはわせ、サテンの靴下留めからキラキラ光るホックやレースを伝って太股へもっていく。ひざまずくと、少女のぼっちゃりとした顔、夜の翳りをおびた大きな瞳の襲来。ペニスを彼女の中へ導く。ゆっくりと、痛そうに、中に収める。自分のからだをスロースロップがいっぱいに満たすまで……

おやつ、ここで何か、へんなことが始まった。いや、いまこの場でスロースロップがそれに気づいてというんじゃない。事後にこの出来事をふり返って、おやつ、と思う——なんか、口にするのも変すぎるけど、なぜだか、勃起した自分のペニスのなかに、自分自身がいいたのだ。そんなことって想像できるか？ 身体の中核、メトロポリスの中にきみはずっぼり入りこんでる。残りの器官は、みな植民地、勝手に生きてくれという感じ。自分の手足はどうやら腺と管とに織り込まれてしまった。精液がだんだん大きな轟音とともに、今にも自分の足下から噴きあげそうだ……頭上にあいた穴から、マロン色をした夕暮れの女陰の光が一条の光線となって差し、周囲の透明なジュースに届いて屈折する。包まれて身動きがとれない。すべてが一齐に射出を始めた。爆発的なものすごい力で果てようとしていて、スロースロップはもうどうすることもできない。なんという爆発的な勇ましさ……赤い肉が響く……途轍もない飛翔の待望感……

少女が上にまたがった。可愛い騎手は顔を天井に向け、身を震わせて上下動、太股上端の筋肉はケーブル鋼のように固く締まり、ベビーサイズの乳房が衣服から懸命にはみ出ようとする……その乳首をつかみだして引き寄せ、片方ずつ強く噛むと、少女はスロースロップの首に腕を巻きつけ、そのとたんに絶頂を駆けあがった。スロースロップも同時に達した。ふたりの噴出がいきなり彼を突き上げ、塔のてっぺんに開いた目[＊]から少女の中へ射ちだした。まったく空を告知する轟音、それは「ヘアグレガート」の、装置集合としてのロケットの、王者の雄叫びでなくて何であらう。

横たわったまま動かないふたつの肉塊のどこかで、少女のハートが拍動している。雪の中の小鳥か。長い髪が二人の顔を一緒に覆い、小さな舌がこめかみと目にふれて、絹の手

4 ペニスの中にいて
射精を待つというモチー
フは、000000号に乗
って打ち上げられること
のパロディなのか。中か
ら見た管の開口部が、カ
バラ的（フリーメイソン

さわりをもつ脚がスロースロップの脇腹をさすり、靴の革はひんやりと脚とかかとを撫でる。両腕でハグするたびに肩胛骨が翼のように隆起する。翼はどこへいったのか？ スロースロップに涙がこみあげてきそうになる。

抱き合ったまま時間が過ぎる。ピアンカはこのまま隠れていたいそうだ。

「いいよ。でも、いつかは降りなきゃならなくなる。スヴィーネミュンデか、どっかで」「だいじょうぶよ、逃げられるわ。わたし子供だし、隠れ方は知っているもの。あなたも隠してあげられる」

そう、その通りだとスロースロップは確信する。化粧の下、ファンシーな下着の中には、真のピアンカが、愛として、不可視の存在として、在るのだと。それは彼にとって発見だった。

だが首に巻かれた少女の腕が動いている、不安げに。そりやそうだろう。この瞬間はたしかに一緒にいられても、彼はいつかは行ってしまふのだ。ここを出れば、〈ゾーン〉をさまよう行方不明者の一人に数えられるだけ。このタンホイザーに奇跡は起こらない。教皇の杖は、スロースロップのペニス同様、永遠に花をつけない。

そう思うと、少女の腕を解いてこの場を離れる彼の動作は、いきおい大袈裟になる。別離に、お役所の手続きのようなものが入り込む。忘却に備える予防接種とか、出国ビザのスタンプ代わりに一噛みのキスをするとか……だが帰国のことはもはや頭の中から消してある。蝶ネクタイを正し、上着の襟のほこりを払い、ズボンのボタンをはめ、今日の制服を着込んで、背中を少女に向け、梯子段を上がる。最後に眼を合わせた瞬間は、すでに過去のものとなった……

的) 解釈による「ピアンカの眼」のようでもある。

ビアンカはひとり、ペンキを塗った鉄板の上にひざまずく。母と同じく娘も知っていた、最大の恐怖は午後が一番明るい時間に襲ってくることを。一番恐ろしい夢を、白黒映像で見るところもマルゲリータと同じである。毎日ビアンカはどこかの縁^{エッジ}ににじり寄っているのを感じる。たびたび見る同じ旅の夢は、よく知られた二都市間を移動する夢。自分に当たっている光は、映画で窓の外の雨を示唆する真珠光沢の、しわが寄ったような不均等な光だ。ブルマンの客車の一室で彼女は自分の物語を口述する。内心感じている恐怖を、今ようやく他人と分かちあえそうな気持ちになった。それができるうちは、恐怖が彼女をエッジの向こうに待ち構える銀塩色の暗がりへ、連れ去ることはないかもしれない——心の縁で重くゆっくり閉じようとする光の闇へ引きこまれることは……エッジをはみ出るとき彼女は暗い部屋の中にいて、眼の脇に、自分のものとも思えない髪が垂れ、それが幽霊のように不気味に浮かぶのが見えた。……彼女の廃墟に立つ数々の塔の中で、いま鐘たちが風に煽られカンカン鳴っている。ビアンカの茶色いフードが石の上を滑っていかないところでは、ほどけた縄が垂れ下がっている。彼女の風はほこりさえも遠ざける。古めかしい白昼光。遅い、冷たい光。午後が一番明るい時間の恐怖が……海に浮かぶ帆は小さすぎて助けにならない……水面はあまりに鋼鉄的な冷たさだ……

ビアンカの視線が、心に食い込み、心をえぐる。スロースロップの、視覚のハートはすでに崩れた。これが何度目だろう。同じ視線がまなざすのをかまわずアクセルを踏んだことがあった。そのときその眼は苔色の崩れかけた植民地^{コロニー}の夕暮れに消えていった——やせ細ったまだら模様のシリンドラー式給油ポンプの夕暮れ。納屋の色褪せた壁面で口づけしてむさぼりあった味に似た、甘辛いリンドウ味のモクシー^{モクシー}のブリキの看板が、くたびれた納

5 故郷マサチューセツツを想起するとき、たびたび出てくるモクシー・ドリントクには、リン

屋の側壁でがんばっている。いままで何人とのヘラスト・タイムをサイドミラーに捉えようとしたことだろう。だが面影はメタルと内燃の内部に、あまりに深くうずもれていく、日々の進行の行きつく先がどんどんリアリティを増して、唯一の頼みの綱のヘマーフィーの法則[★]も、もはや思いがけないドンデン返しをもたらすことはない。……幾度となくさまよい、暴風と洪水に打ちのめされた町ベケット[★]を過ぎ、褐色の轍の坂を昇り降り、熊手の錆びゆく午後、紫灰色の空は嘯み終えたガムのように黒ずんで、中空に霞みが作り始めた白いたなびきが数ミリずつ、一センチずつ地面へ降りる……彼女は一度だけスロースロップの方を見た、もちろん今でも覚えていゝさ、軽食ワゴン車のカウスターの向こう端からだった。雨を弾く靴墨のように、料理の煙は辛抱強く窓に当たって、格子縞の、屈み込んだ漏れる手の中からお恵みをねだっていた。ジュークボックスからはトロンボーンの短い鳴りとリード・セクションが奏でるスイングの楽音、両者の間の沈黙に次の拍が食い込む、バー（ムッ）バー（ムッ）バーと音が跳ねるそのグルーヴが見事にきまって、頭では拍を食っていることがわかつていゝのに、身体には遅れて感じられる。カウスターの両端でふたり一緒に同じノリを共有する、自分たちの時代[★]が新しい拍取りへと届けられるのを感じている。これにノッて、旧来のタイムから、すり抜けられたら……しかし年寄りたちが見つめている、遠近両用の眼に粘液をためながらつまらなそうに眺めている、必要とされる何百万もの若者たちが、リンディホップ[★]を踊りながら、穴の中に落ちていくのを……。もちろんさ、スロースロップは彼女を失った。何度も失い続けた——アメリカ男児であれば当然だ。グレイハウンドバスの窓から、スロープ状の無感覚の中へ抜け出ていく、緑の葉も楡の幹も折りたたまれて知覚されない、いや、砕けてしまったのは「知覚」とい

ドウの根の成分が使われている。

6 上巻527ページに説明があった。

7 バークシャーの町ベケットは一九二七年、ダムの決壊による洪水に見舞われている。

8 ビートが、等拍より早く、前に「突っこんで」打たれること。

9 ハーレムの若い黒人たちが始めたリンディホップの激しい踊りは、スイングのリズムが全米を席捲した三〇年代後半以降、ダンスホールの華となった。アメリカの参戦後、米兵の渡欧とともに、ロンドンなどでも盛んになったようすは、上巻48ページに描き込まれている。

うより、さらに不吉な言い方だけど、「意志」なのだろう（この言葉の意味を、君はかつて知っていたわ。彼女も次へ進んでいった、心も乱さず、すっかり〈かれら〉に絡めとられて、彼女の進むハイウェイ脇に、ベージュの夏の幽霊は立っていない、それはありえない……）

残されたスロースローは、みずからの都会人的反射反応に包まれ、ハーバードのクルーソックスを履いている——どちらも赤いリングの手枷、漫画に出てくる鉄の環である。もともとその漫画は市場に流通していない、パークシャーの砂地の丘で夕暮れ時にたまに見つけたものだ、主人公——またはそのモノ——の名は「サンダイヤル」といって、こいつを、そのモノを、漫画のフレームで括っておくことはできない。ヒュッと現われヒュッと去っていくそいつは「風を横切って」やってくる。ということは、なにかシート状の、ある程度垂直な、常に動いている空気の壁を抜けて、その向こうからやってくるのか。その向こうには違う世界があつて、そこでサンダイヤルは、読者には理解の及ばぬビジネスをやっているのか）

遠いよ。そりゃ、遠いといえ、ずいぶん遠いさ。あまり近ければ、彼女を呼び戻すのも辛くて仕方ないだろう。しかしエウリュディケー・オブセッション¹⁰つてのがあつて、呼び戻さずにはいられないのだ……遠い遠い彼方から。カーバイドの臭気と死んだカナリアの息がスローのようにただよう中から。そこに安置しておいた方がよほど楽だろうに。彼女によく似たコビーに慰安を見出す方が——「なぜ連れ戻そうとしたりする。その努力は何のためだ？ どう違うんだ？ 本物の箱の蓋と〈かれら〉のために描いたそれとの違いにすぎないじゃないか」と言われても、「そうだ」と答えるわけにはいかない。〈かれら〉

10 エウリュディケー（英語読みは「ユリアイシー」）は、死んで黄泉の国へ行ったオルフェウスの妻、一度でもふり向いたら連れ戻れなくなるのだが、オルフェウスはふり向いてしまう。

が、そう信じ込ませようとしているだけで、彼にとっては同じじゃないのだ。箱の蓋とそのイメージは同じかい。そりゃ、彼らの経済はソレを基本に成り立っている……でも彼女は単なるイメージじゃない、商品じゃない、ただの支払い約束以上のものじゃない……

ビアンカの父親を名乗りうる男は多い。回るフィルムの片側にはマックス・シュレプツィヒと、仮面をかぶったエキストラ連中がいたし、もう片側には、ズボンの生地をせっせと擦るフランク・ペクターをはじめとする男たちがいた。その中で、むさぼるジャッカルどもをすり抜けたデッキの底で、最後の可能性を持つこの瞬間に、誰と一番近しかったかといえば、そりゃあんだら。あんたは、目もくらむような彩色服で入ってきて、自分の席に屈んで座り、縦横斜め、どの方向からも、一晩中、危険を感じちゃいない。あんたにとって、母マルゲリータの、水の^{ウォーター・ホワイト・ラズ}のごとくに白き愛は絶対に関わってはならない。あんだだけなんだよ、あいつらなら知ってるさと言いながら、仲間から外され、笑いながらオレも混ぜろと言うのだが、それもダメ。きつとどこかの娼婦だなど考える……あらゆる男の中で、あんたにこそ好意を寄せた、その彼女にあんたはもう二度と会えないのだよ。そのことを、ひとこと言わせてもらいたかった。

11 カーバイド（炭化カルシウム）を使うアセチレン・ランプと、空気成分の異常を知らせる「死んだカナリア」は、ともに地下坑道をイメージさせる。

12 紙幣（不換紙幣）は、単なる名前、記号、イメージにすぎず、それ自体で実質的な価値をもたない。それは抱きしめたビアンカが「愛として」「在る」ようなリアリティは持っていない（143ページ）。



梯子^{ラダ}段の途中でスロースロップはギクリ。暗いハッチの中に上下の歯が白く浮き立っていたのだ。「見ていました。気を悪くしないでほしいのだが」さっきの日本人だろう。男は、大日本帝国海軍モリツリ少尉^{*1}と名乗った。

「ああ……そお」どうしてこんなふうに母音を引きずってしゃべってるんだ？「見てえたよ……昨晚もねえ、あんたが見てえるところ……」

「窃視の常習犯だと思うでしょう。いや、思っています。違うのです。興奮はしません。ただ人を見ていると、さびしさが紛れるので」

「それなら少尉いも……一緒に輪の中に入りや……いいでしょうに。いつも仲間をほしがってる連中う……なんだからみんな」

「とんでもない」と言っただけ。日本人特有の多面体的な微笑だ。「中に混ざればさびしさが増しますから」

船尾にオレンジと赤の縞模様の天幕が張ってあって、その下に椅子とテーブルが並んでいる。ふたり以外に人影はあまりない。ツービースの水着を着た女の子が何人か、日の翳

1 日本名としてあまり聞かれない、Moriumiの名は、ラテン語で「死にゆく者」の意味。

らぬうちに日光浴をしているくらいだ。前方に積乱雲が湧いている。彼方から聞こえる雷鳴に、まどろんでいた空気が目覚めつつある。

給仕がコーヒー、クリーム、粥、^{ポリッジ}丸ごとのオレンジを持ってくる。スロースロップが怪訝そうに粥を見ると、少尉は碗を手に取り、「これは私の、ということだ」

「どうぞ、どうぞ」見ればこの日本人、カイゼル髭を生やしている。「わかったぞお。イギリス人に倣ってポリッジを食べるんだ。いいのかなあ。あんた、カクレ親英派でしょ——ほら、赤くなってる」指さしながらスロースロップは、ワッ・ハッ・ハッと大笑い。

「お見通しですな。そうです。六年間、愛する国と戦っております」

「亡命しようとは思わなかったのかい？」

「そうしたら英米人の真の姿にふれてしまうでしょう。そりゃマズい。好きが嫌いに転じたら。心の置き場がなくなりますよ」含み笑いをし、オレンジの種をベッと脇に吐きだす。少尉の話によると、台湾のカミカゼ訓練所で特訓を受けたが、数週間でやめさせられた。きちんとした理由は教えてもらえなかったが、態度に問題があったらしい。「態度がなっていないと言われただけです」溜息ながらに少尉は言った、「それでここに送り返された。ロシアとスイス経由で。宣伝機関への配属でした」そこで連合国側の映画ニュースを見ながら、どこをどう抜き出して編集すれば枢軸側が善で連合国が悪であるように見えるかを考えて、一日の大半を費やした。「そのニュース素材から得たことが、大英帝国に関する私の知識のすべてです」

「ドイツ映画が現実を歪めるのにならってかい」

「マルゲリータの映画の話ですな。そうなんですよ、私たちが出会ったいきさつがそれで。」

ウィリアム映画に共通の友達がいて。私は休日でパート・カルマに行っていました——ポーランド侵略の直前のことです。あなたが乗り込んできた、あの小さな鉱泉の町。あなたが川に落ちるのを見ました。船に上がるところも。マルゲリータがあなたを見ていたのも見えました。失礼ながら、スロースロップ、今のところは彼女から離れていた方がよろしいようだ」

「失礼どころか、おれも、何か不気味なことが起きてるのはわかってるんだ」と言ってスロースロップは、噴水のところで起きたこと、黒衣の幽霊からマルゲリータが逃げたことを語る。

少尉は含み笑いでうなずき、髭の片端を捻って片眼に突きつけたサーベルの形にした。

「そこで起きたことを彼女から聞いていないのですか？ それはいけない、聞かせましょう……」

モリツリ少尉の話

戦争は、開戦前の日々を踏みつぶしてしまふもの。振り返るに、その喧噪と重力はすさまじい。だが我々は忘却を条件づけられている。忘却により戦争は、実際以上の重要性を獲得するのだ。しかし、とはいえ……軍事衝突に至る日々を見つめることで、背後に隠れた機構も見えやすくなるのではあるまいか。戦争にも手配され準備された側面がある……カバールの裾が一瞬めくれることもあるだろう。見えてはならぬ事が見えることも……

周囲の者たちは思い止まらせようとしたのだ。だが彼女は言うことをきかずにハリウツ

ドへ旅立ち、挫折した。戻ってきた彼女にロッコが付き添い、最悪の結末を避けるべく奮闘したんだ。一ヶ月も貼り付いていた。周りに鋭利な物体がないよう気を配り、どこか高所に彼女が立つことのないよう見張り、薬品類も一切取り上げた。そのために彼女は眠りを妨げられた。一瞬の眠りに落ちてはヒステリックに叫んで目を覚ますという連続で、眠るのを怖がっていた——眠ったら二度と戻ってこれなくなると思っていたのか。

ロッコは精神の鋭い男ではなかった。善意にあふれてはいたが、一ヶ月ものあいだマルゲリータと一緒にいる限界だった。いや、一ヶ月も続いたことを、みな驚きの目で見えていたよ。ジークムントが引き取ったとき、グレタの症状はよくなっていなかったが、おそらく悪くもなっていなかった。

ジークムントに関してまずかった点は、当時の彼の住居だ。バイエルン・アルプスの冷たい小さな湖を見おろす、隙間風だらけの、胸壁に銃眼がついているという奇形の城で、建物の一部はきつとローマ帝国滅亡期までさかのぼるだろう。そんな場所へグレタを連れていった。

グレタはどこかで、自分にユダヤ人の血が入っていると思うようになった。ドイツの状況は、すでに誰もが知っている、最悪のものになっていた。グレタは「見つかる」のではないかと恐怖し、荒廃した城の無数の隙間から吹き込む風にいちいちゲシュタポの気配を感じた。妄想を追い払うべくジークムントはいつも夜明けまで宥めつづけたが、ロッコよりいい結果が出せたわけではない。この頃だったか、グレタに症候が現われはじめた。

顔面の痙攣、蕁麻疹、嘔吐感。心因性だからといって苦しさに変わりはあるまい。ペルリンからツェッペリン飛行船に乗って鍼灸師もやってきた。夜の夜中に、黄金の針の詰ま

った小さなビロードのケースをいろいろ携えて到着した。ウィーンから精神分析医も来たし、インドの聖人も、アメリカからは洗礼派教会の一行が出入りしたこともある。催眠興行師、コロンビアの呪医、みなジークムントの城に呼ばれ、暖炉の前の敷物の上で眠った。何をやっても無駄だった。ジークムント自身もなにか恐ろしさを感じて、ほどなくグレタと同様、妄想を抱くようになった。泥泉町バート・カルマに行くことを最初に持ち出したのはマルグリッタだったか。その夏は泥治療が人気だった。べっとりした熱い泥、ラジウムを少量含んだのが真っ黒くフツフツと気泡を吹き上げている。ああ、ああいう症状に苦しむ者ならみな信じるだろう、この泥はすべてを治してくれるだろうとね。

「戦争」に至るあの夏、人々はどこにいたのか？ 夢の中である。その夏、モリツリ少尉がやってきたバート・カルマの町は夢遊病者だらけだった。大使館には彼のやるべき仕事などなく、九月まで休暇を取れと言われた。これはのびきならぬ事態だと気づくべきであつたが、言われるままにモリツリはバート・カルマに出かけた——そしてパヴィリオン公園の湖畔のカフェでビルスナー・ウルケルを飲んで時間を過ごした。異邦人が、一日の半分を、あは臭いビール酔いで過ごすのだ。おまけに言葉も通じない。だが彼が見ていた光景は、他のどの町とも共通のものだっただろう。周到に準備された国民的総熱狂。それがドイツ中で進行していたのだ。

マルグリッタとジークムントも、同じマグノリアの木陰の道を歩き、ローリング・チニアに腰を下ろして愛国の音楽を聴いていた……雨の降る日はクアハウスの大部屋に行き、その神経質な指でトランプゲームをした。夜は花火見物だ。噴水のように噴き出す火柱、恐ろしいような火花を吹くヘロケット、ポーランドの空高く黄色い星が爆発した。

夢に落けた季節。……泥泉町のどこに行っても、花火の形から実の意味を読もうなんて者は、ひとりもない。単なる陽気な光を見ただけだ。めくるめく明滅するまぼろし。五十年前の駝鳥の羽根扇が皮膚を撫でるのと一緒に。

グレタがいなくなることにジークムントが最初に気づいたのはいつだったか。不在が常習化したのはいつからだったか。グレタはいつも、それらしい言い訳をした。医者に診てもらいに行った、古い友達にたまたま会った、泥浴で時の経過も忘れて眠り呆けてしまった——グレタが「眠り呆けて」いたなどと聞けば、さすがにおかしいと思う。南部にいたころジークムントをあれだけ悩ましたのはグレタの不眠だったのだから。そのころ地元の新報は子供の連続蒸発事件を報じていたが、それに気を留めることはなかったろう、まだその時点では。ジークムントは新聞も見出しただけしか読まなかったし、それもごくたまに、死んでいる時間を埋めるために新聞を手にするくらいだった。

モリツリ少尉はしばしばふたりを見かけた。会えばお互い頭を下げ、「ハイル・ヒトラー」を唱えたし、二、三分ほどドイツ語会話の練習をさせてもらうこともあった。ウェイターとバーテンダーを除けば、話をする相手は町中でふたりだけだった。テニスコートでも、涼しい街路樹の下で喉を潤すべくポンプルームで順番を待つときも、水路に沿った散歩道でも、花のバトル、ヴェネツィア風のお祭りでも、ふたりはいつも連れだっていた。ジークムントは、火の消えたパイプをくわえ、なんというのか、モリツリが思うにアメリカ的な微笑を浮かべ……彼の頭は肉体のクリスマス飾りのようだった……ずいぶん昔の恰好だ……グレタはいつも黄色のサングラスにガルボ風の帽子を被っていた。変化がみられたのは飾りの花だけ。朝顔がアーモンドの花になり、キツネノテブクロの花になる。そのうち

モリツリは、ふたりとの日々の出会いを心待ちにするようになった。妻と娘たちは地球の裏側、我が身は異国にあり。戸惑いと抑圧の地にあり。動物園ですれ違う同士の会釈や、旅行用会話のフレーズを、彼は必要としたのだった。好奇心一杯で、つい振り返って見つめてしまう。みな、ヨーロッパ風の優雅さで、彼を魅了した。白い羽飾りの老婦人は寝椅子に横たわり、欧州大戦の退役軍人はカバのようなのだかさで鉄風呂に浸かっている。やさ男の秘書たちは猿のような声でキーキー喋りながらシュプルーデル通りを横切る。リンデンと栗の木からなるアーチの下では鉱泉の炭酸ガスが、巨大な震える球体の溶液から出て、ブクブクと止め処なき音を立てる……中でも、少尉の心を何より惹きつけたのが、ジークムントとマルゲリータだったのだ。「ふたりはわたしと同じ余所者^{よそ}のようでした。人間みんなアンテナがあるでしょう、余所者同士、わかるんです……」

ある日、午前中だったが、モリツリ少尉はひとりでいるジークムントを見かけた。ツイードの服で、杖に手をかけた姿がまるでインハトリウム^{インハトリウム}の正面に立つ像のようだった。道に迷い、行くべき場所も、その欲望もないかのようだった。そんなわけで、事前の準備もないまま、会話が始まった。タイミングがよかった。やがて歩き出し、病弱な外国人の間を通り抜けながら、ジークムントが語った。グレタに関する苦勞を語った。彼女のユダヤの妄想を、突然の消失を、前の晩に言った嘘を語った。非常に遅く帰ってきて、手が小刻みに震えて止まらない。さすがに彼も気づくようになった。グレタの靴に点々とついた半乾きの黒い泥。体重は減っているのに服の縫い目が広がって、裂けそうになっていること。だが問いただすまでの勇氣はジークムントになかった。

新聞記事には親しんでいたモリツリは、いっぺんに結びついた。まるでトリックハレ^{トリックハレ}の

2 治療や健康のために薬用成分を蒸気に混入したスチーム・ルーム。

3

湧き出る鉱泉水を

Gravity's Rainbow

落ち着いた泡立ちの中から怪物が飛びでてきた思いがした。しかし、ジークムントにそれを言う言葉は、ドイツ語だろうと何語だろうと、見つからなかった。ビール飲みのモリツ少尉が、グレタの後をつけるようになったのはそのときからである。彼女は、振り向くことはなかったが、彼がつけていることは知っていた。クアザール⁴で毎週催される舞踏会でモリツリは初めて、この人々の寡黙さに気づいた。グレタの眼にいつものサン格拉斯はなく、恐ろしく燃える裸眼が、彼をとらえて放さなかった。クア・オーケストラが奏でていたのは、『メリー・ウイドー』や『スザンナの秘密』からの時代遅れの楽曲だったが、後年、街頭でその一節がラジオから流れてくるたび、モリツリの口に、誰も音を出すことのできない深淵の縁に三人で立ったあの晩の、記録されざる味わいが舞い戻ってくるのだった……初めて知ったヨーロッパ三〇年代の最後の反復奏……それはモリツリにとっては一個の部屋、午後のサロンでもあった。眼のまわりにグルリとマスカラをつけたガウン姿の瘦せた少女と、髭を深剃りした、映画スターのように磨かれた男たち……オペレッタとは違うダンス・ミュージックは、洗練され、心なごむ、ちょっと「モダン」な、今風のメロディラインに流麗に乗っていた……上階の部屋に夕陽が差していた、深々としたカーペット、重い言葉も複雑な発言もない、通じ合った同士の腰の低い笑顔に満ちた空間。その朝モリツリは、柔らかなベッドで目覚めた。今宵キャバレーのダンスで、流行のラヴソングが同様に洗練された様式美でもって奏でられるだろう。そのときが待ちどおしい。この爽やかな朝と心地よい夜のあいだに、抑えた涙と煙草のけむりと用心深い情熱うずまく午後のサロンがある。ヨーロッパの、煙くすぶる、都市にあっての死の恐怖⁶。その危うさの中心にマルゲリータの、意図のこもった眼があった。クアザールでの、失われた出会い。

飲むための「ドリンクホール」。

4 鉱泉地で、陶治客のために設けられたパブリック・ホール。

5 たとえばフランツ・レハール作のオペレッタ『陽気な未亡人』（一九〇五初演）には「メリー・ウイドー・ワルツ」の名で知られる、今日の日本でもポピュラーなワルツ曲がある。『スザンナの秘密』はエルマンノ・ヴォルフ・フエラーリ作（一九〇九年初演）。

6 原文は *cried fear of death*。死に傾くヨーロッパ都市文明を、マルゲリータが、ウランとヒロシマの方へ、怪しく導くということか？

寶石で飾りたてた夫人たちやうなずく老將軍たちの間を彼女のブラックな眼が漂い、外の泥鯨泉から沸き立つ轟音が、音楽の合間の静かなスペースを満たしていた——やがて鋼鉄のマシンが空を満たすように。

翌日の夕方は、モリツリがマルゲリータの後をつけた最後となった。すり減った小道を下り、見慣れた木々の下を通り、ドイツの金魚が泳ぐ、祖国日本を思わせる池を過ぎる。ゴルフ場には、バンカーやハザードにはまってもかく白髭の、その日最後のプレイヤーがいた。「氣をつけ」を絵に描いたような姿勢で夕陽に佇むキャディたち。一束のクラブがつくるファシスト的な輪郭。……その晩、夕闇はバート・カルマの上に青ざめた暴力として落ちた。地平線に聖書的な破壊が浮かんた。グレタは黒を着込み、ヴェールの垂れる帽子で髪のはとんどを隠し、長いストラップのバッグを肩に下げていた。目指す先がだんだん一つに絞られていく。モリツリは〈夜〉が自分にしかけた罠にはまっていくような氣がした。予言が川風となって彼を包んだ。いつもグレタが消えていく場所が近づいてくる、新聞が一面で書き立てた子供たちの——

グレタが黒い泥溜りの縁に着いた。ふつふつと地下から湧き出ているのは地球と一緒に誕生した物質で、その一部が囲いこまれ熱泥泉となり、名を与えられた。……その供物になるのは少年か——みんなが去った後ひとり後に残った、冷たい雪の髪をした少年。会話は途切れ途切れにしか届いてこなかった。最初のうち少年はグレタを怖がっていないようだった。夢で見た女だとは氣づかなかったのだろう。氣づいていたら逃げられたかもしれないのに。だが彼を見守るドイツの守護神たちが、逃走の可能性を塞いでいた。モリツリは制服を着たまま立って待っていた。ボタンは外して、動くべきときに備えてはいたが、

7 ユダヤ神秘思想で、女性原理の神性を一身に集める「ヘシエキナー」は、安寧なる「居住」を神格化した「イスラエル」を、

実は動きたくはなかった。これは彼らが古代からみんなして繰り返して演じていた、切れ切りの演目、そうに違いない……

マルゲリータの声が上昇開始、少年の身が震え始める。「こんなに長く外地にいるとは」空気を鞭打つような声、「さあふるさとへお帰り。わたしと一緒に」声がつんざく。「おまえの同胞が住む国へ」少年は逃げ出すが、手袋に包まれた手が、彼女の爪が、飛んできて腕をつかんだ。「ユダヤのクソのかたまりか、このガキは、わたしから逃げる気かい」

「いやだ……」だが語尾が上がっている。挑発的な質問を発するかのよう。

「わたしが誰だかわかっているね。わたしの故郷は光の国だよ」すでにバーレスク調だ。きついイディッシュ語の方言で、女優的な嘘っぽさを醸し出す。「ワレは、^{ディアスボラ}離散の地を歩き、はぐれた子を求むるなり。ワレはイスラエル、神の后にして娘、神の花嫁にして母なるシェキナーなるぞ。おまえたち、打ち壊されし容れ物の欠片^{ヴェッセル}を拾って連れ帰るのだ。たとえ、その不潔な小さい、割礼を受けたペニス^{キヤ}を引っぱってでも」

「いやだ……」

そのときモリツリ少尉は、一世一代の英雄的行動に出た。それは官吏としてのふるまいの中に含まれない行動だった。マルゲリータが少年を押さえつけ、片手で少年の股をさぐっているときに、飛び出ていったのだ。わずかの時間、三人は組み合ったまま前後左右に揺れ動いた。それは灰色のナチの彫像を見るかのようなだった。「家族」という標題がふさわしいだろう。ギリシャの彫像のような静止感はまるでない。実際三人は動いていた。不死の表象などは意図していない。そこが違っていた。諸感覚が受け取るレベルでしか生存を考えていない。次代への継承も頭がない。フィウメでのダヌンツィオの冒険^{*}もそのまま

収まるべき「容れ物」とする。ディアスボラ（ユダヤの民族離散）はそのイスラエルの破壊である。ここでマルゲリータは、シェキナーとしてあると同時に、より広義の大地の女神として、迷える破片を拾い集め、それらを生贄として、大地の穴から、地に引き戻しているとも読める。

8 第一次大戦後、イタリアに割譲されなかったフィウメ（現クロアチアの一地域）を、詩人でロシア革命に共鳴するダヌンツィオが、黒シャツ隊を率いて街を制圧した事件。彼らの支配は十八ヶ月続き、その後はラバロ条約によって独立自由都市のステイタスを得たが、まもなくイタリア・ファシスト政権によって占領された。

終わる運命だったし、第三帝国自体もそれは同じだ。そんな哀れな生き物の運命から一人引き剥がされ、少年は夕闇の中へ走り去っていった。

マルゲリータは明るみのない巨大な泥水の縁に倒れこんだ。泣き叫ぶ女の側にモリツリがひざまずく。恐ろしかった。彼にその行動を取らせたもの——事を理解し、割って入って彼にこれほど自動的な行動をとらせたもの——はすでに崩れ、眠っていた。それに代わって、条件づけられ、言語化され、軍務と制服に収まった自己が再起動していた。跪いたまま彼は震えた。こんなに恐ろしい思いをしたことはかつてなかった。彼女に導かれて少尉はスバまでの道をやっと引き返したのである。

マルゲリータとジークムントはその夜バート・カルマを去った。少年の恐怖が強すぎたのか、光が弱すぎたのか、それともモリツリ自身に強力な守護霊がついていたのか。とにかくあの時の彼は、充分に目立ったはずなのに——警察はやってこなかった。「警察に向くなどということは考えませんでした。彼女が殺しの犯人だという確信は心の奥にあったのだが。その点は非難されても仕方ない。しかし警察に行ったら、彼女をどういうところへ引き渡すことになるのかは明白だ。当局に引き渡そうがどうしようが、結局は同じことです。そうでしょう」翌日は九月一日だった。戦争に突入してしまえば、子供たちが理由もなく消えることはありえない。

午前中なのにこの暗さ、天幕の下にも雨の飛沫は入り込む。モリツリの前に置かれた粥は結局手つかずのままだ。スロースロップは顔に汗を浮かべ、オレンジ・カラーの果物の皮を見つめる。「おいおい」スロースロップの活発な脳に懸念が湧く——「ピアノカはど

うした？ グレタと一緒にしておいて大丈夫かよ」

大きな口髭を捻りながら、「どういう意味です？ ビアンカを救うことが可能かという質問かな？」

「ヤなことを言うニッポン人だなあ、よしてくれよ——」

「いいですか、そもそも何からビアンカを救えるというのです」 その目がスロースロップを平穩さから引きはがす。打ち続ける雨が天幕の縁からレースの模様をなして落ちる。

「おおっと、待てよ、なんてこった。昨日あの噴水のある中庭で見たあの女——」

「そうです。グレタはあなたを見ていましたとも。川から上がってくるのをね。それはそうと、この人たちの放射能信仰はたいへんなもので——季節を問わず鉱泉を渡り歩いているでしょう。神の恩寵か、ルルドの聖水を求めるようだ。そこから発する神秘の放射が、万病に効くと——それこそ究極の治療と信じて——」

「フム……」

「あなたが乗船したときの彼女の顔を見ました。あの放射能の晩に、その縁に彼女と一緒に立ったのですから、今度はわたしにわかりました、彼女にどんな光景が見えていたのか。子供たちの誰かが——泥と放射素に育まれ、だんだん大きく雄々しくなりつつ、ゆっくりと、粘っこい泥の中を、一年また一年と運ばれて、そして終に大人の男として川から現れる。彼女自身の黒々とした光——輝から這い上ってきて、ふたたび彼女のところへ還る。シエキナーですよ。花嫁であり后であり、娘であり、そして母であるところの。身を護る泥としての母、燃え輝くウラン鉱のような——」

頭上ほぼ真上から突然の雷鳴。音の目つぶしのような強烈な一撃だ。爆音が鳴りひびく

9 V2 ロケットと並行して使用に向けて進んでいた別の破壊バワーは、広島出身の日本軍人に、まだ知られてはいない。

なかでスロースロップがつぶやく。「馬鹿^{フル}はやめろ」

「真相を突きとめる意志は、おありか？」

誰だよ、こいつ、もちろん日本の少尉さんなんだろうけど、こんなふうにおれを見やがつて。ピアンカの腕はどこだ。あの無防備な口は。……「あと一日二日でスヴィーネミュンデだし、だよな？」いや、そんなお愛想を言つて、何を避けているんだ——席を立てばいいだろうに、このアホめ。

「人は誰もただ動き続ける。それだけです。終いにはどうでもよくなります」

「何だよ、あんた子供さんもいるんだろ、その言い草はないじゃないか。望みはそれだけなの？　ただ“動き続ける”？」

「それなら申し上げるが、太平洋戦争が終わつて家に帰れる日が来ることを待ち望んでいる。いまどきは梅雨で、梅の実が熟すんです。ミチコと娘たちと、一緒にいられたらそれだけでいい。戻れたらもう二度と広島市を離れんつもりです。あなたもいらしてごらんなさい。きつと気に入りますよ、本州の、内海の沿岸にあつて、風光明媚、大きさも完璧な街です。都会の娯楽にも欠けず、人の暮らしに必要な静けさにも恵まれている。しかし、

この船の人々は故郷へ帰ろうとはしていない、故郷を去ろうとしていますな——」

だが雨水を支えてきた結び目の一つが重みに耐えかね、白い華奢な布張りが見る見る解け、風雨の中でバタバタし始めた。天幕がぐつと沈み込み、漏斗となつて集めた雨水をスロースロップとモリツリにぶちまける。二人はデッキの下に逃れた。

階下は新たにまた盛り上がった人の渦。飲み騒ぐ群衆の中でモリツリとはぐれたスロースロップ、早くピアンカのいるところへ行き着きたいと気持ちちはやる。通路の向う端、

カラの顔をした二十人ほどが騒いでいる向こうで、白のカーディガンとスラックス姿のステファニアが手招きしているのが見えた。密集した人間たちをかくぐってステファニアのところへ行きつくまでが約五分。途中、ブランド・ベースのアレクサンダー^{*10}を手にし、パーティー用の帽子を頭にのつけた。背中には「これを読んだら私のケツを蹴ること」と低地ボメラニア語で書いてある紙切れが付き、シャツは同じマゼンタでも色合いの異なる三種類の口紅で汚れた。そして口は、ご親切にも火までついただれかのイタリア製、黒のマドゥーロの葉巻をくわえている。

「宴^{うたげ}の魂のような顔をつくってらっしゃるわね」とステファニアが迎えながら、「でもわたしにはお見通し。あなたの陽気な仮面の下に、ヨナ^{*11}の顔が見えるわ」

「っていうと、その、なにかい——」

「マルゲリータのことよ。トイレにこもって出てこないの。ヒステリー状態、誰も連れ出せない」

「で、おれに頼ろうって？ タナツはどうした」

「いなくなってしまうたわ。ビアンカも」

「えーっ」

「あなたがビアンカを捨てたんだって、マルゲリータは思ってるわ」

「おれじゃない」モリツリ少尉の話の大筋を伝えると、ステファニアから鋭気^{エラン}と弾みが失せていく。彼女は一本の指先の爪をかんだ。

「うわきはあったわ。ジークムントが去る前に、思わせぶりなことを言っていたから。関心をそそるだけで、具体的には何も言わないところが、いかにもジークムントね。でも、

10 生クリーン、クレーム・ドゥ・カカオを加えてシェイクしたカクテル。

11 旧約聖書でヨナは神の命に背いて逃げ、嵐に遭い、船から投げ出され、大魚に吞まれる。

スロースロップ。ビアンカに危険はないかしら？」

「何とか探ってみる」と言ったところで彼のケツに一発蹴りが入った。

「あんた運が悪いよ」後ろの男のガアガアした声、「この船で低地ボメラニア語が読めるのはおれだけだよ。その前に立つなんて」

「ほんと、運の悪い人」ステファニアがうなずく。

「おれはただスヴィーネミュンデまで、ただで乗っけてもらえればと……」

だがステファニアに言われてしまふ、「無銭乗船は一回だけ。残りは自分で稼ぎなさい。」

ほら、マルゲリータに会いにゆく。お仕事よ」

「おれに行けてかよ、おいおい」

「何かが起きてほしくないでしょ」

この船にはいくつか守るべき心得がある。その一つが「事が起きてはならない」。

スロースロップは葉巻の残りをステファニア・プロカロフスカ夫人の歯と歯の間に丁寧に押し込んだ。それをふかす彼女の両の手はセーターのポケットの中。

機関室にビアンカの姿はない。脈打つ電球の光と、アスベストに包まれたエンジンの間をスロースロップは動きまわり、絶縁の外れたところで一、二度感電、薄暗い奥や物陰を覗いて、自分自身にはいかほどの絶縁性があるのか考えてみた。機械類とノイズだけの機関室から出ようとして。ラダーへ向かう。赤い布が待っていた……いやいや、彼女のフロックだけだ。縁についた彼自身の精液の跡がまだ乾いていない……このやかましい湿気のせい。屈んで服を手に取り、ビアンカの匂いを嗅ぐ。わたし子供だし、隠れ方は知っているもの。あなたも隠してあげられるわ。「ビアンカ。出てこい、ビアンカ」

トイレのドアのまわりに、上流階級ののらくら者やら酔っぱらいやら、いろんなのが酒場、グラスと一緒に道なうてふさいでいる。コカイン常習者の一団が輪になうて座うていたりもする。ゴールドとルビーの短剣の先から飛び出した粉末が、鼻毛の林へ消えていく。彼らをかき分け、スロースロップはドアに行き着くと、体をくつつけてマルゲリータの名前を呼ぶ。

「向こうへ行うて」

「出てこなくてもいい。オレを中へ入れてくれ」

「あなたが誰かは、わかつてるんだから」

「たのむ」

「へかれら」も考えたわね。あなたを哀れなマックスとして送り込んできたなんて。でも、もう、その手はダメよ」

「へかれら」とは手を切った。誓うて言う。きみが必要なのに、グレタ」こんな大ウソ、何のためだよ？

「それじゃへかれら」に殺されるわ。帰うて」

「ビアンカの居場所なら知うてるよ」

「あなた、ビアンカをどうしたの」

「とにかく——中へ入れて、たのむ」まる一分の沈黙の後、ドアが開いた。入り込もうとする野次馬を押しのかうてドアに施錠。グレタは黒のシュミーズ一枚だ。太腿に黒い毛がカールしている。老いた白い顔が緊張している。

「ビアンカはどこなの？」

「隠れている。」

「わたしから？」

「かれら、から。」

「スロースロップを、嘗する。鏡と剃刀と鉄と光の過剰。過度の白さ。あなたこそ、かれらの、味でしょうに。」

「よせよ。そうじゃないことは知ってるだろう。」

「いいえ、もうだわ。だってあなた、川から上がってきたじゃない。」

「でも、それは、川に落ちたからだよ、グレッタ。」

「かれら」が落ちたんでしょ。」

髪を毛を神経質そうにいじるマルゲリータを、スロースロップが見つめる。アヌビス号が少し揺れ出した。吐き気が湧き上がってくる。胃ではなく、頭にだ。彼女が話し出すと、嘔吐感が体全体を包んだ。輝く、黒い、泥流のような吐き気。黒く輝く泥流のような船酔い……

「隠れている」

「わたしから？」

「へかれら」から」

スロースロップを一瞥する。鏡と剃刀と鋏と光の過剰。過度の白さ。「あなたこそへかれら」の一味でしょうに」

「よせよ。そうじゃないことは知ってるだろう」

「いいえ、そうだわ。だってあなた、川から上がってきたじゃない」

「でも、それは、川に落ちたからだよ、グレタ」

「へかれら」が落としたんでしょ」

髪の毛を神経質そうにいじるマルゲリータを、スロースロップが見つめる。アヌビス号が少し揺れ出した。吐き気が湧き上がってくる。胃ではなく、頭にだ。彼女が話し出すと、嘔吐感が体全体を包んだ。輝く、黒い、泥流のような吐き気。黒く輝く泥流のような船酔い……



男たちはいつもたやすく彼女に向かってどういう女になれと言った。同世代の女の子らは、自分のアイデンティティにこだわりながら育ったので「わたしは誰？」という問いは、苦痛と葛藤に満ちていたが、手に負えないほど数多くの「自分」を抱えていたグレーテル^{*1}にとって、それは問いにもならなかった。あまたのグレーテルたちのうちのある者は、かりそめの、ごく表面的な者もいたが、ディープな存在の多くは、重力に逆らえたり、お告げの夢をみたり、仰天するような才能を持っていた……その顔の回りを、昏睡のイメージがとり囲み、宙に光を放つ。その光は実のところ流れおちる涙だった。そんな様式化したスタイルで彼女は泣いている。機械的な都市を運ばれながら。中空にかかる隕石のような壁に沿って、骨のように空虚な空洞と眼窩を通りながら泣き光る彼女の周囲で闇が崩れ、薄れゆく影がダークに輝く……さもなくばグレーテルは凝視したまま動かない。長いガウンには房飾りと錬金術のシンボル、革のスカルキャップからヴェールがたなびく。そのキャップはオートバイ・レーサーのヘルメットのように、同心円状の詰め物がしてあった——ひび割れた塔と黒曜石の螺旋、トライプベルトとローラー、アーチの下を潜り、都会の霧

1 「グレート」の別称。

に包まれた頂塔や巨大な尾翼のあいだをおごそかに縫って進む奇妙な飛行物体の航路……

『ニューメキシコの白い砂漠⁺』で、彼女はカウガールを演じた⁺。最初に聞かれた、「馬に乗れるか」と。「もちろんよ」——これまで馬とは、戦時に道端の溝を挟んで向かい合ったのが一番の接近だったけれど、仕事が必要だったからそう答えた。いざ馬に鞍をつけて乗る段になっても、馬の背中が自分の太腿の間をさするとどうなるかを心配するだけの知識もなかった。乗ったのはスネイクという名のアメリカの馬だった⁺。調教されてはいたが、グレーテルを乗せたままどこかへ走り去ることはありうるし、殺す気ならそれでもできる。だがグレーテルとその馬は人馬サジタリウスのごとくスクリーンを燃えさかる炎で満ちた。グレーテルの口元は終始笑みをたたえていた。

彼女が落とした一枚のヴェールがある。白い萍の薄膜、最近のベルリンの一夜の、腐りゆく残り滓だ。「あなたが眠っている間、街に出ました、靴も履かずに。屍体を見つけたの。男の人の。白髪の髭が一週間伸びっぱなしで、古いグレイのスーツを着ていた……」壁の向こう側で、じっと、真っ白になって横たわっていたそれのとなり身を横たえて、彼女は屍体に腕をまわした。霜が降りていた。屍体は自分の方にゴロリ転がった。服の皺が凍りついたまま動かず、剛毛の顔が自分の頬をこするのを感じられた。その臭いはアイスポックスの冷肉以上に酷いものではなかった。それを抱いたまま彼女は朝まで横たわっていた。

「あなたの国の様子を話して」グレータの眠りを覚ましたのは何だろう。通りを歩くプー

2 *White Sands*
New Mexico

3 世界初の原爆実験が行われた「トリニティ・サイト」はニューメキシコ州のホワイトサンズの一角にある。一九四六年にはこの軍基地に、フォン・ブラウンを始め、ドイツで捕虜となったV2ミサイルの技師の多くが秘密裡に連れてこられた。

4 中央アジアでチチーリンが乗ったのと同じ馬だろう（上巻649ページ参照）。

ツか、早朝の蒸気シヨベルか。だるい彼女のささやき声は、本人にもよく聞こえない。

屍体が答える。「我々は黒い泥のずっと奥深くに住んでいる。そこに行くには何日もかかる」その四肢を人形のように動かすことはできなかったが、語らせたり考えさせたりすることは、思いのままにできた。

一瞬、彼女は思った——言語以前の感覚として——自分の柔らかな精神^{マインド}の上にへかれら^らの指が置かれるときはそんな感じがするのだろうか……

「地下は快適だよ。ときどきへかれら^らの御相伴にあずかることもあるし——遠くに轟音が響いたり、地面の上空で爆発が起きたことを伝えるシルエットを感じたり……だが、どれも遠くだ。近すぎるところで起こることはない。全くない。あまりの暗さに物が火照って見える。飛翔^{フライング}はあるが、性^{セックス}はない。ただ幻想はある。かつてなら性的というべき、溢れんばかりのエネルギーを抑制するのに使った幻想も多いよ……」

まばゆいロツテ・リュステイヒの名で映画界にデビューしたころ、洪水の中を、雑役婦に変装して金持のブレイボーイ、マックス・シュレプツィヒと浴槽の舟に乗って、川を下ったことがあった。すべての少女の夢を演じたその映画のタイトルは『若者よ、立ち上^あがれ！』(もちろん、当時人々がよく口にした「ユダヤ人、失せろ！」^{ユダヤ人、ヘラウス}との軽妙な語呂合わせを狙っている)。浴槽のシーンは実は全部プロセス・ショット^{プロセス・ショット}で、実際にマックスと浴槽に入ったまま川へ流されていったのではない。川のシーンは代役が演じたのである、最終プリントに残っているのは、ぼやけたロングショット^{ロングショット}だけだ。黒くデフォルメされた人影がほとんど猿のように見える。特殊な照明が、その場面を鉛板か何かダークな金

5 背景の映像をスクリーンに映写しながら、その前で演技を行う撮影法。

属に彫り込まれたものであるかのように見せた。グレタの役をつとめたのは、長いプロンドのかつらを被ったブラッツォという男性スタントマンで、彼とのロマンスはしばらく続いたが、かつらをつけていないブラッツォとは、グレタはベッドを共にしなかった。

川面を雨が打ちつける。急流に近づいていく音。まだ目にする事ができないが、確実に、避けようもなく近づいていく。ふたりの役はそのとき奇妙な、厄介な恐怖を経験する。自分たちは見捨てられてしまったのではないか。岸边に並ぶ、かぼそい灰色の走り書きのような柳並木の向うにカメラなど一台もなく……音響係も道具係も照明も、撮影クルーはみな立ち去って……いや、そもそも来ていないのでは……おい、この真っ白な貝殻舟に、いま激流がぶつけたものは何だ？ あの不気味な物音は？ こわばった、無音の物音は何だ？

ピアンカはたいいてい銀色か、さもなくばまったく色が無い。何千回ととられた^{テイクン*}。ガラスの内側へでっぱり、紫光の血がにじむ^{インターフェイス}界^面をワープした。カール・ツァイスのプロタルのダブルやトリプル^{キヤ}も、シュナイダーのアンギュロン^{キヤ}も、フォクトレンダーのコリニア、シュタインハイルのオルソステイグマートも、グントラッハ社の一八九五年製トルネルーライヒも通り抜けた。グレタが見るのはいつもピアンカの、永遠に変わることのない魂だった。……この一人娘はスカーフのようで、腰にたくし込んでおいても、風で飛んでいきそうになる。ピアンカのことを母親の自我の延^{エクステンション}長と呼ぶなら皮肉が強くなりすぎるだろう。しかしグレタは、ときどき、他の子供たちにピアンカの姿をダブらせる——二重写しのゴースト写真のように映りこませることができた……ブリッフェロ大尉の若いベット、

6 「^{プロタル}」という語には、単に映画に「撮られる」という以上の意味を帯びているようだ。

7 「プロタル」は光学機器のツァイス社のレンズのタイプで一九〇〇年から二〇年代にかけて大型カメラ用として普及。
「ダブル」「トリプル」と

ゴットフリートのイメージには、きわめて明瞭に、ピアノカが映りこんでいたのである。

はレンズを二枚、三枚用いるもの。

「ちょっとわたしの肩ヒモを下げて。ちゃんと黒くなっているかしら？ 見て。タナツはね、鞭跡が光り輝く^{リキル}って言うの。一つひとつ位置を憶えていられるって。今日のはずいぶん白いでしょ？ 長くて白くて、まるで蜘蛛の巣よ。お尻にも、ほら、太股の内側にも……」血が止まって、アルコールをつけた後、タナツはよく、自分のひざの上にうつ伏せになったグレタの背中^{クロウ・バック}の傷痕を、ジブシーが手相を読むように、読んだものだ。生命線ならぬ生命痕、感情痕、神秘十字^{クロウ・バック}。何という運命、そして何という幻想！ 彼もまだ鞭打ちの高揚の中にあり、二人が最後まで持ちこたえられる、逃げられるという夢に浸り、その激しさと希望が消える前に眠りに落ちるのがつねだった。そんな瞬間のタナツをグレタは最高に愛した。眠りに入る直前に、自分の背中が熱く燃え、胸の上のタナツの小さな頭が重く感じられるとき。打たれた肌が、その細胞の一つひとつが、音もなく傷の組織を形成していく夜は、まるで自分が安全であるかのように思えたものだ……

8 正式にはシェナイダー・クロイツナッハと呼ばれるレンズメーカーの広角レンズ、以下過去のドイツの代表的レンズのブランド名が続く。

鞭の責め苦にあうたびに、逃れられない無力感のなかで彼女に幻影が訪れる。いつも変わらぬ、ひとつの幻影が、苦痛のピークのたびに彼女の前に現れる。ピラミッドの頂上に眼がついているのだ。生贄の都市に錆色のロープを着た人間たち。通りの向こう端に、ひとりの黒衣の女が待っている。哀しみのフードに覆われた顔を、ドイツの上に傾けている。チェリーレッドに燃える石炭が一晚中落ちてくる。スパニッシュ・ダンスの衣装を着たピアノカが銃身を撫でている……

9 超絶的ヴィジョンのシンボル。142ページ註4参照。

ここは松林の中の、とあるロケット基地の近く。タナツとグレーテルは、もはや誰も通らない古い道を見つけた。緑の雑草に覆われたそちこちに、かつての舗道の断片が見える。このまま進んでいくと町か、駅か、前哨地点に辿りつけそうだ……。どこに行きつくのか見当もつかないが、きつとずっと前にうち捨てられた場所に違いない。

ふたりは手をつないでいた。タナツは古い緑のスエードの上着。肘にパッチが付いている。グレーテルはラクダ毛のコートに白いスカーフ。古い道の上の松葉の吹きだまりは、ところどころ非常に厚くて、足音を消すほどだ。

そこは数年前の地すべりで道が削られていた。斜面には砂利がゴマ塩状に撒かれたよう。谷川のせせらぎが聞こえた。だが目には見えない。坂の途中に古い車——ハノマグ・シユトルム^{*10}——が鼻面を下にして引っかかっていた。ドアの一つは衝撃で開いたままだ。灰紫色の金属外板がきれいになくなった車は、鹿の骸骨のよう。松林の中のどこかに、この破壊をもたらした存在がいるはずである。ふたりは車の残骸を遠まきにして歩いた。蜘蛛の巣状に割れたガラスに近づくのを避けて。フロントシートの影に固くうずくまる肉塊^{モーターテイ}を避けて。

林の奥には家の残りがチラリと見えるかもしれない。光が退いたのか、まだ昼前だし、森が深くなったわけでもないのにあたりが陰る。道の中央に巨大な糞がしてあった。排泄したてのが、縄のようにグルリととぐろを巻いている。黒々とした結ばれ。どんな生き物だろう、こんなのを、するの、は。

それと同時に、彼女とタナツは共に悟った、今まで何時間も歩いて来た場所は、偉大な都市の廃墟だったに違いないと。古代の廃墟ではなく、自分たちの生きた時代に破壊され

10 「ハノマグ」は「ハノーファー機械製作所」の通称。この会社を作っていた「シユトルム Sturm」は富裕層に人気の車だった。

たところ。道は曲がって林の中へ消えている。そこに何か立っている。二人と、道のカーブを曲がった先にあるものとの間に、何か不可視で不可触な……モニターのようなものがあって、こう言っている。「これ以上、一步も近づいてはいけない。一步たりと。引き返さない」

それより先に進むのは無理だった。二人とも怯えが先にきた。体を回し、背中にそれを感じながら早足で引き返した。

二人が戻った発射台シュスシュテレのところでブリツェロは、狂気の最終段階にあった。寒々とした林の中の小さな空地は、幹の樹皮がロケットの爆風で剥がれ、血のビーズのような樹液が垂れていた。

「彼はわたしたちを追い出すこともできたわ。ブリツェロはここでは神のような存在だったから、一枚の書類を書く必要もなかった。でも私たちに居てほしかったの。ベッドも食べ物も酒もドラッグも最良の物を用意してくれた。何か計画があったのよ。青年ゴットフリートを巻き込む何かが。そのことは間違いない——青くくすんだ早朝の松林に樹脂の匂いがただようと同じくらい確かなことよ。でも、ブリツェロは何も教えてくれなかった。「わたしたちはへハイデ」へと移動した。油田と、黒くなった土があった。ヤーボ*11が、上空をダイヤモンドの隊列で飛んで、わたしたちを探していた。ブリツェロは別の生き物に変身していた……狼男……ただしその眼に、人間を思わせるところが一カケラもない。日に日に人間らしい眼が薄れて、その跡をただの灰色の皺と赤い血管のパターンが埋めている。島のような——海面が血のように凝固して群島ができたような。ときどき中心から等

11 「ヤークトボンバー Jagdbomber」の略。アメリカ軍が大量投入した大型戦闘爆撃機の、ドイツでの通称。

高線が拡がってようにも見えた。「これがわたしのウル^{*12}ハイマートの地図だよ」その声の凄さといったら。おだやかなさやき声が金切声として聞こえるって、わかるかしら——「領主ブリツェロの王国。ホワイト・ランド。その瞬間、わかったんだわ。ブリツェロは世界を、神話の空間として見てるって。神話の国にも地図があり、本物の山と河や色彩がある。ブリツェロの活動の場はドイツではなくて、自分自身の空間だった。その中を、私たちも一緒に引きつれて動いていた！ どれほどの危険を冒しているのかを感じてわたし、股間が充血した。だって、一瞬のうちに自分たちの存在が吹き飛んでしまうわけですよ。時間も空間もブリツェロ自身のものなら、消滅の瞬間がいつ襲ってくるかわからない。その甘美さに震えた。……ブリツェロは地面の道路に降りてはいなかった。低い土地の橋を渡っていたのではなく、^{ロウ・ランド}〈低ザクソニー〉の、その島から島へ、わたしたちは航海していたの。発射台のところが島で。白い海に浮かぶ島で。どの島も中心に頂点^{ピーク}があつて……その中心に〈ロケット〉が置かれる？ 発射はその中心から？ これはゲルマンのオデュッセイア。どの島が最後の、故郷^{ホーム・アイランド}の島になるのかはわからない。

ゴットフリートがどうなったのか、タナツに聞くのをわたし、いつも忘れてしまう。タナツは砲兵中隊と一緒にいるのを許されたのだけど、わたしは連れてゆかれた。ブリツェロと同じイスパノ・スイザに乘せられ、曇天の中を、石油化学工場^{ホイル}へ突入していく。それまで何日もわたしたちをつけ狙い、動物のように地平線に輪をつくっていた。壊れた黒い塔がたくさん寄り集まって、ひとつの煙突の先からはいつも炎が出ていた。それが^{キャッスル}〈城〉。ブリツェロがこちらを向いて何か言おうとしたとき、わたし、^{ザ・キャッスル}〈城〉、と言った。ブリツェロの口は瞬間、微笑みだけ、からっぽの微笑みだった。敵の寄った狼の目は、同族的

12 Ur-Heimat (原故郷)。インドのサンスクリット語を含み、ヨーロッパ諸言語を包括する一つの語族の共通の先祖の言語として「印欧祖語」の存在が仮定されているが、その言葉をしやべった民族が住んでいた仮説上の「原故郷」をいう。

な通^{アレバ}じ合いの瞬間を抜けて、動物的極北^{アニマル・ノース}へ向かい、想像もつかない死の堅固なエッジから動かなくなってしまう。固くなった細胞の内側で、極小の光が氷の上を、あるいは氷でさえないものの上を、ゆらめき動く。彼はわたしをカッチェと呼んだわ。『おまえのつまらぬ小細工などものはや役に立たぬわ。すでに無効だ、カッチェ』と。恐ろしくはなかった。それは自分に理解できる狂気だったから。さもなくば、大昔のことの幻覚だったから。銀のコウノトリが、翼を下げて、私たちの風の中へ飛び込んできた。首を下げ、足を後ろへ伸ばして。後頭部の瘤にプロイセンの徽章をつけて。その輝いた表面に今度はリムジンや将校さんたちの車列が見えてきた。黒い渦をなしてメインのオフィスをとり巻いている。駐車場の隅には二人乗りの小型機も見えた。乗っている男たちの顔には見覚えがあった。映画で会っていた。力と重力を持った顔——権力者。でも直接知っていたのは一人だけ。スマラクト取締役^{*15}、レーヴァークーゼン出身の、杖をついた老人。戦争前は、悪名高い心靈主義者で、たぶん今でもそうだわ。『グレタ』とわたしの手をまさぐりながらほえむの。『おお、みんな一緒だな』って。でも、他の人たちはみんな愛想のない顔で、ブリツェロを待っていた。名士たちが〈城〉に集合する会合なのよ。みんな会議室へ入り、わたしはドローネという執事と一緒に残された。額の大きな白髪混じりの男で、いつもネクタイをいじっていたわ。わたしの映画はどれも見たって。機械のある方へ行くと、会議室の窓が見えて、中の丸い会議用テーブルを覗くことができた。その中央に何かが置いてある。灰色で、プラスチックで、輝いた表面の上を光が動いている。『あれはなにかしら?』と、色っぽくドローネにたずねてみた。すると彼はだれにも聞かれないうところへわたしを連れていって、こうささやいた——『〈Fの装置〉^{ゲレイト}に使うんだらう』って」

の〈塔〉は、「ザ・タワー」とも「ザ・キャッスル」とも呼ばれる。このカードは、後に示されるように、ブリツェロの運命と強く関係する。

14 スペインの高級車イスパノ・スイザが、ボンネットの上につけていたコウノトリのエンブレムへの言及。

15 上巻314ページに登場したIGファルベン（架空の）ゲネラルデイレクトール。

16 一八六三年創業の製薬企業バイエル本社の所在都市。

人がわたしの腕をつかんで倉庫の中へ引きずっていく。他の者もついてきたわ、あちこちのドアから入ってくるの。頭上からカーテンが列をなして垂れていた。透明のも不透明のもあったけれど、スチレンかビニール製ですごくカラフルで、オーロラのように光を放った。その後ろに観客がいて、舞台が始まるのを待ってるんじゃないかと思ったわ。ドローネと男たちはわたしを、空気で膨らませたプラスチックのマットレスに寝かせた。まわり中の空気かしら、光かしら、透き通ったまま粉々に崩れるのが見えた。『ブタジエン』と誰かが言った。わたしには「ビューティ・ダイニング」と聞こえた。^{*19} プラスチックの擦れる音と折れる音が、わたしたちみんなを包み、ゴーストの白さのなかに閉ざした。彼らはわたしの服を脱がせ、黒いポリマー製のエキゾチックなコスチュームでくるんだ。ウエストはギュッときつく、股のところが空いている。まるで生き物を着たみたいな感触だった。『革もサテンも、忘れてしまいなさい』ドローネの震えた声。『これがヘイミボレックス、未来の素材です』何ともいいようのない芳香がして、感触があつて——贅沢のかぎり。それに乳首が触れたとたんに固くなって噛んでもらわないといられなくて。アソコにも押しつけてもらいたくて。肌に何かをつけただけで、こんな気持ちになったのは、後にも先にもこのヘイミボレックス²⁰だけよ。ブラもシューミーズもストッキングもガウンも、みんなこの生地で作ってもらう約束をした。ドローネのベニスに、巨大なヘイミボレックス²¹製のベニスが被せてあつた。それに顔を押し当てたときの甘美さたらなかったわ。……両足の間に深い淵ができて、物事も記憶も、すべてが区別を失って、頭から崩れ落ちていくの。奔流となって。自分の中身が虚空の中へ吸い出されていく……頭のでっぺんから、クルクルと渦をなしてカラフルな幻影があふれ、流れ出ていた……キラキラした

―王伝説で知られる、キリストの血を受けた「聖杯」のこと。

19 butadiene は C_4H_6 の分子式を持つ炭化水素。英語の発音は「ビュータダイアン」に近く、beauty dying 美(人)が死につつあるから遠くない。

のも、気の利いた会話の切れ端も、芸術品も……なんでも出ていくに任せたわ。一つも押しとどめようとしなかった。こういうのも「服従」なのかしら、全部を流し出してしまうことも。

その場所にどのくらい入っていたのかしら。眠っては覚め、男たちが現われては消えた。時間は意味を失っていた。ある朝、工場の外でわたしは雨の中に裸で立っていた。草も生えない場所に。何か堆積していた。巨大なタール状の廃物が、何マイルも扇形に伸びている。発射場まで歩いて戻るしかなかった。みんないなくなっていた。タナツからの書き置きに、なんとかスヴィーネミューンデまで来るようにとのことだった。何か、発射場で起きたんでしよう。^{オホ}林に囲まれたその場所の静まりは特別だった。同じ静まりと、以前に一度だけ、メキシコで出遭ったことがある。アメリカにいた年よ。ジャングルの奥深くへ行ったの。石段があつて、そこは蔓草と薔や葎でいっぱい。何百年もの時が朽ちていた。一緒に行った人たちは上まで登ったのだけど、わたしはその場で立っているしかなかった。タナツと二人であの松林に立ったときも同じ。ゆく手に、あの特別な静まりが。他の人たちではなく、わたしだけを待っているのを感じたの……わたし自身の静まりを待っているのを……」

20 何が、どんな超越的な出来事が起きたかは、最終エピソードまで明かされないが、古代のメキシコの神殿は「生贄」の儀式を匂わせている。



アヌビス号のブリッジの上では獣足^{ボイ}のような雨粒が窓ガラスを叩き、巨大な水のひれが夜の闇から不意をついて襲ってくる。雷鳴の虹の、その端にだけ、生き物のかげが浮かぶ。こんなに薄くてもろい境の後ろにこんな姿勢で立ちつづけ、猛々しい風雨の攻撃をもらさず見つめるなんてことは、よほどマニアックな男か、ポーランドの騎兵隊将校でもなければ無理だろう。横揺れは激しく、プロカロフスキーの後ろで、傾斜計の浮きが、夢の中の振子のように揺れている。稲光が、プロカロフスキーの顔を黒く縁取った。彼の眼も同じ黒、皺のよった額を斜めに横切る塩気を含んだタフな防寒帽も同じ黒だ。無線装置の表面に、透明で深みのある光が集まる……そして方位儀のダイヤルから柔らかく扇状に拡がり……舷窓から白い川へこぼれ出る。今日の午後がいつもに比べて長いのはなぜだろう、日が暮れていくのにこんなにも時間がかかるのが不思議だ。索具にチカチカと聖体電光^{セントエルモの火}が現れた。綱と鋼索を嵐がぐいぐい引っばっている。雲の渦巻く夜は、巨大な痙攣と白いざわめきの中にある。プロカロフスキーは葉巻をふかし、オーデル潟^{ハフキ}の海図を調べている。それにしてもこの光、岸からソヴィエト軍が見張っているのか、雨の中で待ち構えて。

1 アヌビス号はいま、
オーデル河の河口の都市
シュテティン（シュチェ
チン）を抜けて、オーデ
ル潟（シュチェチン潟）
に入りこもうとしている。
730～731 ページ地図参照。

この河口の航行はいつも、ロシア製のプラスチックの面を走る油脂鉛筆の、忠実なXマークによって記録されているのか？ 見張りが立つこともなくなったドイツ窓が蜘蛛の巣で白くなった、その中でAスコープ^{*2}を横切って燐光が揺れている。標的を照射できるかどうかは、不可視の歯を動かすハンドクラシク^{*1}のぐらつき次第。……ヴァスラフよ、画面に点滅するそれは、船だと思っていいるのかな？ 近頃の〈ゾーン〉では、紛い物に事欠かないだろ。水面上には定^{スタンディング・ウェイ}在 波も立つし、大型の「ブンブン鳥」—— ってのは監視オペレータがそんな渾名をつけるほど有名な無人飛行機のこと—— 迷子の気球も飛んでくる、他の戦域から流れついた漂流物のなかにはブラジルのドラム缶も「フォール・ラミ^{*3}行き」とステンシル印刷されたウィスキーの木箱もある、他の銀河系からの観察者もいるだろうか、ケムリの所^{せい}為^いってこともあるだろうし、アルベド値^{*4}の上昇がもたらした錯覚^{さくかく}ってのもあるだろう。そんな中で肝腎の標的を待つのはいかにも大変だ。配置換えや徴兵を受けたばかりの新米が多すぎて、混乱が絶えない。今なお正しい感覚を保っているのは、ベテランのAスコープ操作員だけ。彼らが前に座って、エレクトリックな緑色を、永遠にとも思える時間いじくっている。そのうち、画面の分布の様子がわかってきた……視覚の恩寵を彼らは得たのだ。

今夜この河口にアヌビス号が着いている確率はどのくらいあるのだろうか？ スケジュールなどあってないようなもの。それが当世風、避けがたいこと。スヴィーネミューンデを何週間も前に通りすぎるはずだったのに、ヴィステテラ河^{*5}でソ連がこの白き船の航行を禁じた。船上にはしばらくロシア人^{ロシア人}の見張りの兵士も立っていた。船内の女たちが色仕掛けで兵士の注意を逸らし、その間になんとか首尾良く出航可能となり、かくして故国ポーランド

2 初期のレーダー。

ただし標的の方向に関する情報は含まず、スクリーンの座標の横軸で反射体までの距離を、縦軸で反射波の強さを示すにすぎない。

3 現在のチャド共和国の首都ンジャメナは、大戦中は北アフリカ戦線でドイツ軍と戦うフランス自由軍の基地「フォール・ラミ」だった。ブレインティスのバナナ（上巻17ページ）もここから来た。

4 敵密には、水面ではなく、天体表面の反射率（太陽光の入射に対して反射する強さの割合）を表す。Albedo という言葉は、ラテン語の「白

ドの榮華の最後の長い反復奏が始まった。北の平原の水上を滑る船に、後方から無線メッセージが追ってくる——平文で来たかと思えば翌日は暗号文。終戦から日が浅すぎるがゆえに状況は不安定をきわめ、船内は死刑執行のような沈黙と、突然の浮かれ騒ぎとの間を揺れ動く。〈アスビス号問題〉に関しては、国際的な理由からこれを歓迎する声と、反対する声とがあり、議論は遠く離れて歩み寄らず、船の進行に対する指示もコロコロと変わったのである。

激しい縦揺れと横揺れを繰り返しながらアスビス号は北へ向かう。稲妻が水平線いっばいにキラめく。船内の軍人の耳に雷鳴は集中砲撃のように聞こえる。自分らは戦闘を生き延びたと思ったのに、この夢から覚めたらまだ戦いは継続中でこれから殺されるかもしれないと。……風雨に晒された露天甲板はツルリと輝き、パーティのごみが溝をふさぐ。むせ返るような濃い煙が調理室の窓から雨中へ流れ出る。バーではバカラ賭博の用意が整い、ボイラー室ではブルー・フィルムを上映中。もうすぐドッグウォッチの後半が始まろうとしている。白き船に、毎夕繰り返されるルーティンが広がる——灯油ランプに点火した火が広がっていくように。

パーティに向かう男女が千鳥足でそぞろ歩き。飛び散った嘔吐で夜会服に太陽の爆発模様がついている。雨中に寝転ぶ貴婦人の水浸しになった絹のドレスから固く勃った乳首が透けている。給仕らが盆の上に船酔予防薬や重曹をのせて甲板を動きまわる。嘔吐中の貴族がつかんだ救命索が大きく垂れる。スロースロップが姿を見せた。上の甲板から梯子を伝って降りてくる。横揺れをかぶった補助綱に揺り動かされながら。目がうつろだ。ピアンカが消えてしまった。大騒ぎしながら船中を何度も行きつ戻りつ探しまわったが見つ

「albus」に由来。

5 現在はポーランド語で「ヴィスワ河」と呼ばれる。グダニスクを河口とするポーランド最長の河。

6 「折半直」とも訳し、午後四時から八時までの船の当直を二時間ずつで交替する。

らない。どうして今朝ピアノカをひとりにしてしまったのか、その理由も見つからない。

大変だぜ、しかしどのくらい大変なんだ？ マルゲリータがさっき涙ながらに語って聞かせた、ブリッエロとの最後の日々のこと。弦なしの竖琴のような、辛苦の裂け目のような便器にもたれて語ったことはみんな聞いた。だから、スロースロップは、自分が追われる身であることは充分わかっている。へSゲレートと、遍在する白色プラスチックのようなラスロ・ヤンプに追われている。自分が追っている相手に追われている、というだけじゃなく、オトリで誘き寄せられている自分自身がオトリとなっているのだ。へイミポレックスの謎を、カジノ・ヘルマン・ゲーリングで自分に植え付けたヤツがいる。植えた種がへゾーンにおいて、強力な「イミポレティック」の花を咲かせるよう、そいつはきつと望んだのだ。それにスロースロップが飛びつくことをへかれらは知っていた。どうも自分の意識化に、自分の知らない、しかしへかれらは知っている「スロースロップ的ニーズ」というものがあるらしい。それだけでも屈辱的な話だが、しかし、もっと悩ましいのは、この問いだ——おれは何をそんなに求めているのか。

一ヶ月前でも、一日二日平穏な日が続けば大丈夫、あの九月の午後の日へ戻っていった。まるで鉦脈を指し示す杖のように、ズボン中で勃起して、空に現れたへロケットをみんなのために指し示すことのできる才能の持ち主に収まることのできた。へ占いの杖」という宝物に自分は恵まれ、それゆえの受難もかいくぐり、はちぎれるような性欲に動かされて穴さえあればどこへでも……差し込み、満たされ……追いかけて……身を曝した……ありったけの叫び声を上げ……腕、脚、口、ケツの穴、目、鼻の穴、全部開いた、商業主義のイエスさまより真の白な空から降ってこようとするソイツの、あるはずもない慈悲の心に

などまったく縫ることなく……

しかしこのごろ、なにやら逆らいがたき空隙が、彼の後ろで口を開けたようなのだ。後戻りするための橋が落ちてしまつて、再建不可能という感じ。自分を信頼してくれる者を裏切ることにも、このごろのスロースロップはあまり躊躇をみせないし、義務の感覚も薄らいできた。というか、感情全般が薄らいできている。自分つてものが麻痺してきたのか、こりや大変だぜ……と思うべきなのに、そういう気持ちにすら、なかなか……

だめだ……

ロシアからの電波で無線機が割れるような音を立てる。空電のノイズは流れとなつて降りおちる豪雨のよう。岸の灯りが見え始めた。プロカロフスキーが主電源を切り、船の全照明が消え、十字架の先端や鋭く尖った先から、セントエルモの火がほとぼしる。その白いゆらめきで、アンテナや支柱の秘密を漏らすかのよう。

嵐にカモフラージュされた白い船が、大いなるシュテインの廃墟の脇をしずかにすり抜けていく。雨はしばらく弱まつて、左舷に、全壊を免れた何台かの起重機と焦げた倉庫を見せるだろう。濡れてギラリと輝くそれらが、ほとんど匂ってきそうだ。人の住まない湿地帯が始まる。そこはほんとに匂っている。まるで外海に出たかのように岸がまた視界から消えた。〈アヌビス〉のまわりにオーデル潟がぐんぐん拓けていくだろう。パトロール船は今夜は出るまい。闇から白波がいきなり押しよせ、船首より高く砕け、黄金のジャッカルジャッカルの口から海水を吐かせるだろう……船尾でよろめくヴァフナ伯爵は、白の蝶ネクタイ以外は全裸の姿、掌からあふれた赤青白のチップが音を立てて甲板に（もう換金はされまい）こぼれ落ちる……ビベスキュー伯爵夫人が船首楼近くで四年前のブカレストを夢見



聞こえてきた話し声はドイツ語だ。フィッシャング・スマック 帆かけ漁船のようだが、何かしらの理由で、網も帆の下桁フームも取り去り、甲板には荷物が積まれている。船の中ほどから、ピンク色した少年の顔がのぞいている。スロースロップを見つめながら波にゆられて近づいたり遠ざかったり。「イブニングを着てるよ」と操舵室へ声をかけた。それイイ人だっけワルイ人だっけ？ おじさん、軍のお役人じゃないよね？」

「おーい、溺れてるんだ。たのむ、書類にもサインするから」——「ハウディ よお、バドナ 相棒」の挨拶をドイツ語ですると、こういうセリフになるのである。少年が差しのべたピンク色の、手のひらにフジツボがガチガチに付いた手によって船上に引きあげられたスロースロップ、耳は凍りつき、鼻から塩水が垂れている。幾世代もの魚の臭いと重い船荷のひっかかり傷だらけの甲板に倒れ込んだその瞬間、船が動き出した。大波を受けたみたいな突然の加速に、びしょ濡れのスロースロップの体が船尾の方へゴロゴロ転がる。船の後ろに雄鶏の尾のような白波が、雨について立ちあがった。船尾の操舵室から尋常でない笑い声が鳴りひびく。「この船を操縦してるの、いったいナニモンだ？」

「僕のかあちゃんさ」少年のピンクの顔が申し訳なさそうな、仕方なさそうな表情になる。スロースロップの脇にかがみ込んで、「海のテロル、^{★1}って呼ぶ人もいるけどね」

林檎の頬をしたおかみさんの名はグナーブ夫人。^{★2}息子のほうはオットーという。母親が愛おしさを込めて呼ぶときは「音無しオットー」。上機嫌でそう言うのだが、やや時代遅れの感否めない。スロースロップがタキシードを脱ぎ、船室に吊して乾かし、古い軍用毛布にくるまる間にも、母と子による語りは続く。自分たちはバルト海の沿岸を闇物資を積んで往来してるのさ。そうでなけりゃ、誰もこんな嵐の夜に出航したりはしないでしょ。こうして何でも話してもらえるのは、スロースロップの、人から信頼される顔立ちのなせるところだ。目下の目的地はスヴィーネミュンデ、そこで注文の荷を積んで、明日はウーゼドム島の海岸へ向かうという。

「白いスーツの男のことは知ってるかい？」大むかしにゲリー・トリッピングから聞いたのと同じ言葉を口にする。「毎日正午、スヴィーネミュンデ海岸のプロムナードに現れる男」

フラウ・グナーブはかみタバコを一つかみしてニッコリ。「闇^{フランク・マーケット}の市の白の騎士^{ホワイ・ナイト}を知らない人がいるかね。ちなみに、沿岸交易のクイーン、ていやあ、あたしのことさ」

「シュプリンガー？」

「当たり前だよ」

当たり前だぜ。今もスロースロップのズボンのポケットには、ゾイレ・ブマーからもらったチェスの駒が入っている。それを見せれば自分が誰か分かってもらえる。操舵室でスロースロップは眠りに落ちた。その二、三時間の眠りの間にピアノカが毛布の中にもぐり込

1 以下「フラウ」「女将」などとも呼ばれる。

2 「サイレント・オットー」とは、ナチス・ドイツの潜水艦Uボートの英雄的指揮官オットー・クレッチマーの異名。一九四一年三月に英国艦に拿捕されるまでに四十隻以上の敵国艦船を沈めた。

んでくる。「あなた、いまホントにあのヨーロッパにいるのよ」ニヤッと笑って彼をハグする。スロースロップは「あららら」と言うばかり。それをシャーリー・テンプルそっくりの声で繰り返している。恥ずかしいことこの上ないが、自分じゃ制御できないのだ。目覚めて瞼を開くと日がまぶしい。カモメがギャーと鳴き、第二種燃料油が匂っている。岸へ渡した板上を、ワインの樽がゴロゴロと音を立てて転がる。船をつけたスヴィーネミュンデの波止場に、焼け落ちた倉庫の瓦礫が長く続く。荷おろしの指示をするグナープ夫人。オットーが持っているブリキ缶の中身は、正真正銘、本物コーヒード。[すげえ久しぶりだな]と言ってガブリと飲んだスロースロップ、口の中を火傷した。

「やみ市^{いち}って」音無しオットー³がのどを鳴らす、「いい商売になるんだよ」

「そーいやあ、おれも関わっていた……」で、どうなったのよ、ボーディーンのハッシシは？ 残りを、アヌビス号の中に置き去りにしてきたろ。「残り」といっても何百グラムって重量だ、なんて愚かな真似をしたんだ。シュガー・ボウルが、ビッグでバッドなデビルのケーキと、トゥッツイーロールを踊^{マユ}ってる。

「ナイスな朝だね」とオットー君がのたまわった。

スロースロップはタキシードに袖を通す。皺が寄って縮んではいるが、乾き具合はほぼ合格。オットーとふたり、シュプリングガーを探しに陸におりた。本日の海岸べりの航行は、シュプリングガーが手配したのか。アヌビス号も入港してないだろうかと、スロースロップはキョロキョロするが、白い船の姿は見えない。遠方にロケットの^{ガントリ}架台が群れている。

それらは骸骨の姿をして、あまりに突然に港湾一帯を包んだ焼け野原に屹立している。春にロシアが攻撃をかけて以来、港のレイアウトはすっかり錯綜したものになった。この造

3 シャーリー・テンプルの歌 "On the Good Ship Lollipop" (134 ページ註25) の歌詞そのままだが、"big bad devil's food cake" が、「大きなハッシシの塊」の意味に取れる。なお、踊りの名前になっている「トゥッツイーロール」"Tootsie Roll" は、アメリカで十九世紀末から売られている粘質性の茶色いキャンデーのこと。

船所の瓦礫の山のどれかの陰に、白船アヌビスが隠れているのか。出てこい、ほら出てこい……

嵐が過ぎ去り、そよ風の心地よい今日の空は、^{マカシム・グレイ}鯖灰色とブルーとが完璧な干渉縞をなしている。どこを掘っているのか軍の重機の金属音が聞こえ、近くから遠くから、ロシア語で叫び合う男たち女たちの声がする。オットーとスロースロップは路地に入りこんだ。両側から、木造の家々の焼け残りが、何百年もかけて少しずつ道へ迫り出している。一階ごとに傾きを増し、てっぺんはもうくつつきそうだ。戸口に腰を下ろした男たちは黒いひさしの帽子を被り、煙草がほしそうに手を見つめている。小さな広場に市ができていく。といっても木枠に汚れた粗布^{ヤンパ}を掛けた売り場が並んでいるだけだ。風が吹くたび粗布に射す光がまぶしく揺れる。ロシアの兵隊が柱やベンチにもたれ、ダーンドル・スカート^{サカ}に白いニーソックスの娘たちと喋っている。みんなほとんど動きがないので、彫像と見間違えそうさ。市場の荷車は柄を傾けて、地面や床に舌を突き出す。床には黄麻布^{パイルラフ}や藁が敷いてあり、青果の痕跡も残っている。戦車の通った跡は泥の陰画、その轍を犬が嗅ぎ回る。古い黒ずんだ青の制服の男が二人、ホースや箒を手を持ち、港から汲みあげた海水でゴミや砂利を洗い流す。赤くケバい売店に、スターリンの色塗り石版画像が張ってあって、まわりを小さな女の子が二人、ぐるぐると追いかけてこを^こしている。寝起きの顔で、しきりに瞬きしながら、波止場へ向かってベダルをこいでいく革帽の労働者たち。その自転車^{自転車}の柄から弁当箱が下がっている。鳩とカモメが互いにフェイントをかけて、溝の中の残飯を争う。空っぽの手さげ袋をさげた女たちが、幽霊が通りすぎるように早足で脇を通る。たった一本生き残った若木が、一区画分の不可視の鳥を集め、歌を聞かせてくれている。

4 第二部（上巻）307ページで、カジノの「運命の輪」の前に立つカッチェがこれを書いていて

まったくゲリーの言ったとおり、伝説の男がいたのである。鋼鉄の飛び散った遊歩道で石を蹴つとぼし、海を見やり、砂浜に変な時計か眼鏡の金縁でも落ちていないか目を走らせて、だれやら現れるのを待っている。歳のころは五十、荒涼とした中間色の瞳、頭の両脇は髪が濃く、それを後ろに梳かしつけている。

スロースロップがプラスチックの騎士をちらつかせる。シュプリンガーは笑みを浮かべ、頭を下げる。

「ゲアハルト・フォン・ゲール。お役に立てればと」握手をするが、スロースロップの気持ちはイガイガとしたままだ。

カモメの声。崩れた波が岸辺を平たく這っている。「ええと」とスロースロップ、「おれの耳、どうもおかしくていけない。お名前が、ゲアハルト・フォン……ええと」鯖色の空が描くパターンは、モアレからチェスボードへと変わってきた。「共通の友人がいたよね。マルゲリータ・エルトマン。会いましたよ、うん、ゆうべも……」

「あの女は死んだはずだ」シュプリンガーがスロースロップの腕を取り、一同、遊歩道を歩き出す。

「あんたも映画を撮る人のはずだよ」

「どう違うんだ」と言って、みんなの分のアメリカ煙草に火をつける。「死と同じく映画も、コントロールの問題でな。だがより強度が強い。ある種の音楽耳にとって、不協和音はより高度な協和音の形態であるのだよ。アントン・ヴェーベルンのことは聞いたね？ 実に悲しい」

「あれは誤射だったんだよ。ヴェーベルンに罪はなかった」

「罪って、そりゃないさ。だが間違いもこの世の一部——すべてがフィットしあっている。フィットする仕方が見えるんだよ。パターンを習得し、リズムに合わせられるようになる。いつか、きみも単なる演じ手としての存在から自由になる。カメラの向こうの側に抜け出られるのだ。そうなればもう、本部に向けて芝居の叫びをする必要もない——ある日目覚めると、わかつているのだ、クイーンもビショップもキングも華麗な不具者であるにすぎず、ボーンは最後の列まで進んで行けたとしても二次元を這うことしかできない。タワーも上に伸びたり下に降りたりはしない——そう、跳躍は《跳ね駒》様の専売特許なのだ！」

「その通りさ、シュプリング」とオットーが応えた。

崩れたホテルの瓦礫の山から、若いロシア兵が四人。笑い声を上げながら遊歩道を横切り、壁を越えて水際に降りると、平らな石を見つけて水切りをし、水に入って波をキックし、歌を歌いあつた。ここスヴィーネミュンデで、遊びの自由はそのくらいのもの。スロースロップは、マルゲリータの最近の様子を伝えた。私情は避けたつもりだが、ビアンカを氣遣う気持ちも漏れでたようだ。フォン・ゲールは親切な叔父のように腕を振って、「おいおい、私なら心配しないぞ。ビアンカは頭の切れる子だし、母親も破壊の女神ってわけじゃない」

「そうかい、あんたに言われると気が安まるよ、シュプリング」

ドイツ国防軍の灰色をした、落ち着きのないバルト海が、波打ち際でざわめいている。フォン・ゲールが不可視のチロル帽を傾けて挨拶したのは、黒い服を着て日光浴に出てきた二人連れのおばあさん。オットーはカモメを追う。無声映画の殺段シーンのように手を

6 将棋に置き換えれば「ボーン」は「歩」、
「タワー」は「ルーク」の別名で「飛車」に相当。
「桂馬」「跳ね駒」の「ナイト」だけが、敵を飛び越えて進むことができる。

前に伸ばして近づくと逃げられてばかりだ。やがて一行にひとりの男が加わった。ポツテリした鼻、丸まった背、赤毛に白髪之交じった一週間分の無精髭を生やし、だぶだぶのトレンチコートに身を包み、その下にズボンを穿いていない。男の名はネリッシュ。航空力学者ホルスト・アハトファーデンによって〈黒の軍団〉に告げ口された、クラウス・ネリッシュその人である。死んだ七面鳥の、まだ羽根をむしっていないやつ首をつかんで歩いてる。春のスウィーネミュンデ攻防戦で崩れ落ちた大小の瓦礫の間を、一行は縫って進む。廃墟の中から住民が現れはじめ、フォン・ゲールの脇の陸側に行列ができてきた。全員の視線が死んだ鳥に注がれている。シュプリンガーは白のスーツの懷に手を入れ、米軍の45口径を取りだすと、何食わぬ顔で見せびらかし、作動の具合をチェックする。とたんに追従者の数が半減した。

「きょうは町の人が、いつもより腹を空かしてるぞ」ネリッシュが言う。

「たしかにな」シュプリンガーが返す。「しかしいつもほど数はいない」

「うう」スロースロップが思ったままを口にした、「ひどいことを言うもんだ」

シュプリンガーが肩をすくめる。「同情するのはいいが、幻想を膨らましたらいかん。

私を軽蔑して、彼らを持ち上げるのはかまわんが、両者が互いを定義しあっていることは憶えておきたまえよ。選民と棄民とは、宇宙的な明と暗の意匠のなかを進んでいるのだ。^{ネリッシュ}

そのことを全面的に理解している私のような人間は、全人類の中でもきわめて少数だ。だから、お若いの、考えなさい。君はどちらの側にいたいのだね。彼らが永遠の影の中で苦しんでいる間、もう一方の側は……いつも——

7 Natiisch. ドイツ語の Nati (阿呆、道化) の形容詞形。

8 カルヴィニズムの予定説にしたがった考え方。各人が選ばれているか、棄てられているかは永遠者の判断すなわち宇宙の摂理に属し、人間的な努力をもっては動かない。ただし地上的な成功は、選ばれていることのあらわれ(サイン)たりうる。

《ブライト・デイズ》〔フォックストロット〕

ブラック・マーケット
——闇の市に光あふれて

銀と金とが光を投げる

珊瑚の海から空までブルーなバルトの海

マネーの力で、すべての時間がカチカチ進む

行く手を導くかがり火のように、あらゆるものの

胸元からチラチラ値札がのぞいてる。

うぶな娘も欲情女も、ママの体もお金で売れる

すべては神の偉大な意匠

そうさ、闇の市に光あふれて

銀と金とが輝き添える

ネリッシュとオットーが加わって、三部のハーモニーを奏でる。手持ちぶさたで腹を空かせたスヴィーネ・ミュンデの住民が、青白い家畜のような辛抱強さでこれを見ている。実在してるのだろうか、この人たちは？　こんなにも時代物の、泥で光っている戦前のスーツやワンピースを着て、針金細工のマネキンと変わらない体をして。

遊歩道から出た彼らは、通りの角に立ち止まって、ロシアの歩兵と騎兵分隊の行進を見ている。

「すごい、どんどん来るよ。サーカスはどこでやるの？」とオットー。

「海岸を上っていった先だよ、坊や」ネリッシュが応える。

「海岸を上っていくと何があるって？」スロースロップがたずねる。

「気をつけろよ」ネリッシュが警告、「こいつ、スパイだぞ」

「『坊や』っていったな」オットーが噛みつく。

「スパイとは何だ」スロースロップも声を張り上げる。

「この男は大丈夫だ」シュプリンガーが二人の肩を叩いて晴れ晴れ男^{ヘル・ゲ・ミュートリヒ}ぶりを発揮する。

「この男にはしばらく前から悪いうわさが流れているが、拳銃一つ持っていないのだよ」そしてスロースロップに向かって「一緒に来ないかね、北の海辺へ。君にも興味深いだろう」だがスロースロップも馬鹿ではない。このごろ、このシュプリンガーだけでなく、誰からも奇妙な目つきで見られていることは承知している。

海岸を運んでいく船荷の間には六人のコーラスガールがいて、各自羽飾りとスパンコールの衣装を着込み、その上から古着のコートを被っている。トランクのスペースを節約するためだ。他に、楽団の連中が一揃い、それぞれのスタイルで酔いつぶれている。積荷は他に、大量のウォッカ・ケースとチンパンジー演芸団の一座。うち一匹をオットーの母さん、海賊ばりのフラウ・グナープが操舵室の隅に追いつめた。両者激しくいがみあう。女将が悪態をつきながら猿をつかまえようとすれば、猿はヘニヤリとしたバナナの皮で相手を叩こうと腕を振り回す。潰瘍持ちの興行主、G・M・B・ハフトウング¹⁰がオットーの注意を向けようと賢明だ。この男、いつも見当違いの相手に訴えてばかりいるのだ。「お母さんの相手はヴォルフガングなんだ！ お母さん、殺されてしまうぞ！」ヴォルフガングは彼の自慢のチンパンジーだが、情緒が多少不安定。ヒトラーの真似は上手なのだが、

9 このさき船は、スヴィーネミュンデからウーゼドム島の海岸線を北西に三十キロほど向かう。730〜731 ページ地図参照。

10 この男のイニシャルは、GmbH——ドイツ語で「有限会社」。

アテンション・スパンがとても短い。

「危険だなあ」オットーがぼそぼそと、「その猿、母さんの怖さ、知らないんだろ」

ハッチの菱形を通して見ると、この女傑の歴戦ぶりが想像できる。グッと身を乗り出して、満面のやさしさと口いっぱいの歯を浮かべてヴォルフガングにはほえみかけ、猫なで声でこう言うのだ。「ほら、母さんだよ」

「ねえ、君の母さんこんなケモノ初めて相手にするの——」スロースロップは満面に何というか、愛想のよい人殺しの表情をつくって、少年を驚かす、「だよな？」

「ああ、うちの母さん、すごいんだよ。相手がだれでも関係ないの、そいつをどうやって侮辱したらいいか、本能で分かるんだ。動物でも植物でも——一度なんか岩をのしってたよ」

「よせやい」

「本当だよ！ 去年なんか、デンマークの岸边に突き出ていたでかい珪長岩にケチつけたんだ」少年の表情から、後ずさりしたくなるような笑いが今にもあふれ出そう。「そいつのさ、結晶の形が不恰好だって、二十分も悪口並べてるんだぜ、信じられないよ」

コーラスガールたちはすでにウォッカの木箱をこじ開けた。ハフトウングが、頭のとっぺんに残っている頭髮の記憶をなでながら駆けつけて喚きたてる。あらゆる年齢の、やせこけた、ボロを着た男児と女児が、よろけながら板を渡り積荷作業に励んでいる。青空の下、チンパンジーは帆柱からアンテナから、ぶらんぶらんと乗り移る。それを海鳥が滑空しながら見下ろしている。風が出てきた。間もなく港に白波が立つだろう。子供たちが運んでいるのは一人ひとり違った形と色と大きさの櫛や箱だ。その脇でシュプリンガーは瑪瑙

瑠の眼に鼻眼鏡をかぶせ、モロッコ革の緑の帳面に書かれた品目をチェックする、カッターののんにくソース漬け十二ダース……コニャック三ケース……テニスボール二ダース……蓄音機^{ヴィクトロラ}一台……『ラッキー・ピエールのご乱交^{*11}』フィルム三巻……双眼鏡六十個……腕時計……u s w。それぞれの子供の欄にチェックの印。

やがて積荷はすべて甲板の下に収まり、チンパンジーは眠りに落ちて、楽団員が目を見ます。女たちはハフトウングを取り巻いて悪態をつき、頬をつねる。オットーが船べりを回って綱を引き上げ、それを子供たちが投げる。最後の綱が舞い、その目が中空に一瞬止まった、瓦礫の山と化したスヴィーネミュンデの街を涙の形に括りとりと、船が岸から離れたことを足で感じたフラウ・グナープが、船尾のサルもふり落とされそうになるほどの荒技で舵を回した。ハフトウングを囲んだ半ダースの娘たちもひっくり返り、たくさんのおみ脚と、お尻と胸が素敵にもつれる。

スヴィーネ川の、漏斗形に開いていく河口を抜けたところで船は、逆行する潮の流れを浴びる。防波堤のすぐ内側までくると、春の爆撃で水面下にできた裂け目から波が打ち寄せ白く泡立っているところがある。おっと、フラウ・グナープが突進を始めた。顔色一つ変えず舵輪を一杯に切り、ザスニッツ^{*12}行きのフェリーに全速力で体当たりすると見せかけ、すんでのところで向きを変える。手摺につかまったフェリーの乗客が、啞然とした眼で彼女を見つめ、よろけた足取りで甲板に戻る。それを見て女将は笑っている。「やめてよ、母さん」と、サイレント・オットーが操舵室の窓に顔を突っ込んで哀訴すると、肝っ玉おっかあは、返事がわりに歌いだした。轟きわたる大声、これは泣く子も黙る

11 *Lucky Pierre Runs Amok* = 『V』第八章でビッグ・ボーディーンが処刑台号の無線室で数々のボルノ小説を受信した話が語られるが、その一冊は映画化されていたようだ。

12 リューゲン島の観光都市。

《シー・シャンティ》^{*13}

バルト航路の海賊女王、誰にも手出しはさせないよ
ちよっかい出したら骸骨にして、海の底に沈めるよ
頭蓋に開いた目玉の穴を、泳ぎ抜ける魚が歌う――

「手を出したのが悪いのさ、ゴーリ・グナープの死をも恐れぬ
ビジネスに！」

戦艦とだってやりあうよ、スループ^{*14}なぞは皆殺し、

手心加えぬ一撃で何百人も地獄へ送る

「フライング・ダッチマン」^{*15} があたしと会うとき、すれ違いざま叫ぶのさ――

「オレも恐くて近づけぬ、ゴーリ・グナープの死をも恐れぬ

ビジネスに！」

そこで女将は舵輪をつかみ、速度を上げた。乗員たちは気づく――なんと、水面下に半身を沈めた商船の横っ腹へ突進しているではないか。さび止めの赤鉛が張り付いている黒い窪んだ鉄板が、ボロボロになった個々のリベットや、あばた状の鉄板のそれぞれが目の前にヌワツと大きく現わる。尋常じゃない、グナープ夫人の精神は明らかに失調している。スロースロップは目を閉じ、隣のコーラスガールにしがみついた。操舵室から叫声。次の瞬間、小船は左へ急旋回し、ペンキ膜の厚さにして数枚ほどの差で衝突を回避した。死を

13 水夫たちの労働歌。
ソロに引きつづき、各連
四行目の引用符の中はコ
ーラスで歌うのだろう。

14 その昔は、さまざま
なサイズの戦闘用帆船
を指したが、ここではヨ
ット・レースに使われる
一本マストの帆船のイメ
ージでいいのだろう。ピ
ンチョンの後年の作品
『LAヴァイス』では、
スループ船が重要な意味
を担う。

15 伝説の船乗り。嵐
など平気だと豪語して、
雷神の呪いを受け、七年
に一度上陸を許される以
外は漂流を運命づけられ

夢想していたオットーは不意を襲われ大きくかたむき、よろけた足で船外へ向かって走っていく。

「これが母さんのユーモアなんだ。すごいセンスだろ」と言いながら目の前を滑っていくオットーのセーターをスロースロップがつかむと、女の子がスロースロップの燕尾服の尾をつかむ。

「母さんは、ちょっと非合法なことに手を出しているから心配だよ、ぼくは母さんをどうしていいかわからない」

「かわいそうに」といって、コーラスガールがニッコリする。

「オー」とオットーが反応した。

若い二人がなごむ姿を見ると、いつもうきうきしてくるスロースロップは、船尾にいたフォン・ゲールとネリッシュに加わる。グナープ夫人は船をぐいぐい引き回し、北西に進路をとった。白く波立つ、潮の薫るバルトの沿岸。船はのぼる。

「なあ、この船、どこへ行くんだ？」と、スロースロップが陽気にたずねる。

ネリッシュが睨んだ。フォン・ゲールが穏やかに「あれがウーゼドム島だ」と説明する。「その片側はバルト海に面し、さらに二つの川にも挟まれている川の名はひとつがスヴィーネ、もうひとつがペーネ。わたし等はたった今スヴィーネ川を通ってきた。そこがスヴィーネミュンデで、スヴィーネミュンデとは『スヴィーネ川の河口』という意味である」

「わかった、わかった」

「この船はいまウーゼドム島を回って、ペーネ川の河口にある場所を目ざしている」
「ってことは、その場所の名前は……わかったぞ……ペーネミュンデだろ」

た。ヴァーグナーの同名のオペラ（邦題「さまよえるオランダ人」）で歌われる。

「ご名答」

「それが何か？」ここで数秒。「ああ、そうかあ、なーんだ、ペーネミュンデか」

ネリッシュはそこでロケット開発に関わっていたそうだ。今はロシアに占領されている。それを案じてか表情は曇りがちだ。

「そこには液体酸素工場もあるから、わたしも目をつけていたんだ」シュプリングーも消沈気味だ。「液体酸素のチェーレン展開を考えていたのだよ——いまだって、フォルケンローデの工場を狙っている。ゲーリング研究所の敷地にあるやつだ」

「ノルトハウゼンの地下は、液体酸素発生装置¹⁶だらけだったぞ」スロースロップが教えてあげる。

「ありがとう。それもさっそくロシアに押さえられただろう。困ったことだ。連中は何をやってるか分かってないんだが、それを言う気にもなれないほどだ。あまりにも〈自然〉の理に反している。東へ向かう道路は昼となく夜となくロシアの車で一杯で、あらゆる種類の掠奪が行われている。だが明確なパターンが全然ない。ただ剥がして持っていくだけじゃないか」

「ひどいなあ」ここでスロースロップは抜かりなく、「あの〈S装置〉ってのは、もう見つかっただと思いますかね、フォン・ゲールさん？」

「おいおい」シュプリングーの目が鋭くなった。

「こいつ、OSS¹⁷だろ」ネリッシュが呻く。「だから言ってるのに。この男は、消したほうが安全だって」

「〈S装置〉の値はだ、一万ポンドに上がってきている。前金で半額だ。興味があるか

16 圧縮空気を膨張させる冷却法によって得た液体空気から、より沸点の低い液体窒素を分留して作る。英語の通称は「LOXジェネレーター」(上巻637ページ)。

17 CIAの前身。上巻512ページ参照。

わう」

「全然」でもアシタ入手したんでしょ、ノルトハウゼンで聞いたよ」

「そりや違う」

「デアハルト——」

「大丈夫だ、この男は、クラウス」このときのシュプリングの目つきには、スロースロップも憶えがあった。そう、車のセールスマンが同僚に、おい、こいつは本物のカモだから、くれぐれも驚かして逃がすなよ、というときの目つきである。「それは、きみ、シュティンで仕込んでおいたデマさ。チチエーリン大佐とやらが、どんな反応をみせるか見ようと思ってな」

「またチチエーリンかよ。あいつなら、そりや反応するだろうさ」

「それを、これからペーネミュンデで確かめようじゃないか」

「すごいや」スロースロップは続けてしゃべる。ポツダムで彼に会ったこと。チチエーリンはロケットの部品より、ゲリーによれば、かのエンツィアン大佐に対する策謀で頭がいっぱいになっているとのこと。これが二人の闇商人の関心を引いたかどうか、表情からは見えてこない。

その先、スロースロップの話はとりとめなく崩れていって、ヘレン・トレントがどうで、ステラ・ダラスが何して、スターの妻メリー・ノーブル¹⁸がどうなったのと、固有名詞をいっぱい並べてメロドラマの筋を語ってきかせた母のナリーンの午後の語りと変わらぬようなものになった。

「チチエーリンは複雑な男でな、エンツィアンをまるで……自分の分身というか——内に

18 三人とも、一九三〇年代から戦後にかけて、長期にわたって人気を保ったラジオ・メロドラマのヒロイン。

抱えた自分のブラック・ヴァージョンのように見なしていて、そいつは絶対消し去らなくちやいかんという思いに駆られているのかもしれない」

ネリッシュ ……何か……政治的理由でもあるのか？

フォン・ゲール…（首を振りながら）それは分らんよ、クラウス。中央アジアでの一件以来――

ネリッシュ ……っていうと――

フォン・ゲール…そう……〈キルギスの光〉だよ。おかしい話だよな――彼は帝国主義者と思われるのを激しく嫌ってるんだから。

ネリッシュ ……かれらはみんな嫌がる。だが、娘っ子がいただろ……

フォン・ゲール…ゲリー・トリッピングかね。自分を魔女と思っている。

ネリッシュ ……あんたの考えを聞きたい。ゲリーは、チチェーリンを見つけるために、自作自演の芝居をやり通す気にいるんだらうか？

フォン・ゲール…どうだろう、〈かれら〉が……それを仕組んだのではないだらうか

……

ネリッシュ ……だが、ゲアハルト。ゲリーは本心チチェーリンを愛してるんだぞ――

フォン・ゲール…しかし彼はゲリーと出会う約束をしているわけじゃないよな？

ネリッシュ ……おいおい、まさか――

「おいおい」スロースロップが慌てたようすで口を挟む。「あんたらいったい何を話してんだよ？」

「バラノイアだ」シュプリンガーが非難がましい調子で応えた。まるで楽しんでいるゲ―

ムを邪魔されたときのような口調だ。「あんたは聞いてもわからんだろう」

「失礼、ちょっとゲロしてくる」^{チャーム・スクール} いかにも躰け学校の落第生、タイロン・スロースロップ君らしい返答で、ここが陸地であったなら、高級なヒット作となっただろうが、ここは海の上。波高きこのバルト海では、吐きたい気分にならないのが無理だった。チンパンジ²⁰ーも防水帆の下に寄り集まってゲロゲロやっている。手すりにつかまって吐いている楽団員とコーラスガールの一団にスロースロップも加わった。吐いたものが風で戻ってこないようにするには、船の揺れのどの時点で吐くのがよいかなど、みんな、事細かくコツを教えてくれる。フラウ・グナー²¹は警告していた。こんな好天気の日、あたしの船にゲロをつけたりする人はいないだろうねと言って、ドクトル・マブゼ¹⁹がもたらすような氷の微笑を浮かべていた。その彼女が歌う「海の船唄」の太い声が、いま操舵室から聞こえてくる。スロースロップは、ドイツ語の音を引き延ばし、船べり越しに吐きもどす。

こんなから騒ぎを乗せて、彼ら決死のビジネス隊は、靄のかかった夏空の下、ウーゼドム島²²の沿岸を進んでいく。岸には二段の緑の丘がゆるやかに広がり、島の高みには松や樅のこんもり繁る丘が続く。白い浜にわびしい栈橋が見える小さなリゾート・タウンが、リユーマチにかかったみたいで遅さで真横に動いていく。ところどころ軍の所属とおぼしき船舶の——おそらくロシアの魚雷艇の——死骸が浮いているのだろう。だがフラウ・グナーの行く手を阻むものはない。引っ込んでまた顔を出す太陽が、一瞬のまぶしさのなか、みんなの影のまわりを黄色に染めた。一日が終わる前、物影がすべて東北東の一定方向を指す時間になるといつも、ベーネミュンデからのテスト・ロケットが海へ向けて打ち上げられていた。その時間は——正確な時刻は一年を通して変化する——ヘロケットの正

19 怪人マブゼ(349ページ参照)は、テレビバシ²⁰ーで催眠術をかけることができる。するとかけられた人の顔に「水の微笑」が浮かぶ。

20 「オ」と「エ」の間音。

21 バルト海の潮が作った大きな砂嘴の一部だが、川で分断され「島」と呼ばれる。島の北西端がベーネミュンデ。²²730ページの地図で、その「顔」を見ておこう。

午〜として知られ……信奉者はそのとき空を満たして鳴り響く轟音に感じ入っただろう。その音にいま比せられるのは唯一、町の人々が信じる正午のサイレンだ……内臓が石のよう²²に固く震える……

見る前からこの場所を感じることが出来る。船縁にぐったりともたれ掛かり、タールの匂いのする防舷材^{フエンダー}に頬をつけて涙をたらしていても、胃の中が海面のように波だっている²³もわかる。ロコソフスキー將軍と白ロシア軍による春の攻撃で焦土となった今でもわかる。それは顔だ。骨と化した、あるいは腐食した顔として、地図に描かれる。南西を向いてその横顔の、眼窩は湖沼、鼻の穴と口は、水力発電所を経てすぐに出るペーネ川の河口の入江である。画風はヴィルヘルム・ブッシュ²⁴の漫画に似ていなくもない。いたずら好きの少年が標的にしそうなノロマ顔——こんなヤツなら、そいつのタンクから飲用にエチルアルコールを抜き取ったっていいだろう。生乾きのコンクリート面に大きな字でワイセツな言葉を書きなぐるのもいい。真夜中に忍びこんでロケットを発射させてしまえ……

低い、燃え尽きた建物。コンクリートに焼き付いた灰がつくる、網状の迷彩模様（これらの壁が燃え輝いたのは束の間だった。市民の絹の上着が燃えたのと同じ程度だ。沿岸の建物の中を、技師たちの短い影と静かな声で満ちた談話室を照らしたのは……そいつはただ炎上しただけではないのか？ 何を矯正するでも、何を警告するでもなく。到達すべき新たなレベルを模索することもなく……だが、空に見える、あれは誰だ？ モデルロケットの頭上で、あんなに礼儀正しく穏やかに見つめている——顔をすっきり多色石版画の夕陽に染めて、黒縁メガネの中の網を広げたような眼——そうか、見えてきたぞ、これはカモフラージュで、その正体は、誰だろう、へ空の自転車ライダー²⁵だな。本日のヘロケ

22 対ドイツ戦局を転換させたポーランド出身のコンスタンティン・ロコソフスキー將軍は、白ロシア戦線の司令官としてベルリンの戦いに参加。終戦直前の五月五日にペーネ川に侵入してドイツのロケット関連情報を掠奪した。

23 ドイツで国民的に人気の高いユーモア画家（一八三二—一九〇八）。

ットの正午のシルエットが、エドワード朝のスタイルで、輝ける大空の胸に抱かれている。空の光が死滅する、そのラッシュ・アワーの内側で起こる二つの円形爆発。ライダーがくるりと回って、静かに滅びるさまを見よ。この男、タロットでは「愚者」と呼ばれるが、ここへゾーンでは「お調子者」という。今は一九四五年。まだ始まったばかり、まだまだ無垢だ、ある部分は）。

無残に焦げた格子構造。かつてこれは木材だった。いまは張りを失い溜まっているだけ。緑色の人影が廃墟にチラリと光る。尺が違っていて混乱する。一座は等身以上の大きさに見える。ここは動物園か？ 射撃場？ どちらの要素も備わっているではないか。フラウ・グナープは泥の海をこねるようにハーフスピードで湿地帯を陸地へ向かう。占領のしるしが増えてきた——トラックの駐車場、テント、栗毛と斑と純白と赤毛の馬が群がる囲い柵。緑の葎の茂みから野生のカモが爆発したように飛び立ち、船上でスイングして後方にまわり、航跡の中に舞い降りて、クワックワックと二本足をばたつかせる。空高く、太陽の残光の中を白尾の鷺が舞い上がる。爆撃と砲撃で空いたクレーターは、スムーズな唇を開いて、青い海水を口を含む。兵舎は屋根が吹き飛ばされたまま。兵士の——没落するヨーロッパのヨナたちの半数に上る数の——体軀を支えた脊椎や肋骨が、日干しになった白色を晒している。だが樺や松の木々は緑を伸ばしはじめた。瓦礫が除かれ、家屋やオフィスの建築のため地面が平らかになったところに——舗装の割れ目にも、どこにも生命は勢力を伸ばしていくだろう。一九四五年夏の緑がかけ足で追いついてくる。陸地の奥では森がいまも密度を増している。

通りすぎる黒焦げの開発工場跡のほとんどは地上に散乱している。裂かれたり壊れたり

24
161 ページのステファニアのセリフによると、スロースロップもヨナの一人のようである。

将校の車が、船荷置場の角をガタガタ曲がって、ギーッと停まった。後ろのドアから降りてきた少佐は、デュエイン・マーヴィをさらに一回り太らせた恰幅だが、ずっと優しそうで、どこか東洋的な顔つきをしている。羊の毛のような捻れた白髪が頭一面を覆っている。「フォン・ゲールじゃないか！」腕を伸ばして、目を潤ませて——それ、本物の涙かよ？「フォン・ゲール！オオ、わが友よ！」

「ジダーエフ少佐か」ゆったりと舳先を跨いで降りたシュプリンガーが挨拶する。少佐の背後から、作業服姿の兵士たちを詰め込んだトラックが近づいてきたようだ。積荷降ろしをするのか？それならサブマシンガンやカービン銃をかついでいるのはなぜだろう……

案じた通りだ。誰にも動く間も与えずにトラックから飛び出した兵士らは、銃を構えてジダーエフとシュプリンガーを取り囲んだ。「大丈夫だ、危い目には遭わせん」ジダーエフはこちらに向かってにこやかに手を振り、シュプリンガーの肩を抱いて車へ戻っていく。「きみらの友人をしばらく預かっておくよ。きみらはそのままやるべきことを続けて帰ってくれていい。友人は必ずスヴィーネミュンデに無事に返すから」

「何てやり方だい」操舵室から出てきたグナーブ夫人が息巻いた。ハフトゥングも出てきた。顔を引きつらせ、あちこちのポケットに手を差し入れたり抜いたりしている。「だれを逮捕するんだ？わたしの契約はどうなる？われわれの命運はどうなる？」将校の車が去り。下士官が隊列を組んで船上に上がってきた。

「ちくしょう」と言いながら沈思するネリッシュ。

「逮捕されたってことかな？」

「チチチェーリンが関心をもった、それで反応してきたんだろう、おまえがいった通り」

「そうか、ってことは――」

「違う、違う」手を袖にかけて、「シュプリングの言う通り、おまえは無害なやつだ」

「彼には警告したんだが、笑っていたよ。『また一跳ねってことだ、ネリッシュ。跳ね駒^{シュプリング}の役回りは続けねばならん、そうじゃないか?』とな」

「で、これからどうすんの? 救出かい?」

船体中央部が騒がしい。ロシア兵が防水帆をめくり上げたらチンパンジーが出てきた。ゲロにまみれ、ウォッカにまで手をつけているやつらだ。ハフトウングは目をパチクリさせながら震えている。仰向けになったヴォルフガングは、ボトルを足で挟み、ブクブク音を立ててウォッカを啜っている。おとなしくなった猿もいれば、ケンカを売り歩いている猿もいる。

「どんな形であれ……」ネリッシュの、もってまわった言い方に、スロースロップは嫌気が差してきた。「あの男には充分大きな借りがある」

「オレにはない」突然チンパンジーの黄色いゲロが飛んできた。スロースロップは身をかわして、「シュプリングには自力でがんばってもらえればいいよ」

「シュプリングは、壮大な口をきくが、心の中までパラノイドではない――この筋の仕事でパラノイアは命取りだ」

一匹のチンパンジーがソヴィエトの伍長の脚を噛んだ。悲鳴をあげた伍長が吊り革からはずしたトカレフ銃²⁷を腰の位置で発射したとき、相手はすでに揚げ綱めがけて跳び上がった。さらに十数匹、多くはウォッカの壺を手に、群れをなして渡り板へ向かう。「逃

27 ロシアの士官が好んで携行した自動拳銃。

がすな」ハフトゥングが叫ぶ。トロンボーン奏者がねぼけまなこで、いったい何の騒ぎだ
い、とハッチから首を出す。状況がつかめぬうちに、その顔を三匹分のピンク色の足の裏
が踏みつけていく。午後の陽にスパンコールを煌めかせ、羽飾りを揺らしながら娘たちが
逃げる。ヨダレを垂らしたソ連赤軍兵士が彼女らを船首から船尾へ追っていく。グナー
プ夫人が汽笛を鳴らす。驚いた猿たちが一斉に岸へ殺到。「つかまえてくれえ」ハフトゥン
グが懇願、「だれかあ」オットーとネリッシュに挟まれたスロースロップは——猿を追っ
てか、女を追ってか、それとも積荷を陸上げしてきたのか——兵士らに押し出されて上陸
した。水の跳ねる音。罵声。船の反対側からは黄色い悲鳴。その中を、コーラスガールと
楽団員が右往左往する。いったい何が起こってるのか、見ていてもよくわからない。

「みんな聞いて」グナープ夫人が船から身を乗り出した。
フラウ・グナープの意図のこもったウィンクにスロースロップは気がついた。「作戦が
あるのね」

「陽動作戦だよ、ほら」

「ええっ？ 何？」

「チンパンも楽隊も踊り子もよく目出つからね。その間にあんたら三人、コッソリ出かけ
てシュプリングーを捕まえておいで」

「隠れていればいいんだ」ネリッシュがギャングの目つきであたりを見まわし、「誰も気
づかない。ヤー・ヤー！ その間に船が出ていけば。わたしらも乗っていると思うさ、き
っと」

「おれはやだね」とスロースロップ。

「ハッ！ ハッ！」とフラウ・グナープ。

「ハッ！ ハッ！」とネリッシュ。

「北東の角に船を停めて待つてゐるからさ」と、マッドな母さんは続ける。「小島と、前浜にできた三角形の陸地の間の水路だよ」

「テストスタンドX」

「いかす名前じゃないか。今ごろはもう潮も充分満ちてゐるだろう。焚火が合図だからね。

オットー！ ほら、索を外して投げておくれ」

「承知しやした、母さん！」

スロースロップとネリッシュが全力ダッシュで船荷置場の裏へ回り、有蓋貨車を見つけ、中へ隠れる。誰にも見られずに。チンパンジーはあらゆる方向へ走り、追いかける兵士たちはすっかり激昂しているようす。どこかでクラリネットが音階を吹いた。船がエンジン音を立てる。スクリュウが激しく回り、船体が走り去る。しばらくして、オットーとその彼女が、息を切らして有蓋車に這いのぼってきた。

「さて、ネリッシュ」スロースロップから、もっともな質問である。「シユプリンガーはどこに連行されたんだろう、ねえ？」

「自分に見えたかぎりでは、第四ブロックと、南へ延びるコンビナート一帯は無空地帯だ。想像するに、おそらくテストスタンドVIIの周辺の組立て工場ではなからうか。あの大きな楕円の土手の下だな。地下トンネルも地下の部屋もあって——司令本部にはもってこいだろう。ロコソフスキーが殲滅命令を出したにしては、けっこういい状態で残つてゐるわ」

「銃は持つてゐるのか」ネリッシュは首を振る。「おれにもない。あんた、それでほんとに」

闇市の仕事人なの？」

「自分は慣性誘導の部局にいた。今さら転向しろと言われてもな」

「じゃあ、おれたちは何を使って戦うんだい？ 頭かい？」

有蓋車の割り板を通して見える空が暮れてゆく。雲はいまオレンジ色、タンジェリン色、熱帯カラード。オットーと娘が隅でヒソヒソ話している。「カサノヴァ・ボーイめ」ネリッシュがおぞましげに言う。「母親から五分離れると、もうこれだ」

オットーは自分の信じる〈母親陰謀説〉を熱心に説いているのだった。この話を、女の子にやさしく聞いてもらえる機会はめったにない。母親たちは、年に一度、秘密の大集会を催して、情報を交換している。レシピのこと、ゲームのこと、子供に使うと効果のあるフレーズ。「ねえ、きみのお母さん、きみをやましい気持ちにさせるときに何て言う？」

「『おまえのために身を粉にしてるのに』っていうわ」

「そうだろ！ そう言って、あの恐ろしいキャセロールを作っただろ。ジャガイモと、タマネギと——」

「ハムもよ！ 小さくちぎったハム——」

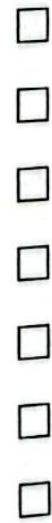
「だろう？ だろう？ これが偶然の一致であるもんか。ぜったいヘマザー・オブ・ザ・イヤー」のコンテストをやってるのさ。授乳とか、おむつ替えのタイムを計って、キャセロール作りを競って、そうさ——最後のほうは、ほんとに子供を引っぱり出してさ、州の検察官を舞台に上げて——『アルブレヒト、これからママが来るよ。ほら、このルガー拳銃はしっかり弾丸が入っているから、好きなように使いなさい。州はいっさい、きみの罪を問わないから。ほんとに何をしてもいいんだ。しっかりやんなさいよ、坊や』弾丸な

28 ドイツ軍が使っていた八連発セミオートマチック銃。

んか入ってないよ。当たり前さ。望望なんだけど、子供はそれを知らされてない。で、ホントに引き金を引いた子の母親だけが決勝に進めるの。決勝では精神科医がやってきて話しかける。ストッブウォッチを持ったジャッジが脇にすわって、子供の頭が狂うまでの時間を競うんだ。『オルガちゃん、あの長髪の詩人とのつきあいを邪魔してくれたムティに感謝しないとね』とか、『君とお母さんとは、何というか、ずいぶん親密な関係のようだね。ヘルマン君、お母さんの手袋で自慰していたの、見つかったときは憶えているかな、えっ？』病院のスタッフが待機していて引きずっていくんだ——ヨダレをたらし、大声を上げ、痙攣している子どもをね、これで最後まで勝ち残った母親の頭に、花飾りつき帽子が被せられる。手には宝珠と笏、この場合は、金メッキしたポットローストと鞭なんだけどね。オーケストラは『トリスタンとイゾルデ』を弾いてるの」

29 王権や女王の権威を象徴するもの。

30 不義の愛が死をもつて成就する騎士と王女の物語。アーサー王伝説にも組み入れられ、ヴァーグナーのオペラになって現代に伝わる。



一行は夕方の最後の薄明の中へ出る。眠たげなペーネミュンデの夏の夕暮れ。カモが頭上を西へ向かう。ロシア兵はいない。船荷置場の入口の上で、一個の電球が発光している。オットーと少女は手をつないで波止場のほうへさまよい出る。チンパンジーが一匹走りよってオットーの別の手をとる。北へ南へ、バルト海が低い白波を返し続ける。「よお」クラリネット奏者が声を掛ける、「バナナ食うかい」チューバ奏者が、バナナを入れた口をモグモグ。楽器の口にも、でかい一房が入っている。

出発したときには、すっかり夜になっていた。シュプリンガー救出隊は鉄道線路沿いを内陸へ。炭の積み上がった土手の両側に松の木がそびえている。太ったまだら兎が前方を走り去る。いや、白い斑点が見えただけで、ウサギかどうかの保証はない。オットーのガールフレンドのヒルデが、彼の帽子一杯に草の実を入れ、しなやかな足取りでやってくる。草の実は丸く、灰青色で、甘そうだ。楽団員は、ありとあらゆるポケットにウオッカを詰め込んできた。これが今夜の夕食だ。ヒルデがブルーベリーの茂みにひざまずき、代表して食前のお祈りを捧げる。湿地の中から今宵初の蛙の鳴き声がわき上がり、餌を求めて舞

っているコウモリの高周波音がこれに混ざる。木々の高みで風が鳴っている。遠い彼方から銃声が一発。もう一発。

「わたしの猿を狙って撃ってるのか？」とハフトウング。「一匹二千マルクもするんだぞ。それだけの損失をどうやって補填できるね」

ネズミの一家が一目散に線路を横切り、スロースロップの足を飛びこえていった。「こ
こ一帯は、広大な墓場になっていると思ったが、そうでもないんだな」

「われわれが来たとき、森を打ち払うのは必要な範囲に留めた」ネリッシュが回想する。

「森にも生き物にも、たいして手はつけていない……奥にはまだ鹿もいるだろう、どこか
にな。黒ずんだ角をした大きなやつだ。鳥は、タシギとクロガモとガンがいたな。発射実
験の音がすると海へ逃げていくんだが、辺りがしずまるとまた戻ってきたもんだ」

飛行場に着くまでのあいだにも二度、森の中へ逃げ込まなくてはならなかった。一度は
警備パトロールが来たとき、二度目は、ペーネミュンデ・イーストから蒸気船がやってき
たとき。蒸気船のヘッドライトは闇に薄くただよう霧を切り裂く。自動小銃を持った兵士
らがステップや梯子に手を掛けている。夜の闇に金属が軋り、そよぐ風に向かって銃が鳴
る。発砲する兵士に緊迫感はない。「われわれを追ってきたのかもしれないぞ」ネリッシュ
が声をひそめる。「さあ、こっちだ」

森を抜け、あたりを見回しながら広い飛行場へ。空に新月の鎌の刃形がくつきり浮か
んでいる。骨のような光のなかを、腕を垂らした猿どもがトコトコ走る。気を抜けない道
だ、誰もが恰好の標的になる。楯になるのは、撃墜された飛行機だけ——錆びた機材と、
焦げたベンキ、カサメの翼を思わせる折れ曲がった翼が地面にめりこんでいる残骸だ。旧

ドイツ空軍基地の建物群から、南に向けて灯りがぼんやり広がっている。飛行場の遠くの隅で、たまにトラックが小さな鳴き声を立てる。兵舎からは歌声。どこかでラジオも鳴っている。何語の放送かも知れないが、この真剣な一本調子はニュースを伝えているのだろう。おまえがいなくてもな、スロースロップ、世の出来事は続いていくんだ……

滑走路仕様の舗装の上を気づかれずに渡り切り、道路へ出る。側溝にうずくまって、近づく音に注意を払う。左手にいきなり夜間着陸用の黄色い光が点いた。海へ延びる二列の光が二、三度ふらふら明滅してから安定した。「誰かさんのお出ましたぞ」とスロースロップ。

「いや、お帰りだろ」ネリッシュが言い放つ。「急げ」

再び松林の中、テストスタンドⅦへ向かって固い土の道が続く。はぐれていた女たちとチンパンジーも合流し、松の匂いがみんなを包む。行く手の両脇には枯れた松葉が吹きだまっている。傾斜面を下っていくと木立がばらけ、灯りが見える。視界にテストスタンドの敷地が浮かんできた。組立工場は、三〇メートルの高さはあるようだ——背後に星々を隠している。明るいスリットは引戸の開いているところか。そこから外へ光が漏れ出ている。ネリッシュがスロースロップの腕をつかんだ。「少佐の車のようだ。エンジンが掛かっている」サーチライトがいっぱい、上部に有刺鉄線をめぐらした柵に据えてある——巡回中の警備兵士もいっぱい、一個師団はいそうである。

「いよいよこれまでかね」スロースロップも少々緊張ぎみである。

「シッ」飛行機の音。単発エンジンの戦闘機だ。松の森林の上を低く旋回しながら近づいてくる。「時間がないな」ネリッシュがみんなを集め、命令を下す。コーラスガール隊は

前線から出撃、歌って踊って、女に飢えた蛮人どもを引き寄せる作戦である。オットーは少佐の車をやつつける。ハフトウングの担当はみんなをまとめて、フラウ・グナープの船と落ち合えるようにすること。

「ティッツ&アス」女たちがぶつくさ言った。「あたしたち、ただのオッパイとおしりになれって」

「うるさい」G・M・B・ハフトウングが声を荒げる。手助けが入るたびに、この興行主はいつもこういう反応をする。

「その間に」ネリッシュが続ける、「スロースロップとわたしとで中に入ってシュプリンガーを探す。見つけたら、やつらに発砲させるから、それを合図に、みんな死ぬ気で走れ」

「そりゃ発砲されるわな、請け合いだ」とスロースロップ。「で、こいつは使えないかな?」いい考えが思い浮かんだのだ。似非モロトフ^{カクテル}火炎壘。ゾイレ・ブマーが過去によく使ったというトリックだ。手に持ったウォッカのボトルを指さしながらニヤリとする。

「だめだ、そいつはろくに発火もしない」

「ガソリンだと思わせればいいんだよ」スロースロップの指先は、最寄りの娘のダチョウの羽を引き抜いている。「それにさ、おれたちを安心させる心理的な効果も考えてよ」

「フェリックス」クラリネット吹きが、チューバ吹きに尋ねる。「ここはどこだ? オレたちはいかなる難儀にさらされている?」フェリックスはバナナを食べ続ける。彼は現在に生きている。そのうちに彼は森の中へ入って行って他の楽団員に加わった。ピーヒャラ・ブースカやりあいながら森の中を周回する音が聞こえる。ヒルデとスロースロップは

ニセ火炎塵を作り、他の娘たちは「ツイッツェ・ウント・アーシユ^{*1}」を連呼しながら坂を下っていく。

「それっぽく威嚇するということだな」ネリッシュがささやく。「マッチが必要だ。誰か持ってるか？」

「持ってるない」

「わたしもない」

「ヤバッ、おれのライター、石が切れてた」

「コット^{*2}」ネリッシュが両手を挙げてドイツ語で罵った。「コット」林の中へ進んでいてフェリックスと彼のチューバに鉢合わせする。「あんた、マッチもってるないよな」

「ジッポのライターならあるけどね」フェリックスが応える。「コロナ・コロナも二本、米軍の将校クラブからいただいたよきた——」

一分後、ネリッシュとスロースロップは極上のハバナ葉巻の先が赤く光るのをそれぞれ手のひらでしっかり隠して、漫画の二匹の猫のようにテストスタンドVIIへ忍び寄る。ベルトにウォッカ爆弾をくくりつけ、芯代わりのダチョウの羽を海風に揺らしながら。発射台は、上部に松の木が生えた、砂と低木の土手に囲まれている。その土手に這い上って、背後の組立工場から侵入するという計画だ。

いまネリッシュは誘導係をつとめている。もとより誘導が担当だ。毎日ヘロケットの正午³になれば、死か、お祭り騒ぎが生じるこの場所で。……ネリッシュ自身は、どちらにもあまり関わることなく今日の日を迎えることができたのだが。

実際、これほど備えのないふたりが〈聖なる中心^{ホーリー・センター}〉に近づくのは、チチエーリンとジャ

1 Zize und Arch.
先の「ツイッツとアス」のドイツ語。

2 Kot は英語の Shit に当たる罵倒語。

3 聖なる空間＝世界の中心、という考えを、宗教学者ミルチャ・エリ阿德が『聖と俗』で展開している。前近代の宗教的社会にあっては、人々の暮らし自体が、聖なる空間を中心として営まれたことの例を、上巻609ページ註16でふれたヘレロ族の村に見ることができる。

キップ・クランが中央アジアの草原を踏み越えて〈キルギスの光〉を見いだしたとき以来のことだ。およそ十年ぶり。記録を破ることに身の危険が付きまとう点は、このスポーツもベースボールの場合とさして変わらない。野球もまた、不吉な白いクモの糸が張り巡らされているスポーツだ。

〈ホーリー・センター・アプローチ〉は、もうじき〈ゾーン〉を代表する競技としての人氣を獲得するだろう。過熱の絶頂が迫っている。競技史上最大規模のチャンピオンと達人と魔術師が参入し、正直で楽しいものである限り、太陽がすべての企画を支配するだろう。強者がゲームを制し、確率のガウス曲線はきつとヘルニアができたようになるだろう。ネリッシュやスロースロップのような新米のドジは、最初からゲームに入れてもらえるまい。以前にも（少なくともアヌビス号乗船時には）指摘のあったことだが、スロースロップの自我はこのところ希薄化し、拡散しつつある。クルト・モンダウゲンのオフィスは、これから徒歩でも遠くないが、そこでクルトは、後に〈モンダウゲンの法則〉として知られる法則を発表した——「人格密度は時の帯域幅に正比例する」と。

「時の帯域幅」とは、きみの現在、きみの〈ナウ〉のことだ。例の Δt のことだが、これを従属変数として見る。過去と未来に自己の根を張れば張るほど帯域幅は大きくなり、ペルソナは堅固になるというわけだ。しかし、〈ナウ〉の感覚が小さくなるにつれて自分が薄まって、五分前に何をしていたか思い出せなくなるところまで行ってしまいうこともある。今のスロースロップなどは、ここで、この巨大な楕円の盛り土で何をしているのかも憶えていられない……

「あのさ」口をだらりとさかせてネリッシュの方を向くなり「おれたち今……」

4 諸学の研究を統合しつつ重力からの超越を目指したロケット開発が、戦後世界の〈中心〉となつたというヴィジョンは、核ミサイルを配備した東西両陣営の対峙の構図が、どこから生じたかを考えてみれば納得できる。ここでいう「強者」のうちには、IBMもスターリン政権も含まれるだろう。

5 ガウス曲線（正規分布曲線）は、ランダムな出来事を釣り鐘形で示すものだが、そこに（神の）選択が働く場合、その曲線は破れて脱腸状態を呈する、という冗談。

6 それより前に、雨の日にマルゲリータと暮らし始めたベルリンの家屋のシーン（74ページ）で、スロースロップの自我が拡散し「アンチ・バ

「今、どうした？」

「え？」

「『おれたち今……』って言って、やめたる」

「そうか、そりやまた変なこと言ったもんだ」

ネリッシュはいえ、あまりにも頭がビジネスのことだらけで、この偉大な楕円^{*8}の盛り土を見ても、自分の業務に関係すること以外は目に入らない。対照的にグレタ・エルトマンは、ここで赤錆色の高官たちが、期待の表情を浮かべ、深く頭を下げるのを見た。実際彼らはその通りのことをした——顔をフードで、スムーズな〈無〉のカウリング^{*9}で、覆って……タナツがグレタの肌を鞭打つそのたびに、グレタは連れていかれる、改めて〈中心〉へ向かって刺しこまれていく。一発ごとに、奥へ奥へと……いつかとうとう、それを目にするだろう。最初の一瞥を得るだろう。その瞬間から、それが彼女の絶対的なニーズになる。求める標的に支配されるようになる……ヒュルヒュル・バシーン！ 頭上に建った骨墨色の脚組みが、大いなる外縁に向けて傾いている。その姿を木の上に見せる光は荒んだ腫れ物の紫色、冷たく遅く燃えるペーネミューデの太陽の色……どこか知られた〈低き国〉^{ロウ・カントリー}の堤防の上から遠く眺めると、空は一樣な黄色味を帯びた褐色に覆われ、日輪はその後ろのどこにあってもおかしくない。回転する二つの風車の十字が、天翔る自転車^{サイクリスト}の車輪のスポークのようだ、かの恐怖の〈ライダー〉^{ライダー}が漕いでいるのか、スロースロップの〈ライダー〉、彼の二つの爆発が、空をゆくスロースロップの自転車乗り——いや、しかし〈それ〉さえもスロースロップの前頭葉を一瞬明るくよぎっただけで、表皮に溶け込み消えていってしまう。彼はここでもまた過ぎゆかれる……みずからの棄民性が、

「ラノイア」に向かっていることが書かれていた。

7 従属変数とは、他の変数に応じて変化するもの。この場合「強弱」の変化する〈自己〉が、その占める時幅(Δt)によって決定される関係にある。ピンチョンはこれ以前にも、『V.』のファウストや、『鏡壳』ナンバー49の叫びのムーチョなど、自己を拡散または希薄化する人物を描いてきた。

8 「Test Stand VII」については英語版 *with data* に、写真付きの解説がある。打ち上げ台(ファイア・ピット)を囲むように、楕円の防風砂壁が高い土手をなしている。その土手に、冷却水を通すコンクリートの水路が組み込まれている。

その分また浮き彫りとなる。……こりやもう、変わりようがないんだから、望んだって無理だ、どんでん返しの理解の光がスロースロップの脳に射すなんてことはありえない。^{*10} 彼のあけすけな、脳髄とは名ばかりの神経叢の壁面から、これは影なき正午だとか、そうじやないとか、間に合わせのヴィジョンを得るのが精一杯。だが、どうか、空飛ぶへロケツトを解す〈卵〉よ、波長五〇メートルの無線波を空に飛ばす〈臍〉よ、この場に関わるすべての霊たちよ——スロースロップの無感覚を、彼のたるんだ無判断を赦したまえ。胸の前に握られることなき彼の拳を、どんな出会いに際しても緩いままの彼のハートを赦したまえ。……〈ヘルギスの光〉を見すごしたチチエーリンを赦したように。……もつとよい日がやってくる。

スロースロップが聞いている遠くの音は、巡回楽団のチューバとクラリネットで、それにトロンボーンとテナーサクスが加わって、何やら一曲始めようとしている……兵隊と女たちの爆笑が聞こえた……あっちでパーティーをやっているのか……お相手のない女もいるかな……「よお、おれたちもさ……えーと……あれ、きみは……何だっけ？」革の案山子であるネリッシュは、弛緩していくスロースロップに煩わされまいと、火炎壘を剥く決心をした。ウォッカの栓を抜き、ベルトに手をかける前に、鼻の下にもっていつて壘をゆする。スロースロップを見やるシニカルな目つきがセールスマン風だ。「ほら」と促すが、相手は白い壁の下にいて沈黙しか返ってこない。

「ああ、それがソリンだと思ってたけどさ、それは見せかけで、ほんとにはウォッカなんだよな、だろ？」
だが、上手のすぐ向こう、アーリーナの中に、いま一瞬見えた、アレは一体何だったのだ。

9 航空機のエンジンを覆う金属板。

10 『鏡売ナンバー49の叫び』で主人公エディバが、宇宙産業を支えるヨードダインの発祥地〈サン・ナルソ〉に近づいたときも、聖体示現の感覚に襲われ、神の〈言葉〉が聞こえてきそうになった。その〈言葉〉は、どうもスロースロップには届きそうにない。

ろ。途切れとぎれの月光の中に立つ、尾翼から先端までジグソーパズルのような迷彩模様
様に塗り分けられたアレだ……アレは本当にもう二度と、オマエを求めて落ちてこないの
か。夜中の最悪の時間にもか。鉛筆の言葉が、それが意味する物とほんのΔ¹¹しか離れてい
ない時¹¹もか。その内側で生贄は体を引きつらせ、数珠^{ビーズ}をまさぐり、木に触れて、あらず
る「操作のコトバ」を逃れようとしている。それはもう、オマエをつかまえ連れていくこ
とは絶対にならないのか？

給水塔の近くで上り坂が始まった。坂が外縁のてっぺんまで続く。砂は靴に入り、音を
立てて斜面を下る。頂上にあがり、背後をチャリふり向くと、木々の間を通して照明を浴
びた滑走路が見える。ちょうど戦闘機が着陸したところだ。それを取り囲む人影が、給油、
整備、機体の転回に追われている。半島に向かう側には、ぼんやりとした光のパッチやカ
ーブやジグザグが見られるが、こちら側、昔の「開発場」がある南側は真暗闇である。

松の枝を押し分けながら再び下降、「卵」の中へ降りていく。ドイツ製のハードウェア
を根こそぎ抜かれていったそこは、ロシアの役人用のモータープールとなっている。砂壘
を降りるふたりの前方、ジープとローリーが百ヤードも連なる向こうに、巨大な「組立工
場」の一角が浮かぶ。その右手に、三段、四段と積み上がった実験施設の骨組みフレーム
の最上部には、かまぼこ形の覆いがあり、骨組みの下には、浅いV字型の長い溝が掘られ
ている。「冷却溝さ」とネリッシュ。「連中はたぶんその下にいるんだらう。ここから入っ
ていくしか方法はない」

坂を半分ほど降り下ったところにポンプ室の建物がある。壘に埋めたそのポンプが汲み
だす冷水を流して、発射実験の猛烈な熱を冷ますしくみである。そのポンプは取り払われ、

11 「名指す言葉」と
「名指されるもの」とが
分離していることが、合
理的な現実をつくる。両
者が重なるときに魔術が
起こる。

小屋の中は真っ暗。戸口から一步半進んだところで、誰かの体がスロースロップにぶつかった。

「おっと失礼」いや、そんなに落ちついてはいられない。

「ザッツ・オーライ」アクセントはロシア人だ。「こっちはかまわんのよ」と、そのままスロースロップを小屋の外へ押し出す。この軍曹、若いくせして、実に性悪な顔をしている。背丈は八、九フィートといったところか。

「あのですね——」と言ったところへ、ネリッシュが到着した。

「おっと」ネリッシュが見張りの男を見上げて目をパチクリ。「ねえ、軍曹、あの音楽、聞こえない？ みんな〈組立場〉にいるから戻りなさいよ。誘惑的なゆるゆるの薄物をまとった娘さんたちがね」と、ここで相手の脇腹を突ついて、「出血大サービス中みたいだよ」

「それは素晴らしい眺めだろう」見張り番が答える、「そういうのが好みのやつらにはな」
「クソ……」作戦の通じる相手じゃなかった。

「ここはな、おまえらの圏外なんだ。知らないのか、アホめ」

ネリッシュはふっと溜息をつく、手にしたボトルを高く差し上げ、相手の首筋に投げ落とす——じゃなく、投げ上げる。コンと音がして、相手のヘルメットがボトリと落ちる。「ガキのイタズラはよせよ」と、いらだった声、腰を屈め、ヘッドギアを拾い上げて、「冗談やってるんじゃない、おまえらふたりとも逮捕だ」

「何言ってるやがる」スロースロップが吠えた。火の点いた葉巻と、モロトフ・カクテルを振りかざし、「銃を渡せ、イワン、それともこいつで火だるまになるか？」

「ワルめ」相手は口をとがらせ、肩から銃を外す、そのタイミングが早すぎる。スロースロップは脇に飛びのき、得意の早業、股間蹴りを繰り出すが、足は見事に空を切りつつ銃をとらえた。落ちたそれに、抜かりのないネリッシュが飛びつく。「ケダモノ」ロシア兵は泣きそうだ。「ああいい汚ねえ、ひでえ……」と、夜の中へ跳ねていく。

「二分経過」ネリッシュがポンプ室に走りこむ。スロースロップは自動小銃を奪い取って、ネリッシュの後を追う。下り道が加速をつける。コンクリートを打ち鳴らす二人の靴音がだんだん速く、鋭くなる。行く手に金属のドア。中からシュプリングの音が聞こえる。歌ったり、くだを巻いたり——酔っぱらっているようだ。スロースロップが銃の安全装置を外し、ネリッシュが踏み入る。中には黒いブーツを履いたブロード美人の補填兵、スチール縁のメガネをかけ、シュプリングの言うことを片端から速記している。冷水パイプが床上一二〇センチあたりのところを部屋中巡っていて、シュプリングはそのパイプに機嫌よく、偉そうに背をもたれている。

「鉛筆を捨てろ」とスロースロップ。「オーライ、ジダーエフ少佐はどこだ？」

「会議ですわ。名前をおっしゃっていただけますと——」

「クスリだ」ネリッシュが叫んだ。「薬物を飲まされてる！ ゲアハルト、ゲアハルト、返事してくれ！」

フォン・ゲールのこの症状はスロースロップにはおなじみである。^{*12}「アミタール・ナトリウムを飲まされただけさ。大丈夫、行こう」

「少佐はすぐに戻ると思います。二階の守衛室で喫煙しています。ご連絡先の番号はありますか？」

12 一度はロンドンの聖ヴェロニカ病院で、PISCESによる下意識調査を受けたとき、もう一度はグレッタと会った前、ポツダムでチチェーリンに、飲まされている。

スロースロップがシュプリンガーの片腕を肩にかけ、ネリッシュももう片腕を担いだそのとき、強烈なドアの連打音。

「喫煙？ 何のケムリを？」

「はやく！ こっちだ！ スロースロップ！」

「あ、そうか」 ふたりして別のドアからシュプリンガーを運び出す。そのドアにスロースロップは門かんばんをかけ、重いファイル・キャビネットを動かしてきてドアの前に据えた。それから階段を一階分、シュプリンガーを引きずり上げると長く伸びる通路へ出た。電球が六つか七つ光っているが、その間はとても暗い。両側は床から天井まで、計測用のケーブルの束がびっしりだ。

「これで一巻の終わりか」 ぜいぜい声でネリッシュ。砂壘の下したの計量室まで、まだ一五〇ヤードある。そこに行き着くまで、隠れるなら電球の間の暗がりしかない。やつらにスプレーを掛けられたら、三人のパターンが浮かんでしまう。

「彼女は何にもバフらんのだ、ヘテロスピードめ」 ゲアハルト・フォン・ゲールが叫んだ。¹³

「おい、進もう」 スロースロップが恐怖に震えながら、「ほらほら、自分のケツだろ、動かせよ」 ドアの連打が地下道を追いつめる。自動小銃の、抑えられた発砲音が一発、二発。二つ先の光だまりに、オフィスへ戻るジダーエフの姿が現われた。その連れが、四〇ヤード先からスロースロップに微笑みかける。でかい鋼スチールの微笑だ。スロースロップはシュプリンガーを打ちやって、銃を手にもち次の電球の光だまりへ走った。ふたりのロシア人は、事態をつかめずに眼をパチクリさせている。「おい！ チチエーリン！」

お互い、それぞれの光のサークルに立って見つめ合う。相手に銃口を向けていたことを

13 ハッシシで「いつて」しまったゲアハルトの、意味の通らないセリフ。原文は She baffs at nothing. the hetero-speed.

スロースロップは思い出し、ちょっとすまなそうな笑顔を見せて近づいてゆく。ジダーエフとチチェーリンは、必要以上に長く思える議論のすえ、手を挙げることに決めたようだ。

「ロケットマン！」

「やあやあ」

「ファシストの制服なんか着てどうしたんだ？」

「言えてるな。これから赤^{レッド・アーマー}軍に入れてもらおうと思う」ネリッシュも加わって——つ

ややかなゴムとシルバーメッシュに巻かれたケーブルの壁を背にして放置されたシュプリンガーの体が沈みこむ——一緒にふたりのロシア軍人の武装解除。追っ手のロシア兵はおもドアを打ち破ろうと懸命だ。

「ここで服を脱ぐのはかまわない？　ところで、チチェーリン、あのハッシシはどうだったよ」

「いまな」ズボンを脱ぎながら「あの見張りの小屋^{ブドゥカ}で、みんな吸ってきたところだ……さすがはロケットマン、完璧なタイミングで現れるじゃないか。なあジダーエフ、こいつ大したやつだろ？」

スロースロップはタキシードを脱いで、「いいからここで勃起だけはするなよ」

「いや、本気で言ってるんだ。おまえの^{シュヴァルツフェノーメン}〈黒の現象〉はすごい」

「冗談はよせ」

「自分じゃわかってもないのか。ソイツの振付で踊ってるっていうのに。俺のは破壊的なんだ、いつも俺を壊そうとする。服の代わりに、シュヴァルツフェノーメンを交換したい」

なんとも複雑な変装ゲームである。金星の肩章^{ギョウニ}の付いたジダーエフの上着を（クルト・ヴァイル^{*14}のモデルをハミングしている）シュプリンガーに着せる。ジダーエフはシュプリンガーの白いスーツを着せられ、チチエーリンもろともベルトとネクタイで締め上げられる。「作戦を言うぞ」とスロースロップ、「チチエーリンがおれになり、その少佐が

——」このとき、後ろの地下道の奥のドアが破られた。ふたつの人影が走り込んでくる。どちらもスオミのサブマシンガン^{*15}を抱えているが、その銃の弾倉^{ドラム}はジーン・クルーパー^{*16}が叩けそうなくらい大きい。チチエーリンになりましたスロースロップが、灯下に立ち、縛りあげたふたりの将校を指して、大袈裟に手を振った。「うまくやるんだぞ」とチチエーリンにつぶやく。「信頼はしてるけどさ、下手な気起こすな。おれはロシア語のパシヴ・ボキヤブラリー^{*17}が豊富なんだ。おまえが言ってることは分かるんだぞ」

チチエーリンに文句はないが、今ひとつ理解が及んでいない。「俺は誰になるんだ？」「なんだよ、まったく……いいか、とにかく、緊急事態だと言え。直ちに向こうのポンプ小屋を調べてこい、と」チチエーリンが発声し、その声にスロースロップが口の動きと手振りを合わせる。うまくいった。兵士二名、こちらに敬礼をし、撃ち破ったドアを抜けて走り去る。

「あの類人猿だよ」チチエーリンが首を振る。「あの黒々とした猿どもだ！ ロケットマン、おまえ、どうしてわかった？ もちろん、おまえがわかったわけじゃなくて、シュヴァールツフェノーメンに導かれただけなんだがな、すごいセンスだ。黒い類人猿が二頭、窓の外から俺を見ていたよ。それを見て、俺は何と思ったか。そうだ、図星だ。チチエーリンならこう思うだろうとおまえが思うまさにそのことを思ったんだ」

14 ユダヤ系のドイツ人作曲家。ミュージカル

劇への関心を強め『三文オペラ』で名声を博し、ナチスを逃れ、最終的にアメリカに帰化し、商業的成功を得るといふ人生は、ビジネスの信奉者フオン・ゲールと折り合いがよさそう。

15 フィンランド国防軍の短機関銃。

16 スイング時代のスター・ドラマー。派手なドラム捌きを映画で披露し、アメリカ以外にも多くのファンを獲得した。

17 自分では使えないが読んだり聴いたりできる言葉。

だがスロースロップはすでに遠く、言葉は彼の耳に届かない。シュプリンガーの意識も、よろけながら速歩で進める程度には回復した。三人は、誰とも出くわすことなく地下の計測センターに到達する。防弾のガラス戸の向こう、映りこんだ自分たちの像の向こうに、打ち上げ実験に使ったやぐらが骨組みをさらしている。その窓は割れ落ち、灰色と黒の迷彩模様が一面のさざ波を立てている絵柄は、まるでドイツ表現主義映画だ。^{*18}二名のロシア兵は命令された通りポンプの建屋を探している。誰もいない。再び中に入り込んだのを見てネリッシュがドアを開け、「急げ」。三人、外へにじり出る。楕円形のアリーナへ。

斜面を登るのが大変だったが、木立の中に入るとオットーとヒルデが姿を見せた。このふたり、ジダーエフの車から、運転手の目を盗んでローターのアームを引き抜いてきた。今度は四人がかり。さえずる重荷、ゲアハルト・フォン・ゲールを持ち上げながら数フィート、崩れやすい砂の土手を登っていく。この発射台周辺で、こんな低推力のシステムはしばらく誰も見ていないだろう。オットーとヒルデがシュプリンガーの腕を引っ張り、ネリッシュとスロースロップが尻を押す。そのシュプリンガー、斜面中ほどで猛烈な尻を放ち、その破裂音が、歴史的な楕円体に数分間響き渡る。諸君、私の肛門がA4ロケットから受けた印象を上演しましょうって……

「オー・ファッキュー」スロースロップが咆える。

「小惑星と骨の、そそり立つ緑の馬よ」と応じて、ひとり肯くシュプリンガー。

〈組立工場〉付近は、いまや音楽もお喋りも静まり、不快な静寂に包まれている。やっと高みまで登り切り林の中へ入ったところで、シュプリンガーが木に額を押し当て、激しくゲロを吐きだした。

18 スロースロップがマルゲリータと会ったスタジオのセットが「表現主義風」だったようすが描かれていた。ドイツ表現主義といえば、ヴェーネ監督の『カリガリ博士』をはじめ、本作に登場するフリッツ・ラングの諸作品が有名。それらを含む同時代の作品を多数分析しながら、ヴァイマル時代のドイツ人の国民心理を描いたジークフリート・クラウザー著『カリガリからヒトラーへ』（一九四七）も、この小説の基礎文献のひとつである。

「ネリッシュ、なんでこんな男のために、オレたちのケツが弾丸を浴びないといけないのよ？」

だがネリッシュは、けなげにも友の腹を押し上げつつける。「ゲアハルト、大丈夫か？ どうしてほしい？」

「すばらしい」シュプリンガーが咽せながらいう。顎にゲロをしたたらせ、「おお、気持ちいい！」

チンパンジーと楽団と踊り子たちがやってきた。風に吹かれ、出会いの場まで吹き溜まってくるかのような。最後の砂丘を越えると、炭殻を三角に固めた恰好のテストスタンドXだ。シンダーブロックの三角形が見える。その先の海に向かって、楽団がしばし行進曲を奏でる。渚には波に運ばれた砂の帯が続く。だがグナープ夫人の姿はない。ハフトゥングがチンパンジーの一頭と手をつなぎ、フェリックスはチューバを揺すって唾を落とす。名を知る機会のなかった蜂蜜色の髪の少女が両腕をスロースロップに回す。「怖いわ」

「おれもさ」と言って抱きしめる。

そのとき天地がひっくり返った——サイレンがウワンウワン、サーチライトが前方の林の上を舐める。トラックのエンジン音、指揮官の怒声。脱走者の一団は炭殻の山を離れ、湿地の草むらに身を潜める。

「自動小銃一丁と拳銃二丁をせしめた」とネリッシュが声をひそめて。「敵は南からやってくる。誰かひとり後戻りすれば充分だ。それでやつらを押しとどめておける」と、自分で言っただけでうなずき、銃の作動を確認している。

「そりゃムチャだ」スロースロップが鼻息を荒げた。「一発で吹っ飛ばされるぞ」テスト

スタンドⅦ周辺が騒がしい。そこへ向かう車のヘッドライトが一台、そしてまた一台。

ネリッシュはシュプリングの顎を軽く叩いてみる。まだうつろで相手が認識できていない。とにかくにも、シュプリングよ、「レーベ・ヴォール」^{*19}……ナガン銃を上着のポケットに突っ込み、自動小銃を抱えると、ネリッシュは身をかがめ、振り返りもせず、海岸線を走り去る。

「船はどこ？」ハフトウングは青ざめてパニック状態。浜辺のカモがガーガー警戒のメッセージを伝え合う。草むらを風が揺らす。サーチライトがめぐる。丘の高みで松の幹が燃え上がる、その深い輝きが恐ろしい。……一同の背後で、バルト海はふるえながら流動する。

丘から銃声——続いて、おそらくネリッシュが応戦したのか、自動小銃が炸裂した。オットーがヒルデを抱き寄せる。「誰か、モールス信号、読める？」スロースロップの隣りの娘がたずねた。「海の向うの光。ほら、あの小さな島の先に、見える？ もう何分かチカチカしてるわ」三拍で、トントントン、トン、トン。そしてまた、トントントン。その繰り返いだ。

「フム、SEESとね」フェリックスが考え込む。

「トンじゃなくてさ」テナーサククスが述べる、「ツーの方じゃないか」

「へんだな」とオットー、「それだと、OTTOだ」

「あなたの名前じゃない」とヒルデ。

「母さんだ！」オットーはそう叫ぶと、バシャバシャと湿原へ走りこみ、点滅する光に向かって手を振った。フェリックスのチューバが鳴り出す。他のメンバーも演奏に加わる。

19 Lebe wohl = 英語の Farewell に当たる別の言葉。

探査灯の光が地面に急降下し、葦の茂みが砂地を刺すように走る。船のエンジンの猛る音が耳に届いた。「来たぞ来たぞ」オットーが湿地の上を飛び跳ねる。

おい、ネリッシュ、スロースロップは目を細め、仄かな光の中にネリッシュを探している。帰ってこい、退散だ。退事はなく、銃撃の音が続く。

走行ライトを消した船が猛スピードで近づいてくる。グナーブ女将はベーネミュンデに突撃をかませるつもりか？ おっと突然向きを変えた——軸受けの軋む鋭い音。スクリュ——から砲が吹き出る。船はクルリ回って停止した。

「乗りな」かあちゃんの声が響く。

スロースロップは声を囁らしてネリッシュの名を呼んでいる。かあちゃんが汽笛を鳴らす。退事がない。「クソ、ネリッシュを連れ戻さんと——」あきらめないスロースロップの背中にフェリックスとオットーが掴みかかり、足蹴にし、罵りながら船まで引きずろうとするが、それでもがんばる。「ネリッシュが殺される、行かせてくれ——」ここテストスタンドⅦの間の砂丘の上にいくつもの暗い影が散らばり、その中央にオレンジ色の小さな炎が噴き出して一秒後、ライフルの銃声が聞こえた。

「こいつが殺されちゃうよ」オットーがスロースロップを持ちあげ、船の中へ押し込み、続いて自分も転がりこんだ。このとき、船がスポットライトに浮かび上がる。何条もの光線に串刺しにされる。銃声が大きくなる——水面に乳首が突起し、飛沫が飛び交う。散弾が船材を貫通する。

「みんな、そなたよね？」女将がニヤリと牙を剥く。「よし、よし、よし！」遅れてきた狼公が最後の手を伸ばし、ハットランプがその手をつかんだところで船が発進。チンパン君

は足を海中につけたまま数ヤード引きずられ、それから船べりによじ登る。銃弾が海に刺さる。だがそれもやがて船には届かず、しまいには耳にも届かなくなった。

「おい、フェリックス」とテナーサックス。「スヴィーネミューンデに仕事はあるかな？」

ジョン・ディリンジャーは、最期を迎えて、スクリーンで出会った数秒の映像に不思議な慈愛を感じていた^{*20}——ブラッキー役のクラーク・ゲートルが、改心しないまま電気椅子へ向かう。死刑囚監房の鉄格子の中から、物柔らかな声、あばよ、ブラッキー……今やニューヨーク州知事になった長年の友のウィリアム・パウエルが、あの細身で顎のないイタチ野郎が、恩着せがましくつけてきた執行猶予なんぞに用はない^{*21}。ゲートルとしてはとにかくケリを付けてしまいたい。「死ぬも生きるも一緒だ——一気に生きて一気に死ぬ、ぐたぐたするのは醜いぜ——」バイオグラフィ劇場の外で見張っていたメルヴィン・パーヴィスのチビ野郎めが、運命の葉巻に火をつける。当局お墨付きのペニスを唇に感じる。それを合図に、FBIの腰抜けどもが、オカマ的正確さをもってディリンジャーを銃撃したんだ……だが死にゆく男の中では、なおもパーソナリティの変換が起っていた——映画を見終わったあと君もよく感じただろう、顔面の筋肉や声の質が微妙に変化して、ゲートルのあの皮肉っぽい眉や、自信たっぷり輝く蛇のような頭が自分のものになった気がする。それが待ち伏せの悲劇を減じ、ディリンジャーの冥土の旅をわずかに楽に癒した。

ネリッシュは今、二、三メートルほどにぶち切れたコンクリートの排水管の中で体を屈めている。敵を欺くのにテストスタンドⅦの壁の下を進んでから、だいたい前の大雨の水が臭っているところで背を丸め、管内にエコーする音が自分の居場所を気づかせないよう息

20 「民衆の敵ナンバー1」のレッテルを貼られたディリンジャーは、アナ・セイジというルーマニア移民の女に裏切られ、その晩の居所を通報された。一九三四年七月二十二日、シカゴのバイオグラフィ劇場で、『マンハッタン・メロドラマ』を見て、出てきたところを、待機していたFBIのGメン数人によって射殺された。その陣頭指揮をとったのがメルヴィン・パーヴィス。

21 W・S・ヴァン・ダイク監督『マンハッタン・メロドラマ』（一九三四）でウィリアム・パウエルが演じるのが、対立候補の射殺をブラッキー（クラーク・ゲートル）に依頼して、州知事に当選したジム・ウェイド役。

を潜めている——ネリッシュが最後に観た映画は『死滅の谷』^{*22}、あまり昔のことなのでエ
ンディングも覚えていないが、疲れた表情の死神が恋人ふたりの手を繋ぎ、忘れな草の咲
く中を導いた。リルケの悲歌風の最終ショットだ。そんなシーンを思い出しても何の慰め
にもならない。今夜ネリッシュは、人生の最期にあって小型機関銃^{トミカ・ガン}に、この過熱した異物
になりきる覚悟……握る両手はすでに火ぶくれているが、明日のことを心配する必要はな
い。手にしたこの殺傷器械以外、焼け焦げそうな指以外、どこからも、誰からも、慈愛は
来ない。……まっとうな給与を得てまっとうな時間を仕事に捧げたロケット誘導技術のプ
ロとして、この幕切れは残酷ではないか……他のオフアーもあったのだ……RABE^{*23}に行
った仲間に加わることもできたし、西へ進んでアメリカに渡れば日給六ドルの報酬が待っ
ていた——だが、ゲアハルト・フォン・ゲールが約束したのだ。華々しさを。一発の大き
たりと、両腕いっぱい抱けるだけの輝ける美女を。ペーネミュンデじゃ敷かれたレールを
——それから解放されたばかりの男が飛びついたからって責められはしまい。
〈計画〉の全体を考える必要はなかったし……山を把握するなど、誰の手にも余る……だ
ろ？ この〈Sゲレート〉の作戦にしたって、シュプリングラーのたくらみの全体像は、ネ
リッシュには見当もつかなかった。どちらかが犠牲になるのであれば、それは部下の自分
であるべきだ、それでシュプリングラーが救われ、一日でも長く生きられるなら……それは
戦時下の思考だろうって？ それもそうだが……いま急に止めろと言われてもな……

ノルトハウゼンで〈Sゲレート〉の計画が進んでいたとき、こんなに多くの個人、国家、
企業、利益団体が関心をもって群れてくるといふ展開は想像もつかなかった。もちろん当
時も、誘導の修正の担当に、自分が抜擢されたことはネリッシュにとって誇りだった。い

22 フリップ・ランド
監督の初期の作品（一九
二一）。原題 *Der Mörder*
「S」は「殺れた（うん
ざりした）死神」の意味。
今日出回っているDVD
の邦題は『死神の谷』。

23 ロケット技術者の
確保のためにソ連がノル
トハウゼンに近いブライ
ヒエレーデに設立。技術
者たちは、ドイツに留ま
って働くことを約束され
たにもかかわらず、翌年、
キルギスの草原に連行さ
れた。一方アメリカ軍に
投降したフォン・ブラウ
ンらは、クックスハーフ
エンで英国の〈バックフ
アイア作戦〉に参加。そ
の後米国ニュー・メキシ
コ州へ向かった。

24 ニーダーザクセン
州南東部の中心都市。

かにマイナーな仕事であって……特別の処遇が与えられるわけでもないが……歴史の舞台に登場するようなことは生まれて初めてのことに、その後もおそらく死ぬまであるとは思えない。そんな矢先、六月の雨多き季節に、シュプリングガー一味のスカウト担当に出くわしたのだ。カフェでの、またはブラウンシュヴァイクの教会の中庭の入口での会談（化粧塗喰のアーチ、蔓から漆喰の柱環へ雨水が垂れる）、傘も差さず、胸中に軽やかに鳴りひびく希望を持って——心の力場に力線が満ち、膨張と充満と健康と揚々とした意気をもたらし……ベルリンだぜ！ シカゴ・キャパレーだ！ 「コカインか——それともカード」（その夏、若造たちの間で流行っていた古い映画のセリフ）……ザ・ビッグ・タイム！

だが、心で明るく鳴り響いたものが彼を導いたのはそこではなかった——ここだった。このコンタリート管で背中を丸めたまま、あと何分抵抗できるのか……

問題は常に、一定量Aをどうやって保持するかということだった。ウィーン・ブリッジ発信回路を使って、一定周波数Aに保った音を発してみるという方法も使ったよ。電子の回路を、ヒュルヒュルと不吉なホイッスル音が駆け巡る……そのあいだにも、外部からの避けがたい作用で、ヘロケットがスピードを増すにつれ変量Bが凝集し、値を増す。燃焼終結時の速度Vに達するまで、この飛行体は、電気ショックによって一定の経路を走らされるネズミのように、この極細の透明な空間の迷路をまっしぐらに走るわけだ——そう、地上からの無線シグナルがヘロケットの身体に入って、その条件反射によって——文字通りの「反射」だぞ、電気シグナルがちやんと反射の全体を通るんだ——コントロール面が瞬時に反応し、わずかに逸脱しはじめた動きをたちまち修正する（想像してみれば、見守る者もない、まぶしい上空で、少しも傾かず軌道を維持するんだぞ、この風

25 「コカインか、カードか」は、フリッツ・ラングの『ドクトル・マブゼ』（一九二二）で、クワッに入るときにたずねられるセリフ。

26 以上の話はロケットの誘導の原理について、大まかに言って、一定の基準値（ここでは一定周波数の波）を設け、それとのズレが生じてくるとそのズレ（変量B）が成長しないように抑えこむ。マイクドバツ機構を備えた回路について語られている。

27 この回路によって、選んだ周波数の正位相を発生することになる。正位相の「ピー」という響きは、実際オオナリ笛のように聞える。

28 生物が刺激を受け

圧、この高度……しかも足下から想像を超える火炎を噴いているんだ……だから、厳格に制御された軌跡のために、すべては極度の鋭敏さ、ビリビリした予期の中で営まれた。

Bの値は常に上昇する、その波頭がくつきりと立ち上って、まさに津波の襲来だ。小さな生き物はすべて静まり、大気も研ぎすまされて冷たくさざめいた。……その中を、あんたは定量Aを大事に大事に運んでいく。その昔、過去の戦場にただよう荒涼たる物々しさの

なか、夜の大地の遙か高みを〈聖杯〉が運ばれたように……ある朝気づけばその幅広の上唇に一日分の無精髭が生えている、死の予兆、恐ろしい徴^{サイン}。彼は毎日それを剃りおとし

た。それは今日が〈最後の日〉となることを意味している——そして、仄かな第六感によつて、知覚というよりむしろ信念によつて捕らえられるだけだが、電界の地平から仄かに

〈多くの下つき文字がついたB〉が実際接近してきたということも意味している。今やつてくるのは、ジャイロスコープの首振り角 B_{iw} か。動きは眼に見えないが感じはわかる、そ

れが金属のフレームを越えて、角 A_{iw} に肉薄するのが感じられる（これは最初から決まっている、設定された角度から寸分違わない角度に、わかるか、閉ざしていくんだ）。あるいは B_{il} ということもある。ジャイロのレートの積算ではなく、ナマの電流自体の積算だ、両

極の内側にセットされた「足かせ」付きの振りが可動コイル内に流させる血流というかな……「足かせ」か、設計班グループの連中は、とかく拘束や禁止のイメージで考えるん

だ……ハードウェアに対し、一般の技術者より暴力的で戦闘的な態度をとる。……荒くれ

エリート気分だったんだろう、ドリヴェリングや、シユマイルたちは。毎晩蛍光灯の光の下で禿げ上がった額をテカらせていた。……そいつらの脳内はみんな古い古い電気のガジエットだらけなんだ——バリコンはガラス製、誘電体に灯油を使い、真鍮プレートにエボ

て反射の運動を起こすときに信号が伝達される神経回路の全体。信号で誘導されるロケットの電気回路もそれと同じだと言っている。

ナイトのカバーを被せる。ツァイス社の検流計には極細の調整ネジが無数についているし、ジーマンス製ミリアンペア計は表面がスレート製だ、端子にはローマ数字がついていて、スタンダード社の抵抗器は油に浸したマンガン線を使っている、ガスの炎を使って四ボルトの電圧を発生するギョルヒヤ熱電変換セルは、ニッケルとアンチモンでできている、上は石綿のファンネル、管は雲母で……

あのときの方が、ギヤングスター暮らしより、まともではなかったか？ まあ、交友関係はきれい……というか、少なくとも軌道を外れてはいなかった。……みんな収まるべきところを心得て……全体の機構^{マシナリー}によって決められていた。……あの頃はすべてが明瞭で、敵だけ疑っていればよく、自分たちに対してパラノイアックになる必要は……

——SSに対してもか？²⁹

——SSは最初から敵だったから……「笑い」

だめだ、クラウス。流れていってはいかん。ソヴィエトに温かく迎えられて聴取を受けるなんて、そんな甘い夢に。行きつく先が、アーミンの毛皮ベッドと、ウォッカの匂う酩酊だとも思っているのか、そんなこと、ありえないのは知っているだろ……

Bが迫っている、Bの下にN（ネリッシュ）がついたB_Nとして——あと少しで最後のささやきのヴェールを燃やして「A」とイコールになろうとしている——彼自身に、彼らが収奪もせず置いていった自分の、まだ時とともに動いている小片に重なるうとしている。これ以上再処理利用できないドイツ・スチレン製の人形に、以前のどの自分よりもケチくさくウソっぽい……最後の光の中でも取るに足らない量でしかない……ハンター・ブーツのタトゥーのような、油を塗った鉤溝を滑るライフル銃のボルトのような……

29 ネリッシュが、ソヴィエトの事情聴取に応じてしゃべっていたことが、ここで確認された。



やってきたのはエンツィアン、アンドレアス&クリスティアン^{*1}。三人がスミス、クライ
ン&フレンチ^{*2}のように地下室に踏み込む——灰緑色の軍服にニユースペーパー・シュー
ズ、ズボンの裾をたくし上げ、手と露出した前腕はモーターオイルとギアグリースでテカ
テカだ。その手に、これ見よがしにカービン銃を抱えている。だがここに〈空無派^{エンフティ・ワシズ}〉の
姿はない。遅すぎた。何も語らぬ寝台の、破れたふとん地が茶色い楕円に染まっている
——彼女の血だ。隅に、ベッドの下に、ウォッシング・ブルー^{*3}の粒々のある斑点が飛び散
っている……これがやつらの署名だ、挑発している。

「妹はどこなんだ——」クリスティアンは暴発寸前。余計なひと言が掛けられれば、その
まま飛び出て最初に見つけた〈空無派〉の一味を殺しかねない。マリアは、すでに、いや、
おそらく——

「ほら行かないと」エンツィアンはすでに戸口の向こう側へ出ている、「どこなんだ、妹
さんの亭主の……」

「パーヴェル」クリスティアンが合わせようとする視線をエンツィアンは避けている。

1 上巻624ページから
続くエピソード。ここハ
ンブルクはヨーゼフ・オ
ムビンディを中心とする
〈空無派〉の牙城になり
つつあった。

2 「コンタック」で知
られるイギリスの製薬会
社が過去に長年使ってい
た社名。

3 I G ファルベンが
作っていた染料で、シア
ン化水素酸塩の原料にも
なる。服用によって子宮
収縮を起こすため堕胎薬
としての効用がある。

パーヴェルとマリアは子供を作ろうとした。するとヨーゼフ・オムビンディの一味が訪問を始めた。やつらにはキリスト教伝道師から学んだ、禿鷲のようなしつこさがあった。

その年齢層の女のリストを作っていて、妊娠の報せが入ると旋回を始め、ここぞというときには急降下する。脅迫、倫理のぐり押し、誘き出し——あの手この手が蓄積されている。ウォッシング・ブルーはお気に入り、墮胎薬だ。

「精油所か」アンドレアス・オルカンベが推測する。

「本当に？ 危険な遊びはやめたと思ったが」

「今やっているとは思えんが」というエンツィアンに向けたクリスティアンの目は拳のよきにきつい。エンツィアン、老碌したか、おぬし、勘が働かないようだな……

一行は再びオートバイにまたがって街を進む。爆破された乾ドックが、焦げた倉庫の肋骨が、組み立てられなかった潜水艦の円筒形の鋼材が、闇の中を後方へちぎれ飛ぶ。イギリス警備兵の姿はあるが、彼らがいるのはカプセルに包まれたもう一つの世界。イギリスG5が占領統治している空間は、〈ゾーン〉のこのこと——今宵厳粛なシュヴァルツコマンドらがマフラーを外したバイクで飛ばしまくっているこの地と——符合はしているが同一ではない。

分離が進行中だ。それぞれの択一的な^{オルターナティブ}〈ゾーン〉が、運命づけられた相互離反を進行させ、加速して赤色偏移^{レッド・シフト}しつつ、〈中心〉から逃げ去っていく。エンツィアンの夢見る神話的な中心回帰は、一日と不可能になっていく。かつては境界を察知するのに、制服、徽章、飛行機の印を知っている必要があった。だが今はもう、あまりに多くの選択を経てしまった。単一の根が存在したのは、はるか以前の五月のこと。それはバラけ、いまや舞

4 すべてのが一つの混沌の中心にあった状態から、各〈ゾーン〉が分離するようすを、宇宙の生成に喩えたレトリック。赤色偏移（レッド・シフト）とは、互いに離反する星や星雲の光の波長が伸びて赤っぽく偏向する現象。

いおりた鳥ごとに別の枝を持つ。そのそれぞれが〈ゾーン〉である。

破壊された装飾噴水のそばに一群の難民が集まっている。塩のように白い顔面に灰を塗りつけたような眼。二十人以上もいるその群の脇をヘレロのライダーズが駆け抜ける。低く続く石段、上の道路に出るところが先開きになった石段の中程まで駆け上がる。上歯と下歯がガチガチかち合い、マシンの金属フレームが軋る。軋りながら滑り上がるもの、滑り落ちるもの。呆氣にとられたスラヴの男女の顔面から、その灰と塩から、声にならない破裂音が漏れる。百メートル先の壁の近くに宣伝トラックが現われた。いかにも大学出という感じの、単調なアナウンスに飽きた声で、「道路をあげなさい」「家へ帰りなさい」とアナウンスする——え?…なんだって? どこへ帰れって? 「家」なんて、どっか別の町の話だろ…

ブルルン、架台の上の石油パイプラインの下を、左手の港湾へと走っていく。頭上にボルトで留めた巨大なフランジは、錆と油汚れに柔らかく覆われている。遠景の港をオイル・タンカーが進む。星々のウェブのような艦体を音もなく揺らしながら。…ズウウウム、車体を傾け坂をのぼっていく。塁壁が潰れ、ひしゃげ、溶け、焼け焦げた胴輪、煙突、パイプ、配管、巻き線、フェアリング、絶縁体。どれも爆撃によって変形している。油にまみれた小石が分速一マイルで脇へ飛ぶ。待て待て、何と言った? いま「変形」と言わなかったか?

このときエンツィアンに理解の光が射した。いや夜明けの光のように射したのではない。むしろブレイクしたというべきか。深夜、理性で出来事を捉えるには深すぎる時刻に、あなたの恐れる光が破れて真実を見せるように——エンツィアンはすさまじい理解の洪水で

5 原文は reconfigured
「変形」といっても「形を歪める」(deformed)ではなく、「新しい形につくりかえる」という意味。

精製された精製油は、煉獄などにはなっていない。いまでも完全に作動可能な状態にある。

正しくつなぎ合わせ、スイッチが入るのを待っているだけだ……形を変えたのだ、厳密に計算された通りにだ。あの爆撃に敵意は微塵もなかった、両陣営が——「陣営」に別れてもいないのだが——常に合意の上で進めていた計画の一部にすぎない……そう、だからもし我らが——まあ、言ってしまうえば、この地のカバリストとして、〈ゾーン〉の学術と魔術を引き受ける運命を負っているとしたとき、その我らが向かうべき〈テキスト〉とは何か。それを節や句に分けて取り出し、註釈をつけ、不明な箇所を取り払い、そのマスターベーション行為でそいつを最後の一滴までこすり取るものは何か……言うまでもなく、その聖なるテキストとは〈ヘロケット〉以外にありえないと、そう我々は考えたわけだ。オルルモ・オルネネ、高く、立ちのぼる、死んだ、炎を上げる、偉大なる者こそがソレだろうと（その「オルネネ」は既に、〈ゾーン・ヘレロ〉の子供たちによって、長男（兄弟の長）を意味する「オムネネ」に変化しつつあるけれども）……我々が読みとくべきトローラ^{*}は〈ヘロケット〉であって、それ以外にありえない、と。その対称性、その潜在性に魅惑され、目を奪われてしまった。その間にも真の〈テキスト〉が、どこか別の暗がり、我ら自身の暗がり、に、あり続けたというのに……まさに古代の、メッセージ喪失の神話そのままじゃないか。故郷南西アフリカからこんなに遠くまで来たというのに、部族の悲劇からいまだ救われていないというのか。同じ呪いが今も我らについて回っていると……だが、今ワタシが今まさにソノ中を、〈真のテキスト〉の中を走っているということはないか……あるいは、今日オートバイで通過したハンプブルクの瓦礫のどこかにソレがあっ

6 〈ヘレロ語で Oruru-rumo は「炎」の意味。Orumene は「サイズの巨大さ」を表す語。

7 ヘブライ語で「教え」を意味する「トローラ」は、一般にユダヤ教の聖書のうち「モーセ五書」を指す。これには後世のラビたちが付した詳細な註釈がついている。

たのに、灰塵にむせ返るうちに見逃してしまったということとは？……この場にIGが造ったものは、読み解くべき最終形態などでは全然なくて、単に呪物を集めて並べたもの、米陸軍第八空軍を呼び寄せて爆撃させるための誘いでしかないとしたら。そう、連合国の「航空機」であっても、終局的にそれはIGファルペンが、ディレクターのクルップと連動するイギリスの手を介して、製作したものであるわけだし。爆撃とはまさに変換という厳密な工業過程であって、それぞれの爆撃において放出されたエネルギーが空間的・時間的に位置づけられている。それぞれの衝撃波も予めグラフに正確にプロットされ「今夜時点の破壊の形」をそこに在らしめるのだ。そうやって「テキスト」を解読し脱コード化する。聖なる「テキスト」をコード化し再コード化しては再び脱コード化する……この過程が実際進行しているとしたら、意図する目的は何だろう？ここを精油所として作ったエンジニアには、その先にまだいくつものステップがあったなどということは知るべくもない。彼らにとっては自分のデザインが「最終形」なのであって、それ以上は関与の必要がなかったのだ。

つまりだ、この「戦争」は政治とは無関係。政治は完全にお芝居、民衆の注意をそちらに向けておくためのものであり……その陰で、テクノロジーの要請こそが、専横的な力を揮い、事態を動かしていた……人間と技術とが一体となって、戦争というエネルギー・バーストを必要とする何者かに変化^{へんげ}したのだ。表向きは「カネがどうした、わが国」「どの国名も挿入可能」の生存が掛かってるんだぞ」と喚きたてているものの、その意味は、おそらくこうだ——もうじき夜明け。わたしは夜の血が必要だ。財源、財源、ああ、もっと吸わないと。……真の重要局面は、配分をどうするか、優先権をどこにもっていく

8 アメリカー・ルイジアナ州に本拠を持つが、第二次大戦参戦以後、イギリスに駐留して威力を揮う。ドイツの爆撃に当たっては、ロケット部品の製造地を狙い撃ちした。

9 グスタフ・クルップは、エッセンの重工業コングロマリット、クルップ社の会長として、ナチス・ドイツの兵器製造と資金提供を請け負った。

かという点にある。どこかといってもどの企業というわけではない——それは表向きのところ——そうではない、どの「テクノロジ」に、人工物製造と電子技術、航空機その他のものの「ニーズ」配るのか、それを理解しているのは支配層のエリートだけだ……

それでも「テクノロジ」はこう比えるだけだろう（この議論が、わけても若手のシェヴァルフランツの間で、何度繰り返されたことか——いかにこの議論が、ガウスの消去法のように執拗に、面白味もなく繰り返されてきたことか）——「怪物の尾を捕まえる？ まあせいぜい議論してくれたまえ、だかもし、誰か具体的な、名前を持ちベニスを持った誰かが、一トンのアマトール火薬を、五百キロ飛ばして、一區画全体の民間人全員を吹っ飛ばしたいという欲望を持たなかったとしたら、テクノロジが自動的に「ロケット」を開発するなんてことにはならんだろう。いいさ、テクノロジを大文字で綴って神格化したければそうすればいい——だがそうすることで、ブラザー、おまえら自身が主体性の力でもない存在になるってことは忘れるな——盗み取られた地球のハーレムを、人間スルタンども（支配する権利などそもそも持たないエリート連中）の悦びなき勃起のために守護している、そんな宦官をやりたいっていうならそれもいいがね。

権力の源泉を、その分配ネットワークを、探らなくてはならない。学校の教師らには想像もつかない——それとも避けて通るように指示されているのか——権力の回路を……この世に知られていない尺度を計測するメーターを、見出さなくてはならない。我ら自身の理解を明確に図式化し、フィードバックを得て、コネクションを作り、エラーを減らして、真の機能の習得に努めること……照準を合わせようにも、計算で割り出せるような相手でもない。ここ地表で見る、コールドタームも水素化合物も分子合成も、それらはつねに偽り

10 三元連立方程式から x, y, z を得ていくようなやり方で、 n 元の連立方程式の解を一つずつ丹念に得ていく方法

の姿でしかない。何世紀もかけて展開していく真の惑星^{ミューン}的^{ミューン}ミ^{ミューン}ッ^{ミューン}シ^{ミューン}ョ^{ミューン}ンを覆い隠すためのダミーにすぎない……この焼き払われた工場にしても、いつかカバラ学者や新錬金術師らが〈鍵〉を見出し、秘技を伝えるのを待っているのだ……

それに、こいつも〈ヤンフ石油精製工場〉^{エルフ・フーリク・ツェルケ}を名乗ってはいるが、それは偽りの姿で、実はエッセンのクルップの工場かもしれないし、ここハンブルクのブローム&ボス¹¹のものかもしれない。どの都市の、どの国の、偽りの工場が「廃墟」になったのか、わかったものではないのだ。Y A A A G G G H H H H H H H H H!

覚醒剤がもたらしたトーク。そう、エンツィアンはナチスが残したベルベチンの錠剤を、このごろは映画館のポップコーンみたいな感じで服用しているのだ。そして、いま、精油所の大きな影を、オナイリンの発見で有名なヤンフ博士の名を冠した工場を背にして、エンツィアンは、またまた別のパラノイアの恐怖に入りこんで、ひとりで喋りまくっている——オートバイが風切る音と、マシンのエンジン音に阻まれて、会話は成立しないのだ。

「バックにホーギー・カーマイケル風のピアノ¹²が流れる」

命知らずのディオキシエフエドリン¹³・ダディ

ポケットに夢幻の素をつつこんで

野犬うろつく〈ゾーン〉を飛ばす

紡ぐ夢をばらまきながら

ラジオから真実の管は外したぜ

11 ハンブルクの造船・大型機器製造企業。ナチス政権下では航空機も製作、A4ロケット先端部（ノーズ・コーン）も担当した。大戦末期に強制収容所の労働力を利用していたことも知られている。戦争によってほとんど壊滅したにもかかわらず、戦後復活し、現在もティッセンクルップ・マリッセン・システムズに属して戦艦の製造も行っている。

12 ジャズ初期の白人ピアノリスト。作曲家としては「スターダスト」や「我が心のジョージア」などを残している。

ワタシにや意味がなくなった

「星条旗新聞」^{*14}に金は払わん

うちのニュースは無料だよ

口が回る、誰も聞かない

乱射速度でシャベクリまくる

ずるいアンタにや、手を振ってバイバイ、

口にはニタリ、クソ食いの笑み

エフエドリン^{*15}扱いするなよ、ハニー

名前を聞いて卒倒するなよ

消灯時間の独房の闇じゃ

なんも違いはないじゃないか

(蠟燭つけばいいんだよ)

なんも変わりはないじゃないか…

昨晚日誌にエンツイアンは書いた。「最近」^{ザ・マウス}口が無駄に動きすぎる。人の役に立つ言葉がほとんど出てこない。もっぱら防御だ。オー・ゴッド、参ったな、みんなに苛ついてるってことじゃないか。頼む、こんなふうに説教を垂れたいわけじゃないんだ…自分の声がどんなふうかもわかってる——何年か前、ペーネミュンデのヴァイスマンの「口述録音機」^{デ・レコメタンフェタ}

13

レボメタンフェタミンとも呼ばれる。交感神経興奮剤だが、メタン

フェタミン(俗称「スピード」)「シャブ」などと

呼ばれる)と比べて覚醒作用は弱い。アメリカ製の

ヴィックス・ヴェボラップはこれ含有する。

14 ヨーロッパに駐留する米軍向けの英字新聞。

15 これも交感神経興奮剤。

で聞いた……クロームとベークライト樹脂のやつ……高すぎる声で醜悪だった、ベルリン風の鼻声……おれに話しかけられるたびに、みんな辟易していることだろう……

こっちは明日にも出ていけるぞ。独りになるのは得意なんだ。孤立を恐れたりはしない。むしろアイツらがそら恐ろしい。アイツらは際限なく取りまくる。取っておいて使うことをしない。このわたしから何が取れると思っているんだ？ 族長としての権力が欲しいわけでもないだろう。わたしの愛が欲しいわけでも、情報も、仕事も、エネルギーも、わたしの所有品も望んでいない……物なんぞ何ひとつ持っていないしな。今やカネもない——こいらでカネを見た者はもう何ヶ月もいないだろう。だから、カネではない……タバコか？ タバコにだっていつも事欠いてるんだ……

アイツらと別れたとして、自分がどこへ行けるかだ」

貯水タンクの並ぶ中を、夜風を切って飛ばすだけ。この化学合成（シンセティック・ウエイストワールド）の荒れ野原で車輪を軋らせる、グレードに差のない黒一色の土の上……クリステイアンのエンジン音がときどき消える。うろたえて、止まりそうな音だ。即座の判断——バイクが故障したら歩かせるぞ。その方が、もしパーヴェルがいた場合に、紛糾が避けられる。いなかったなら、帰りにクリステイアンを乗せて戻り、トラックを出して修理させればいい……単純が一番、それが偉大なリーダーの証しというものだ、エンツイアン。

クリステイアンはしかし最後までついてきたし、到着先にはパーヴェルも、いたことはいた——もっとも今の精神状態のエンツイアンなら、やがてそこにいたとは考えなくなるだろう。体はそこにあっても、心はパーヴェルがロイナガソリン（*16）を嗅ぐたびに出てくる驚異の仲間と共にいたのだ。その中には、たとえば「（モス・ワイルド・サウザン）」ってのがいて、こいつは信

16 I G ファルベンの子会社であるプロセイン

州ロイナの「ロイナ製作所」で製造していた合成ガソリンのブランド。

じられないほど明るい緑色、蛍光というより炎色という感じに燃えて見えるのだが、今夜はフィールドの隅に隠れるように潜んでいて、ときどき幼児のようにモゾモゾ動く……それとへ水のジャイアント。こいつは身の丈一マイルの、全身が水流でできていて、ダンス好き、腰を軸にクネクネ動く、両腕はぶらぶら空を吹き流れている。オムビンディー派の者たちがマリアを連れて、ハンブルク市内で医者を探し回っていたときには、へ菌のピグミーたち——この小人たちはタンク内の燃料と底の水との境界面^{インターフェイス}に生息する——の呼び声が聞こえた。「パーヴェル！ オムネネ！ どうして会いに来てくれない？ 寂しいよ。戻ってこないのはなぜ？」小人たちにとってこのヘインターフェイスはあまり楽しいところではないらしい。バクテリアとの張り合いもある——彼らの光の国を偉そうにクルーズしている単細胞の貴族連中だ。神の豊穡のおこぼれにあずかろうと炭化水素の壁に近づき、排出物を出していく。緑色したブツブツ、不定形に発散していくペチャクチャ——ヘドロは日に日に濃くなり、毒性も増していく。いや、ほんと、幾千幾万もの仲間にビッシリ囲まれて生きるってのもなかなか気が滅入るもんだ。それもこの騒ぎの向こう側で生きていかなくちやならない。おっ、今「向こう側^{ジ・アザー・サイド}」って言ったな？ どういう意味だ。何の向こう側なんだ？ ガソリンの中で、って意味か？（ここで群生ピグミーが、ある有名なスイング・リフに合わせて冗談っぽく）「ノ・ノ・ノ、ノ・ノ・ノ、ノ・ノ・ノ」とやる。じゃあ、水の中かよ。（ピグミーが応えて）「ノーノー、ノー、ノー！」——おい、教えてくれて、さもねえと、おれのBVD脱ぎ落とすぞ！ と言われて群生ピグミーは寄り集まり、小さな頭を対称的に突き出してカリフラワールのパターンを作って、ソフトで切ないアカペラで答えを歌う。それってまるで、野球帽姿のビング・クロスビーと一緒にキャンブ

ファイヤーを開く少年たちみたいじゃないか（そう、このロイナガソリンのもたらす幻覚¹⁷ロイナ・ハルツィナツィオーネン¹⁸ってのは、異様なことで有名でね、カルチャーショックに比べてももっと異様な、メタ・ショックというべきものだね。カラハリ砂漠に現れた北極光¹⁹よりもっと深い神秘に照らされた、3シグマ²⁰の白い顔ってとこか）どういう意味かというのだね、「すべての向こう側」ってこと。バクテリア²¹炭化水素²²排泄物のサイクル全体を超えた、ジ・アザー・サイドなの。ここからもヘインターフェイス²³が見えるよ。長い虹。だいたいが藍色——と聞いて何か思い当たるかな。インディゴとケリー・グリーン。（ここでタクトを振るビング・クロスビーが、炎の照らす、すっかり洗脳された上向きのアイリッシュ顔の子供たちを、クレッシェンドへ導いていく）グリーン……ガソリン……ピトウィーン……サブマリン……ときて歌声はかすれていく、つてのはこの時までにパーヴェルがすでに精油所に向かっていたからだ。ここ二週間半も自ら苦行を課していたが、それはもう終わりだと。オムビンディー一派が彼を追ってガラス繊維のボイラーパイプの下を進む。男も女も彼を愛撫しようとするし、〈民族自殺〉の問題で対立する相方からのプレッシャーは受けるし、それに加えてエンツィアンの不満、エンツィアンは〈ロケット〉にあまりに深く関わり、ロシアの兄弟との反目にもあまりにのめり込み、個人的な事柄以外に気持ちを向ける余裕がない……パーヴェルは単に身を引きたいだけなのに。部族の神〈ムクル〉の息を逃れて、ただの善良な男でいたい——

〈モスクリーシャー〉
〈苔怪獣〉がうごめく。パーヴェルが最後に見たときから、だいぶ警戒すべき距離にまで這いよってきた。突然、ぬるりとしたチェリーレッドが右手の山腹を這いおきる（お、山があるのか？ その山、どこから現れた？）パーヴェルは直ちに知る。幻惑も願望も超

17 「標準を大きく逸脱した」という意味。上巻でロジャー・メキシコも使っていた統計学用語。

えて確信する。自分は〈北〉へさまよい出たのだ、と。ヘレロの始祖〈ムクル〉の吐息を吸い込んで、恐るべき土地にやってきてしまったのだ、と。彼自身、それは分かっていたが、たわけじゃない。ここ数年ジワジワと、もはや向きを変える（変える？ 変えるって、どっちの方向へ動き出したらいいかもわからんのに……どうしたら動けるのかも……）が不可能な地点までできてしまった。もう遅すぎる。あまりに遠く、あまりに変化を被りすぎた。

いま彼の頭はクリスティアンの引き金から三〇〇ヤードの距離。突然、恐ろしい枝分かれが生じる——すでに思考のスピードで裂け始めていた二つの可能性が形をとる——どちらにせよ新しい〈ゾーン〉が生じる、クリスティアンが発砲するにしろ自重するにしろ——飛びつけ、どちらか選べ——

エンツィアンも、やれることはやる——樽をひっくり返し、若き復讐者に一言二言、不快な言葉を投げつける。だが、双方ともに、新しい分枝を見てしまった。今この瞬間、〈ゾーン〉はまた一步、変化の道を進み、ふたりはいまや新しい〈ゾーン〉に足を踏み入れた……

上り坂をバイクがゆく。灯りのないページュの丘の斜面、タンクが天まで白く這い上がったところにパーヴェルはいて、合成ガソリンを吸っている。まったく、こんなに幸せそうなIGのカスタマーもないだろう……

他の者たちの知らない何かを、パーヴェルは知っているのか？ IGがここを何かの隠れ蓑にしているとしたら……〈ムクル〉の息が隠れていてもおかしくあるまい？

エンツィアンは自身を〈土豚穴〉^{エントシュヴァインヘレ}のなかに投げ戻し、IGファルペンについての新

しいファイルの作成を始めることもできる。連結連動が進めば、帳簿はどんどん厚くなり、内容監査が入り、証人も——正面切ってではないが、脇から、陰に隠れるようにして入ってくる。……で、その結果、それが〈ロケット〉でないと判明したら？ IGの関与もなかったとなれば？ そのときは、また最初から続けていくことになるのか、別な想定の上に立って——フォルクスワーゲンの工場とか、どこかの製薬会社の業界とか……でドイツ国内の企業でなかったということになれば、アメリカやロシアで調査を再開ってことか。それでもダメで、〈真のテキスト〉を見出す前に死んでしまうのであれば、別な者たちが調査を継続するような機構を作っておかなくてはならない……そりゃいい考えた。〈エルトシュヴァインヘーレ〉の全員を呼び集めよう、そして、起ちあがって、わが人民よ、わたしはヴィジョンを得たと宣告する……いやいや、しかし、実際の話、スタッフはもつと要るな、きわめて大がかりな調査になるわけだし。なにしろ〈ロケット〉に集中した資産を密かに動かそうというのだ。それも多様化させつつ、それを有機的成長のように見せることも必要だろう……その仕事にだれを投入するんだ？ クリストイアンか——今あいつを使えるだろうか、クリスティアンには怒りがある。にもかかわらず彼を、〈それ〉は、用立てようとするだろうか、オムビンディを抑え込むために……というのも、もし〈ゾーン〉における〈黒の軍団〉の真の使命が、たったいま明らかになったのなら、オムビンディと〈空無派^{*18}〉と〈ファイナル・ゼロ〉の教義に対して何かの手を打たなくてはならないだろう。スタッフを増やせば、〈ゾーン〉のヘレロ人口は、減少ではなく増加に向かい——敵について入ってくる情報も増え、コネクションも増えるから、我ら一族への脅威もそれだけ大きくなる、ということは一族の人口を増やさねばならなくなる。他に取るべき

18 〈空無派〉とその教義については、上巻604ページに説明がある。

直は？　ない……オムピンディなど無視していたい、この新たな「探究」の必要のためには、そんなことで心の平安を得る贅沢は許されぬ……探究こそが支配する……

「世界の」廃物のどこかに、我らを修復する鍵が潜んでいる。我らを「大地」と我らが自由とへ引き戻すための何か……

アンドレアスがさつきからパーヴェルと話している。パーヴェルは今なお、奇妙に光るお友達と一緒にふわふわ遊んでいるのだが、宥めたりすかしたり、なんとかオムピンディとつながりのある医者^{なだ}の住所を聞き出した。

エンツィアンにはそれが誰だか分かった。「聖パウリ地区^{*19}だな。行こう。おまえのマシンは少しご機嫌が悪いみたいだな、どうだ、クリスティアン？」

「人を思いやるふりなんかするな」クリスティアンがまくし立てる。「おれのこと、妹のこともあんたにはどうでもいいんだ。妹は死にかけてるんだぞ、なのにあんたは自分の等式にはめ込んで満足してんじゃないか——あんたって人は——いつになったら聖なる父の真似事を止めるんだよ。あんたのエゴの中じゃ、おれたちは憎んでさえもらえないんだ。ケアする気持ちがゼロなんだよ、あんたは、脱線してるんだ、もう何ともコネクトしてないじゃないか——」握った拳を振りかざしてエンツィアンの顔面へ。クリスティアンは泣いている。

突っ立ったまま殴らせるエンツィアン。痛みが襲うに任せる。この屈従は必ずしも作戦というわけではない。クリスティアンの言葉の中に骨身にしみる真実が感じられるのだ。その真実のすべてを即座に感じることはできないにせよ、十分に。

「おまえのパンチで、コネクトした。妹さん、一緒に探しにいけるか？」

19 ハンブルクの「聖パウリ」地区は、ロンドンのイースト・エンドに相当する貧民の地区。歓楽街が発達している。



気がつけば女将が、ベッドの足もとから身を乗り出してスロースロップを覗きこんでいる。オウムのように尊大に輝く眼。あたかも白くて大きな目玉の大將が、古いチクチクする片持ち梁の腕と足に支えられているという感じ。ボンバドールの髪に黒いスカーフを巻いているのは、ハンザの御霊を哀悼してのことか。竜骨の曲線に波立つ灰色のバルト海、その波の艦隊がうねる大海原の下に御霊は眠る……

お次はゲアハルト・フォン・ゲールの足だ。その足は、かなり荒々しいやり方でスロースロップを突ついた。太陽は上り、娘たちはだれひとり残っていない。オットーは不平たらたら箒とモップで昨日のチンパンジーのゲロを始末している。スヴィーネミュンデ。

ザ・シュプリンガーは彼本来の調子をすっかり取り戻した。「操舵室にできたてのエッダとコーヒー——さあ、食べてくれ。あと十五分でここを出るんだ」

「出るんだ、って勝手に決めないでよ」

「だが、あんなの手が必要だ」今朝のシュプリンガーの召し物はファインツイードのスーツだ。ロンドンのセヴィル・ローであつらえて、体にびったり——

1 「ハンザ」という語はそれ自体で「同盟」を意味する。中世後期よりバルト海貿易を独占した都市間の大同盟は、過去のドイツの栄光の象徴。

「ネリッシュは、あんたの助けが必要だったんだぞ」スロースロップが言いだした。

「自分で言ってることの意味がわかってもらえないな」絶対に折れない鋼鉄の目がこちらを睨む。彼の笑いは副題つき——「馬鹿と調子を合わせてる」。中央ヨーロッパ風で容赦ない。「わかった、わかった、いくらほしい？」

「世の中すべて値段つき、ってか？」だがここで彼は高貴にふるまうのではない。実はちょうどこのとき、彼自身の値段を思いついたのだ。で、話を急がず、ちょっと息継ぎをして次の展開を見守る。

「すべてに、な」

「で、おれにどんな話をふっかけてるの？」

「小物の掠奪。包みをひとつ取ってきてほしい。援護は引き受ける」と言って手首の時計を見る。大げさな身ぶりだ。

「わかった。おれには除隊を用立ててほしい。それなら一緒に行く」

「何だと？ 除隊だ？ おまえのためにか？ ハッ！ ハッ！ ハッ！」

「ふだんからもっと笑えばいいのに、シュプリンガー。その顔、死ぬほど可愛いぜ」

「どんな除隊を言ってるんだ、スロースロップ？ ひょっとして、名誉除隊か？ ウワーッ、ターッハー、ハッ、ハッ！」アドルフ・ヒトラーと同じでシュプリンガーは、ドイツ人が「シャーデンフロイデ」と呼ぶところのもの——他人の不幸を喜ぶ心——をくすぐられるとたまらんようだ。

「冗談じゃないんだ、おれ、真剣なの」

「もちろん真剣さ、スロースロップはな！」と言って笑いつづける。

スロースロップは待つ。見つめる。卵を一つむしゃぶる。だが気分は変わらない。今朝はどうしてもコソ泥気分にはなれない。

「ネリッシユが、今日わたしと一緒に行く計画だったが、あんたと組むはめになった。ハッ、ハッ！　で、どこで手渡ししてほしいんだ、その——アッ、ハッ——その除隊とやら？」

「クックスハーフェンで頼む」このところスロースロップは、クックスハーフェンの「バクファイア作戦」^{*2}の連中と何とか接触できないか、ひょっとして彼らがスロースロップを放免してくれるのではないかとぼんやり夢想をしたりもしていたのだ。「ロケット」に参与しているイギリス隊といえ、もう彼らしか残っていない。だが、うまくいきこないことはすでに明白だった。で、シュプリンガーととにかく日時を取り決める。

「「ブッツィの館」^{*3}にいる。ドルム街道だ。地元のディーラーが場所を教えてくださいるだろう」

という次第でふたたび出航——防波堤が濡れた両腕で抱きつくのを躲し、波頭の踊るバルト海を、何層にも湧き上がって光る雲に向かって、陽気な海賊帆船は進みゆく。だがきょうの日はすでに雲行き怪しく、身を切る疾風が暗転の近いことを報せる。操舵室の外からシュプリンガーが叫ぶ。船首を乗り越え、甲板に水しぶきを立てる波音にも負けない大声だ。「どこへ向かってる？」

「船に聞きな。コペンハーゲンに向かってるなら」フラウ・グナープの風焼け顔が、目と口の周り全体に、永遠の笑い皺をたたえて輝く——太陽が射すように。「一時間たらずで着いてくれるさ……」

2 上巻522ページ註10参照。

3 クックスハーフェンから南へ二十キロほど下ったところにドルムという村がある。おそらくその周辺の海辺にあるのだろう、「ブッツィの館」という娯館での出来事は百数十ページ先で語られる。

今朝の視界の具合では、ウーゼドムの浜辺を望むのは無理だ。スロースロップは手摺にもたれ、灰色の大气の閉塞的な匂いを吸い込みながらぼんやり無を見つめている。シュプリンガーが隣りに立った。

「やつは大丈夫だ、スロースロップ。もっと面倒な目にも遭ってるしな。二ヶ月前には、ベルリンのヘシカゴ・バー^{*4}を出たところで待ち伏せに遭った。シュマイザー^{*4}三挺からの十字砲火が飛び交う中を平気で通り抜けた。相手方に、一泡吹かせてやったよ。かすり傷一つ負わずにな」

「シュプリンガー、ネリッシュは一人で、何ラウンドも銃撃戦をこなしてたんだ。ロシア軍の半分を相手にして」

「ロシアがあいつを殺したりするもんか。ネリッシュが何者かはちゃんと知ってる。ヘロケット^{*5}を誘導できる男だ。シリングの片腕。今じゃガルミッシュ村^{*5}に集められなかった者のうち、回路全体の知識が一番あるのはネリッシュだろう。ロシアは素晴らしい給料を出すといっている——アメリカ以上だと——ドイツに残って、以前と同じようにペーネミューンデかミッテルヴェルケに勤務すればいいって話だぞ。そう望むなら、逃げることもできるだろう、わたし等の特上のコネクションを使えばな——」

「しかし、実際に撃たれちゃったとしたら——」

「いや、ロシアは撃たんはずだ」

「シュプリンガー、これ、映画じゃないんだぞ」

「まだ映画ではない。まだ映画ではないかもしれない。映画になってしまいう前に、楽しんでおけてことだ。いつかそのうち、フィルムが充分早いものになり、装置が便利なポケ

4 ナチス・ドイツが多
用したサブマシンガン
MP 38およびMP 40の、
連合国側での通称。

5 連合国がドイツの
ロケット技師を捕らえた
バイエルン州の村、ガル
ミッシュ・バルタンキル
ヒエン。

ットサイズになり、大衆価格で作れる、照明もブームも不要ということになったら、さあ……どうなる……」いま右舷に神話の島リューゲンが見える。白亜の絶壁が空より明る。入江が霧に霞んでいる、茂った檜の木々の間も。海辺には濃厚な霧が真珠色に輝いている。我々がキャブテン、グナープ女将は、リューゲン島のグライフスヴァルダー湾へ進路を向け、めざす獲物を求め、その長い入り江を隈なく探索。一時間後（滑稽なソロのバスーン演奏をバックに、年老いた背教者がガソリン携行缶から、ひどく発酵したマッシュポテトを啜って袖で口をぬぐい、ゲップをする、そのクロースアップ）成果のないまま、我々現代の海賊は再び外海に出て、島の東海岸をめざす。

さつきからの細かな雨。オットーが雨合羽を取りだした。熱いスूप入りの魔法壺もだ。幾重もの明度に分かれた灰色の厚い雲が空を疾走する。霧に包まれた大きな岩山、険しい絶壁、深い峡谷を流れおちる川、雨の中の緑と灰色、その上に突き出た白亜の岸壁を船は通りすぎていく——〈白亜の石段〉、〈王座の岩〉、そしてアルコナ岬の断崖の下に波が砕け、断崖の上の白樺の森を風が抜ける港へ。……古代スラヴ人はここに聖堂を建て、スヴェントヴィトなる豊饒と戦争の神を祭った。そのスヴェントヴィトには、別の名がいろいろあり、それぞれの名でそれぞれの務めを果たした——三つの頭を持つトゥリグロフとしても、五つの頭を持つポレヴィトとしても、七つの顔（！）を持つルーゲヴィトとしても「二つのことに頭をつっこむな」と今度上司に言われたら、この神様の話をしてやるという。さて、我々が船の左舷からアルコナ岬が消えたようだ——

「見えたぞ」操舵室の屋上からオットーが叫ぶ。はるか遠方、雨の中にかすかに浮かぶ、小さな亡霊のような白い船影。ヴァイソウ岬（蒼白い石灰石の鍵を使って、本日北方の神は

6 リューゲン島南東部の入り組んだ海岸線から、船はいま東岸を北上中。〈王座の岩〉と訳したのはドイツ語名「ケーニッヒシュトゥール」という、百数十メートルの白亜の絶壁。アルコナ岬は島の北端。

スロースロップのハートの監房をこじあげようとしているのか」の陰からいま、小さな白い、幽霊のような船がちらり、姿を現した。

「つかまつてるんだよー」グナープ夫人が舵輪をつかみ、足を踏んばった。「衝突、航路を進むからねー！」オットーは方位盤のそばに屈んで震えている。

「ほれ、スロースロップ」

ルガー拳銃？ それに弾薬箱？「何だよ……」

「今朝、卵と一緒に届いた」

「言ってくれよ——」

「ちよっと腕のいい男だな、しかし現実主義者だから。あんたのお友達のグレタとわたしは昔ワルシャワで彼を知っていたな」

「シュプリンガー——教えてくれよ、一体あの船は何なんだ？」双眼鏡がシュプリンガーからスロースロップに渡される。生霊のように白い船首には黄金のジャッカル像、金文字で書かれていた船名は、読まなくてもわかっている。「オー……ケイ」降りしきる雨を通して懸命にシュプリンガーの目を覗き込む、「あんた知ってたんだ、おれがあ船に乗ってたの。で、こうしておれを、はめようってわけだ、だろ？」

「あんたが乗ってた？ いつだよ」

「しらばっくれるな——」

「いいかね——今日はあんたじゃなく、ネリッシュが包みを取りにく予定だったんだぞ。あんたのことは知りもしなかった。それなのに、すべてを陰謀にしないと気がすまないのか？ わたしはロシア人を操れんよ、彼を送り込むこともできない——」

「今日はヤケに善人ぶるじゃないか、跳ね駒さん？」

「バカなことと言い合ってるんじゃないよ」グナーブ女将がひと呟え。「行動——開始だよ！」

アヌビス号の船足は幽霊のごとくのろろしている。距離がつまっても、輪郭はぼやけたままだ。シュプリンガーが操舵室にあったメガフォンをつかんで叫ぶ。「しばらくだな、プロカロフスキー——乗船の許可をくれ」

返ってきたのは銃声だった。シュプリンガーが甲板に倒れる。視界に流れる黄色の雨合羽を銃弾が掠める音がした。仰むけの姿勢のまま、メガフォンを咥える。漏斗を伝って雨水が口に入り込む。「ならば仕方ない。無許可で乗りこむまでだ——」スロースロップに身ぶりで合図。「乗船準備」と指図をして、フラウ・グナーブには、「一発よろしく」

「わかった、でもさ」オットーの母は邪悪な流し目をキラリとさせる。彼女が今日船を出したのがカネのためでないことは明らかだ。「ガンとド突いてやるのは、どのタイミングだい？」

海原の上に、アヌビス号とただ二隻。スロースロップの額に脂汗が浮かぶ。強風のなか、背景をなすリューゲン島の岩多き緑の岸辺が上下に揺れる。もう一発、隔壁からカン高い銃砲の音。「ド突き、始め」シュプリンガーが命じた。風雨が激しさを増す。ニカッと笑ったグナーブ女将は、歯の間からハミングを漏らしながら舵輪を回す。回転の早さにスポークがぶれる。船の舳先が急旋回して、相手の船側のど真中を狙う。アヌビスの白い横腹が急接近する——フラウ・グナーブは輪に貼った紙を突きやぶるみたいに、こいつに突っ込もうって腹か？ 舷窓の向こうに顔が見える。調理室の外でジャガイモを剥くコック。

フロックコート姿のまま飲んだくれて雨の甲板で眠りこんだ者が、船の揺れるままにツツと滑る……ああ——ヤー、ヤー、彼女の肘の脇には大きな青い花器に入った千切りポテトが、窓が、螺旋の茎の上に咲く白一色の鉄鉄の花が、流し台の下から届くキャベツと布巾の微かな匂いが、彼女の腎臓の辺りできっちり快く結ばれたエプロンの結び目が、脚の周囲の子羊の肉が、オー、ヤー、あの小さな——ああ——来るぞ、来る来る、あのかわいい——AHH——

オットー！ 船はアヌビス号に激突した。凄惨きわまる、耳も裂けよとばかりの呼び声……

「スタンバイ」シュプリンガーは立ちあがっている。プロカロフスキーがアヌビスの向きを逸らし、エンジン回転を上げた。グナープ女将が追いつかる。みずからの航跡で船体を揺らしながら相手の右舷をうかがう。オットーが引掛け錨を手渡す。長い鉄製で穴が開いていていかにも機能的なそれらは、ハンザの時代から使われている骨董品だ。その間もかあちゃんは全力疾走。アヌビスの天幕の下からカップルたちが出てきて楽しそうにこちらを見ている、笑いながら指さし、陽気に手を振る。女たちのむき出しの胸に、雨のビーズ玉が垂れる。投げキッス。バンド演奏はガイ・ロンバードのアレンジによる「雨粒の間を走りぬける」^{*}

滑る梯子を、塩水にぬれた海賊スロースロップが上る。自分の引掛け錨を差し上げ、綱を伸ばして、オットーから目を離さずに——振りかぶり、投げ縄を投げるように旋回させて——ガチャリ。船首と船尾にはシュプリンガーとオットーが立ち、ふたり同時に錨をフックさせる。二つの船体がぶつかり、弾んで離れるのを引き寄せてまたぶつける……だが

7 ハンザ同盟が消滅したのは十七世紀末。三十年戦争後、オランダ等プロテスタント国家が興隆、海洋交易も新大陸を巻き込み、ニュートンの登場によって科学の思考も刷新され、新しいシステム（近代西洋）が起動する。グナープ夫人は、なかば〈それ以前〉に帰属しているかに見える。

8 "Running Between the Raindrops" (一九三二)。ガイ・ロンバード楽団は甘いメロディを得意とし、一九二九年以来、アメリカ市民は、いつも大晦日の晩にラジオから流れる彼らの演奏に親しんでいた。

柔白なアヌビス号はゆったりと体を広げ、それをゆるす……オットーは、相手の遊覧船の船首にある鎖^{フック}止めの鯨骨彫りの手すりに綱を巻きつけ、それからベタベタと水しぶきを上げ——スニーカーの靴跡がつくる肋骨の模様を雨が消し去る——船尾に走って同じ作業を繰り返す。両船体間に新たにできた白濁の河は猛り、船尾へ流れる。シュプリンガーはもう遊覧船の第一甲板に立っている。ルガー拳銃をベルトの中に差し込んで、スロースロップも後に続く。

往年のギャングのスタイルでシュプリンガーが首をひと振り、スロースロップをブリッジへ呼びよせる。スロースロップの進む脇から握手の手が伸び、ブロークンなロシア語の挨拶が、酒臭い息とともに飛んでくる。左舷のラダーにたどり着き、それを登り、ブリッジへと静かににじり寄る。プロカロフスキーは船長の椅子に座ったままだ。帽子を後ろに傾げ、シュプリンガーのお気に入り^{ケムリ}をふかしている。そのシュプリンガー、今ちやうど、無数のレパトリ^{レパトリ}を有するドイツのトイレット・ジョークの中から一つ、パンチラインをキメたところだ。

「たまげたな、ゲアハルト」プロカロフスキーが立てた親指を振った。「赤軍が、きみのためにも動いてくれているのか？」

「やあ、アントニーまた会いました」三つの銀星を並べた両肩の肩章を、ハローとばかりにキラリとさせるが、反応がない。

「おまえはだれた」と言っ^て船長はシュプリンガーの方を向き、「機関室の中だ。右舷側、発電機の後ろあたり」これだけ聞けば充分だ。スロースロップはこの場を立ち去る。

ラダーを降りたところで通路を歩いてくるステファニアに会う。「やあ、こんな再会は

残念だねえ」

「こんにちは、わたし、ステファニア」知らん顔の愛想笑いを浮かべて通りすぎる。「上の甲板にはお酒があつてよ。どうぞお楽しみなさいな」あれ、もういない。雨の中を行ってしまった。ゲッ。

スロースロップはハッチをくぐりラダーを降りて、機関室へ向かう。どこか頭上で三つベルが鳴った。ゆっくりとした、やや空虚な、かすかにエコーのかかった響き。それが告げるのは遅い、遅い、時刻。……ここはどこだ？ 記憶が戻った。

デッキに足が触れた瞬間、すべての灯りが消える。送風機もゆっくりと停止して静まりかえる。機関室はもう一階下だ。暗闇の中でやれというのか？

「無理だ」はつきりと声に出した。

「できる」耳元で返答。吐息まで感じられる。首の付け根を殴りつけられた。プロの技だ。真暗闇の中で光が輪をつくる。左腕が麻痺してきた。「もう片腕は生かしておこう」声がささやく。「機関室へ降りていけるようにな」

「待ってくれ——」ダンス用パンプスのとがった爪先のような感触。それがいきなりやってきて、一瞬あたりを浮遊し、顎下の柔らかい肉を撫でたかと思うと——喉元を蹴り上げた。スロースロップの歯がガクンと閉じて舌が挟まる。

激痛が走る。血の味。両目の脇に脂汗が垂れる。

「動け、さあ」ためらっていると、首筋を絞めつけられる。その痛み……ラダーに縋って、真っ暗闇の中、泣き声をたて始めたが……ふとルガー銃があるのを思い出し、手を伸ばそうとしたところ、尻と股間の間に、強烈な蹴りが入って、銅板の床に銃が叩き落とされる。

片膝をつき、あたりを探りだすと、その指を靴が踏みつける。「ラダーをつかむのにこの手が必要なのだよ、そう言ったろうが、えっ？」手を離れた靴が、肋骨の脇を襲う。「立てよ、立つんだ」

階下へのラダーを見つけ、強ばった体でぎこちなく降りていく。近くでハッチの鉄蓋が持ちあがるのが感じられる。「おまえのやるべきことが済むまで上がってくるんじゃない」「タナツ？」舌に痛みが走り、口から出た名前は不明瞭。返事はない。「モリツリか？」沈黙が続く。スロースロップはラダーにかけた足を一段上げた。

「足搔くなよ、見張ってるからな」

一段、もう一段。震えがきている。腕に鋭い痛みが戻る。無理だ。降りていくのは。だ
が上がることもできない。懸命に、痛みを意識を集中する。足がようやく鋼鉄のプレー
トに触れた。何も見えない。右舷へ向かう。一步踏み出すごとに、向こう脛が、突き出た
障害物にぶち当たる……いやだ……ムリだ……奥底へ降りていくのは……素手では……怖
い……

突然、右手でクーンという鼻音。彼は跳び上がる。何だろう、機械的な音だ。歯の間か
ら吸い込む空気が冷たい。背中と腕の神経が明滅している。さっと……手を伸ばした先に
円筒形の障害物、これが発電機か……中腰になっていいよ——彼の手が強ばったタフ
タ地をつかむ。それをエイと払いのけ、立ちあがろうとしたら、頭を鋭い何かにぶつけ
た……ラダーまで戻りたい。もう方向がわからない……しゃがみ込んだまま、円を描いて
回り出す、ゆっくりと……もういい、もうわかったから終わりにして。……だが、床を這
う手がふたたび触れる、滑らかなサテン地に。

「やめる」。やめるもんか、とばかり一列の鈎ホックと目が彼に絡まる。外そうとしたら、指の爪が割れた。追跡は執拗だ……蛇のような、確信に満ちた、縫いからまる動き。指も動かない……

「フー……」中腰の構えで前へ進むと、何やら吊るされた物体があった。濡れた絹布に包まれた、凍りついた太もも。それがグラインと揺れて彼の顔面にぶち当たる。海が匂う。顔をそむけると、今度は長い濡れた髪の毛の鞭に頬を打たれた。逃げられない、あちらからはこちらからも……冷たい乳首……尻の深い裂け目、香水と糞と海水の入りまじった匂い……そして、何なんだ……この匂いは……

光が戻ってきた。スロースロップはひざまずき、ひと息ずつ呼吸している。いずれ目を開けなくてはならないだろう。密室に、闇に抑えつけられた光が、光の息が絶えていく臭いがたちこめている。大きな悲しみの中で肉体がリアルな——リアルで恐ろしい、今にも襲ってくる——苦痛にこちらから触れていこうとするように。……茶色い紙に包まれた物は、彼の膝から五センチの距離に、発動機に差し込まれてあった。だが、視界の端では死白色した紅いものが踊っている……それに、上なる外界に通じるラダーは、だれもいないように見えて実は……？

フラウ・グナープの船に戻るとシユプリンガーはアヌビス号から失敬してきたシャンパンを手に、輝く口金はずし、コルク栓をとぼす——別れの礼砲だ。まだ震えが止まらないう。スロースロップのグラスから、シャンパンのほとんどがこぼれ落ちる。船と船が離れていく。それをアントニーとステファニアがブリッジから見つめる。その四つの目の裏側に

バルトの空が透けて見える。ステファニアの白い髪は泡立つフィラメント、その頬は霧の彫刻……雲の夫と霧の妻は、超然と、音もなくしりぞいて、嵐の中心へ戻っていく。

フラウ・グナープは南へ向かう。リューゲン島の反対側の岸を回り湾曲部を過ぎて海峡へ。船は夜へ向かう。後から嵐がついてくる。「シュトラールズントの港に入るよ」操舵室の石油ランプが揺れるたび、絵筆で描きなぐった女将の顔は、潤滑油の緑に限取られ、黄色い光を走らせる。

ここで船を降りよう、とスロースロップは考えた。クックスハーフェンへ向かおう。「シュプリングァー、例の書類は期日までに入手できるかな」

「何も保証はできない」と、ゲルハルト・フォン・ゲールは応える。

シュトラールズントの波止場、雨降りしきるランプの灯り。その下で交わす別れの言葉。フラウ・グナープはスロースロップにキスをし、オットーはラッキー・ストライク一箱を寄贈する。シュプリングァーは彼の緑の帳面から一瞬目を上げ、鼻眼鏡^{*10}ごしのアウフ・ヴィーダーゼーンを送る。船を下り、雨に濡れた港のハーフェン^{*10}プラーツへ歩いていくスロースロップ。海に慣れた脚が、波揺れを失ってぐらついている。帆船とマスト、起重機の滑車を過ぎ、ギーギー軋る舢舨^{はしけ}と、木製の荷車に荷降ろしをしている夜勤の団を後にする。灰色の馬たちが首を下げ、草もない石だたみに口づけする……ポケットの中のさよならが、からっぽの手を温める……

10

「港広場」の意味。



吾がために花をつける教皇の杖は何処に

彼女^{あなた}の山は、絹と色香で老身を誘いもどす^{*1}

逞しき体に塗油した下僕たち、彼女^{あなた}の物憂き目配せ

その虐^{いた}りが血肉を聖化^{*2}し、空に向け

純青の光への変化^{へんげ}をもたらす——緊縛^{ボンド}は歌い

振りおろされる鞭^{むち}には虹の軌跡^{*3}

我を呼ぶ彼女^{あなた}の声は氣象のごとく

気紛れにただようばかり、夜会の集まりにも

病身のリザウラを運命に任せず

吾ひざまずきて最後の懺悔をなしぬ

かれの宝石の輝きの中にありて疑いを捨てず……

吾は此処に、身を引き裂く最後の風の下にあり

1 本務を置き去りにして、カッチェとのマゾキステイックな性愛に耽るブディング准将が、タシホイザー伝説を引きながら、胸中をつづっている。

2 原文は transubstantiate で、これは（地上的な存在であるパンとワインが）キリストの血と肉へ「化体」すること。

3 whips that trail their spectra as they fall. というこの句は、「重力の虹」というタイトルに相応したイメージを喚起する。

歌も欲情も記憶も罪の意識も奪われて
ペンタクルもカップも、聖なる愚者もなきところに

ブディング准将は六月中旬に昇天、死因は大量の大腸菌感染だった。今際のきわに「おなかイタイよう……」と泣き言を連発して。望んでいた通りの、夜明け直前の逝去だった。⁴その後、少々のあいだ、カッチェは「ホワイト・ヴィジテーション」を離れず、戦務を解かれた廊下を歩き、実験動物もなくなった檻の格子が並ぶ向こう端に、くすんだ姿で佇んだ——灰の色をした蜘蛛の巣と、積もる埃、蠅のたかった窓がなす風景の一部に、彼女自身になってしまったかのように。

ある日、むかし音楽室だった部屋に、ウェブリー・シルバーネイルが無造作に積み上げた何枚ものフィルムを見つけた。誰も弾かないヴィットマイヤーのハープシコード一台だけ、タイルもストップもあられもなく壊れ、弦の音程もシャープし、フラットし、腐食するまま放置されているところ。気象のナイフは容赦なく、部屋部屋を刺しつづけてきた。その日、ポイントマンはロンドンに用があって出かけていた。といっても〈第十二宮〉の仕事ではない。各方面の実業家たちとの、アルコール入りの昼食会。カッチェは忘れている？ ってことは、自由になれる？ 実はもう、なっている？

「ホワイト・ヴィジテーション」の見るからに空虚なスペースの中から、一台の映写機を採しだしたカッチェは、これに缶から撮りだしたフィルムを巻きつけ、染みだらけの壁面の、貴族連中が北の谷間で浮かれ騒ぐ風景画のわきに写像のピントを合わせる。白色の髪をした女が映っている。だが、この中世的雰囲気の一部が、チェルシーのブレンティスの

4 タロット・カードへの言及。

5 「夜が明ける直前」は、上巻452ページの最後で予兆されていた。

メゾネットの中だとわかるまでは、その妙な顔の女性が自分自身だとは思わなかった。

バイレイトとはいつ——ああ、オズビー・フィールがベニテングタケを調理していた日だった。[★]……興味を引かれたカッチェは、二十分間、自分の映像を追い回す。まるで魚座の二匹がフーガを踊る稽古をしているかのよう。こんなフィルムを、彼らは何に使ったのだろう。その答えもリールの缶の中だ。まもなく彼女は見つけた——タコのグリゴリが水槽にいて、映写されたカッチェを見ている映像を。カッチェの姿から、それを見つめるタコGへ、カット編集で切り替わる、その繰りかえし。それぞれに日付けがタイプ打ちしてあって、条件反射がだんだん堅固にできあがっていくさまを示している。

そんな場面が続いた後に、接ぎ張りされたこの映像は何だろう？ この、オズビー・フィールのスクリーンテストのようなものは。サウンドトラック入りで、オズビーが、自作の映画のシナリオを、即興で演じている。題名は——

《ドーパーズ・グリード》

「最初のシーンでは、ネルソン・エディ[★]の歌声がバックで鳴っている——

ドーパーズ・グリード

オー、ドーパーズ・グリード

これほどゲロいものはない

青空気分のあなたでも

6 上巻183ページ参照。

7 一九二〇年代にオペラ歌手として脚光を浴び、その後ミュージカルでも活躍。美女のソプラノ歌手ジャネット・マクドナルドと共演した一連の映画で知られる。麻薬の歌など、誰よりも似つかわしくない本格派歌手。

豚に変わってしまったでしょう
麻薬中毒の欲深を、一度なめてしまったら

さてさて、踏分け道の長旅に疲れたカウボーイがふたり、ベイジル・ラスボーン^{*8}とS・Z・カドルズ^{*9}・サコルのふたりが町に入っていこうとすると、入口で保安官に止められる。これを演じるのが、『フリークス』で主演した小人^{*10}ですね。金色の星のバッジで胸全体が隠れるけど、町のシェリフがこの人です。ラスボーンとサコルが手綱を引いて馬を止める。ふたりの顔に不安げな笑みが浮かぶ。

ラスボーン…これは現実ではなからう。ありえないことだ。

サコル …ホッホー！ ゲンジツにきまっとるよ、ヤク中さん。アンタ道中、ヘンテコなシャボテン、やりすぎたわな。ボクのように上物のマリワナにしとかないとアカンわ。そう言ったやろ——

ラスボーン…(例の神経質な、薄気味わるい笑いを浮かべて) 頼むから、ユダヤ人の母親みたいな世話はやかんでくれ。現実か現実でないかは自分でわかる。

(その間にも小人は、西部の強者らしいポーズをいくつかをキメて、でかいコルト拳銃を二挺、振りまわしている)

サコル …アンタかてボクと同じだけ大西部の草道を——覚えてるよな、どの道だか、このオタンチン——歩いてきたがな、小人のシェリフを見て、それがゲンジツかゲンカクかくらい、わかりそうなものに。

ラスボーン…現実の小人と幻覚の小人という、ふたつのカテゴリーがあったか。それは

8 シェイクスピア劇の舞台から転向した本格俳優。一九四五年から翌年にかけて三本のシャーロック・ホームズ映画に主演。

9 映画『カサブランカ』(一九四二)のウェイター頭の役が光る、ハンガリーから逃れてきたユダヤ系の名優。ラスボーンとは別の意味で、カウボーイ役がもっとも考えにくいひとり。

10 トッド・ブラウニング監督『フリークス』(一九三二)で、ブランドン乗りの妻にいたぶられる小人リトル・ハンス役を演じた役者は、ハリー・アールズ。

知らなかった。おぬしは、このテリトリのそちこちで小人のシェリフを多数みてきたに相違ない。さもなくば、そのようなカテゴリーは作らんであろう。それともおぬしなら作るのか。スキあらば何をやらかすかわからん、油断のならぬ手合いだ。

サコル …「まったく、おぬしってやつは」って、言わんのか？

ラスボーン…まったく、おぬしってやつは。

ふたり、笑う。銃を抜いて、何発か、ふざけてバンバン撃ちあう。小人は憤怒して、あつちへ走りこつちへ走り、甲高いドイツ語訛りの声で、いかにも西部劇風の台詞を吐いている——「この町はな、俺と貴様が両方いられるほどデカくはねえんだ」みたいな。

サコル …いいか、アンタにもボクにもヤツが見えてるやんか。ってことは、ヤツはゲンジツだ。

ラスボーン…それはいいがかな。^{ジョイント}共同幻想というものも、この世に知られていないわけではないぞ、相棒

サコル …ジョイント・¹¹ゲンソウだなんて言つたらんがな。たとえばゲンソウだとしても——ぼくは断じてゲンソー¹²だとは思わんで——ペヨーテ・ゲンソウやろ。それともジムスンウィード¹²・ゲンソウか

このおもしろい会話が一時半続くんた。その間、カットは一切なし。小人はせわしなく動いて、会話から出てくる、高尚にして把握しがたい、ときに目も眩むようなポイントにいちいち反応する。たまに砂塵の上に馬が糞を垂れる。自分自身の実在性が議論されているのだということを、小人がわかっているのかどうか、これは何とも言えなくて、その

11 「ジョイント」には「マリワナ」の意味がある。

12 学名ダトウ・ストラモニウム。いわゆるチョウセンアサガオで、アメリカ大陸の原住民はその幻覚作用を宗教的な目的に使った。

点も本作品の芸術的両義性をつくり出している。最後に、ラスボーンとサコルは、どちらが正しいかを決めるには、小人を殺すしかないという点で合意するんだ。小人は、それが通じたか、キーキー叫びながら通りを走り去っていく。サコルは笑いすぎて馬から飼葉桶に落ちてしまう。ラストは、曖昧な薄笑いを浮かべたラスボーンのクロースアップ。歌のボリュームが上がる。

青空気分の人あなたでも

豚に変わってしまうでしょう

麻薬中毒の欲深を、一度なめてしまったら」

これには短いエピソードがついている。オズビーが出てきて、もちろん『グリード』¹³の要素をなんとか筋に入れ込まなくてはいけない、このままじゃ「ドーバーズ・グリード」という題名が浮いてしまう、と述べるのだが、「えーと……」と言ったところでフィルムはプツリと終わってしまう。

すっかり頭の中を掻きまわされてしまったけれど、そこはカッチェ、読みとるべきメッセージは逃さない。「ホワイト・ヴィジターション」にも誰か隠れた仲間がいて——シルバー・ネイル本人かしら、あの人はポイントマンの取りまきから距離をとっていたようだし——オズビー・ファイルのこのフィルムが、間違いなくわたしの手に渡るように、意図してここに置いておいたんだ。カッチェはフィルムを巻きもどし、もう一度回す。オズビーの目線はしっかりカメラを捉え、自分を見つめている。これはラリった人間のおふざけで

13 オーストリア出身のエリッヒ・フォン・シュトロハイム監督による、フランク・ノリスの自然主義小説『マクタイーグ』の映画化（一九二四）。

はない。オズビーは、すっかり演技をしている。間違いない、この映画は、一種の暗号文であって、そのメッセージは——読み解くのにそんなに時間はかからなかった。あのベイジル・ラスボーンはオズビー自身を表していて、S・Z・サコルがポイントマン。小人は、ダークで壮大な〈陰謀〉そのものではないだろうか。〈陰謀〉をコンパクトにパッケージ化して、ミゼット・サイズに、明確に標的化したものに違いない。で、ポイントマンは陰謀が実在すると主張するのだけれど、そこはオズビーの方がちゃんとわかっていて、ポイントマンは結局、銅葉桶にはまったまま動きがとれなくなってしまふ。そして陰謀のミゼットは、大慌てで砂塵の中へ消えてしまふ。そういうことか。これは予言ね。親切心からの。彼女は自分の仕切り^{セル}へ戻り、少しばかりの所持品をバッグに詰め、"ホワイト・ヴィジテーション"を後にする。刈り込む手を失ってリアルな姿に伸びつつある装飾庭園を抜け、平和とともに帰ってきた狂人たちが日向ぼっこする前を過ぎて。以前、スヘーフエニングンの外に広がる砂丘を歩いた。給水場を過ぎ、打ち壊されたスラム街に代わって何ブロックもたち並ぶアパート群の、型枠の中のコンクリートも乾ききらない前を通して。あのときも、いまと同じ逃亡の期待を胸に抱えていた——吹けば飛びそうな影となって、〈天使^{エンジェル}〉という名の風車のそばで、パイレーツとランデヴーに向かった。あれからもうずいぶんになる。^{*14}彼は今どこに在るのだろう。まだチェルシーの古屋敷に住んでいるのかしら。生きているのかどうかもわからない。

ともかくも、オズビーは在宅だった。香辛植物を噛み、クサのケムリを吸い、針先からコカインを射^うっている。戦時中に溜めこんだドラッグの最後の残り。いま壮烈な噴火が起ころ。三日も寝ていないオズビーの顔が、入ってきたカッチェの姿を見て光り輝く。原色

14 ブリッエロのロケット隊とオランダのレジスタンスから離れ、ブレントイスと海峡を渡った(上巻206ページ参照)のが前年十二月。このエピソードは、おそらく四五年七月の出来事だろう。

の渦巻く太陽が、彼の頭から破裂して飛び散った。静脈から注射針を抜いたまま、その手を振る。歯に啞えているパイプは、サックスほどの大きさがあって、鳥打ち帽を被っても、頭の爆発はまるで収まらない。

「シャーロック・ホームズね。つていえば、ベイジル・ラスボーン。正解ね」カッチェは息を切らしている。肩のバッグが床に落ちた。オーラが脈打つ。頭を下げると、体は鋼鉄でありながら生皮で、汗でもある。^{*15}「ご名答。フランケンシュタインの息子役も絡めたんだだけだね。もっとダイレクトに伝えたかったんだけどさ、そうもいかないから——」

「プレンティスはどこ？」

「旅の資金調達さ」カッチェを案内して入っていく奥の間は電話つき。コルクボードの一面にメモが留めてあり、机の上には地図、計画表、『現代ヘレロ語入門』、企業史の本、録音コードの束が積み上がっている。「まだいろいろ整理はついてないけどさ、でも近いうちに、ペイビ、きつと組織されてくる」

え、これが本当にその日のための準備なの？ 自分はこれまで何度夢からひき戻されたかわからない。そう望むだけでは、この程度のことでは、何も起こせないから。弁証法的に考えるなら、^{*17}なんらかのカウンターフォースが、いつかは、生じるはずだけれど……自分分は充分に政治的でなかったのだろう、革命の進展を信頼しきるなんてことは……あれだけの権力を持つ相手に対して、本当にそんな……

オズビーは折り畳み椅子をふたつ用意した。彼女にガリ版刷りの束を手渡す。かなり分厚い。「知っておくべきことが一つふたつ書いてあるから。急かせるのもイヤだけどさ、銅葉桶が待っているんで」

15 前のパラグラフから、オズビーの視点で見たサイケデリックな描写が差し挟まれていることに注意。この作品は、映画のようであることを意識している。ここはオズビーの「主観ショット」が挿入されるのか。

16 『フランケンシュタインの復活 *Son of Frankenstein*』（一九三九）では、ラスボーンが死んだフランケンシュタイン博士の息子役で登場、惨劇が再演される……。

17 歴史はテーゼ・アンチテーゼ・ジンテーゼ

やがて部屋にあふれる極彩色が、ブーゲンビリアの赤とビーチの桃色の壮麗な（しばし心を奪う）パターンを通してしずまったとき、オズビーにこんな思いが訪れた。いまこの瞬間、自分は失われたヴィクトリア朝の絵本に出てくる、なかば神聖なヒーローになったのではないか、と。それで彼は、カッチェが百もの違った言い方で尋ねるその質問に、こう答える――「人生の議会ではね、採決の瞬間はあっさり訪れるのさ。僕らはすでに自分たちが選んだ回廊を〈採決場〉^{フロア}に向かって進んでいるのさ……」

（正・反・合）を繰りかえして前進すると説く弁証法的唯物史観は、プロレタリアート革命の必然性を訴える理論的根拠となった。

□ □ □ □ □ □ □ □

ママへ。ぼくは今日、二人、地獄へ送ったよ……。

——『トマスによる福音書』^{イェズ}と思しきものの断片
(オクシリンコスの秘密のパピルス文書^{ナグ・ハマデー})

こんなに多くの人がいるとは誰が想像しただろう、絶え間なく現れる人たちは、この不安を煽る構造物の中で、グループで固まったり、一人物思いに耽ったり、立ち止まって絵画、書物、展示物をしげしげと眺めたりしている。非常に広大な博物館のようなこの場所は、多層の階から成り、生き物の組織のように広がる翼を持っている——その成長に最終的な形があるにせよ、内部にいる者が目にすることはできない。ホールの中には安全を保証されていないところもあって、そういう場所の入口では、モニターが危険を知らせている。通路間の移動は摩擦がなく、完璧なローラー・スケートのように、しばしば頭を前に突き出して、滑走できる。長い回廊の一部は海に向かって開けていて、日の入りを眺めながら観察することもできるし、シンボジウムの時間制次第では、日の出も楽しむこともできる。

1 ナイル河畔の町オクシリンコスで十九世紀末に発見されたパピルス文書の断片のうち三巻が、後にナグ・ハマデーで発見された「トマスによる福音書」と重なる部分が多く、共にグノーシス派によって再解釈されたキリストの諸録集であることがわかった。ただしここに掲げている「断片」は、同じ「トマス」でもピント・ジョン氏の作家によるもの。このエピソード

なかなる、みんな車の中へ入って、無数の棚から欲しいお菓子を採すのだが、目の前に、次々と、もつと甘くもつと美味しそうなのが出てくるのだ……アイスクリームをすくって待ち構えているシェフが、甘党の注文客の一語を聞いただけで、そのサイズとフレーバーのベークト・アラスカの形を作り、サッとオーブンに突っ込む……バクラヴァのお船には、ババロアのクリームの上に、ほろ苦いチョコレートがクルリと巻かれ、砕いたアーモンド、ピンポン球サイズのチェリーが載っている。溶かしたマシュマロとバターをからめたポツブコーンもある。ファッジも、甘草からディヴィニティまで数千種が、石版テーブルの上にならび。タフィを長く長く伸ばしたのが、みんなの手を伝って、角を曲がり、窓を抜けて、別の廊下まで延びている——すいません、これちょっと持っていたけすかね、どうもどうも——と、そのお調子者は行ってしまった。いま来たばかりのパイレート・プレンティスは、長い長い練りキャンディの端を持ってキョトンとしている。これの向こうの端はどこなのか、まるつきり見当がつかない……だったら辿っていつてみよう……苦みばしった顔をして、一步一步あるいていく。一ヤードずつタフィを巻きとり、ときどきチョコッピリ口にも入れて——ふむふむ、ピーナッツバターとハニーね——さて、そのタフィの迷路を進んでいくと、実によくできたもので、まるでプロヴィデンスの中心を突っ切って走るUS1号線のように、外来者に街を観光させるように出来ている。きつとこの不思議なタフィの手品は、新参者をこの場所に慣らすためのルーティンなのだろう。というのも、パイレートはとどころで、タフィを括っている他の新参者と交差するからだ……ときにはタフィ同士が纏れてしまって、それを解くのにだいぶ時間を要することがあるが、

では、ある意味で「地獄送り」になったプレンティスが（途中から現れるカッチェとともに）、スバイとしての罪の意識にさらされながら、原子爆弾を抱え込んだ、べつとり甘美な未来世界を動いていく。

2 ケーキにアイスクリームを載せ、メレンゲを被せて焼いたデザート。

3 中東・北アフリカ地方でポピュラーな菓子。フィロ生地になッツを挟んで重ね、焼いてから濃いシロップをかける。

4 メイン州からフロリダ州まで合衆国東岸を走る高速道路以前のハイウェイ。ロード・アイランド州の州都プロヴィデンス（「神意」とも読める）の中心部も縦断する。

これも新しい参加者同士が偶然出会って知り合いになるために計算されているのだろう。

ツアーは今、パイレーツを戸外の中庭へと導く。人だかりのできたそこには、^{エルトシヨヴァインヘーレ}ヘ

土豚⁵穴⁶の代表者と、だれか宣伝部のトップのような人が侃々諤々、何を議論しているのかと思えば、なんと〈異端問題〉だ。これは本大会の厄介な火種であって、下手に扱うと会を沈没させかねない。路上のエンタイナーが脇を滑りやすくて危険な固い舗道の上でめざましいトンボをきる素人の軽業師、ギルバート&サリヴァンのメドレーを演奏するカズー合奏団⁵、サービスを待つ列ができるたび、ストリート上の面ではなく、階段を上がり下りした大きな踊り場で踊る少年少女……

タフィを（いまや持ち運ぶのも大変な）玉に巻き取りながら、パイレーツはビーバーポード⁷ローの名で知られる通りにさしかかる。〈委員会〉のオフィスが並んでいる通りだ。ドアの上にステンシルで書かれた名前は——〈A4〉……〈IG〉……〈石油企業〉……

〈ロボトミー〉……〈自衛〉……〈異端〉……

「あなたはもちろんすべてを軍人さんの目で見ているのよね」話しかけてきたのはたいそう若い、屈託のない女の子だった。いま流行の、おかしなほど小さい帽子を被っている。すっきりと涼しげな顔が、広い肩幅、高いウエスト、首を見せない、当世の規範的プロフィールとマッチしている。その子がパイレーツと並んで歩く。大きく優雅にストライドを伸ばし、腕をスイングさせ、頭を放り上げるようにして。彼のタフィをつかんだとき、その手が彼の手に触れた。

「きみにとって、ここはすでに楽園なのか」と言ってみる。

「ええ、そうよ。あなたも、ただのデクノボーじゃないよね」

5 濁音を鳴らすカズーはピンチョンお得意の小道具として『V.』にも『競売ナンバー49の叫び』にも登場。本作第四部でも華々しく使われる。

奔放なティーンズの魂は、すぐに感染してしまおう。⁶

君とぼくと、混線

魂たちまち、感染

年の差なんて関係ありまー、せん

皆でたかるぞ ハニー

放りすてるぞ マニー

笑いこけるぞ ファニー

浮かれた魂が トゥー・ユー

忘れなさい ネヴァーマインド、きみの車の騒音

ほら、外を見て、みんなあんなにカッコイイ

忘れなさい、ネヴァーマインド、カレンダーはウソつき

ホントの年齢、みな十月！^{とつき} ヘイ

めくるページの、喧噪

みんな檻から、脱走

魂たちまち、電送

浮かれた魂が、きみに、飛んでき、そう！

スイングバンドはどこからきたのか。
彼女は軽やかに跳ねまわる。ジルバを
踊ってもらいたいのだ。彼にはわかる、
この子が自分の重力を失いたいと思っ
ているのが――

6 teens, spirit, conta-
inous をキーワードとし
て、気ままに (Never
mind) エンターテイニ
ングな世界への魂の到着
を歌う次の歌は、ニルヴ
アーナの "Smells Like
Teen Spirit" (一九九
一) をインスパイアした、
とうわさされる。

建物が隣接し合うビーバーボード通り^{ロウ}で、ただ一つ、意図的に分け隔てられた、波形鉄板製のみすぼらしい小屋。ストーヴの煙突が屋根から突きでていて、庭に放置された自動車部品がすっかり錆びついた姿をさらしている。薪の山には覆いとしてあまり役をなさなくなった雨色のキャンパス地。雨ざらしになったハウストレーラーの車体が冷たい雨にうたれて、タイヤとホイールがみじめに傾いている……看板には「悪魔の弁護人^{デヴィルズ・アドヴァケート}」とある。そうそう、そのとおり。中でやっている説教は、看板に違わず、悪魔的だ。イエズス会士仲間のティヤール・ド・シャルダン^{ティヤール・ド・シャルダン}と中身は一緒に帰は無理だ、後戻りは不可能だと説いている。臨界量^{クリティカル・マス}に注意を払わねばならない。テクノロジーによる制御の量、ないしは相互の結びつきの度合が、ある一定値を越えると、自由へ戻る見込みは一切消えてしまふのだ、と。自由という言葉が何の意味も持たなくなってくる、と。ラピエ神父はそのように弁舌している。いや、たいした弁舌で、神父本人が感動に打ちふるえる瞬間もある……いや、聞きに行かなくても大丈夫、大会^{コンヴェンション}にお集まりのみなさんは会場のどこからでも、この情熱的な説教にチューニングを合わせることができる。いや、まだこのときにその言葉の意味を解した者は、一部のヘップな連中に限られていた。彼らが洒落てそう呼んだ「クリティカル・マス」の最中にもしばしば聞こえる（いまの洒落、おわかりかな？^{*10}）一九四五年に知っていた人は少なかったのだよ。〈宇宙爆弾^{コスミック・ボム}〉はまだ開発初期の段階で、一般の〈人々〉に姿を晒してはいなかった。スーパーヘップな人間がヘップな人間に喋る会話にしか、そんな単語は出てこなかったのだ。「思うに〈世界〉は今や恐ろしい可能性を持つにいったった。これを無視するわけにはいかない。直視しようではないか、へかれら」

7 昔のカトリック教会で、聖人認定や奇跡の資格を厳しくチェックした調査審問官をこう呼んだ。

8 フランスのカトリック司祭。進化論とキリスト教神秘主義の統合を図り、最小構成物質から聖なる精神への一方向的な変化を説いた。第二次大戦中に書いた代表作『現象としての人間』は、ローマ教会から禁じられ、一九五五年まで出版されていない。

9 それを超えると爆発的連鎖反応が始まる核

が死なずにいるという可能性を。永遠の営みを続けていくための最先端技術を、今や「へかれら」は手にしたかもしれないのだから——とはいえ、もちろん我々は以前と変わらず死に続ける。死は常に「へかれら」のパワーの源だった。我々にも分かりやすい話だったと思う。どうせこの世は一度限り、生きてるあいだに、得られるものは得ておこう。そりゃあ「へかれら」の方がずっと強欲で、地球だけでなく、我々からも、あれこれ奪っていくわけだが、まあ「へかれら」だって、同じく死する運命にあるのだから、妬むこともないだろう。みんな同じ船に乗り、同じ死の影に包まれるのだ……そうだ……そうだ。しかし、本当にそうだったのか？ それもウソだったとしたら？ 「へかれら」のウソのうちでも最高の傑作が、細心の注意をこめて言いふらされていたのだとしたら？

我々が死ぬ理由は単に「へかれら」がそれを望んでいるからだ、という可能性を自覚していかなければならない。「へかれら」が生きつづけていくためには、我々の恐怖が必要だという、我々は彼らが刈り取る作物^{ハーベスト}なのだという……

これは、我々の信仰の性質を根底から覆さずにはいないことだ。「へかれら」も死ぬのだと信じるようお願いすることは、私にはできない。「へかれら」も我々と同じく泣いたり恐れたり苦痛を感じたりすると信じ、「へかれら」は「死」を支配しているようでそれはただの見せかけなのであって、「死」こそは我々すべての支配者なのだと訴えることは、私の人間性の限界を超えたレベルの勇気を必要とする……そのとてつもなく高次の勇氣に向かつてジャンプする代わりに、向きを変えて、戦うのはどうだろう？ 我々が命を差し込んでいる者たちに向かって、我々の不死性を要求するのは？ もはやベッドで死ぬことのない「へかれら」も、暴力によって倒されないとはい限らない。それが無理でも、少なくとも、

物質の質量。ここでは「ミサイルを電波で誘導する技術など」制御のテクノロジーが連鎖反応的に発達して、個人の自由が抑えこまれるディストピア的状况が語られている。TVやインターネットをテーマにしたピンチョンの後の作品で追究されるテーマでもある。

10 「時代の先端に通じている」という意味の「ヒップ」と同じ意味。一九三〇年代後半以降、スイング文化の流行語。

11 「臨界の質量」と「決定的なミサ」をかけている。

12 原子爆弾の当初の通称。

我々が〈死〉を恐れていないということを彼らに見せつけることはできる。ヴァンパイアの種類はさまざまでも、それぞれに対して有効な十字架はあるだろう。少なくとも〈かれら〉が大地と我々から奪取した目に見える物たちを分解し、取りこわし、もとの場所へ還すことはできるだろう。

「〈かれら〉の一人ひとりが別々に死んでいくと信じることは、〈かれら〉のシステムが全体として死ぬと信じることに等しい。つまり、システム更新に向けてなんらかの弁証法が〈歴史〉の中にいままも作動していることをだ。彼らの死滅を肯定することは、〈回帰〉を肯定することに等しい。その〈回帰〉を肯定するうえで、障壁となるいくつかの点を、先ほどから指摘させていただいた……」説教する声は、まるで申し開きをしているような、恐れに満ちたものだ。パイレートと連れの少女とは、あるホールの入口近くでこれを知っている。パイレートは入ろうとしているのだが、彼女は一緒にくるだろうか。まあこないだろうと彼は思う。そこはまさに恐れていた通りのホールだ。壁には設備を取り外した跡がギザギザの穴になり、上から漆喰で塗り固めている。他の者たちは、彼が入ってくるのを待っていたのだろうか、チャーリー・チャーリー、ヒット&カット、石・鉄・紙など、見た目には痛みを交換するゲームをしながら時間を潰している。隣の部屋からは水をかけあう音と、タイルの壁に反響している男たちの笑い声。「さあて」と能弁なラジオのアナウンサーの声が聞こえた。「いよいよその時間がやってきました。今から——セッケン、落とし、タ・イム——拍手。甲高い笑い声。それが不愉快なほど長く続く。

「セッケン落としたって？」サミー・ヒルバートが仕切りの薄壁に近づいて、一目見ようと隅の隙間から覗き込む。

13 『GRC』によれば、どちらもイギリスの子供たちの外遊び。

14 セッケンを落とし、拾おうとする相手の無防備な尻を突くという、ロッカルームの「いじめ」ともいえる遊び。

15 上巻415ページに登
場した、「サカナ顔」の
二重スパイ。

16 サン・ジュストはフランス革命軍を率いたリーダーの一人。¹ "brose out" とは汚い物や汚い話でウヘッとさせること。

17 プレンティスの実
際のファースト・ネーム。

17 プレンティスの実
際のファースト・ネーム。

275 3 In the Zone

くれよ」

「だめですよ。こんなのを騙されてはいけない」おっと、こいつはいったい誰だ。油でテカラせたオールバックの髪を梳かして、顔自体と同等の寸法に積み上げている。顔はといえば、ハンマーで叩かれてヤワになった肉というか、何度もダウンを喫しただけでなく、精神的にも叩きのめされた男の表情だ。こいつは、そう、名の知れたペンブルックの政治情報売人のジェレマイア・慈悲深き¹⁸・エヴァンズではないか。「だめだよ。われらがステイヴンは、まだまだ聖人にするには早すぎる、でしょ、あんた」と言って何発も叩く。冗談半分ではあっても、マジに頬へビンタを振りおろす。「エ？ エ？ エ？」

「君みたいなのと一緒に投げ込まれたのなら、そりゃ聖人ってわけにはいかんだろ」と、ナイトの称号を持つステイヴンが無作法に答える。だが、いったいどっちがどっちをけなしているのか。というのも「慈悲深き」エヴァンズがそのとき突然歌い出したのだ。ウエルズ人の面汚しといえるほどヒドい歌声で――

祈りを唱えよ、しがない情報屋のために¹⁹

ヤツも人の子、股から生まれた

笑うにしてもやさしく笑え

垂れ込み屋だって死すべき身だ²⁰
キルケニーからキューにいたる

この世の誰とも、おんなじだ……
だから安堵の息を吐くときは

18 古域で有名なウェールズの南西部の町。

19 ローリング・ストーンズの「地の塩 Salt of the Earth」の最初のライン「しがない歩兵に祈りを捧げよ」(Say a prayer for the common footsoldier)のもじり。
なお「地の塩」は聖書の言葉だが、アカ狩りでハリウッドを追われたシナリオ作家・監督・プロデューサーのチームが、メキシコ系労働者を描いたドキュメンタリー映画(一九五四)のタイトルでもある。

20 アイルランドの貧しい田舎から、ロンドン

ヤンのことも気に掛ける

「いったいどっちが罪が重い？」

報酬を得て自分を売ると

ため息ばかりで一生を無駄にするのと？

「どうもここは、好きになれそうもない」不愉快な疑念が湧きあがってきて、パイレートは落ちつかないあたりにあたりを見やる。

「恥辱に耐えるところが最悪で」とサー・ステイヴンが教えてくれた。「そこを過ぎてしまえば……なんてベテランみたいな口をきいてるが、実は僕もそこまでね。やっと恥辱をくぐりぬけたところなのです。今とりかかっているのは『自由の本性』の演習と

ネイチャー・オラ・フリーダム

いうやつで、自分の行為が真に自分自身のものか、それとも『へかれら』が自分にやらせたことだけをやっているにすぎないのか……自分自身がどう思うかには関係なくね……要するに『頭の中に無線制御装置をつけたまま生まれてきた』問題というのを解かなくちゃならない。禅の公案と同じですよ。これには本当に、医学的な意味で、クレイジーにさせられる。実は僕を狂わせるのが目的なのかと思うのです。それを終えても次が控えている。まったく参りますよ。今の問題を片づけないと、次の問題を教えてもらえない。……なんか、いきなりヒドイ話を聞かせてしまったね——」

「いやいや、それよりおれが知りたいのはさ、きみもおれも、みんな同じ『グループ』なのかい。おれはここを指定されたのか？」

「そうさ。なぜだか、理由がわかってきたか？」

の貴族の家が並ぶところまで。

「うん、まあ、わかってきてしまったようだ」ここにいる人間は結局みな——他の点はさておくとして——お互いを殺し合う人間たちであって、軍人バイレートにしても常にその一員であるわけだ。「おれもバカだな、慈悲のおこぼれくらいにはあずかれるのかと期待したよ……しかしオールナイトの映画館にいたんだもん、ギャラホーギャラホー既舎小路から折れたところにある、路が変な角度で交差するので、なかなか見づらんだ……そこまで抜けるのが大変でさ、有毒物質や金属やらに悩まされる……何のためかといえば、しばらくすわっていられる場所がなかった。自分が誰であっても、何を食べてもどれだけ眠っても文句を言われない場所だね——誰といっしょになっても……」

「ブレンティス、いいんだ気にしないで」誰かと思えばサン・ジュスト・グロスアウト、この男を罵倒するときにはみんな「サム・ジュースト」と呼ぶ。この場所を通過していくあいだには、そんな乱暴な野次しか飛ばないところもある。

「無理だ……そんな……だって、もしそれが本当なら」笑い飛ばそうとしたら、気管の奥に痛みが走った。「おれが寝返ったのは無意味だったってことにならないか？　つまり、それじゃあ、そもそも寝返るもなにも……」

彼にその言葉が届いたのは、政府によるニュース映画の中でだった。FROM CLOAK-AND-DAGGER TO CROAK-AND-STAGGER（クローク・アンド・スタグジャー）というタイトルが、飾り鉾で描き出すタイトルが、今夜もまた一晚、回復中の魂を、何が映し出されるかわからないオールナイト館のスクリーンにさらす観客の前で、チカチカと光った——続いてのショットでは、街頭に小さな人ばかりがあつて、埃っぽいショーウィンドーを覗いている。ここはイースト・エンドの裏の裏、住人以外はその名も聞いたことのないような地区……爆弾にやられたダン

21 ロンドンの架空の小路。上巻525ページに出てくる〈第十二宮〉がここに建っている。

22 St. Justの発音は英語の耳には Sam juiced（泥酔したサム）とも聞こえる。

23 「cloak and dagger」（外套と短剣）はスパイ活劇を表す成句。それを「croak and stagger」に換えると、酔っ払ったカエルが「ケロケロ・ヨロ

スホールの床面は傾き、後ろがせり上がって山腹のようだが、上に乗るとランポリンの上を歩くように頼りない。内に傾いた化粧漆喰の円柱は振れて巻き貝のよう、真鍮製のエレベーターが頭上から垂れ下がる。真ん前に、なんだろうこの生物は、半裸で不潔で毛むくじゃらで、恐ろしく蒼白な色をしているが形は人間そっくりで、それがこなごなに割れたガラス皿の後ろをうごめきながら顔や腹に開いた傷口を泥だらけの黒い爪で掻いている。「スミスフィールド市場では、毎日、ルシファー・アンプが自分を見世物にしております。それ自体は別に驚くことではありません。すべてを失った身であっても、せめて魂だけはその身とひとつに留めおくために、こうした公共奉仕を余儀なくされる復員兵は数しません。ただミスター・アンプが特別なのは、かつてはSOE——特殊作戦執行部——の司令を受ける隊員だったというところで……」

「やってみるとなかなか面白いもんだね」カメラが寄ってこの人物のクロースアップを映しだす。「コッをつかむまでに一週間かかったけど……」

「最初いらしたときと違って、今ではもう、この地区に溶けこんだ感じはしますか？ それともまだ彼らに受け入れられていないようですか？」

「彼ら？ ああ、ここの住人かい。それは大丈夫だ、すばらしい人たちだよ。その点はまったく問題はない」

そのとき、パイレーットの斜め後ろ、チェスのビショップの方向からアルコールの臭いと温かい息が流れてきて、誰かが肩をポンとたたいた。「聞いたかね。『かつてはSOEの隊員だった』と？ 面白いことを言う。ヘザ・ファームを生きて出られた者がおるかい。過去に一人もおらんかったし——未来永劫そうだろう」上流のアクセントだ。進路の定

ヨロ」しているかのよう。

24 上巻冒頭で紹介されたように、ブレンティスは、SOEの隊員として、国の秘密任務を帯びて活動する特別な訓練を受けている。

まらない若造だった頃のパイレーツが憧れたかもしれないしゃべり方だ。しかし、意を決して振り返ると、男の姿はなかった。

「ハンディキャップのようなものだと思えばいいのさ、プレンティス。足が一本ないとか、マリアに雇ったとか……それでも生きていられるだろ？……じきに慣れる、日常の一部になるさ——」

「あれになることがか？ その、ダ……」

「はつきり言っていていいんだよ。『何になる』って？」

「ダブル・エージェントに、二重スパイの生活に、『じきに慣れる』ってか？」みんなの顔を見る。読み取れる表情からして、みんな少なくとも二重スパイではあるようだ。

「そうさ……あんたも、俺たちと一緒にここに堕ちて来たんだからさ」と、サミーがささやく。「恥の感覚なんて捨てちまいなんて。甘ったれた気持ちの中にいつまでも浸ってるってのは、ここの流儀じゃないんだ」

「影だよ」パイレーツがいきなり大声で、「影で使命を遂行する、永遠にな」

「だが自由について考えると？」慈悲深きエヴァンズが口を開く、「自分自身のことも信用できなくなるか？ だろう？ 人間の自由なんてそんなもんさ。いずれ誰かが自分を売りわたしてしまうことになるとしたら。自分で自分を売りわたすことだってあるだろう」

「それはいいやだ——」

「選択できる問題ではないのだよ」とドズン・トラックが応える。「きみがここにきたことは、すっかりヘファームに知られている。詳細な報告の提出を求められるだろう。自発的に報告するか、別な形で報告させられるか、どちらかだね」

「おれは屈しない……彼らに話すもんか——」これを聞いて彼らの笑みが、友好の装いから意図的な冷笑へと変化した。彼を理解へと押しやってくれているのか。

「みんな本気か、おれの言うことを信用しないのか？」

「もちろん、信用しない」とサミー。「あんたは、おれたちのうち一人でも、本気で信用してるのかい？」

「なんてことだ」パイレートがつぶやく。これは今進行中の、自分自身の人生なのだ。他の誰のでもない。それなのに、ここに至ってなおへかれらの手は簡単に自分の歷程を、まるでこちらから依頼したかのようにいじることができるのか。いきなり、パイレートの目に涙があふれたように思えた。変だよ、いままで人前でこんなふうに泣いたことなどないのに。だが自分がいまだにこのにいるのか、ここでハッキリと理解したのだ。結局、誰にも知られず、ひとりの人間も助けることなく、死ぬこともありえるのだ。愛もなく、軽蔑され、信用もされず、汚名を着せられたまま——「見捨てられた者」の一人としてささやかな名誉も奪われ、捜し出されることも罪から救われることもなく。

彼の涙は、後に残してきた人々のため、場所のため、物事のために流れている——スコーピア・モスムーン。彼女がいるのは、セント・ジョンズ・ウッド^{*25}。そこで楽譜と、新しい調理法と、ヴァイマル犬の小さな犬小屋（その犬種純血を、信じがたい努力を重ねて守っている）とともに暮らしている。夫のクライヴも時折姿を見せる。地下鉄駅からわずか数分の場所にいるのに、パイレートにとってはもはや永遠に失われてしまった人。もはや取りもどすことのできない時間……彼の涙は、ヘファームの任務のために裏切らねばならなかった同胞や外国人にも及ぶ——あまりに初心^{ナイヴ}だったアイオンにも、ゴンギラキ

25 ロンドン北西部の高級な住宅地。ビートルズで有名なアビー・ロードはここを通る。

スにも、ローマのモンキー・ガールとボン引きたちにも、火傷を負ったブルースにも及ぶ……ゲリラ兵のようにして過ごした山中の、存在が溶け込むような立ち木の匂いと終に否めずに恋に落ちた夜の美しさにも及ぶ……ミッドランドで会った娘ヴァージニアにも、彼女が孕んだまま消えていった子供にも……死んだ母にも、死にかけている父にも。これから彼を信じるだろ？ 無垢で愚かな人たちにも。市の動物収容所の金網フェンスの向うからしげしげと見つめていた犬のように悲しげな人たちの顔……未来を覗くとその絶望的な冷たさが、さらなる涙をさそう。時の高みを彼は次から次へ運ばれていくのだ、〈選ばれし者〉の集まりで待機し、新しい〈宇宙爆弾〉のテストも目にするのだ——「さあ、ほら」思慮深い、年老いた顔がバイレートに黒眼鏡を差しだして、「きみの〈爆弾〉を見てごらん……」黒眼鏡をかけて振り返ると、波高き太平洋の彼方、浜の向こうに黄色い爆雲がモッコリ立ち上がるのが見える……名だたる暗殺者に触れ、そう、彼らの、血の通った手や顔に触れ……いつの日か気づいた、自分の人生に関する契約が、ゲームのきわめて初期段階で結ばれていたことに。それがいつ落ちてくるか、知る人はいない——毎朝、市場の開始よりも牛乳配達よりも早く、〈かれら〉はその日の情報を刷新し、今日何をしたらいいかを決め直すのだ。毎朝バイレートの名前がリストに載る。ある日気づくと、リストのトップに近づいている。直視しようとしても、身も凍える恐怖を感じて、しばし失神しそうになる。その後少し落ち着いて、次の出撃へ向かう気持になれたときには、恥の感覚は克服できたという気になった。そう、サー・ステイヴンに言っていた、恥辱をくぐり抜けるとはこのことか。もはや気になるのは、自分のケツのことだけだ。そうそう、大事な、罪作りの、おれさまのオケツだけ……

「ここには死者も入れてもらえるかしら？」とたずねる言葉が先に聞こえ、それから彼女の姿が現れた。どうやってこの部屋へ入ってきたのか。部屋の隅々から男たちの嫉妬の波が伝わってくる。船に女を乗せると悪運を呼ぶぜ、みたいな、冷え込んだ、引いた空気がだ。パイレートは女と彼女の問いに直面させられる。持ち歩いてたタフィの玉を彼女に差し出す、その仕草が実に間が抜けている。まるで子豚のボーキーにチクタクなっているアナキストの爆弾を、渡されたかのような²⁶だ。だが、ここで甘さは無用である。ふたりはむしろ、苦痛と真実を交換するために出会ったのだ——この場面にふさわしい、やや取り乱したスタイルで。

「冗談はよせよ」どんなにバカげたことを起こしてしまったか、この女、わかっているのか。「きみは死んじやいない。比喩的な意味でも、死んでいるとはいえないね」

「私の死者たちと一緒に入ってきていいか、それを聞いたんだけど」カッチュが説明する。「彼らこそ、私のクレデンシャルとして資格を証明してくれますから」

「おれはさ、きみの御先祖様のフランス・ファン・デア・フローフの心酔者なんだぜ。あのドードー撃ちの」

彼女の死者たち、という意味は、必ずしもそういうことではなかった。「その死を直接私に負っている人たち²⁷という意味よ。それと、もしフランスがここに現れたとしたら、みんなして彼を取り囲んで、どれだけ罪深い行いをしたかわかっているのかって、問いつめるだけでしょう？ 彼の世界では、ドードーは無尽蔵に供給されていたのよ——それを虐殺だと教え込んでどうするの」

「そんなら、あんたがそのフランスってのに、教えてやりやあいだろ、お嬢さんよ」と

26 「ボーキー・ビー」は、かつての映画館で前座にやっていた人気アニメ短編のひとつ。その中に、ボーキーが、アナキストが仕掛ける時間爆弾を、そのつど拾って、落とす物です。と手渡すネタがある。『Peking Man: The Brown Out』で検索可能。このボーキーは、『観光客』の149の叫び』に登場する介護ハウスの住人。その人の夢にも出てきた。同書151ページ。

27 ここは原文に『死者たち』とあるが、これは『死者たち』の直訳だが、直訳わたしに聞かされたことではない。『死者たち』は、死者たちとしての様相が強調される。

言って、音痴のウェールズ人の密告屋エヴァンズがニタリとする。

エヴァンズに近づいていくパイレート。両肘を張って、まさに西部劇の酒場のスタイルだが、そこにサー・ステイヴンが割って入った。「彼のような物言いはここでは当たり前なんだ、プレンティス。みんな心のささくれた魂ばかりだからね。きみもそれを学びとってうまく活用する術を考えたほうがいい。ここでいつまで足止めされるのか、わかったものではないからね。こちらの若い女性は、身を守るよすがはしっかりできているようじゃないか。僕の見るかぎり、きみが代わりに戦うことは望んでいないね」

言われてみればその通りだ。彼女はその温かい手でパイレートの腕に触れている。小さな、はにかみの笑みを浮かべ、首を二度振って、「それはともかく、会えてうれしいわ、プレンティス大尉」

「他のやつは誰もうれしくないらしいよ。それを考えてよ」

彼女は眉を上げてみせただけ。馬鹿を言ってしまったものだ。悔恨の念、または今さらながらの純粹さへの憧憬が、彼の血中に、麻薬のようにじんわり染みこむ。

「しかし——」これは驚きだ、自分が崩れおちていくのが感じられる。積み上げたライフルが崩れるように、カッチェの足下に崩れ落ちる。彼女の重力に捉えられ、距離は消滅、波形も測定不能に。「カッチェ……いつまでもきみを裏切らずにいられたらいいのだが——」

彼は墮ちたのだ。表面を失った彼女は、驚きをあらわにして、彼を見つめている。

「たとえその代価が……他人を裏切り、傷つける……もしかしたら殺すことであつたとしても、それが何人であつても。もし、おれがきみの安全を保障できるなら、カッチェ、き

もの、完全な

そんなことは、ありえないから、犯すことのできない罪を語ってどうするの」まるでボ
ノ引き同士の取り引きである、まわりにどう聞こえるか、当人たちは分かっているのか。
「口でそれを誓うのは簡単よ、一銭もかかりません」

「だったら、実際におれが犯した罪はどうだ」プレンティスは抗弁する、「それらの罪を
繰り返さし犯そうじゃないか——」

「でもあなたはそれもしない——だからね、どのみち、安っぽい男で終わるの、でし
ょう？」

「同じパターンを繰り返せばいいんだ。それならできるさ」——こんな自虐的な物の言い
方は、彼女も望んでいないだろうに。

「ほら、よく考えて……」彼女の指先が彼の髪を梳いている。「あなたがこれまで為した
ことをしっかり考えて。あなたの徳と業のすべてを、そしてわたしの積み上げてきた行い
のすべてを——」

「しかしいま、おれたちの持つ手段といえば、それしかないだろう」叫ぶように彼は言っ
た、「人を裏切るおれたちの才能さ。それを活用して、すべてを組み立てていくしかない
……検察官が他人の自由を分配するのと同じやり方で、対処するしかないんだ」

「わ、哲学的」と笑みを浮かべて、「初めてよ、こういうあなたを見るの」

「動きつづけているせいかな。こんなに静寂な気持ちでいられるのは、おれも初めてだ。

……ふたりは触れあっている。なにかとても自然で、落ちついて、心もさわがず、その
ことにふたりとも驚きを抑えきれない。……「おれの弟は」(彼女が弟につなげてくれた

とバイレートは理解した)「十八のときに家を出たんだ。寝顔がかわいくてさ、睫毛が長い……純真そのものさ……何時間も見つめていたもんだ。……その弟がアントワープに行きついて、じきに仲間と教区の教会のまわりをうろつくようになった。言ってる意味、わかるか? びちびちしたカトリックの少年がだよ、軍のキャンプに群れる女と同じだ——若い青年の多くが酒に依存する。牧師さんを選んでその忠実な犬になるんだ——ほんとに一晩中、戸口で待ってるんだよ、寝起き姿の主人が出てきて話しかけてくれるのを、シーツの中の親密な匂いが寝間着の皺の中からこぼれてくるのを……仲間同士、狂ったように嫉妬して、あれやこれやの牧師さんに目をかけてもらうために毎日熾烈な場所取り競争をするんだ。ルイはレックス党^{*28}の集会に通いはじめたよ。サッカー場で、デグレールの演説を聞いてさ。きみたちは洪水にさらわれるように行動しなければならぬ、と煽動するのをね。行動しさえすれば、それ以外のことはおのずと道が開けてくると。まもなくルイは、箒を持って街路に出たよ。街にはおのれの罪深さを意識した、皮肉な若者たちがみんな箒を持って出てきていた……そのままルイもレックス党員になった。『全的な魂の国^{*29}』に所属したのさ。最後に聴いた話では、アントワープでフィリップという年長の男と一緒に暮らしてるってことだった。その後の消息は知らない。おれとはすごく仲が良くて。双子だと思われたりしてさ。アントワープが激しいロケットの攻撃にさらされたときは、はつきり思ったね。これは偶然じゃないと……」

おやおやバイレート自身が〈礼拝堂〉になっている。「だが〈教会〉を通して団結を得る」というのは、どうなんだろうな……ひざまずいて彼女の御手に身をゆだねるといふのは……政治的に行動しているときに、みんながそうやってひとつの勢いを得て上昇してい

28 ベルギーで、レオン・デグレールが組織したカトリックのファシスト集団。三六年の選挙では政党も躍進、その後国民の支持は失うが、ドイツによる占領後は、ナチスを支えた勢力の中心となる。

29 原文は "realm of holy souls"。神秘主義的なシヨナリズムを奉じるレックス主義者のスローガン。

くといふのは――」

「それもあなたにはなかったわね」さっきから彼女はまじまじと彼を見つめたままだ。驚異の力のせいにもできない。わたしたち、すべて自分たちでやったんですものね」

だめだ、恥辱を振りはらおうとしても、ここでは無理だ――飲みこむしかない。針のような屈辱を、その醜さもろとも浴びつつ、その苦痛と共に毎日を生きていくしかないのである。

衝動的に、ブレンティスは彼女の腕に身をあずける。べつに慰安を求めてはいないが、つめ車にカチカチと運ばれてだけの人間にも、少々のヒューマンな接触の時間は必要だろう。「カッチェ、外のようす、きみにはどう見えた？ おれには組織された大会が見えたんだが、別のヤツには庭園が見えたようだし……」だが彼女の答えは、聞く前からわかっていた。

「外には何もなかったわよ。不毛なところ。命のしるしはないかと、ほとんど一日中探したわ。そしたらやっとあなたの方の声がここから聞こえて」気がつけばふたりは優美な欄干のついたバルコニーにいる。そこは屋内からも屋外からも見られない。眼下の、もはや戻ることでできない下の通りに、《民衆》^{ザ・ピープル}がいる。パイレートとカッチェの方へ、長い年代記の一節を朗読する声が流れてくる。『私は如何にして人間たちを愛してきたか』という、作者不詳の、いつまでも終わらない語りだ――「ブレンダという名の女。鳥の顔をして、雨の日の朝、車のフロントのようなニタリ笑いを纏い、膝をついて私にフェラチオをし、私はその乳房に射精した。リリーという名の女。去年の八月で六十七歳だったが、ピ

ール嬢のラベルを大きな声で読みあげ、私と英国標準体位で交わった。私の背中を叩いて『いい友達ね』とささやいた。フランクという名の男。髪が顔からめくれるようにカールし、鋭いが爽やかな目つきをしていた。アメリカ軍の補給倉庫から物を盗み、私のかまを掘った。そいつが私の中でイタとき私もイッた。フランジベラという女。黒人で、破壊された顔をして、ヤクを買う金を欲しがった。彼女の開放性が、マムシのように私の心の中でのたくった。この女のヴァギナを舐めた。次にアランという名の男。ケツが日焼けしていたので、日射しがどこにあったのか聞いたら、角を曲がったところだと答えた。枕の上にケツを載せて私を入れると、この男は愛の泣き声を出した。グリースがヒリヒリ沁みる私のピストンがしまいに破裂した。次にナンシー。六歳の女の子。破壊された街のクレター近くの壁の後ろで、私と体を擦り合わせ、ミルク色した子供の腿が私の腿にグイと押しつけられてまた離れる。目を閉じたまま、形のよい小さな鼻孔が膨らんだり縮んだりを繰り返していた。瓦礫の山から物が崩れ落ちるその脇で、そうやっていつまでも、快楽のなかを揺れていた。次に——」年代記はまだまだ続く。うんざりするほど聞かされてふたりも理解した。この匿名の好色著者は〈世界〉の〈民衆〉と一人残らず性愛関係を結ぼうという、誇大妄想的な基本計画を持っている。なんらかの奇跡によって、すべての人との交わりが完結したときにやっと、人々を愛するということがどういふことか、その雑駁な定義が成立すると信じているのだ。

「聞いたか、^{フランジベラ}〈枝々〉に分かれた偽善者たちめ」バイレートはユーモラスな口調で言いたかったのだが、結果は違っていた。カッチェに両手をかけ、まるでこれから音楽が始まってく、二人で踊りだしそうに見える。

「でも〈民衆〉はけっして愛さないでしょう、あなたのことも」カッチェがささやく。
「わたしのことも。彼らがどのように善と悪を切りわけようとも、わたしたちは、いつでも、悪の側に入るの。永遠の悪人たちの行き先はどこか存じ？」

彼は笑ってみせるが、あまりにぎこちない。芝居がかった表情を生まれて初めて作る人間の笑みのようだ。だがこの表情をしてしまえば後には引けない。一度銃に手を伸ばしたら取りつくりうことができないのと同じだ。それに気づいて彼は上方を見上げた。かすかに見える層がいくつもスーパースターポーズされている、ここはあらゆる種類の罪人の魂のための場所、アクアマリンからベージュに至るあらゆる醜悪な商業的カラーに彩られた場所、雨が降ってほしい日に照りつける日射のような、派手派手しい企画と喧噪が、パイレーツとカッチェのふたりに見えない高さまで積み上がっている。彼はその面長の、罪の意識のにじむ、永遠に隷属する顔を、幻影の空に向け、頭上からの圧迫と重圧の現実、その厳しさと容赦なき惨さにさらす。その間カッチェは、彼の肩と胸当てとの間の安らかな低地に顔を押し当てている。戦いを止めた表情、恐怖もデタントの安定を得たようすだ。日没が進行する。建物の面が明るいグレイに染まり、外壁の曲面を、初殻のように柔らかい灰色が音をたててこぼれ落ちていく。奇妙な炉のような輝きが西に浮かび、小さな店前の窓の中を覗き見る通行人の顔に不安が浮かぶ。店内にはのかに見える火、その後ろに鍛冶屋がいる。鍛冶屋は覗く人たちには目も向けず、今度こそ永遠に消えてしまいたいような火のことを心配している。火の喪失が個人的なこととして済まされないから余計に心配なのだろう通りをゆく人々すべてがそれを見てしまった。……光が失われるにつれて、部屋の中にいたオーケストラが実際、苦みの利いたドライな曲を始める……枝状の燭台も結局光

を灯した……オーヴンで仔牛のフイレンツェ風が焼き上がろうとしているこの晩は、（ハ
ウス）じゃ酒は飲み放題、ハンモックには酔っぱらい、

世界はカチカチ、黄昏時に！

われらの靴が踏みしめた朝の通りを、だれが知る？

友を何人泣かせたままにしてきたか、だれが知る？

しばしここに一緒につどって

口ずさもうよ、今日の歌を……

みんな踊るよ、黄昏に

踊ろう、悪夢が抜けるまで……

みんな、ほんとに踊ってる。踊りに関してはまったく木偶の坊だったバイレートも、と
ても上手に踊っている……踊り進みながら他の人たちと触れあいを感じる。すっかりリラ
ックスすることはありえないにせよ、もはや「行進やめ」の状態ではない……だから二人
は意を決して、この、神に見捨てられし者たちの踊りの輪に混ざり溶ける。そしてふたり
がこの舞踏会のために装った親愛で滑稽な表情も褪せていく、無垢のように色褪せていく、
しかつめらしく戯れ、優しくあろうと足掻きながら……

30 原文は dancing
Preferition II 「プレテリ
ション」とは、カルヴァ
ン派の予定説で「救いの
選びに漏れる」または
「滅びの選びを受ける」
こと。



細い小路の喉口から濃い霧が立ちこめていく。大気は潮の臭いがする。小石の道が昨夜の雨で濡れている。戦火で焼かれた錠前屋の、煤けた（さし込むべき鍵穴はすべて失われた）鍵のラックの下でスロースロップが目をさます。よろけながら外に出る。煉瓦の壁と、その前に立つ人もいない観音開きの窓に囲まれた中庭にポンプ式の井戸がある。水の出口の下に頭を突き出しポンプを動かし続け、気がすむまで水をかぶる。赤褐色の猫が朝食をねだってミャーと鳴き、家々の戸口を過ぎるスロースロップをつけてくる。「ついてねえな、大将」ネコにもヒトにも、食べ物はないらしい。

チチェーリンのズボンをグイと引きあげ、街を出ていく。ずんぐりした塔、靄に揺らぐ緑青ドーム、高い破風、赤いタイルを後にして。空っぽの荷馬車を引いている女にたのんで乗せてもらった。馬の薄茶色の前髪が揺れてなびく。後方（しりえ）を霧が覆いつつむ。

ヴァイキングが、この大いなる水の平原をビザンチウムまで南下していったときも、今朝の光景を眼にしていたに違いない。東ヨーロッパ全土が彼らの大海原だったのだ——農地もグレイやグリーン波となつてうねり……池も湖も明瞭な輪郭を持たず……一面

海空をバックに、もし人間が現れたなら、たとえそれが軍隊であろうと、長い航海後に海原に見えた船の帆のように歓迎の気持ちをかき立てるだろう……

民族が流れ動く。国境なき大流動が巻き起こっている。オーデル河を渡ったドイツ人がロストックの難民キャンプへ動き、彼らを押しだしたポーランド人は、ルブリン政権からの逃走者に加え、故郷への帰還者もいて、両派が、頬骨の奥のくぼんだ眼と眼を合わせる、彼らを移動に駆りたてたものより年老いた眼を合わせる、エストニアとラトビアとリトアニアの民はふたたび北を目指してトレッキング、彼らの冬服は羊毛が浅黒い毛玉を作り、履いてる靴はズタズタ、歌も歌になりきらず、言葉もまとまらない、ズデーテンと東プロイセンの民が、ベルリンとメクレンブルクの難民キャンプの間をシャトルする、チェコとスロヴァキア、クロアチアとセルビア、トスクとゲグ、マケドニア人、マジヤール人、ヴラック人、チエルケス人、そしてスペインやブルガリアから出てきた民も流れている、煮え立つ帝国の大鍋の表面を流れる彼らはぶつかる渦、何マイルも並列して進んでは右と左に剪断される、感覚はない、最奥の深みから、足裏よりずっと深い、形を与えるには深すぎる、ところから湧きあがる衝動で動く、信じられぬほど瘦せかけた白い手首と足首を、強制収容所の縞模様のバジャマから突きだし、内陸の埃を踏んで、水鳥のような足どりで進むジプシーのキャラバン隊、車軸も輪止めのビンも壊れ、馬も動かなくなつて乗り捨てられた荷馬車には、白くて熱いアウトバーンを進んできた別の流民が、一夜または一日の休息を求めて入りこみ、うず高く積んだ荷物が脇にハミ出ている車の列は、軍の輸送隊がやってくる道脇でお互い寄りそう、西へ向かう辛い顔をした白ロシア人、東進する解放されたカザフの捕虜たち、旧ドイツ領のあちこちから帰還した国防軍の元兵士も、プロシ

1 メクレンブルク地方に位置する、旧東ドイツ最大の港湾都市。

2 解放されたポーランド東部のルブリンに、戦後を見つけたソ連のプランに沿って作られた政権。

3 チェコの外縁部、ドイツ系住民が多い地帯。

4 アルバニアのキリスト教徒と、イスラム教徒。

5 ハンガリーの主要民族。

6 セルビア東部に住んだルーマニア人。

アのジーンシーと変わらない、ボロの雑囊を背負い、持ってきた軍用毛布にくるまり、上衣の胸に糸で留めたる緑色の、農場労働者の印の三角布を揺らしながら漂流する様子は、夕暮れのある時間には蠟燭を灯した行列の儀式のよう——どこへ向かってるんだ？ ハノ一ファアって話だよ。食べるものは？ 道すがらジャガイモを見つけて食べるって。だが、もう一ヶ月も探し求めているのだ、幻になってしまったジャガイモを——「みんな引っこ抜かれちゃってる」ラッパ吹きだった元兵士が、割れた線路の枕木で作った杖をついて足を引きずりやってくる。奇跡的に凹みのない、ピカピカの楽器が彼の肩で揺れている。

「SSに根こそぎやられた。ヤー、兄弟、^{ブルーダー}ジャガイモ畑はひとつ残らずやられたんだ。何のため？ アルコールさ。といっても飲むためじゃないぞ。ロケット様に献上さ。おれたちが食えたかもしれないイモ、飲めたかもしれないアルコールがよ。信じられん」「何だと？ ロケットが？」「違う！ SSだ。SSがイモ掘りやってたんだよう！」そう言うって笑いが起こるのを待つのだが、まわりの陰気な面々に、彼の冗談につきあおうというのはいない。みんな歩兵だったから、行進しながら居眠りするコツを心得ている——午前何時かに、彼らは道端へ倒れ込み、慌ただしい夜道のケマージ^{*}から一気にこぼれ落ちて眠りにつくが、その間にも、路上の不可視の煮えたぎりは進行中だ。ぶつ切れになった長い渦が彼方へ延びる——背中に十字を描いたピンストライプの背広、海軍陸軍のよれよれの軍服、白いターバン、ちぐはぐなソックス、ソックスのない足、格子縞^{タッタソール}のドレス、赤ん坊をくるんだ分厚いニットのショール、膝が裂けた軍服ズボンの女たち、集団で吠えながら走るノミにやられた犬たち、手押し車に高く積み上がった傷ついた合板の家具、もう二度とどの箆筒にも収まることはない手作りの引き出し、分捕ってきた生きたニワトリ、死ん

7 十九世紀のコーカサス戦争でロシアに組み入れられた北カフカス黒海岸の民族。

8 難民の分類のため、占領軍は色と形の異なる布を胸に付けさせた。

9 農産物から化学製品や工業原料を得ることを目的とする応用化学の分野。

だニワトリ、雨ざらしの黒いケースに入ったホルンやヴァイオリン、ベッドカバー、足踏みオルガン、大きな古時計、大工道具に時計修理・革細工・外科手術用の道具の詰まったキット類、白のワンピースから桃色の肌を見せる娘たちを描いた絵、血を流す聖人を描いた絵、海への日沈を描いたサーモンやバーブルの色が広がる絵、ビーズの目をしたニシキヘビを詰めこんだ袋、激しく赤い唇をして微笑する人形、クリーム・ゴールド・ブルーの三色に塗られた三センチ大の、アルガイア製のオモチャの兵隊、百年前の瑪瑙^{めのう}がたくさん（とうの昔に土に還った爺さんも舐めたという蜂蜜につけて、それから硫酸に入れ糖分の黒や褐色の輪状の焦げ跡をつけたやつ）、フォルゼツァ・ロール^{*10}に打ち抜かれた、死を知らぬピアノ演奏、リボンのついた黒いランジェリー、花模様やブドウ飾りのついた銀食器、鉛入りのカットグラスのデカンター、チューリップ形のユーゲントシュティールのカップ、数珠つなぎになった琥珀のビーズ……さあ、人民の大移動だ。大空の下の草原を、びっこを引き、足取り高く、あるいは足を引きずり、あるいは背負われ、手を引かれ、一つの秩序の崩落の跡地を、みんなまだ知らないが欧州ブルジョワ体制が永遠に崩れさった跡地を、進む。

スロースロップが煙草を持っていればたかられる。相手が食べ物を持っていれば分けてもらえる——たまに、近くに軍隊が駐留しているところではウォッカを口にするこもできる。G-1のゴミ箱を漁れば、役立つものがまだまだ出てくる。ジャガイモの皮、メロンの皮、砂糖代わりのキャンディのカケラ。難民の蒸留酒は何から作るかわかったもんじゃない。つまりは、どこかの占領軍から出たゴミのおこぼれを飲んでいるってことだ。これら、無言の、腹を空かせた、足を引きずる何十人もの移住者たちと、スロースロップは混

10 足ペダルやポリュームの大小まで、楽曲再生情報が細やかにパンチされている自動ピアノ用ロール。

「……たう離れたり、傍らの顔を見るときに、強烈なベンゼドリン的寒気に襲われる——間
隙は、たれひとり、無視できないところ。どの顔もあまりに頑丈なのだ。競馬場の観
客もたいに、それそれな違う、おれだ——おれを見る、感動しろ、ほらカメラを取り出せ、
あんたの武器を、あんたの珍棒を。……目立たないようにと、チチエーリンの軍服から微
章は全部剥ぎ取っていたが、そもそも徽章などに関心を示す手合いがほとんどいそうにな
い……」

大抵はひとりである。夜になると、ひと気のない農家に行つて、干し草に身を横たえて
眠り、珍しくマツトレス付きのベッドがあると、そこで眠る。朝、目を開けると、どこか
小さな湖面に反射する太陽が眩しい。湖のまわりの緑には麝香草や辛子菜の花びらが振り
かけた塩のよう。サラダの丘陵が霧に包まれた松林の丘に続いている。庭にはトマトの温
床と、紫色のジギタリス、草薺き屋根の軒下の大きな鳥の巢から朝のコーラスが聞こえる。
やがて、ある日、夏も重々しく巡り、空を渡る鶴の、鋭い鳴き声に変わるのだろう。

ロストックのずっと南、川の流れる谷間の農家に真昼の雨宿りに立ち寄って、ポーチの
ロッキング・チェアで眠りに落ちたら、遠い昔の友タンティヴィ・マッカマフィックが
夢に出てきた。まさかのタンティヴィが、ついに帰ってきたのだ。そこはイングランドの
どこかの田舎で、深い緑のなかに、目に鮮やかな麦藁の黄色いキルトが敷き詰められてい
る。丘の上に古代の岩が並び、若くして死と租税との契約が結ばれ、夜の闇を抜け裸で岩
山の頂上に立って歌を歌うところ。家族と友人がたくさん集って、タンティヴィの帰還を、
しずかな祝福ムードで喜んでいる。これがただの「訪問」にすぎないことは、みんなわか
っている。ある条件下でのみ、「ここ」にいられるのであって、いずれ、醒めた思考が始ま

11 スロースロップは、
直近のエピソードでいた
シュトラールズントから
南西へ百キロほど移動し
た。

ると分解してしまう。芝草の一面を削って作ったダンス場があり、村の楽団もいて、女たちの多くは白い服を着ている。その日の進行次第の件でひとしきり混乱があったのち、集會が開かれた——場所は地下のようだが、墓や霊廟といった、不吉な感じはまるでなく、親戚や友人にぎやかに開かれたタンティヴィもとてもリアルで、時の影響を感じさせない。くつきりとして、色付きも鮮やかだ……「スロースロップじゃないか」

「なんだ——どこ行ってたのよ、おまえ」

「いわゆる『ここ』さ」

「『いわゆる』……？」

「うん、そんなもんだ——」二度移動させられたことがあったが、それでもこのすぐそばにいたよ。きみと同じ通りを歩き、同じ新聞を読んでいた。同じ色の色彩スペクトルから外れはしなかった」

「そうか、じゃあおまえが——」

「僕がしたことはないさ。変化があったんだ」

この場所の色調には、石の上張りにせよ、客がつけている花々にせよ、テーブルに置かれた奇妙な杯にせよ、流れた血が黒ずんで固まったような気味がある。日曜午後四時のひと気のない町の一角で、静かな炭化が進行したような基調のトーン……その色調ゆえに、タンティヴィのスーツの輪郭は実際以上にくつきりしている。ジヨロが着るような怪しげな外国仕立ての、彼が選んで着るとはとても考えられない派手なカットだ……

「あまり時間がなさそうなんで……ヒドイこと聞くけど、おれ、あんまりひとりぼっちなんで、わがまま言してくれ……おまえさ、何か起こったあとで、しばらくその場所にうろ

「ついでるんだって？　そうやって『ここ』の友だちを見守ってるって……」

「ああ、ときどきな」と、微笑を浮かべている。だが、あまりの落ちつき。あまりの遠さ。手を伸ばしても到底届かぬその隔たりを、無力な叫び声が渡った。

「おれを見守っていてくれるの？」

「いや、スロースロップ。きみじゃない……」

スロースロップは古ぼけた、雨ざらしのロッキング・チェアに腰かけたまま、なだらかにうねる丘の稜線に目をやっている。今ちょうど太陽が最後の雨雲から顔をのぞかせた。雨に濡れた野原と干し草の山が金色に転じる。眠るスロースロップ。泥まみれの軍服の胸の上でコックリ・コックリしている困惑した白い顔を、通りがけに見たのは誰だろう？

歩き進んでいくうち、じきにわかった。この辺の農場には実際、霊が取り憑いている。

でもそれは、善意に満ちた霊のようだ。夜中に桎材が軋んだ音を立てる、正直な木の心を吐き出して。遠くの草原から、乳が張ったウシたちの低い苦痛のうめき。別のウシがやってきて、貯蔵牧草の発酵したのを食べ、柵を打ちやぶって、夢みるスロースロップの干し草の山に近づいては、酔ったウムラウト^{*12}つきの「モー」を発する。屋根の上では黒と白のコウノトリが、天に向けた長い喉を反り返し、頭を逆さにして後ろを見ながら、嘴を鳴らして挨拶と愛の言葉を伝える。夜にはウサギが駆け込み、庭から餌になるものを何でも食べていく。そして、木だ——スロースロップは木々に対する鋭敏さを得た。ようやく。木立ちの間に入っていくときは幹に手を触れ、枝々を観察し、近くに静かに座して理解する、木々の一本一本が生き物として、独自の生を歩んでいるし、まわりの出来事もちゃんと自覚しているのだ。こいつら、ただ伐り倒されるべき木材なんかじゃないんだ。スロー

12 Oの音にウムラウトをつけたOの音は「オ」と「エ」の中間のような音になる。

スロップ家は代々、木々を殺してカネを得てきた。その身体を根元で切り落とし、叩き切り、挽いてその屑をバルブにし、漂白し、紙にして、その代価を、やはり紙で受け取っていた。「狂ってる」彼は首を横に振る。「おれの一族には狂気が流れている」枝を仰ぎ見る。樹木は静かだ。スロースロップがここにいることを知り、何を考えているかもきつと通じているのだろう。「ごめんよ」と、木に向かって、「あいっら、抑えようにも、手が届かなくてさ。おれに何ができる？」 近くにいた中肉中背の松の木がうなずいて知恵を授けた。「ここに伐採に来る人間を見たら、見張りのいないトラクターを一台見つけ、オイルフィルターを抜き取るんだ。それなら、あんたにもできるだろ」

この時期の夕べの星への願い事——その一部

おばあさんが話していたニワトリ小屋が見つかりますように。

タンティヴィイが本当に生き返りますように。

背中にできた、こんちくしょうのブツブツが、なくなりますように。

これが終わったらハリウッドへ行けますように、そしてリタ・ヘイワースがおれと出会って恋に落ちますように。

今日一日の平和が、明日目覚めたときも続いていますように。

クックスハーフェンに着いたら除隊の報せが待っていますように。

ビアンカが無事でいますように、そおして——

もうすぐクソができるようになりますように。

それが流れ星のようにスーッと落ちるやつでありますように。

このブーツがリ्यूベックまでもちますように。

ルートヴィヒのやつがレミングと幸福な再会ができて、おれの邪魔をしなくなりますように。

そのルートヴィヒというのは、ある朝、名もない青い湖のほとりで泣いていた子だ。ビツクリするほど太った、八つか九つの男の子が水面を見つめ、ヒックヒックと体脂肪を波打たせていた。ウルズラという名の旅^{レミング}ズミを飼っていたのが、家から逃げ出した。後を追ってブリッツヴァルク^{*13}から北に向かってここまで来たんだ。ウルズラがバルト海へ向かっているのはわかるんだけど、海と間違えて途中の湖に跳び込んでしまわないかどうか、それが心配でしかたない――

「レミングが、一匹で？」

「二年も一緒にいたのに」ルートヴィヒはしゃくり上げて、「すごいいい子で、いままでこんなことなかった――わかんないけど、きっと何かに取りつかれたんだ」

「バカいうな。レミングは一匹じゃ何もしない。旅をするには群れが必要だ。それは伝染するんだ。いいか、ルートヴィヒ。レミングは増えすぎるしくみになってる。サイクルを巡るんだ。数が増えすぎるとパニックを起こして餌はないかって走りだす。これ、大学で教わったんだぞ。でまかせを言ってるわけじゃない。ハーバード大学だ。きつとウルズラに彼氏ができて、追っかけてったんじゃないかな」

「そんならばくに教えてくれたはずだよ」

13 ロストックの南方百キロに位置する田舎町。

「気の毒だけど」

「ロシア人はフリーなんて思わないんだろ」

「おれ、ロシア人じゃない」

「だから徽章をぜんぶ取っちゃったの？」

顔を見合す二人。「えーとき、きみは、一緒にレミングを探す人が必要だね？」

ルートヴィヒの頭はしかし、いまあまりマトモな状態にはない。夜の夜中にスロースロップを眠りから引っぱり起こす、その騒ぎで野営している難民の半分は起きてしまおうし、犬や赤ん坊は怖がってしまふ。ウルズラが絶対そこにいるよ、その焚き火のすぐ向こうからこつちを見てる、でもいつもとようすが違うんだ——そう確信してゆずらない。スロースロップの手を引いてソ連の戦車分隊の中も引きまわす、大シケの海のように盛りあがって、一歩踏み込んだ途端こちらに崩れ落ちかねない瓦礫の山も抜けていく、足がずぶずぶ沈んでいく——手をかけた葦の茎もスッポリ抜ける——沼の中へも引っぱり入れる。タンパク質の大惨事のような臭気の中にも連れていく。これは何なのだ。狂信か、もっと暗黒的な何かだろうか。最後にはスロースロップにもビンときた。自殺衝動に動かされているのは、ウルズラじゃなく、ルートヴィヒのほうじゃないか——ひょっとして、レミングなど最初からいなかったのかも！

とはいふものの……スロースロップ自身、一、二度、目にしたことはなかったか。どこか灰色の狭い道、ほんのお飾りに若木の植わった道を急ぎ足で通りすぎながら——そこはプロシアの駐屯地で、産業も存在意義もすべては兵士のためだった、今もバラックと石壁が放置されたままになっている。あるいは、どこかの小さな湖の縁にしゃがみこんで雲を

見づめながら、遠い対岸の霧に霞む緑を背にして進む斜桁帆船の白い帆を見つめながら、その水面からある理解を授けられなかったろうか。レミングの時間に合わせた、大洋的な、抗いがたい、しかしそこから歩み去るには充分スローで堅固に見える動きから……

「イエス様がな」スロースロップの最初のアメリカの祖先ウィリアムの亡霊がささやいた、「ガリラヤの湖に歩み出たというのは、そういうことだったのだ。イエス様はレミングの視点で見ておった。飛び込んで溺れた何百万もの人間がおらんかったら、奇跡などは起こらない。一人の成功者とは、単に全体の一片に過ぎんだ。ジグソーパズルの最後のピースだよ。その形を作ったのは、見捨てられた残りの者たちだ。テーブル上にできた最後の隙間がそうであるように」

「ちよっと待ってよ、ご先祖さま。あんたの時代に、ジグソーパズルがあつたの？」
「チエッ、ばれたか」

ウィリアム・スロースロップは変わり者だった。一六三四年か三五年にボストンを出て、真の帝国臣民スタイルで西へ向かった。^{*14} ウィンスロップの体制にすっかり嫌気が差したのだ。自分は、正式な資格はなくても、どんなに高位の聖職者と比べても引けを取らぬ説教ができると確信して、彼は西へ向かった。パークシャー丘陵の墨壁は当時すべての者の行く手を阻んだのだが、ウィリアムは墨壁を登りつめ、その内側に立った最初のヨーロッパ人の一人となった。パークシャーに定住した後は、息子のジョンと一緒にブタのビジネスを展開——^{*15} ブタを追い立てて大きな斜面を下り、ボストンまでの長い長い道のりを、ヒツジやウシを追うようにして連れていった。市場に着いたころには、豚はすっかり痩せ細って、商売としては割に合わないものだったが、ウィリアムにとってその価値は、収益では

14 小説家トマス・ピンチョンから十代さかのぼるウィリアム・ピンチョンは一六三〇年、ジョン・ウィンスロップが率いたマサチューセッツ湾植民事業の中心人物の一人として、ロクスベリーを拓いたが、数年後、一行を率いて八十マイルほど西の丘陵地（後のパークシャー地方）に植民、イングランドの故郷の名に因んでその集落を「スプリングフィールド」と名づけた。

15 ウィリアム・ピンチョンと息子のジョンは、周囲のインディアンたちと友好な関係を築き、毛皮取引で成功した。

なく旅そのものにあつた。彼は道路を、移動を、日々の偶然を楽しみ、インディアンと、毛皮を商う罽獵師と、女たちと、丘陵地の人々との出会いを愛し、とりわけブタと一緒に過す一日を愛した。ブタは最高の道連れだ。民話の中でもブタの評判はよくないし、『聖書』からして、ブタを禁忌しているところがある。にもかかわらず、ウィリアムはブタの中に高貴さと自由を認め、暑い日に泥の中を転がって快適さを得る才能にほれ込んだ。ブタを連れて旅する日々は、ポストンでの生活とは正反対の意味を帯びた。だから旅の終わりに、計量され屠殺され、パークシャーの丘陵までブタのいない一人旅が、彼にとってどれだけつらいものだったかは想像に余りある。もちろん彼はそこに寓意を読みとつた——旅の終わりの、恐怖の鳴き声に充ちた血の戦慄は、それまでの、幸せな鳴き声、苦悩知らずのピンクの踵毛、その笑み、田舎道を渡る動きの優美さを正確に相殺する。アイザック・ニュートンの登場はまだしばらく先だったが、作用と反作用の思考はすでに時代の空気として漂っていたのかもしれない。ウィリアムは不死の生を得る一頭のブタを待ち望んだに違いない。その一頭がいれば、他の無数の、レミングのように絶滅に向かつて突進していったガダラのブタの死も無駄ではなくなる。ブタたちは、悪霊ではなく、人間への信頼の気持ちに取り憑かれている。裏切られても裏切られても振り落とせない無垢に取り憑かれている……大地と共に生きるウィリアムのことを別品種のブタだと、彼らと同じ生の贈り物を共有していると信じ切つて……

これに関してウィリアムは後に『神の見捨てるについて』という長文の論説をまとめる。出版はイギリスでしかありえず、ポストンでは発禁、かつ見せしめに焚書にされた最初の一冊となった。神が少数の者を選び、残りを見捨てるるとき、その見捨てられた大量の魂に

16 ニュートンの生誕は一六四二年。運動の第三法則（作用と反作用）を定式化した『プリンキプ・マテマティカ』の出版は一六八七年。

17 聖書「マルコ伝」五章十一、十三節は、イエスの御業により、二千匹ほどの豚が、悪霊を中に入れ、崖を下って湖に溺れた出来事を記している。読み方によっては、イエスによる豚の大量虐殺である。

18 ウィリアム・ピンチョンは一六五〇年に『我らが贖罪の賞賛すべき代価』(The Meritorious Price of Our Redemption) をロンドンで出版。この本がポストンに届いて物議をかもし、異端の裁判にかけられ、ポストンの広場で公開の

ついでの話など、だれも聞きたがりではなかった。ウィリアムは彼ら「第二の羊」たちの聖性を論じた。彼らがいなければ、選ばれる者も存在しない。そんなことを言いだしたら、ポストンの「選良民」が怒るのは目に見えている。それだけじゃなかった。ウィリアムは、イエスとは選良民のための存在であり、イスカリオテのユダが「棄却民」のためにあったのだと考えた。世界創造にあっては、あらゆる物にそれと同等の対立者が存在するのに、どうしてイエスひとり例外でありうるのか。そんな不自然な、超創造的な存在であったとしたら、われわれはイエス様を前に恐怖以外の感情を持ってはいないか。いや、もしイエスが人の子で、恐怖じゃなく、愛を感じられるお方だったら、ユダも愛さなくちゃならない理屈にならないか？ だろ？ ウィリアム自身が異端の罪で火あぶりにされるのをどうやって免れたかは分からない。何かコネがあったのだろう。最終的にはマサチューセッツ湾植民地から追放という裁きが下った——そのとき彼はしばらくロード・アイランドに行ってみようかとも考えたが、道徳律不要論者の仲間になりたいわけでもないと思い直し、結局、懐かしのイングラントへ、恥じるところはなくとも、大きな落胆を引きずりながら戻って、そこで生涯を閉じた。^{*21} 新大陸の思い出がいつも彼を包んでいた——青々とした丘、緑のトウモロコシ畑、インディアンとの会合で麻や煙草の葉をのみ回したこと、二階からかわいい顔を覗かせる若い女たちがエプロンをたくしあげ、髪の毛を木の床に垂らし、階下の厩では馬が足蹴りをして、酔っぱらいがわめき、朝一番の光に自ら手掛けた群れの背が真珠に輝いたこと。ポストンまでの長い悪路は途中石ころだらけで、コネティカット河に雨が降り注ぎ、新鮮な星々に囲まれる一日の終わりに、百匹のブタが鼻を鳴らしておやすみを言うのを聞きながら、昼の太陽の熱のこもる高背の草の中で眠りに就いたこと……

焚書に処す裁きを受けた。アメリカ最初の焚書である。このなかでウィリアムは、贖罪をめぐるカルヴィニズムの中心的教義に異を唱え、磔刑はキリストに与えられた最後の試練であり、それによって父なる神への服従が完全であることを証明したキリストは、その時点で贖罪を成立させており、処罰（地獄の業火に焼かれる苦しみ）をもって選良民の罪を清めたという考えは成り立たない、との議論を展開した。

19 キリストを売り渡した裏切り者。

20 上巻 626 ページ参照。

21 ウィリアム・ピンチオンは裁判で異端思想の取り消しを命じられたが従わず、動産・不動産

ウイリアムこそ、アメリカが足を踏み入れなかった道への分岐点、つまりそこで進路を間違えた特異点だったという可能性はあるだろうか？ 仮にスロースロップ派の異端が、時を経るうちに支持を集め、栄えたとしたらどうだったろう？ イエスの名の下で行われる犯罪がそのぶん減ったり、イスカリオテのユダの名の下で施される慈悲がそのぶん増えたりする展開につながらなかったらどうか？ タイロン・スロースロップには、まだ戻る道があるように思えるのだ——チューリッヒで会ったアナキストは正しかったんじゃないか、すべての柵が倒されることが短期間ながらあって、そこではすべての道が同等に開かれ、〈ゾーン〉全域がクリアされ、極性を失い、すべてが崩れた中から、選良民も棄却民も国家の枠組みもないままに、新たな指針をもたらす座標が現れる。……ルートのヴィヒの後について歩いていくスロースロップの頭の中に、そんな思考の視野が開けていた。彼は単に漂流しているだけなのか、それとも導かれているのか？ 導かれてるにしても、その導き手が、存在するかしないかわからないレミング嬢だというのだから。少年は彼に、財布から取り出した写真を見せる。明るいシャイな目をしてキャベツの葉を積み上げた下から覗いている写真……ヘイトラー青少年団^{ユース・バンド}のペット大会で優勝したときの、カゴの中で巨大なリボンと鉤十字の徽章をかけている写真……家の飼猫とタイルの床を挟んで対峙し慎重に見合っている写真……ルートヴィヒの着たナチスのカプスカウトの制服のポケットから前足を垂れ、眠たげな目をして映っている写真。彼女の体は、いつもどこか焦点がブレている。シャッター速度より動きの速いところがある。ウルズラが赤ん坊だったころから、運命の日がくることは知っていた。でもルートヴィヒはウルズラを愛しつづけた。愛には制を止める力がある、と信じていたのか。

を息子^{ユダ}のジョンに譲って
イングランドへ戻り一
六五二年、十年後に死
去した。

22 アルゼンチンのア
ナキスト、エスクアリド
ーシとチューリッヒのカ
フェで出会ったシーンは
上巻503ページ。

「実際のところスロースロップが知る可能性は失せてしまった。気のふれた太っちょ君と、海辺近くの村ではぐれてしまったのだ。くるぶし丈のスカートに、花模様のスカーフの娘たちが、森の中でキノコを採る。ブナの木のあいだにアカリスがチョロリと見える。道は町へとうねる。遠近法があまりに急だ——小さな田舎町は広角レンズで撮ったかのよう。立柱の先に灯火が群れる。通りに埋め込まれた砂色の石が重々しい。荷馬車の馬が陽光の中で誇らしげに尻尾を振る。」

聖ミヒヤエル教会近くの路地をよろよると、山と抱えた密輸品の毛皮コートの陰に隠れて歩く小さな少女の茶色い足が見える。その一番上に積んだコートを指さして、ルートヴィヒが金切り声を上げた。襟に小さな灰色の毛皮が縫いつけられていて。その人工的な黄色い目が不気味に光ったのだ。ウルズラ！ ウルズラ！ 叫びながら駆け寄り、コートに飛びつこうとする。女の子が罵る。

「ぼくのレミング、殺したな！」

「放してよ、アンボンタン」日向と日陰がぼんやりと混じり合った路地で綱引きをするふたり。「レミングじゃないわ。グレイ・フォックスよ」

見つめるルートヴィヒの叫び声が止まった。「この子のいうとおりだ」スロースロップが言いそえる。

「ごめんよ」囁りあげる声で、「取りみだしちゃった」

「これ、教会まで運ぶの。手伝って」

「うん」

ルートヴィヒとスロースロップはそれぞれの両腕に毛皮を抱え、少女の後について、町

のデコボコした小路^{ガッセン}を通り、ミヒヤエル教会の脇の入口から階段を下り、また下りて、地下階のさらに下へ。そのランプの光の中で、スロースロップが最初に見たのは、固形^{スダ}燃料^{イノ}の上で煮立つ鍋のようすをうかがっているデュエイン・マーヴィ少佐の顔だった。



Y A A A G G G H H H — スロースロップは両腕いっぱいコートを抱え上げ、今にも放り出して逃げ出しそうになったけれど、少佐の顔は満面の笑みだ。「ヨオ、同志。きっかり間に合ったな、デュエイン・マーヴィのアトミック・チリが始まるぞ。椅子ひとつ持ってこいや、ヤーハッハッハ、その嬢ちゃんもな」と巨漢を揺すって笑いながら、少女が運んできた毛皮を撫でまわす。部屋の大半は、すでに大量の隠し毛皮で埋めつくされている。「この子はたまに気が回らんとときがあつてな。われわれが違法なことに手を染めるとか思わんでくれるとありがたい、つまり、あんたんとこの〈ゾーン〉でな……」

「ダイジョーブ、少佐」ロシアふうのアクセントを心がける。結果はベラ・ルゴシ調だったが、それでもマーヴィは証明証を出して見せた。ほとんどは手書きで、あちらこちらに印章のスタンプが押してある。キリル文字が見えたので、スロースロップが目を細めると、それは確かにチチエーリンのサインだ。「ダー、わたしも一、二度、チチエーリン大佐と一緒にになったこと、ありました」

「それがな、ベーネミュンデで何があつたか知ってるか。下司野郎どもが押しかけてきて、

1 上巻207ページではゾンビ役で言及された。ドラキュラ伯爵の他、「フランケンシュタイン」シリーズのイゴール役でも有名な、ルーマニア出身の俳優。

大佐の目の前から、シュプリングガーをかつさらってったのよ。そうなんだ。シュプリングーは知っとるか。しけた野郎でな、同志、いいか、数えきれんほど武器をみんな持っていっちまってよ、おれとブラッディ・チクリッツが自由にビジネスする分も残さねえんだ」そのブラッディなチクリッツ——母親がつけた名はクレイトンという——が、いま山と積まれたミンクのケープの背後から、スロースロップの腹部めがけて、45口径の狙いをつけている。「大丈夫だ、こいつなら」マーヴィが声を掛けた、「なあ、もつとシャンパン出してきてくれねえかい」チクリッツの太り具合はマーヴィにひけを取らない。角縁の眼鏡をかけた顔面が、頭のとっぺん同様にテカっている。いま二人が、互いの肩に腕を回し、ニッコリ顔の太っちょベアとしてスロースロップの前に立った。³「なあイワン、今おまえが見てるのは、一日一万カロリーで育てた腹なんだぞ」とマーヴィが親指の先でふたつの出腹を突いてウィンクする。「このチクリッツは、ヘロイナル・ベビー」になるんだもん⁴な」ワッハッハ。だがこれは事実なのだ。チクリッツは実際、部隊の海外展開のたびに得をする方法を考えた。米軍の「ヘスペシャル・サービス」との独占契約を結ぼうとしている、赤道を横切るすべての軍輸送船に対してセレモニーを提供しようというのだ。それについては可能な限り、チクリッツ自身が「ヘロイナル・ベビー」になる、という条項も書き込んである。この先何世代もの兵隊野郎が、一人ずつ膝をついて進みでは、自分の腹に口づけしていくのをチクリッツは夢見ている。その間自分は七面鳥の足やらアイスクリームコーンやらに食らいつき、べっとり汚れた指を兵士の髪で拭うのだ。この男の軍内での肩書きは「フォース付きのアメリカ人実業家」というもので、ドイツの技術、特に秘密兵器に関するものを渉猟している。本国では、ニュージャージー州ナトリーにおもちゃ工場

2 ヨーロイディン社の創立者として『V.』および『競売ナンバー49の叫び』にも出てくる名前。

3 トゥイードルディーとトゥイードルダム（『鏡の国のアリス』）の挿画が想起される。

4 ロシア人への一般的な呼びかけ。

5 「兵隊野郎」と訳したのは、cannon fodder（大砲のエサ）というひどい表現。

6 ノルマンディ上陸後まもなく、SHAEF

を持つ。「シューシー・ジャップ」は彼の忘れがたいヒット作だ。この人形にケチャップを詰め、数個あるスロットのどこかに銃剣を刺しこむと、日本兵人形はバラバラに弾け、八十二個の、ベトリ赤い肉片が部屋一杯に飛び散るという趣向である。「シャフリン・サム」というのもあった。こいつは、黒ん坊がスイカをもって柵を越えていかないうちに撃たないといけないという技能ゲームだ。男の子、女の子、すべての年齢層が運動神経を競えるというわけで、そちらの商売は順調に回転しているが、チクリツツの目は未来を見ており、それが、この聖ミヒヤエル教会を倉庫とする、毛皮の広域出荷のビジネスなのだ。「経費削減。途中でつまずかないためにや、充分な資本投資が必要なのよ」と、ミサ用の金の聖杯にシャンパンをふんだんに注ぎながら――「どんな展開になっていくのか見極めがつくまでな。おれが思うには、このV爆弾にはすげえ将来性があるぞ。こいつはほんとにビッグになる」

古い教会に、こぼしたワインとアメリカ人の汗の匂い。プラス燃えてまもない無煙火薬コルダイトの臭い。だがこれら新参の侵略者の匂いも、長年にわたって染みこんだカトリックの匂いを消し去ることはできない。香煙と蠟の匂い、何世紀にもおよぶ会衆の口から発する羊の鳴き声の匂いが残っている。毛皮を持ちこみ運びだす子供たちがルートヴィヒに話しかける。まもなく一緒に、操車場に停まっている貨物列車を見に出かけた。

チクリツツはざっと三十人ほどの子供たちを雇っている。「この子たちをな」と本音を漏らす、「アメリカへ連れていくことを夢みてるのよ。ハリウッドへな。映画に売り込めないかとな。プロデューサーのセシル・B・デ・ミルは知ってるか。おれの義理の弟が知り合いなんだ。この子たちに歌かなんかを教えて、少年合唱団に仕立て、デ・ミルとパッ

のアイゼンハワー將軍の指示で生まれた、敵軍から有益な情報を収集するための組織の総称。戦後のドイツでは知識を得る目的で、科学者や経済人の拘束を行った。

7 黒人が白い歯を剥いて赤いスイカにかぶりつく、という差別的イメージが使われている。

8 チクリツツの会社が二十年後、巨大な宇宙関連企業に成長しているようすを『競売ナンバー49の叫び』で読むことができる。財界人ピアス・インヴェラリティを育んだサン・ナルシソ市の産業の中心は、ヨーヨーダインの「銀河電子工学支所」だった。

ケーシ価格で交渉したらうまくいくかもしれない。超大作には必要になるだろう。宗教的なシーンとか、乱交シーンとか、子供たちのコーラスが入るといいだろ——」

「ハッ！」とマーヴィは大声を出し、シャンパンをしたたらせ、目玉をぶっくり膨らませた。「まったく夢もいいとこだ！ セシル・B・デ・ミルのおっさんが、このガキどもを何に使うと思う。歌なんか歌わしてもらえるか。ガレー船の奴隷の漕ぎ手にされるんがオチだ！ ヤー、ハッハ——みんなオールに縛りつけられてよ、ヘンリー・ウィルコクソンを太陽の沈む方へ連れて行くんで、漕いで漕いで漕ぎまくるのさ、ギリシヤかペルシヤか忘れたが、とにかく敵をやつつけるのにな」

「ガレー船の奴隷だ？」チクリッツが怒鳴る。「ありえんな。デ・ミルにとって、毛皮運びの子供たちが、船を漕ぐなどありえんことだ！」

町はずれにA4打上基地の跡がある。ナチスの砲兵中隊が、英露両軍の挟撃に遭って、南へ逃走したときのまま放置されている。マーヴィとチクリッツは、そこを見にいく予定で、スロースロップも一緒にどうだという。だがデュエイン・マーヴィの「アトミック・チリ」が先である。何かと思えば、これは男らしさのテストだった。シャンパンの壺は簡単に手の届くところにあるが、といって、それを飲んでしまうのはマッチョじゃないというわけだ。かつてのスロースロップだったら、自分も同じ我慢をしてみただろう。今は考えるまでもない。太っちゃアメリカ人がふたり、目を眩ませ、燃える鼻から信じがたい量の涙を垂らしながら、権威ある『守銭奴のための「ヘゾーン」案内』にしみじみ「粘膜の神々の黄昏」と記されている体験を味わっているのを尻目に、シャンパンをソーダボトルのようにガブ飲みし、うなずき、微笑み、呟いている——ときどき、ダー、ダー、と

9 デ・ミルが監督した『クレオパトラ』（一九三四）でアントニウス役を演じた。古代のガレー船の言及も、この映画のシーンから。

10 For de Mille, young fur-henchmen can't be rowing! が "Forty million Frenchmen can't be wrong" をゆっくり発音したように聞こえるというきわめて凝ったダジャレ。「四千万人のフランス人がみな間違っているはずはない」（正しい歌詞は Forty ではなく Forty million だが）は、一九二〇年代のヒッ

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

彼は陣地まで一行が乗り込んだ緑色の将校用のフォードの、放熱格子が歯を削いて笑っている。運転席に寄り込んだとたんフォーヴィは、牙を削いたアル中ドライバーに変身だ。ウイ——ン——ン——一個師団全員のコンドームをまかなえるほどのゴム膜を路面になす

りつけ、発車の爆音の収まらぬうちに時速はゼロから一一〇キロに到達。右や左の自転車
をなぎ倒し、家畜は大逃走を起こすその脇で、ブラッディ・チクリッツはシャンパンを両
手にはしやぎまわり、マールヴィをけしかける。マールヴィはお得意の「サン・アントーニ
ャ・ローズ」[★]をかなりたて、チクリッツは窓の外へ警告をわめき散らす——「ヘキッド」
様に手出しは無用、下手にケツ出しやカマ掘られるで！」。応える者はない。道端の老婆
か小さな子供が、戸惑ったファシスト風の敬礼を返すだけだ。

小さな子供が、戸惑ったファシスト風の敬礼を返すだけだ。

戦火に焼かれた打ち上げ基地を新たに雑草が覆いだしている。場所はブナとハンノキの雑木林の中だ。迷彩色に塗られた金属が静かに立つ周りでは、咲き終わったタンポポの亡霊のような綿毛が、背きながら光まばゆい風に乗って海へ、デンマークへ、〈ゾーン〉のあらゆる地点へ運ばれていくのを待っている。すべてが丸裸だ。中をゴッソリくりぬかれた車軸は、ガソリンとグリースの臭いを残しているとはいえ、まるで設計初期のデザインそのもののよう。ケーブルとホースが纏れる中を、忘れな草が青に黄色に目映く激しく咲いている。指令車の内側にはツバメの巣、ロケットを起てるマイラーヴァーゲンの網目に、一匹の雌蜘蛛がせつせと糸を張っている。「ちくしょう」とマーヴィ少佐。「一切合切、持たせてくれたじゃねえか、くそったれの露助どもが。おっと、あんたを責めてるわけじゃねえ」緑と紫色の下生えに落ちた錆びた缶カラ、古いオガ屑、木っ端を蹴とばしながら

に、曲のナラシメで、
「リタ」的なアメリカ人
にくらべ、酒にもエロス
にも寛大なフランス人を
うらやむ歌。

11 ポプ・ウィルスと
テキサス・プレイボーイ
ズをオリジナル版とする
カントリー・スタンダー
ド曲「サン・アントニ
オ・ローズ」のこと。

進んでいく。てっぺんに白いぼろ切れを打ちつけたサーベイ用の杭が今もなお、十二キロ離れた誘導ビームの送信機まで続いている。東の方へ——ということとは、ロシア軍を阻止しようとしたのか……

埃をかぶった制御車^{コントロール・カー}の上で、赤・白・青がウィンクした。スロースロップが片膝をついて見ると、それは〈黒の軍団〉のマンダラだった。KEZVH。目を上げるとマーヴィが笑っている。狡猾なでっぶりとした笑顔である。

「こんなことだろうと思った。おめえさんは徽章をつけてねえもんな。こーんちくしょうめ、おい、おめえはソヴィエトのCIC^{*12}か！ そうじゃねえのか」スロースロップが見かえす。「おい。誰をとっつかまえようって腹だ。ええ？」その顔にさっきの笑みはない。

「まあさか、チチエーリン大佐を狙ってるわけじゃあるめえな。あいつあ、善い露助だぞ」

「信じてくれよ」吸血鬼に十字架を向けるかのようにして、マンダラを差し上げながら、

「おれ、この黒い悪魔の問題以外に、何の関心もないんだって」

相手の顔に笑みが戻った。でっぶりとした手が、スロースロップの腕に置かれる。「おめえの同志がここにきたら、その黒い悪魔たちと手に手をとって踊りまわるのか？」

「踊りまわる？ 何の話だ？」

「わかってるだろうが。トボケんな。ブギーダンス踊る黒いんが、町はずれで野営してるじゃねえか！ おい、イワン、こりやまた、てーんで面白くなりそうだ。なあ、おれは今日一日、このコルトを磨いてたんだ」と言っ、ホルスターに納めて腰に装着した銃をなでる。「あいつら一人せしめりや、素敵なクリーンの毛皮の帽子ができるだろ。帽子のうしろでブラブラするやつにクリーンのどこを使うか、こりや決まってるあな、ハァウ」それを

「聞いて、スロースロップ・チクリッはグヒグヒ笑い、笑いすぎて息を詰まらせる。」

「ほんとだね」スロースロップも口から出まかせに調子を合わせ、「この手の作戦じやさ、おれは情報のコーディネーターが担当で」って、どういう意味だ？「ここににいるのも敵のポジションを偵察するためなんだ」

「敵も敵」チクリッがうなずく。「銃から何から持ってやがる。ニガーならニガーらしく幕でも持ったりやいいものをよ！」

マーヴィはしかめ面で、「おい、おまえよお、おれたちに一緒に行ってもらおうって思っ
てねえのか。やつらの居場所を教えることはできるが、同志、ひとりで乗り込んでく
つてのは気持ちえ沙汰だぜ。暗くなるまで待てや。だいたい深夜の零時頃に始まるもん
だよな？ そんなときまで待ってろや」

「前もって情報を集めておくってところがミソなんだ」ポーカーフェイス、ポーカーフェイス、いいぞ、いいぞ……「これがどれほど重要かは、言うまでもない……」意味深な、
ベラ・ルゴシ風のポーズ。「おれたちみんなにとってな」

とにかくこれでシュヴァルツコマンドの居場所の情報と、町へ帰る足は確保できた。町
につくと、ビジネスマンのおふたりさんは、〈気のあるドイツ娘〉を二人拾って、浮かれ
ながら日暮れの中へ消えてく。彼らの噴き出す排ガスの中で、スロースロップがつぶやく。
次の戦いは、パイ投げじゃすまないぞ、バアカが……

広い草原を越えて彼らの野营地まで徒歩で一時間。草の緑が深みを増していく——まるで
緑の染料が流れて、草の葉の柔毛へ染みわたっていくかのように……草の刃の影が一本
一本伸びていって、すぐ東側の影にくっついていく……沈みゆく太陽の高みに、純粋なミ

シーは黒人に対する差別語の一つ。

ルク色の光が、釣鐘曲線をなしている。白く透き通った肉^{フレッシュ}が、多様なブルーの層をなし、粉のような質感をともなつて天頂のダークなスチールブルーへと続く。自分はなぜここにいて、こんなことをしているのか。放っておけばいいはずの他人の怨み事にハマってしまったというのも、レミングのウルズラの影響なのか？ 自分のすべきことがあるだろうに……ええと、それって、何だっけか……

そうだ！ そうだよ。ヘイミポレックスG¹⁴はどうなった。あのヤンフってのと、それとへSゲレート。おれ、ハードボイルドの私立探偵やってたはずじゃん。自分だけをたのみに、危機一髪の脱出を繰り返して、へかれらに殺られた友の仇をうつ。そして自分の失われた身元を取り戻し、あの謎の装置を見つけ出す。しかし、それって、あまりに変そうな気がする。まるで――

ルッキン・フォ・ア・ニードル・イン・ア・ヘーイスタック！

乾し草に落とした針を探そう

――月の光にすっぽり濡れたその、何だっけかを
(何だっけか) 君を見つけない¹⁴ちや！

タツプする足に踏みしだかれて草がささやく。顎を上げ、息をつがずにハミングするのは、まさにフレッド・アステア流だ――この先シンジャー・ロジャースと、この優雅な死すべき世でふたたび見える可能性って、どのくらい……

一瞬、ゲンジツに戻って――違う違う、おまえはいま計画に集中しないとダメだろうが、

14 フレッド・アステアが、駅で一目惚れしたシンジャー・ロジャースを求めて歌う『コンチネンタル』(The Gay Divorce, 一九三四)の挿入歌 "Looking for a Needle in a Haystack".

選択肢を比較して、到達点を決定して、おまえの人生の決定的な分岐点にいるんだぞ……
ヤー・タッタ、ルッキン・フォ・ア・ニードル・イン・ア——
って、おまえ、何してんの。だめじゃん、集中しろ。……ほら〈Sゲレート〉の謎に迫るところなんだから——わかった、〈Sゲレート〉のことと、ヤンプの関わりを突きとめられりや、イエイ、イエイ、〈イミポレックス〉だい……

——探^{サーチン・フォ・ア}してる、セラー一杯の（ムニヤムニヤ）サフロン^{*15}

オウ……

そのとき、まるで誰かさんの単純素朴な願望に応えたかのごとく、空にポチンと針の穴が開いた。一番星だ。

まだ間に合ううちに、教えてあげなきゃ。

林の中。彼らがスロースロップに飛びかかる。ひよろ長い、あご髭の黒人たち——連れていかれた先で、誰かが親指^{サム}ピアノ^{ハーブ}を弾いている。焚き火がいくつか。サムハーブの共鳴箱の材はここの松の木で、リードは廃車になったフォルクスワーゲンのパネを利用して。女たちは濃紺の花をあしらった木綿の白いスカートに白のブラウス、編み紐付きのエプロン、黒のネッカチーフ。ポットやブリキの金物を手にして忙しそう。ある者は赤やブルーのハッチングを施したダチョウの卵の殻をネックレスにして掛けている。火の上の木串に牛肉の大きな塊が突き刺してあって、そこから滴がしたたっている。

エンツイアンの姿はないが、アンドレアス・オルカンベはいた。海軍のプルオーバーを

15 この歌詞はスロースロップのでっちあげ。

着て、陸軍の作業ズボンをはいて、ビリビリした表情だが、スロースロップのことは覚えていた。「ヴァス・イスト・ロース？」

スロースロップは伝える、「真夜中に来るぞ。人数はわからない。この場所は引き払った方がいい」

「ん、かもしれん」アンドレアスは微笑んでいる。「飯は食ったか？」

ここを引き払うべきか、留まるべきか、議論は夕食の席でも続く。スロースロップが士官学校で教えられた意思決定のやり方とは違う。単なる戦術以外に、スロースロップにはわからないが「ゾーン・ヘレロ」にはわかっている何か重要なことがあるようなのだ。

「行くところへは行かねばならない」後になってアンドレアスが説明してくれた。「ヘムクル」の思し召しだ」

「そうなのか。おれはまた、おたくたちも他の連中と同じに何かを探してたんじゃないかと思った。例の、ほら、00000号、その点はどうなんだい」

「それは「ヘムクル」のものだ。俺たちに探してほしい場所に隠しなさるのだ」

「なあ、おれ、あの「S装置」のな、情報を握ってるんだが」スロースロップはグレタ・エルトマンが語った物語を聞かせる——「荒野原」のこと、ガソリン工場のこと、そしてブリツェロという名前——

この名前を発したとたん、手ごたえがきた。ゾーンという銅鑼のような手ごたえだ。その場の全員が全員と顔を見合わせている。「そのブリツェロというのは」アンドレアスは言葉を濁して、「「S装置」を使う砲兵中隊の指揮を取っていたドイツ人の名前だ」「使ったのかどうか正確にはわからない。ブリツェロがグレタを、「S装置」の組み立

「その場所がどこか、女は言わなかったのか」
「それ、その場所がどこか、女は言わなかったのか」
「それ、その場所がどこか、女は言わなかったのか」

「ただ『荒野原』と言っただけだ。夫のミクロス・タナツを見つけるといいだろう。タナツは発射を見ているかもしれない、現に発射があったとしてな。そのとき、なにか異様なことが起きたはずだが、それが何なのかはまだ突きとめていない」

「それは助かった。礼を言う」

「礼はいらんが、知っていたら教えてほしいことがある」スロースロップは前に見つけたマンダラを取り出した。「これはどういう意味だ」

アンドレアスはそれを地面に置いて、Kが北西を指すように向きを直した。「Kは〈クラール〉」一字、一字、指で触れて——「Eは〈エントリユフトゥング〉。この二つの文字は女であり、北に属す。おれたちの村では、女は円の北半分の小屋に住み、男は南に住んでいた。村そのものがマンダラだった。〈クラール〉とは受精と誕生、〈エントリユフトゥング〉は息、靈魂。Zの〈ツンドゥング〉とVの〈フォルシュトゥーフエ〉は男の記号で、活動や火、それに準備や建設を表す。そしてここ、中心の日は〈ハウプトシュトゥーフエ〉で、これは神聖な家畜を飼っていた囲いであり、先祖の靈魂を表す。ここではすべてが同じひとつのものになる。誕生も靈魂も火も建設も。男と女も一つになる。¹⁶

「〈ロケット〉の四枚羽根も十字をなし、そこにもマンダラが生じる。ナンバー1は飛んでいく道筋の、ナンバー2は縦揺れの、ナンバー3は偏揺角と横揺れの、ナンバー4は縦揺れのためのものだ。対角に位置する二枚が連れだって作動しながら、逆の作用をもたら

16 これら五つの単語の、ロケット打ち上げまでの指示としての意味は、上巻684ページ。ヘレロ族の村の構造については、上巻609ページに図を載せた。

す。逆同士が相つれそっている。それが、どのようにわれわれの心を捕らえたかはわかってもらえらるだろう——実際に尾翼にお飾りをつけて崇拝したわけではないが。ずっと昔、われわれが北に向かいドイッへやってきたときに、これが待ち受けていたんだ……根無し草になって混乱していた当時のわれわれは、そのとき確信した。自分らの運命がその運命と結ばれていることを。つまり、われわれの部族がフォン・トロータの軍隊によって見捨てられたのは、この集合体を見出すためだということを」

スロースロップは手にしたマンダラをアンドレアスに手渡す。望むらくは、かつてエンツィアンが教えてくれた呪文のようにマンダラが作用してほしい。ンバカイエレ（わたしは見捨てられた）、ンバカイエレ……今夜マーヴィにかける呪文だ。チチェーリンにかける呪文だ。それはひとつのメズーザ^{メズーザ}。邪悪な夜を安全に通行するための……

17 旧約聖書申命記の一節をヘブライ語で記した羊皮紙を巻いた、ユダヤの御守り。



シュヴァルツコマンド

〈黒の軍団〉はアハトファアデンを尋問したが、チチェーリンはネリッシュを獲得しただ

け。その代価として、シュプリンガーは奪い返されるし、下士官三名が深い傷を負って治

療室送りとなった。うち一名は動脈切断。ネリッシュはオーディ・マーフィ¹流の抗戦を試

みたのだ。ビショップと引き替えに騎士^{ナイト}を得た——のだが、この騎士は、クスリで情報を

引き出そうとしたら、〈聖なる環^{ホーリー・サークル}〉だのロケット尾翼の十字^{クロス}だの、意味のわからぬことを

言いだした。だが黒人たちには知られていない情報をネリッシュは知っていた。すなわち、

(a) 地上から〈Sゲレート〉への無線リンクはあったが、逆の送信経路はなかったこと。

(b) サーボ・アクチュエーターと、そこからメイン・タンク装置の後部へ伸びている特

殊酸素補給ラインとの間に干渉が起きるという問題があったこと。

(c) ヴァイスマンはノルトハウゼンでの〈Sゲレート〉計画を統括していただけでなく、

ロケット00000を発射した砲兵中隊を指揮していたこと。

これはトータルな諜報活動だ。モザイクが一片ずつ埋まっていく。事務所を持たないチ
チェーリンは、その全体を頭に入れて持ち歩いている。半端な情報片もみんな抱え込む。

1 西部戦線で名を馳
せたアメリカの若き英雄。
迫りくるドイツ軍に対し、
炎上する戦車の上から単
身マシンガンで攻撃を続
け、弾丸が尽きてからも
負傷した身で耐えて味方
の反撃を呼び込んだ。

フグ・ソノの「サイク」よりも貴重な何かが、鰐粉色をした空へ向かって伸びていく。
無緯筋上の車結、酸素もある種の「アノターバーナー」、通常はそうなるだろう。だがネリ
ン・は、ある非対称の存在についても語っていた。ロケット内部、三番の尾翼の近くに
なんらかの負荷が積みこまれるのだ、と。そのために横揺れと偏揺角がほとんど制御不能
なほど複雑になる、と。

だとしたら、アノターバーナーの方も、非対称な燃焼パターンをきたして、機体が受け
止められる以上の熱流を引き起こしはしないのか。ちくしょう、なんでおれは推、力担
当の技師を捕まえられなかったんだろ。アメリカにみんなかつさらわれてしまったから
か。

やってきた森の空き地でマールヴィ少佐がボーイーナイフを歯の間にくわえ、二挺のトン
ブソン式小型自動機関銃を両の腰に収めた恰好で、いきり立っている。してやられた襲撃
隊はしゃべる気分も失せ、悪い顔をしてザバーエフの底なし水筒からウォッカをあおって
いる。だが、もしガルミッシュ村に「S装置」に関わった推進技術者が現れたのなら、マ
ーヴィはそれを教えてくれたはず。そういう取り決めなのだ。西側が諜報して、ロシアの
指が引き金を引く、と。

どうにもエンツィアンの匂いがある……いまこの瞬間にもあの黒人が闇の中からこつち
を覗いているのではないかと。チチエーリンは煙草に火をつける。緑青紫の炎が燃え盛っ
て黄色に安定してからも、まだ炎を消さずに考える。させておけ。アイツはするまい。お
れもしない。いや、どうだろ……するかもしれない。

しかし今夜は突如として、量子跳躍的接近だ。二人が、ついに相見えるのだ。へSゲ

5

量子のなかを回る

2 イタリヤのラヴ
ンにあるオデッセ
イは、初期キリスト教の
代表的建築で、壮大なモ
ザイクで知られる。

3 タービンの排出バ
イクに燃料を送り込むこ
とでジェットエンジン
の推力を高める装置。

4 フォン・ブラウ
ンをはじめとするドイツ軍
技師が投降した、ドイツ
南部、アメリカ占領下の
村。

「シート」が現実であるのか、幻想であるのかはともかく、うまく機能するのか無駄な失敗だったのかはどうであれ、とにかく異母兄弟が、そいつをめぐって対面する。そうになったら……

だが一方、マーヴィが話していた不思議なソヴィエト諜報部員ってのはだれだろう。考

え出すと、バラノイアに陥りそうだな、チチェーリン。モスクワが、おまえの長年の血恨にもとづく行動を知ったのかもしれない。おまえを軍法会議にかけるための証拠集めをするのか。そうだとしたら、今度は中央アジア送りじゃすまされんだろう。海の底のアトランティスか。その大使館の、最後の補佐官として、溺死したロシア海兵が麻薬沙汰を起こすたびに、引き取りの交渉を担当するのかい。日本海に沈んだおまえの父親が、遠くレムリアへ行きたいといってきたらヴィザの発給を急がせるか。いや行き先はサルガッソ海かな？——浮かび上がり白骨化した骸骨が寝そべって沖行く船を嘲笑するという？ で、

親父さんが旅行パンフを肋骨の間に、トラヴェラーズチェックを頭蓋骨に詰めこんで、真昼の海流にのって出発しようってときに、彼の黒い息子の話でもしてやるか——秋の気配のただようある日、エンツィアンと会った日の、身も凍えるような思いについてな

——バルセロナのホテルのテラスで出てくる、かき氷の下で冷やしたオレンジみたいな。

私に手紙を出すのなら滞在先は知ってるね……オレンジの皮を剥く指先が、死の冷たさにまで冷えていきそうだ……

「よお」酔いが回ったマーヴィは虫の居所がよくない。「あいっら一体いつんなったら潰せるんだ」

「もうじきだ、安心してろ」

電子のエネルギー単位が、ひとつのレベルから別のレベルに突然に変化することをさす量子力学の用語。

6 アトランティス同様、かつて存在し今は沈んだとされる伝説の大陸。インド洋にあったという説と、太平洋にあったという説がある。『L.A. ヴァイス』のヒッピーたちの会話にしばしば登場する。

7 北大西洋の、いくつかの海流にぐると囲まれた亜熱帯海域。

8 スペイン内戦で王党派が歌った歌の一節。このあと「グランデッサの戦線さ／すべてのパトリの最前線」と続く（ドナルド・ラーソンの指摘による）。

「パリからおれはすげえプレッシャーもらってんだぞ。最高司令部のお歴々から、直ちに一人残らず片付けろってお達しなんだ。すんばらしいだろ。お偉いさんを怒らせたらどうなる？ ボタン一押しで、オレなんか、メキシコの売春宿でのお楽しみが吹つとぶじゃねえか。あのクロンボたち、何しでかそうとしてるか分かるだろ。事を起こさねえうちに、止めなきやいけねえだろ——クソ！」

「あんたが見た、例の諜報部員のことだがな。うちの政府とアメリカ政府とは、同じ政策を打ちだすのは簡単なことだし——」

「あんたらのところにはゼネラル・エレクトリックの息がかかってねえじゃねえか。ディロン、リードも……スタンダード・オイルも……^{*9}ったく、クソ！」

「しかし、それこそ、あんたの国が必要としていることじゃないのか」と、ブラッディ・チクリッツが口を挟む。「すべてを政府が運営するんじゃないで、ビジネスの専門家をちやんと入れないとな。あんたの左^{レフト・ハンド}手は、右^{ライト・ハンド}手のやっていることをわかつちやいないだろ^{*10}」

なんだ、これは。ここで政治論争なんかやろうっていうのか。〈黒の軍団〉に逃げられただけじゃ足りなくて、さらに恥の上塗りかい？ 最初からそんな簡単にいくとは思ってなかったろうに……

「で、ハーバート・フーヴァーはどうなんだ」チクリッツが叫び声を上げる。「かつてあんたらの国が飢えてるときに食べ物をもつていっただろ！ この連中はフーヴァーを愛してるぜ^{*11}——」

「そうだ——」チチエーリンが割って入る。「聞かせてくれ。ゼネラル・エレクトリック

9 「ディロン、リード &カンパニー」は一九二〇年代のウォール街で力をふるった投資銀行。ここで軍人のマーヴィが、具体的に何を呪っているのかは不明だが、アメリカのスタンダード・オイルとドイツのIGファルベンの間に戦前から事業協約があつて、この協約が、ゴムなどの物資調達等に影を落とし、戦況を左右したのは事実。また戦後、「ドイツのための連合国管理理事会」がドイツ経済の順調な復興を優先して、IGファルベンの保護に力を入れたのは、占領下欧州の経済部の長だったドレイパー將軍が、かつて「ディロン、リード」の副頭取だったときに、IGから多額のドイツ債券を引き上げていたことが理由だとも言われている（フチヤー

作はここであつた。何してゐるんだ」

「フーウィル佐が親しげなウインクをした。「ミスター・スウォープはFDRと無二の親友でな。『エレクトリック・チャリー』^{*11}はもうアチラに行つたが、スウォープのおっさん、今も政府のブレーンでさ。まあブレーンっていえば、たいていはユダヤ人だが、スウォープは大丈夫だ。GEはジーマンスにコネがあつてさ、ほら、V2の誘導装置はジーマンスの仕事だし——」

「スウォープだつてユダヤ系だろうが」とチクリッツ。

「そんなこたあねえよ、ブラッディ、おまえ何もわかつてねえな——」

「いいか——」ゼネラル・エレクトリックの元社長が何系であるかをめぐる舌のまわらぬ酔っぱらいどもの議論には、毒氣とネットリした憎悪がこもっている。チチェーリンは片耳で聞いていただけだが、一瞬、軽い眩暈に襲われた。告白剤^{クスリ}を飲ませたとき、ネリッシユが言つていなかっただろうか——ノルトハウゼンでの「Sゲレート」の集会にジーマンスの代表がいたと。そうだ、IGの男もいたと言つていた。それにIGのカール・シュミツ^{*12}はジーマンスの理事に名を連ねていたではないか。

マーヴィに聞いてもラチはあかん。泥酔して、話自体がふらふらだ。「最初ここにきたとき、おれもけつこうウブでよ、クソオ、IGファルベン^{ドイツ語で青}ってだれかの名前だと思つてた。そうよ、そういう男がいるんだと——もしもし、あなたI・G・ファルベンさん？ いいええ、わたしファルベンの妻ですわ！ ミセス・ファルベンですの。わーっはっはっは！」

ブラッディ・チクリッツがお得意のエレノア・ローズヴェルトの口真似を始める。「先

ド・サスリー『IGファ
ルベン』。

10 聖書「マタイ伝」
では、他人の称賛を当て
にして善をなすことをい
ましめる意味を持つが、
ここでは「左手」に共産
政権を、「右手」に「正
しい操作」の意味をかけ
ているのだろう。

11 後の大恐慌時代に
大統領をつとめるフーヴ
アーは、第一次大戦中か
ら戦後にかけて、ウィルソ
ン政権の食糧庁長官とし
て、ロシアを含むヨーロ
ッパへの食糧援助を行つ
た。

12 一九四四年にGE
の社長を最終的に退任す
るジェラード・スウォー
プは、ローズヴェルト政
権誕生以来、さまざまな
委員や閣僚を歴任してい

日のことですが、わたくしは、息子のイデオット^{イデオット}と一緒クッキーを焼いたのです。外地の若い兵士たちに送るクッキーです。兵士たちはわたしたちのクッキーを受け取ると、お返しにクッキーを焼いて送ってくれるのです。これでみんなのところにクッキーがいきわたりますね！

おお、ヴィンベよ。なつかしのVマンよ。あんたの言うことは正しかったのかい。あんたのIGファルベンこそ、まさに国家のモデルだったのかい？

森の空き地でチチェーリンは、二人の馬鹿者に挟まれて、そんなことを考えている。散在する発射台の残骸には砲兵部隊の番号もなく、ウィンチで巻き上げたケーブルは張りつめたまま動かない。最後の晩に、最後に残った男たちの投げすてたビール壺が、そのままの位置に転がっている。すべてが敗北の形を、作戦の死滅を、純粹にとどめている。

「おい、あそこ」 途轍もなく大きな白色の指が彼を差していた。その爪には見事なマニキュアが塗られていて、指がぐるり半回転して見えてきた指紋は、未来の（指さしの^{リック}市、住人すべての心が知られ、隠れ場のない町の航空写真であるかのような。今その指の関節が、何やらソフトな油圧式の機械音とともに動き、チチェーリンに差ししめす——



ロケット・カルテル それに接触したあらゆる組織（人間も書類も含む）を貫いて拡がるもの。ロシアへも伸びている……ロシアもクルップから購入した、だろ？ ジーメンスから、IGから……

その存在をスターリンが認めない、いや実は知らずにいる協約があるのだろうか？ ああ、国家の消えたドイツの夜闇に、ひとつの（^{スライム}）が形を取ろうとしているのか。ヘインターナシヨナル^{ヘインターナシヨナル}やヘローマ教会^{ヘローマ教会}のように世界の海を股にかけ、地表の政治を包み

る。彼はユダヤ系であることを隠して非ユダヤ人と結婚したが、戦後はイスラエルの援助に尽力した。

13 GE社の初代CEO、チャールズ・A・コフィン。一九二六年に没して「アチラの間人」となった。

14 「ヘルマン・シュミッツ」(一九三五年以来IGファルベンのCEO)の誤記かと思われる。

15 フランクリンとエレンアの第四子。空軍の航空写真偵察で活躍し准将に任じられた。

込むひとつのくにが。へロケットを魂とするくに、その名は「IGラケーテン」¹⁶。サーカスのごとく煌びやか、赤と黄色のポスター、無数のリングで一斉に演し物が演じられる。その真ん中で、堂々たる「指」がクルリ、クルリと旋回している。チチェーリンは確信した。「ゾーン」を動きまわって証拠を眼にしたからというより、むしろ自分のうちに確証を得たから。自分が破滅のもとをつねに持ち歩いているという感覚——それが今一步で啓示として現れそうな気がするのだ。最初は「キルギスの光」のときだった。でもそのときは、自分がそこへ入っていくのを必ず恐怖が押し止めるだろうという理解を得ただけのことだった。今夜存在を知らしめたこのメタ・カルテルも、彼がその輪郭^{エッジ}を踏みやぶることはけっしてないだろう。「へロケットのくに」に国境はないのだ……

キルギスで「光」を見損なったのは残念であっても、こんな「指」は二度と見たくない。だが悲しいことに、ひどく悲しいことに、誰もがみんなここに集まってきているようなのだ。ここに来て部品をかつさらっていく者たちはみな「IGラケーテン」の雇い人だ——自前で動いているのは、彼自身とエンツィアンだけ。弟の、エンツィアン。「黒の軍団」を「へかれら」が追っているのは当然だ……それに……

それに、おれの実の姿を見誤っていたことに「へかれら」が気づいたとしたら……よせやい、なんでマーヴィはあんなふうにおれを見つめるんだ。眼玉をぶっくり膨らませて……いかん、パニックって、やつの狂気を焚きつけては……やつはまだ留まっている、まだ超えていない、ギリギリこちら側に……

16 「IGファルベン」は染色（Beizen）の会社として始まったのでそう呼ばれるが、ロケット（Rakete）が基盤であれば、たしかに「IGラケーテン」の名がふさわしいだろう。また「へロケット」を中心として連なる企業は、化学・電機・金属・プラスチック等多種のカルテル間の複合的な連合を形成するので「メタ・カルテル」と呼ぶにふさわしい。



クックスハーフェンへ、夏は勢いを落とす。それがクックスハーフェンへ伝わっていく。ハミングする草原。ざわめく雨は三日月を描いて葦の葉を滑り落ちる。羊が、ごくまれに北方の黒鹿が、藻を食べに降りてくが、そこは海でもなく砂地でもなく、日射しと霧とが分かちがたくもつれるところ。・・・その海の草地をスロースロップは運ばれる。迷子の旅人を導く道しるべのように、いくつかの形象が消えてはまた現れる。ヘゾーン^{カタチ}の象はいろいろだ。彼はそれらを受け入れるが、もはや意味を解釈したりはしないし、その必要もない、たぶん。それらのカタチの中でもっとも執拗なもの、もっとも現実味の薄い時間帯に訪れるのが、階段状の切妻だ。^{*1}むかし北ドイツのほとんどの建物の正面をかたどっていた切妻の形象がバックライトを浴び、まるで海中から出現したかのように奇妙に濡れた灰色をして、低くまっすぐに伸びた水平線上に立ちのぼる。空に消えずに浮かんでいる。さながら「解析^{アナリシス}」の記念碑のように。三百年前、数学者たちは砲弾の上昇と下降を射程距離と高さの階段に分割し、 Δx と Δy によって表す方法を開発した。その階段をしだいに細かくしていった、ゼロに近づける。階段を駆け足で上り下りする小人の軍隊がいつまでも小さ

1 左右の斜線が頂点で交わるのではなく、垂直と水平が交互してギザギザの切妻をつくる家屋は、中世末期以来、北ヨーロッパの広い地域で建てられた。

くなり続け、足音も無限に小さくかばそい滑らかな連続音になっていく。その解析法の遺産はそのまま変わらず継承された——ペーネミュンデの技術者にしても同じだ。ヘロケツト²の飛行を収めたアスカニアのフィルムを彼らは見る。ひとコマ、ひとコマ、 Δx と Δy を、飛行を抜き去った静止画像を……フィルムも微積分学も、どちらも飛行のボルノグラフィ^{インボテンス アブストラクション}。性的無能と抽象化の象徴である石の階段状の切妻が、ときには全形、ときには壊れた部分となつて、緑の海原に現われ、しばしその姿を留めては消えていく。その影で、干し草のような髪をした子供らが「天国と地獄」ごっこをしている。村の舗道で、天国から地獄へ、そしてまた「天国」へと、だんだん広がるマス目を跳ぶのだ。ときどきスロースロップも混ぜてくれる。かと思うと、暗い小路へ逃げ戻ってしまうときもある。小路を挟んで、たくさんの窓とたくさんの悲しみを湛えた古い家々が、たがいに向けて頭を下げてお辞儀をしている。見上げると、触れあいそうな額と額の間に、細いリード線のようなミルク色の空がある。

夜になると子供らは丸い紙の提灯^{ランタン}を持って通りをうろつき回る。「ラテルネ、ラテルネ、ゾンネ、モント、ウント・シュテルネ³」と歌いながら……田舎の夜の天球は靈魂の青白さ。去りゆく夏への惜別を歌う。ヴィスマル⁴近くの海辺の町の公園でスロースロップが眠ろうとすると、子供らが囲んで「豚のヒーロー」のプレヒャツングの話聞かせる。十世紀のいつだったか、その豚鼻でヴァイキングの侵入を嗅ぎつけ、雷鳴の中から突如姿を現したプレヒャツングは、悲鳴をあげる北方の賊軍を海へ追いもどした。以来、毎年夏になると、人々は一日、木曜日を祭りにあてて町の解放を祝った——木曜日(Thursday)とは、そもそも雷神トール(別称「ドナール」)の日という意味で、巨大豚を遣わした雷神に感謝

2 ドイツのアスカニア・ヴェルケ社はシネセオドライト(26ページ)用の機器メーカー。飛行物体の角度から位置情報を得ることで、速度や加速の算定を可能にするこの撮影装置は、ロケットの開発に欠かせないものだった。

3 「ランタン、ランタン、太陽、月&星」という意味。これは一種のかくれんぼで、「太陽」になった子は「星たち」を見つけて「ランタン」(街灯のポスト)に連れこる。「月」には「星」を逃がす力がある。

4 東のロストツクからも西のリュールベックからも、ともに五十キロほど離れた港町。

を捧げたのである。十世紀には古代の神々はまだ人々を動かす力を持っていたのだ。^{*}そのドナル神が手なずけられて、聖ペテロかローラン^{*}になったというのでもあるまいが、祭典が行われるのは聖ペテロ教会近くにあるローラン像のところだった。

それが今年は開催が危いのだ。過去三十年、プレヒャツンガ役をやってきた靴屋のシュラウプが、去年の冬に民間選抜隊員に徴兵されたまま、いまだ音沙汰がない。白い提灯がスロースロップの周りに集まり、闇に揺れている。小さな指々がスロースロップの腹を突つく。

「こいつ世界一のデブだよね」

「村の誰よりデブってるよね」

「ねえ、お願いだよ」

「おれはそれほどのデブじゃないぞ——」

「代わりがくるって、言ったとおりだったね」

「それに、背も高いよ」

「待てよ、おねがいつて何だ」

「あした、プレヒャツンガになってよ」

「おねがい」

近ごろスロースロップはソフトタッチで、争わなくなった。子供たちに引っぱられるまま草の寝床を起き出して、市役所まで連れていかれる。地下に「豚の英雄祭^{シユグアインヘルトフェスト}」に使う衣装と小道具があった。楯と槍、角つきの兜、毛むくじやらの毛皮、木製の雷神の槌、そして一〇フィートにわたって金箔を張った稲妻。豚の衣装は少々キワモノで、桃・青・黄の

5 「豚の英雄祭り」自体はフィクション。スロースロップがキリスト教化する以前のプロシアの英雄に同一化する、そのことが小説全体のなかで持つ意味は小さくないだろう。

6 フランク王国シャルルマーニュの甥に当たる伝説の騎士。叙事詩『ローランの歌』に歌われる。

7 少年も年配者も、傷の癒えきらない負傷兵も、みんな集めた歩兵隊。上巻441ページでも触れられた。

どきつい色、外側はフラシ天、内側には藁のパッド。なんともドイツ表現主義風の豚だが、サイズは彼にびつたり……フム。

翌朝の人はまばらで活気もない。老人と子供たちと、物静かな退役軍人が少数。ヴァイキングの侵入者をやるのは全員子供だ。ずり落ちた兜が目隠し、ケーブは地面を引きずって、背丈に等しい大きな楯を持ち、背丈の二倍の槍を持って立っている。広場の周りには、ストックの白い花と矢車草の赤や青をワイアメッシュに編み込んで作った巨大なブレヒャツンガ像が並ぶ。スロースロップは、ローラン像の背後に潜んで待機する——むっつりとした表情、皿のように見開いた目、縮れ毛の頭、肉がつまめる腹。となりに花火の束があつて、その脇にアシスタントのフリッツがいる。八歳ほどの、ヴィルヘルム・ブッシュの漫画から飛びでてきたような子だ。豚の英雄フェスティバルなんて初めてのスロースロップはいささか緊張気味だが、フリッツは手慣れたもの。用意周到にも、上薬をかけた大きな壺に、脳髓を潰したみたいな液状のものをもってやってきた。デイルとコリアンダーで香りをつけたそれは「ハーファッシュュライム」——たしか「オートミール」という意味のはずだが——を蒸留して作ったという。

「ハーファッシュュライムなんだな、フリッツ？」もう一口飲んで、訊くんじゃなかった、と後悔する。

「そう、ハーファッシュュライムだよ」

「そうか、半分のシュライムでも、ないよりマシだ、ホ、ホ……」その正体が何であるにせよ、神経中枢の働きに敏速に効果を及ぼしていることは確かである。町の楽団が吹き鳴らす厳肅な宗教歌に合わせて、ヴァイキングを演じる全員が、息を切らせローラン像の

8
200 ページで言及された国民的ユーモア画家。

ところまで登ってきて整列し、町の降伏を要求したときには、スロースロップの頭の働きはいつものレベルすら下回っている。そのときフリッツがマッチを擦った。底抜けの騒ぎが始まる。ロケットが、打ちあげ花火が、回転花火が、そして——プレッヒャツンガア！大量の黒色火薬がスロースロップを空中に吹き飛ばす。尻は焼け焦げ、豚の尻尾のカールもとれてしまった。「あ、そうか、ここで言うんだっけ。えーと……」足をふらつかせ、ニーッと大きな笑みを浮かべたスロースロップが台詞をシャウト。「われこそはドナルの怒りなり——今日こそは汝らをわしの鉄床かなどにしてくれるわ！」ヴァイキングたちは声をあげて逃げだし、大騒ぎの追跡劇が、白い花びらの雨を降らせ、小さな子供たちの金切り声を伴って、通りを抜け、海辺に着いたら、みんなして海水を掛け合い、頭を水に沈めあう。大人たちはビールをあげ、ワインを抜き、パンとクヴァルク・チーズとソーセージを広げる。小さな泥炭の火に掛かった黒い長柄鍋スキレットの、煙っている油から、油をしたたらせながら金褐色のポテトパンケーキが登場。女の子らがスロースロップの豚鼻とビロードのわき腹をさすり始める。町は救われた。もう一年、安全である。

平和に満ちた酒酔いの日に音楽はあふれ、海水の、湿地の、花の、揚げタマネギの、こぼれたビールと新鮮な魚の臭いにおがたちこめる。頭上の青空に、霜の色をした小さな雲が流れていく。そよ風が心地よく、豚のスーツに被われたスロースロップの汗を止める。海岸線に続く青灰色の林が、息をしながら揺らめき光る。白い帆が沖へ向かう。

パイプの煙とキャベツの臭いの立ちこめたカフェの奥。その褐色の部屋でスロースロップは、木底の靴とサマードレスの健康的な二人の若い女性との——男なら夢見ない者はいまい——
《榎と鉄床》ゲームにまる一時間いそしんでからカフェに戻ると、人々が三人か

四人ずつ、縛れた塊になっている。おいおい、今はかんべんしてくれって。……ケツのアナの周辺に張りつめた痛みが走る。頭も腹も、オートミールの濁酒と夏のビールで膨れている。スロースロップは漁網の山に腰を降ろし、何とか理性を保とうとするけれども、それはちょっと無理そうだ。

この辺りに小さな人の渦ができれば、それはたいてい闇市を意味する。真昼の庭園の静寂のなか、バラノイアの雑草がアーミー・グリーンの花を開かせる。スロースロップ家の末裔は、これほどまでに堕ちぶれたか——〈商い〉を前にして、これほどの恐怖を感じた者がスロースロップ家にいただろうか。石を敷き詰めた道路の上にはもう新聞紙が広げられ、その上にバイヤーが缶からコーヒー豆をぶちまけて、底まで本物のコーヒーか、紛い物で上げ底していないかをチェックしている。うす汚れたポケットからぞんざいに取り出された金時計や金の指輪がまばゆく光る。よれよれの汚いライヒスマルクが音もなく持ち主を替え、煙草は一瞬のうちに手から手へ渡される。足下で子供たちが遊ぶなか、大人らはポーランド語、ロシア語、北バルト語、低地ドイツ語方言で取引する。どこか非個性的な、通りすがりの感じは、難民のスタイルにも通じるかもしれない。旅の途中で、移動しながら、ほとんど思いついたかのように商売している風情……これら灰色のハスラーたちはみんなどこから来たのだろう。今日の日の快^{ミューズ・トリック・ヒヤイト}適^{ヒヤイト}さの一体どこに、彼らを宿す影が宿っているのか？

と、薄気味悪い静けさは……そして案の状、警察が現れる。白黒のシャラバン⁹二台に詰め込まれた青緑の制服は、白い腕章と、星形の徽章のついた小さなバケツ帽子つき。早くも鞘から抜いた警棒は神経質な手に握られ、震える黒いデイルドーと化している。攻撃開

9 フランスの観光地で見られるペンチシート付きのオープン・バス。

始の体勢。人の渦巻きが瞬時に解かれる。舗道に落ちた宝石がチャリチャリと転がる。煙草が飛びちり逃げまどう市民の足に蹴散らされる。時計が、武勲メダルが、絹地が、札束のロールが、ピンクの皮のジャガイモが一瞬にして路に散乱する。いっぱいに見開かれて警戒する眼玉。肘までくるキッド革の長手袋、振れた指が空につかみかかる。割れる電球。パリ製のミュール、石ころと指輪とブローチの静物画を囲う金の額縁——どれひとつ、だれひとり、自分の物だとは言いださない。みんな怯えきっている。

それはそうだろう。闇市を警官が潰すそのやり方は、戦前の反ナチスの街頭デモに対したときもこうだったのかと思わせる徹底ぶりなのだ。多用途の棍棒を手に、細めた眼つきをくつきりとした威嚇の表情に微調整し、革の臭いと、ウールの腋から警官自身の恐怖の悪臭を発しながら、群に向かって、ムムムヤーっと一気に距離を詰め、三人がかりで小さな子供に飛びかかり、娘だろうと老人だろうとブーツも脱がせ下着も脱がせて所持品検査をする。泣きじゃくる子供と金切り声をあげる女たちの間で棍棒を振り回し、叩きまくる。思う存分の効率でパワーをふるう悦びに加え、古きよき時代への郷愁もあるのだろう。こんな群衆制御のお楽しみは、戦争中には味わえなかった。殺人にせよ、軽犯罪にせよ、しよっびく相手は一人だった。だがいまは「^{エルスト・アプラインフング}白きマーケット」を守るといふ大義があるし、おまけに街頭はふたたび最初の^{エルスト・アプラインフング}一発を浴びたくてうずうずしている群衆でいっぱい。こりや警官にとっちゃ、たまらんだらう。

やがてロシア兵の援軍が加わった。トラック三台に詰め込まれた、作業服姿の若いアジア兵たちである。遠い東方の極寒の地から連れてこられたばかりで、ここがどこかもわからないうち、そんな連中が、荷台の積荷を乗りこえ、サッカー選手がフィールドに登場す

るように横一線をなし、路上の邪魔者たちを海方向へ押しやっていく。スロースロップも群衆の下真中にいてよろけながら後ろへ押されていく。豚の仮面で視界の半分は覆われている。それでも子供は守らなくちゃ——小さな子供数人と、さっきまで木綿布を持ち運ぼうとしていた老婆の楯になって、棍棒を受ける。第一撃が腹を捕らえた。大丈夫だ、藁のパッドで、さほど痛みは感じない。町の住民が右に左に逃げ惑うなか、プレヒヤツンは仁王立ちしてふんばっている。そうか、今朝のは、これのドレス・リハーサルだったのか。今度は本物の侵略者を追ひ払ってこと？ ひとりの小さな女の子が脚にしがみついて英雄の豚の名を叫んでいる。彼の力を確信して。白髪の初老警官が、スロースロップの頭めがけて警棒を振り下ろしてきた。長いこと内地の職場で、賄賂の暮らしをエンジョイしてきやがった顔だ。〈豚ヒーロー〉は身をひるがえし、自由のきく足で蹴りを入れる。うずくまる警官に、数人の市民が叫びながら飛びかかり、帽子と警棒を奪う。そいつのしょぼくれた目からこぼれる涙が太陽光にキラリと光る。そのときどこかで銃声がした。大パニック。人波が、スロースロップの体を半ば浮かせたままさらっていく。足にしがみついていた子供も離され、激流の中に永遠に失われてしまう。

街路から埠頭へ走る。殴打をやめた警察隊は路上の戦利品を拾いはじめた。が、今度はロシア兵がやってきた。スロースロップを睨みつける多くの眼。と、いかなる神の思召しか、カフェの中から女の子が一人。スロースロップの手を引いてズンズン歩いていく。「あなたに逮捕状が出るのよ」

「逮捕状だ？ そんなもんじゃない、アイツら好き放題やれるだろう」
「あなたの軍服がロシア兵に見つかったのよ。脱走兵と思われるわ」

「それ、当たってるけど」

娘はスロースロップを、ビッグ・スーツ姿のまま家に連れ帰る。名も知らぬこの娘、年は十七くらいか。色白で、童顔で、傷つきやすそう。天井からシーツを垂らしたその裏で、彼女とふたり、柱がラッカー塗りの狭いベッドにビタリと身を寄せる。シーツは長年の精液で黄ばんでいる。台所から母親のカブを刻む音。身の危険ゆえにスロースロップの心臓は高なり、スロースロップゆえに娘の心臓は高鳴る。娘は親の話を始めた。父親は印刷工、徒弟を終え、^{ジャーマン}渡り職人となって結婚したが、それから十年、流浪は今も続いている。手紙は、四二年にノイケルン^{*10}の友人宅に転がり込んだときのものが最後だった。いつも友人宅からだ。いったいいくつかの裏部屋と後部船室と印刷所で一夜を過ごし、『月曜日の世界』^{*11}のバックナンバーにくるまって震えたのか。『出版印刷組合』の一員であれば、屋根の下で寝そびれることなく、時には食事にもありつける。だが滞在が長引けばいつか必ず警察に嗅ぎつけられることを覚悟しなくてはならない——まともな組合であればそれは避けられない。IW^{*12}の伝統をドイツにあって守ろうとし、他の組合がみなヒトラーと歩みを揃えていく中にある、それを拒んだ。その純粹さは、スロースロップ自身の清教徒的な『言葉』への希望と触れあうものがある。『言葉』が印刷工のインクをあらしめ、善き人間の血に、血液に入り込み、抗体や、鉄分へ向かう呼吸と一緒に流れる。だがこの印刷工の父親にとって『世界』はつねに『月曜日の世界』でしかない。その冷徹な刃先で、ブルジョワジーが現実ととり違えた快適さの幻想をさっくり切り剥がすもの……国家の狂気に対抗するパンフレットとともに彼は逃げおおせたか？ それとも逮捕され、殴打され、殺されたのか？ 休日には父と撮ったスナップ写真を娘は持っていた。バイエルンのどこか観光

10 ベルリン東南部の行政区。

11 Die Welt am Morgen
『ベルリンで発行されたプロレタリアートの週刊行物。』

12 世界産業労働者組合。一九〇五年に結成された、権力と闘うラディカルな労働者組織。『逆光』でも『グライムラン』でも描かれた。

地。滝が落ち、白い頂がある。日焼けした不老の赤ら顔、チロリアンハット、ズボン吊り。すつくと立った二本の足はこの瞬間にも逃走に備えている。像が止まり印画紙に焼き付けられた。この男を拘留できるのはこのやり方だけ。彼は逃げる。郊外全域を、同志たちの冷えきった部屋から部屋へ、フリーメイソンの夜から夜へ……写真を見つめる、エプロン姿のキッチンの夜、からっぽの午後。逃走する漂流者の魂の動きを、シャッターのギロチンで切りとられた Δx と Δy の中で起こっている微細な変化を見つめる。流れる水から彼は何を聞きとっていたのか。自分と同じく永遠に流れつづける、沈黙のなかに消えて、はやくも背後に去って。

豚の姿で見知らぬ娘の隣りに横たわる今も、この父はスロースロップにとって高飛びの元素だ。彼だけじゃない。逃走の翼をうしなつてこのベッドに停泊し、娘の「一緒に連れてって、どこまでも」という願いを聞いたすべての男を鼓舞したはずだ。彼女とふたり、鉄橋を歩いている情景が浮かぶ。周囲は山なみ、長い裾野に松林が続いている。秋の陽と、寒々しい紫の雨雲。午後も半分過ぎて、彼女の顔はなにやら高いコンクリートの建造物と向かいあい、壁からの反射光が斜めに差して頬骨の両側に当たり、肌と溶けあう。大きな黒の外套を着て静止した彼女のイメージが彼の上にある。ブロンズの髪の毛の背景に空が広がっている。彼自身も金属の梯子に上っている。そこは駅構内。眼下に輝く鋼鉄の道が交差しながら「ヘゾーン」のあらゆる領域へ延びていく。二人で逃げることに。それを娘は望んでいる。だがスロースロップが望むことは、ただここで静かに横たわり彼女の胸の鼓動を聞いていること。パラノイドなのは、みんな同じで、動かずにいるための方法を極めたいと思っているんじゃないのかい？ それでも追っ手はやって来る。逃走者を追って一軒一

軒、しらみつぶしに調べにくる。だからここを出ていかなくちや。娘を残して。通りで拡声器が金属の喉でがなり立てる。今夜の外出禁止時間はいつもより早く始まると。この町のどこか窓の向こう側で、ベッドに入った一人の子供が、はやくも眠りの縁をさまよいながら、この外国訛りの金属声に、夜の安全を守る力のあらわれを感じている。この声も野生の野原の一部、海上の雨も、犬たちも、見知らぬ窓からただよう料理の匂いも、土ぼこの道も一緒……みんな一緒に二度と帰ってくることはない夏を織りなす……

「月あかりがないわよ」彼女がささやく。つつましかな眼が、彼をとらえて離さない。「町を抜け出るベストの方法は？」

彼女は百通りもの方法を知っている。恥ずべきことをたずねてしまった。心と指先が痛む。「私についてくれば大丈夫よ」

「その必要は——」

「そうしたいの」

母親が固ロールパンをふたつ、スロースロップのビッグ・スーツに突っ込んだ。服もくれようとして探したが、亭主の服はみなへ中央交換所^{タラシユツェントラーレ}で食べ物に換えてしまっていた。

母親の最後の像はキッチン^{すがた}の光に縁どられる。窓の向こうで薄らいでいく黄金の婦人の図。鍋がひとつだけ湯気を立てて煮立ち、その上でうなずく頭。そむけた顔の背景に濃いオレンジと赤の、花柄の壁紙。

彼を連れて娘は低い石の壁を越える。排水溝から地下水路を通過して町の南西へ。外へ上がる。遠く背後で、聖ペテロ教会の時計が九時を打ち、ローラン像が盲目の眼を広場に向けている。花で作ったブレヒャツンガ像から白い花びらが次々とこぼれ落ちる。発電所の

煙突群も雲のよう。煙もなく、空に描いた絵のよう。田園の風車が軋んだ音を立てている。

町のゲートは高くはっそりとして、最上部で階段が中空に消えていた。そのオーシャイツ曲線の出口を抜けて道はカーブし、夜の草原へと続いている。

「あなたと一緒にいきたいわ」という娘はしかし、一緒にアーチをくぐる素振りを見せない。

「きつと帰ってこられるだろうさ」流れ者のそら言とは違う。ふたりとも確信している。

きつとだれかが戻ってくると。来年の今ごろになれば、たぶん次の『豚の英雄』が、それに充分よく似た男が戻ってくると……名前が、書面が、少々違っていったって、町の人たちはそんなものは信じていない。

彼女は印刷工の娘であって、印刷というメディアをよく知っている。父親に教わっている。組み版ステッキもかなり上手に扱える。行組みの方法も、活字棒の外し方も知っている。

「あなたは五月虫だから」とささやいて別れのキスをし、その場に立って彼を見つめる。エプロン姿で、アーミーブーツを履いて、微かに鼻をすすりながら。「グーテ・ナッハト……」

おやすみ、気だてのやさしい娘さん。置き土産はないけれど、歩みさる豚男のスナップショットを収めてくれ。まだらの服でトポトポと、空の星と薪の山に紛れていくその一葉を、オヤジさんの子供時代のスチール写真の隣りに置いてくれ。飛行を体現する身でありながら、心が沈んでとても飛べない。それでいながら留まるための知恵も失くした。……だからおやすみ、夜間の外出は禁止されてる。家に戻れ、部屋に入って……そしておやすみ……

開けた野道を歩いてゆく。疲れて歩けなくなったら藁やビロードに寒さから守られて眠

13 ロケットの頭部の形状。この町の門は、古い家の切妻と同様の階段状で、ロケットの形をしているようだ。

る。ある朝目覚めたら、ブナの木立と小川にはさまれた空洞の中だった。冷え込んだ夜明けの空。と、温かい舌が乱暴に顔をなめるのを感じる。目の前に豚の鼻があった。丸々と太った、ピンクの豚のお嬢が、ブーと一鳴きして、ニッコリしながら長い睫毛をしばたいたっている。

「おいちよっと、これはどうだ？」スロースロップは豚の面をかぶる。雌豚はその顔を少々見つめて、不意に近づくと鼻と鼻をこすり合わせた。二頭の体から露がしたたる。彼女の後についてスロースロップは小川へ行き、ふたたび面を外し、自分の顔に水を掛ける。そのかたわらで、彼女は音を立てて水をすすする。堂に入ったもんだ。よく澄んだ水が、勢いよく、冷たくほとぼしる。水底で丸石がこすれ合う。深く反響するサウンド。これは音楽だ。昼も夜も、この場所を基地にして生きていけたら、谷川と丸石の音楽に耳を傾けていられたら……

スロースロップの腹が鳴った。「さあ、朝の食事でありつくぞ」農家の近くの小さな池のそばで、地面に埋まった杭を彼女が見つけた。まわりを鼻でつついている。スロースロップが上に被さった土を蹴とばすと、煉瓦を積み上げたケルンが見えた。中から去年貯蔵したジャガイモが見える。「きみにはいいだろうが」彼女がそれを貪るわきで、「おれの食いもんにはならんのだ」。水面が静かに空を映している。人の気配は一切ない。スロースロップは農家へ偵察に行く。庭一面に、背の高い白のデイジーが咲いている。草ぶき屋根の下、二階の窓は暗く、煙突から煙はない。だが裏手のニワトリ小屋は空ではなかった。一羽の太った白いメンドリをなだめながら巣からどかせ、そっと卵に手を伸ばす——ブクワーツメンドリは動転して飛び上がり、スロースロップの腕を嘴で叩き落とさんばかりの

剣幕だ。仲間が外から援護追撃で、すごい騒ぎになった。このとき木製の羽根板の隙間に両翼を挟み入れたメンドリが、それを引き抜くことができなくなり、かといって、翼の下はデップリしすぎて前に抜けることも出来ず、羽をばたつかせたままケコーケコー叫んでいる間にスロースロップは卵を三ついただいて、そのお礼に、挟まったメンドリの羽を抜いてさしあげようとするのだが、しかしこれが卵を抱えた手ではなかなか思うに任せない。オンドリは入口で注目！^{アハトウツ}注目！^{アハトウツ}と叫びまくっている。彼のハーレム内の規律は打ち砕かれて、メンドリたちがタンブルウィードよろしく樽のような尻を転がし、小屋の中をグルグル回る。スロースロップの皮膚も数ヶ所切れて、血が流れている。

そのとき犬の吠え声があった。メンドリさんとはおさらばだ。出てみると、国防予備軍の制服を着た女が三〇メートルの距離に立ち、ショットガンを水平にしてこちらに向けている。犬はうなり、歯を剥いて、こちらの喉をにらみつけながら突進してくる。慌てふためいたスロースロップは鶏小屋の裏に飛び込んだ瞬間に、朝イチパンの、眼の醒めるような銃弾がかすめていった。そこへ走りこんできた豚のお嬢が、犬を追い払う。豚と、豚の面に入れた鶏卵を抱えたスロースロップがスタコラ逃げる。銃を手にした女が喚く。メンドリが騒ぐ。彼の脇を豚が並走する。最後のショットガンの銃声は、射程距離の外から聞こえた。

一マイルほど先まで行って休む。スロースロップの朝飯タイムだ。「やったね、きみ」親指の先で、愛情のこもる一押し。彼女は屈み込んでハアハア息を整えながら、彼の方をじっと見ている。生卵の朝食を口にし、タバコ半本の煙を吸って、また出発だ。

やがて海の方をめざす。豚は行き先を知っているのか。遠く、別の道の上に大きな土埃

の雲がかかっている。それが南へ這っていく下に、ロシアの騎兵輸送隊がいるんだろうか。毛の生えそろわないコウノトリが干し草と野原の上を危なっかしげに飛んでいる。孤立した木のでっぺんは絵の具を袖でこすってしまったかのような滲んだ緑。藁をちりばめた赤土が何マイルも続いた先の地平線で、褐色の風車が回る。

ブーブー豚さん、最高のなかま

野豚に雌豚、パロウにギルト^{*14}

一緒にいれば意気ブーブー

山は崩れ、傾きもする

拒絶、裏切り、火あぶりもある

トリー、ホイッグ、頼りにならんし

ミケにもポチにも嫌われる、でも――

豚さんだったら大丈夫ブーブー

豚さんだったら間違いなし！

あたりが暗くなる前に、ブタと豚子は森へ入った。窪地に霧が立ちこめている。どこかの暗がり、飼主を失った牝牛が、ふくれた乳の痛みを訴えている。あたりが寝床に選んだ松林には、切れ切れの金属箔がたっぷりとまぶしてある。かつて爆撃しにやってきた英軍機が、敵のレーダーを効かなくするために、大量の金属箔を空になびかせた名残りだ。¹⁵ まるでアリス・マース・グリーン¹⁶の森のような光景。メタル・フイルが風に散打ち、星の光を

14 パロウは去勢豚、ギルトは処女豚。

15 一九四三年七月、ソ連空軍はドイツ軍機に對して、金属箔を大量に撒き散らす作戦を行った。

捕らえる。ふたりの頭上に一晚中、氷のように冷たいクラウンファイアが、音もなくワイルドに燃えさかる。スロースロップが目覚ますたび、隣りにいつもメス豚が、松葉のベッドでぬくぬくしながら彼の姿を見守っている。別に危険を感じて起きているんじゃないだろう。落ち着かないのでもなく、隣のこいつを見まもっていようと、きつと心に決めたのだ。メタルフォイルの明りに浮かぶ彼女の姿は、ほっそりくびれて、剛毛も羽毛のように柔らかい。肉体の欲望がスロースロップを捕らえる。なあに、ちょっとだけー、外れる、ただだよ、エヘヘ、大丈夫、オレの手に余ることじゃないから。……飾りたてたツリーの下でふたりは眠る。豚子は、放浪する東方の博士なのか。着ぐるみにくるまれたスロースロップは、夜が明けて幼な子のものとなるのを待つ、ケバいピンクの貢ぎ物なのか。^{*16}

翌日の昼どき、ふたりはバルト海沿岸に孤立した、ゆっくりと滅びつつある市^{まち}に入った。滅びの原因は、子供が消えてしまったこと。正面ゲートの標識には、切れた電球と空のソケットでZWOLFKINDER（十二人の子供たち）とある。何マイルも先から、スカイラインを支配していた大きなフェリス観覧車も、少しばかり腰が曲がったか、陰気な老女の家庭教師^{ガヴァネス}のよう。太陽に照らされたスポークの錆越しに蒼白の空が見え、鉄の格子が落とす影が砂浜を横切ってプラム色の海へと延びる。ドアのないホールと家々を野生の猫のようにならながら風が吹き抜ける。

「フリーダ」壁のうしろの青い影の中から呼ぶ声がした。鼻を鳴らし微笑みながら、豚は四つ足に力を込める——見て、わたしが連れてきた人。痩せた、そばかすの、ブロンド髪がすでにまばらな男が出てきて、陽光の中に姿をさらす。男は、神経質そうな視線を一瞬^{*17}スロースロップに向け、手を伸ばしてフリーダの耳元をこする。「ベクターといひます。」

るリーダー探知機乱用のアルミ箔が初めて使われ、壊滅的な被害をもたらした。

16 キリスト生誕に際し、東方からやってきて乳香、没薬、黄金を献じた三博士の故事（「マタイ伝」第二章）による。

17 思い出の遊園地にベクターが戻ってきたようすは10ページに描かれていた。

どうも、この子を連れてきていただいて」

「いえいえ、こっちがこの子に連れてこられたんで」

「いえ」

ペクターは役場の地下に住んでいる。ストーヴに流木をくべ、コーヒーを温める。

「チェスはやりますかね」

フリーダがやかましく観戦する。スロースロップは戦略よりも縁起をかついでプレイをする傾向があり、二つのナイト——シュプリンガーとシュプリンガー——を守ることはかりに気が行って、他は何でも気前よく与えてしまう。一手か二手先を読むのがせいぜいで、ぐったり後ろに寄りかかっていたかと思うと、馬鹿としか言いようのない大げさな素ぶり
で攻めてくる。それを見てペクターは眉をひそめるが、心配はしていない。クイーンをと
られた辺りでスロースロップが声を発した。「あれっ、待ってよ、おたくの名前、ペク
ーだって？」

相手の男はさつと銃を取り出した。お見事な早業。特大ルガーの銃口がスロースロップ
の頭に向けられる。一瞬、ビッグ・スーツの男は、ペクターは、スロースロップが娘のト
ン子を孕ませたと知って父親にショットガン・マリッジ——ルガーだけど——を迫ってい
るんじゃないかと錯覚した。^{*18}そして実際、Unto thee I pledge my trough (我が飼葉桶
を汝に誓約す^{*19}) という誓いの言葉が思い浮かんだところで我に返った。ペクターが言っ
ているのは、「帰ってくれ。どのみち、あと二手であんたは詰んでいた」

「おれの話も聞いてくれや」咳き込むようにしゃべり出す。チューリッヒで仕入れた、ペ
クターの名前も出てきた書類一式^{*20}、ハシニヴァアルツゲレート^{*20}を探しに懸命なロシアとアメ

18 アメリカで「でき
ちゃった婚」を shotgun
marriage というのは、
妊娠させた相手を娘の父
親がショットガンで脅し
て正式な結婚を強要する
というイメージから。

19 Unto thee I pledge
my trough 「我が誠を汝
に誓約す」のもじり。

20 ヤンプの墓のある
チューリッヒ市内の山で
マリオ・シニヴァイター

リカとヘレロのこと。しゃべりながらスロースロップは並行して考えている。へゾーンで人は土着に戻ると言ったエンツィアン大佐は正しかったのではないかと——どうだスロースロップ、だんだんわかってきたかね、〈運命〉についての、ややエロティックな、固定観念が沸いてきたのではないかね、え？——フリーダに連れてこられた道を頭の中ですり直し、途中の分岐点で進路を間違えはしなかったかと記憶をたどる……

「ヘシュヴァルツゲレート」については」ペクターは首を横に振る。「それが何であるかも知りませんね。関心を抱いたことがなかったし。あんたは本当にそれだけを探しているのか？」

どうだったろう。スロースロップは思案する。窓から差しこむ日射しが二つのコーヒークップに反射して、天井に青い光の楕円のゆらめきをつくる。「どうなんだろう。ただ、おれ自身がヘイミポレックスG」と、ある意味くつついてしまってるみたいなんだ」

「それは芳香族のポリイミドだ」^{*21}ペクターは銃をシャツの中に収めた。

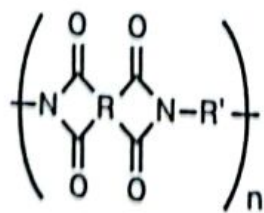
「その話を聞きたい」とスロースロップ。

だがその前に、イルゼの、夏になると戻ってきたイルゼについての話が続いた。聞かされるスロースロップは首筋をつかまれふたたびビアンカの屍体に押しつけられたような感覚に襲われる。……イルゼもグレッタ・エルトマンの銀色の、受動的な映像から生み出された子である。スクリーンでそれを見てペクターの脳裏に踊ったエロティックな想念が、運命的な射精に至ってイルゼが宿った、そのシーンの撮影現場で孕まれたのがビアンカ。この二人が同一の子でないと、どうして言えよう？^{*22}

彼女は今もおまえといふのだ。この頃は見えにくくなっているだけさ。黄昏時の部屋に

の使いから届けられた書類（上巻514ページ）を、ノルトハウゼン行きの汽車の中で読んでいたとき、ペクターの名がでてきた（上巻539ページ）。

21 上巻478ページの説明にあつたように、ヘイミポレックスG」という物質は、芳香族化合物が高分子化したものだが、「ポリイミド」であるということは、その連結が図のようにできているということ。



22 上巻と下巻をつなぐエピソードを読み返されたい。

置いた灰色のレモネードが見えにくいのと一緒だよ……だが彼女はいるんだ。冷たく酸っぱくスイートに、飲み込まれるのを待っている。おまえの底辺にある細胞に触れ、深い深い悲しみを掻き立てるのを待っている。



ようやくラスロ・ヤンフのことを少々しゃべったかと思うと、ペクラーはすぐに映画の話に脱線する。スロースロップが聞いたことも、ましてや観たこともない映画の話だ……この男は手のつけられない映画マニアで、こんな話を始める——「Dデイに、ラジオでアイゼンハワー将軍がノルマンディ侵攻の発表やったときの声^{*1}だけどね、あれを聞いて僕はクラーク・ゲートルだと思った。ふたりの声、まったく同一だ。気がついてました？」

人生の最後の三分の一を残してラスロ・ヤンフの顔にある特定の敵意がにじむようになったことを、木造の講義室の席から見ていた学生たちは感じていた。瞼がだんだん顆粒^{ぶつぶつ}状になり、しわや斑点によって顔面に老齡のイメージが浮かんでくると相まって、教授は共有結合というものへの敵意を、妙に個人的な憎しみとして募らせたようだった。プラスチック合成の生来をそんなものには委ねられない、結合の形態を「改良」せねばならない。学生のなかにはその表情に「超越」のメッセージを読んだものもある。炭素原子が電子を分かちあうとか、そんな場当たり的で軟弱なつくりが生命の、彼自身の命の、中核をなしっているという事実は、ヤンフにとって宇宙大の屈辱に思えた。共有^{シェア}だ？ イオン結合の方

1 アイゼンハワーの演説は、“D-Day Speech”で検索すると聴くことができる。

がどれほど強く、どれほど永続的であることか。イオン結合において、電子は共有されはしない。捕えられ、強奪される！ 把握される！ プラスとマイナスに極化したこれらの電子に、曖昧さは微塵もない……その明快さをヤンフはこよなく愛すようになった。鉱物的なその安定を、結晶の頑なさを！

「〈理性〉を敬愛するのはいいが」ペクラーがむかし受けたミュンヘン工科大学の講義でヤンフはこう言った、「いくら中庸を口にし、妥協に走ったとしても、ライオンを消し去ることはできない。ライオンは君たち一人ひとりの内に住んでいる。そいつを——過剰な数学と、細部のデザインと、企業のプロセスの中で——手なづけようとするのか。さもなくば野生のまま、永遠の野獣として残すのか。

ライオンに微妙なことは通じない。中途半端は受けつけない。分かちあって解決するなど、ありえんのだ！ ライオンは自分のものにする。つかみ獲る！ ボルシェヴィキでもなければユダヤ人でもない。ライオンは絶対に相対的なものは語らんぞ。絶対を望むのだ。生か死か。勝利か敗北か。休戦も協定もない。跳梁と咆吼と血の喜びがあるだけだ」

いかにも国家社会主義の化学に聞こえるだろうが、それが時代の空気だったんだ。「ツアイトガイスト」というやつだ。ヤンフ教授博士もそれに染まり、彼の学生だったペクラーも感染した。ただ、インフレと不況のなかを引きまわされているうちにペクラーの「ライオン」の観念は、具体的な人間の顔を——もちろん銀幕上の顔だが——持つようになった。俳優ルドルフ・クライン・ロッグ²。ペクラーはクライン・ロッグを偶像視し、彼のようでありたいと願ったんだ。

まだキング・コングがおっぱいを吸ってヨチヨチ歩きをしていた頃、クライン・ロッグ

2 本文で言及されている役柄は年代順に、『ドクトル・マブゼ』（一九二二）のマブゼ博士、『ニーベルンゲン』（一九二四）のエッツェル（アッティラ）王、『メトロポリス』（一九二七）の発明家ロートヴァング。すべてフリッツ・ラング監督。

はすでに妙齡な女優たちを——まあ妙齡といえるのはブリギッテ・ヘルムひとりだけだったかもしれないが——高い屋根の上へ担ぎ上げていた。^{*}『メトロポリス』は偉大な映画だ。あれが描きだした〈企業都市〉^{コングレス・シティ}としての国家を、ベクラーだけでなく多くの者が夢見ていた。権力の源がテクノロジーにあり、エンジニアと執政者が一体化して働き、大衆は地下深くで人目に触れず労働する。最終的に権力はひとりの最高指導者の手にある——父親的で、慈愛に満ち、正義を行く、極上のスーツに身を包んだ紳士。その名は——ベクラーは思い出せない。クライン・ロッグ演ずる狂信的な発明家にあまりに心酔してしまったせいで。ヤンフの弟子の多くが同様に、この発明家のようになりたいとあこがれた。〈メトロポリス〉の統治のためにはこの人物は必須なのだが、しかし最後に、飼いならすことのできないライオンとしての面をあらわにする。すべてのパーツを——女も国家も民衆も自分自身も——破壊してしまえるんだ、この男には。それらすべてに対して自分のリアリテ^イを主張しながら、最後のひと吠えと共に、屋根の上から道へ墜落するのだよ……

そこに潜んでいた不思議な力が何であれ、時代の、騒乱のストリートががなり立てるハードな音域^{デレック・ウィラ}において、真の幻視者は聴きとっていたのだ。ケーテ・コルヴィッツ^{*}にはそれが見えていた。だからこそ、背中の瘤のように取りついた瘦せた死神が抱きしめるのを悦んで受け入れる女たちのスケッチを描いたのだろう。ベクラーにもときたま、同じ力が自分に触れ、自分を〈夜^{マール・ノクト}の海^{ヘルム}〉への深い旅路へ誘うのを感じた。この闇空間を支配し彼自身を支配する〈マスター〉に屈服する儀式において、皮膚と神経の上を剃刀の刃が、頭皮から足底までスーッと走り抜けていく——そんな悦楽にも似たものを感じていた。〈マスター〉は、工学技術の化身であるが、彼の力は白昼社会でふるわれるものではない。

3 『メトロポリス』の終盤で民衆が蜂起し、ロートヴァングは、アンドロイドのマリア（ブリギッテ・ヘルム）をかついで高い屋根の急斜面を上る。そのシーンと、『キング・コング』（一九三三年公開）の類人猿がフエイ・レイをかついでエンパイア・ステート・ビルを登るシーンとが比べられている。帝国の力の象徴である「ライオン」と、植民地の闇の力を象徴する「コング」の対比か。

4 ヨハン・フレードーセン。アルフレッド・アベルが演じた。

5 都市の貧民や貧民など、身近に暮らす虐げられた人びとの版画や彫刻作品を数多く残している。

そうではなく、いつかどこかで起こるであろう降伏、個人的な暗黒の〈空虚^{ヴォイド}〉への、甘美な絶叫^{スクリーミング}的崩壊の機会をうかがっている。……まさにアッティラへの屈服だ。草原の地から西進して、ブルグント王国をひとつにまとめていた魔術と近親婚によるかけがえのない構造を打ちくだいたフン賊の王。その日ペクラーはずっと石炭あさりをやっていたので、夜はもう疲れきって、居眠りを繰り返した。目が開いてからも、三十秒ほどは、スクリーンに写っているものが、顔なのか、森なのか、竜の鱗か、合戦のシーンなのかも理解できなかった。その混乱した映像がクライン・ロッゲの顔に収まったことが、けっこうあった。古代東洋の殺戮魔アッティラを演じている。剃り落とした頭のとっぺんに鬚^{まげ}がある。首から数珠を下げ、仰々しい身ぶりで、荒涼たる大きな眼を見開いて喚きちらす。……その破壊美の炸裂をかき抱いてまた眠りに落ちては、夢の中でまたそれを練りなおす——声なき蛮族に代わって野蛮な喉頭音を発し、ブルグントの連中を鎮静すると、相手のその従順さがミュンヘンでの大学時代にピアホールに集まった連中のねずみ色と重なって……ハッ^{*}と眼をさますと——この繰り返しが数時間——殺戮、火炎、破壊のシーンが先へ進んでいる……

電車と徒歩で帰宅途中、妻がペクラーの居眠りをなじった。因果関係が命のはずの技術者がそれでいいの、とからかった。いやいや、すべてのドラマチックな結びつきを自分が見ていたよ、夢がそれを見せてくれた——とは言えなかった。レニに対して、言えることがひとつもなかった。

クライン・ロッゲはとりわけドクトル・マブゼ役が印象的であって、どうしてもフリー・シュテイナーのことを思わずにはいられない——歴史を操作してその表層にハインフ

6 『ニーベルンゲン』
はブルグント王国を舞台に、同族内の復讐の悲劇を描く。十三世紀頃成立し、ミンネゼンガーたちによってうたい継がれた。十九世紀より、ヴァーグナーの楽劇巨編「ニーベルンゲンの指輪」によって

レーションの様相を作りだした、疲れしらずのオペレーターだ。ギャンブラーにして金融の天才、最高位のギャングスター……たしかに小うるさいブルジョワ風の口をして、その下の顎はたるみ、身のこなしも品がなくて、第一印象は滑稽なテクノクラートだ……だがこの男が激怒に駆られて、理性の仮面を壊すとなると、その氷河の眼の奥になまなましいサヴァンナを覗かせる。そのとき真のマブゼが、周囲にうごめく灰色の諸力をうち破つて、生き生きと誇らしく立ちあらわれて、彼を破滅へ追いつめていくんだ。彼自身わかつていたんだろう、行き先に待っているのが、彼のアジトを囲んで道いっぱいに拡がった軍兵士の撃ちこむ無音の銃砲と手榴弾地獄だということを。秘密のトンネルの一番奥に、自身の狂気が待ちかまえているということも。……彼をそこへ追いつめたのは誰だ？ 他ならぬマチネーのアイドル、国家検察官フォン・ヴェンクを演じるベルンハルト・ゲッケだよ。『死滅の谷』[＊]でおとなしい官僚タイプの〈死神〉を演じた彼が、ここでもあまりに上品な役柄を演じている。人生に倦きあきした伯爵夫人の愛を手に入れるにはヤワでありすぎる——そこへクライン・ロッゲがまさに爪を剥いて跳びかかってくるわけだ。彼女の軟弱な亭主を自殺に追いこみ、アンニユイな女をつかんで、文字通りベッドへ放りなげるのだよ。力づくで奪うのだ！ その間もゲッケは検察局で紳士然としてるんだ、書類と慰安主義者どもに囲まれて——そこへマブゼが乗りこんでいく。ゲッケを執務室で催眠術にかけて、クスリを飲ませ、爆弾を仕掛けるんだ——しかし、これがなかなかうまくいかない。ヴァイマル的無気力と、書類ファイルと官僚主義とルーティン・ワークがいつもゲッケに味方するんだ。マブゼは先祖返りした野人なのであって、日曜午後のアグファ社のセルロイド・フィルム[＊]などには受けとめきれないカリズマ的閃光を放つ。波立つ現像液に焼きつ

知られるが、フリッツ・ラング監督の二部作『ニールンゲン』(第一部「ジークフリート」、第二部「クリムヒルデの復讐」)もサイレント時代を代表する大作映画。フランクがこれを観た晩のことは上巻505ページでも触れられている。

7 シュティネスについては、上巻542ページの本文参照。

8 228ページ註22参照。

9 ドイツ最大のフィルムメーカー、アグファも、一九二五年からIGファルベンの一翼をなしていた。因みに、上巻141ページには、ヤンフの手になる特殊現像剤「クリプトザム」の開発が、アグファ社において行われたとある。

けようとすれば像は燃えあがって殲滅的な白色になるだろう（双魚宮の深みをペクラーは夢見るときも目覚めてからも航行していた、眼下にインフレーションの陰鬱な日々を、人々の行列を、株式仲買人を、皿の上の茹でたイモを見ながら、鰓とはらわただけで——自分自身信じているのかどうかわからない神話に向けて自己駆動する——白い光の方へ、アトランティスの廃墟へ、より真なる王国の兆しを求めて）……

メトロポリスの発明家ロートヴァングも、アッティラ大王も、大賭博師のマブゼも、ラスロ・ヤンフ教授博士も、みんな向かう方向は同じだったんだ。歓喜と拒絶を見せつけながら死んでいくというひとつの死のかたち。それはブルジョワのゲッケ的な死とは大違い、自己欺瞞の、分別くさい死の受諾とは、応接間に親戚がいて、子供たちにも読みとれる訳知り顔があつて……

「君たちの選ぶ道はふたつにひとつ」一年の最後の講義でヤンフは声を張りあげた。窓の外には香しいそよ風と、淡色の服を着た少女たち、ビールの大海と、張りつめ昂揚した「センペル・シット・イン・フロールス／センペル・シット・イン・フロールス」^{*10}の男声合唱……「炭素と水素におとなしく埋もれ、毎朝弁当を持って、陽の当たらない工場が好きでたまらない飼慣らされた連中と一緒にぞろぞろ入っていくのか。それとも現状を突き抜けてへビヨンドへ羽ばたくのか。シリコンもホウ素もリンも、炭素と置換可能だろう。そうすれば、水素ではなく窒素との結合が可能になるだろう——」ここで、クックッという忍び笑いが入る。この悪戯好きの老教授には特に珍しいことではないがね。ヤンフ博士にも、いつも花の中にあってほしい。ヴァイマル政府を動かしてIGのハ素素シ

10 71ページに出てきた学生歌「ガウデアムス・イジトゥル Gaudemus iestur」の一節。歌詞のカナ表記はピンチヨンのテクストに依った。正規のラテン語では Gaudemus sint in flore で、意味は「いつも花の中にあれ（榮えあれ）」。

無機の世界へ。そこには弱さも死もない。あるのは「強度」と「無時間」だ」そしてヤンフ教授博士の有名なフィナーレだ。黒板の上に殴り書きされたC—Hを消し去り、そこに巨大な文字でSi—Nと記したのだよ。^{*12}

来るべき化学の波——だが妙なことにペクラー自身は前進を続けなかった、あれほどドラマティックな予言をしておきながら、無機の環も連鎖も合成していない。新しい世代が学術の波を膨らませていく、その背後の窪みにただ留まっていたというのだろうか。それともペクラーたちの知らないことを何か知っていたのだろうか。あの講義室の熱い煽動は一種のエキセントリックな悪戯であって、自身はC—Hの世界に留まり、弁当を持ってアメリカへ行ったということなのだろうか。ペクラーは工科大学卒業後、ヤンフとの接触を失ってしまった——昔の学生はみんな。ヤンフはすでにライル・ブランドの不吉な影を引きずっていた。共有結合の脆弱さ、その可死性^{モータリディ}を乗りこえる試みにその後も関わっていたかどうかはわからない。関わっていたにしても、そのやり方は、きわめて目につきにくいものであったに違いない。

11 窒素化合物の合成はIGファルベンが一九二〇年代、まず化学肥料において、続いて爆薬においてなし遂げ、その生産と配給の両面で、水平・垂直の企業連合が成立、ヨーロッパでの価格コントロールのシステムが作られていた。

12 ケイ素Siは炭素Cと同じく「四本の腕」を持つが、生命体に取り入れられることは稀。ポリマー化によってSiの人工高分子化合物を製造する方法は、一九四〇年、GE社のユージーン・ロコ¹が開発。それによって得られるシリコン樹脂は、耐熱絶縁体としてB-29の製造を含む軍事面で活用された。



もしフリーメイスンに入っていなかったなら、ライル・ブランドはきっと今もかつてのよう
に腹黒い企みに関わっていたんだろう。《世界》には悪事を事業としてやっている仕組
みがあるが、その一方で、たまにその帳尻を合わせるための仕組みも働いているようだ。
こちらは厳密には「事業」としてやっているわけではないが、少なくとも物事の踊り^{ダンス}のな
かで、そういうことが起こる。事態の自然な動きのなかで、メイスンがブランドの関わる
ところになった、ということだ。

想像してみろよ。この男、あまりの大金を手にしてどうしていいかわからなかった。
「だったら俺に分けてくれ！」なんて喚^{わめ}かなくてくれ。ちゃんとあんたにも分けてるんだ
から。どうやってって、それを突き止めるのは大変だな。系統立った捜査をしないと無理
だろう。しかし間違いない、きみもおこぼれにあずかっている。《ブランド研究^{インスティテュート}所》や
《ブランド財団》を通じて、あの男は、アメリカ人の日々の暮らしを、しっかり自分の手
で握りしめてきたのさ。ガロンあたり一〇〇マイル^{*1}の燃費をうたったキャブレターがあっ
ただらう。そのパテントの最上位の保有者が誰だと思う。きみももちろん聞いたことがあ

1 リットルあたり約
四十二キロというのは、
今日でも目標値にすぎな

るよな——どこかの雇われ人類学者がそいつを「自動車時代の都市伝説」だと笑い飛ばすのを聞いて、一緒に笑ったかもしれない。だが、その夢のキャブレターは存在したんだ。金で動く学者を捕まえてきて、そんなものはありえないと笑わせる信用詐欺を仕組んだのは誰か。ライル・ブランドだよ。それから三〇年代に、マリワナを殺人草に仕立てた宣伝キャンペーンがあっただろう。そこでFBIとグルになって——柄の悪い連中はベニス・イン・マウスフェラになってと言ってたっけ——動いていたのが誰かってことだ。それと、覚えているか、あの「起らない男が医者にいきました」っていう一連のジョーク。そいつもブランドが仕組んだ。基本のバリエーション、六つ全部。あらかじめ全米学術研究評議会（NRC）向けに綿密な調査をやったのさ。それによると男性労働人口の三六パーセントが自分のベニスに充分な関心を払っていない。手前の生殖器に対してそんな執着のないことでは、いざ本番つてときの効率に差し支えるだろうってさ。

実際、心理学研究ならブランドにお任せって感じだった。大不況の初期の時代のアメリカの潜在意識を探る彼の調査は、今では古典だ。一九三二年の大統領選でローズヴェルトが「選出」された根拠を、より疑念のない形で示したと評価されている。実際、仲間うちの多くは、FDRに対しては嫌悪の立場を示した方が得策だと考えたんだが、ブランドは支持の姿勢を演出するのに並々ならぬ意気込みを示した。彼にとってFDRこそ、うってつけの男だったのだ。ハーバード出身で、新／旧、生産／小売、あらゆる種類の財界から恩義を受けている。ハリマンからもワインバーグからもだ。こんなアメリカ的合成はいまだかつて生じたことがない。この男からは一連の素晴らしい可能性群への道がひらけて見えた。すべて「制御」という概念に関わる可能性がある。この語はまさに私的な暗号

い、当時としてはほとんどない数値。

2 ヘンリー・I・ハリマン（一八七二—一九五〇）はニューイングランドで電力会社を興し、大不況期の一九三三年から三五年まで、全米商工会議所の長を務めた。若い世代のシドニー・ジェイムス・ワインバーグ（一八九一—一九六九）はユダヤ系で、中学中退から出世して金融業界の顔役になった「ニューマナー」の代表者。一九三三年から死ぬまでビジネス諮問評議会のメンバー。

のようであって、ブランドたちの野望の行末を示しているように思われた³。一年後、ブランドはゼネラル・エレクトロニクス（GE）のジェラルド・スウォープ⁴をトップとするビジネス諮問評議会の委員になった。⁵「制御」の方法において委員会の考えはドイツGEのヴァルター・ラーテナウと近いものがあって、スウォープ一派は、どんな行動を取る場合も、すべて秘密裡に行い、ファイルを他人に見せることは決してなかった。ブランドから何かを聞きだそうとしても無理だということだ。

第一次大戦後、ブランドはAPC⁶に出入りして、合衆国内在住のドイツ人から押収した権益の処理を仕事にする連中と親しくなった。その中に中西部関連のマナーが多額に含まれていたことで、ブランドは「ヘンポールの大難」と呼ばれるものに巻き込まれる。そして、そのままフリーメイソンに加わる。ヘケミカル・ファウンデーション⁷という名の財団があつて——当時の覆面団体は、そんなぶっきらぼうな名前を使っていたんだ——それを通して、APCがブランドにラスロ・ヤンフの初期の特許のいくつかを売った。ペルリンに本社を持つ「グリテリウス塗料&染料⁸」のUS代理店も一緒にだ。数年後の一九二五年、企業連合が進展していく中でIG社は「アメリカン・グリテリウス」（こちらは特許保有のためのブランドの会社）の株式の五〇パーセントをブランドから買い戻し、ブランドは現金と有価証券の他、ペルリンにあるグリテリウス社の子会社のひとつについてその支配的利権を手にする。ここを経営していたのがフアラウムバウムというユダヤ人——そうだよ、フアラウム・ペクラーを雇っていたペンキ工場のユダヤ人経営者だ⁹。あの工場の火事で、ふたたびペクラーは路頭に放り出されたわけだ（実はこの出火事件の陰にブランドの手が伸びていたことを見ていた者もいるんだが、訴追されたのはフアラウムバウ

3 広範な「制御」の概念の中には、ニューヨークにおける市場の制御も、ブランドが関わったらしい人心（世論）の制御も含み、後にはミサイルの誘導術にまで及ぶのだろう。上巻320ページのラーテナウの二つの質問も響いている。

4 一九二二年から三年まで、GEの社長。

5 「在留外国人財産保管局 Alien Property Custodian」は戦争相手国や違法居留の外国人の財産を押収し、再分配する権限を有した。

6 上巻306ページ参照。

ムで、このユダヤ人のおっさんは、裁判で罪を着せられ、財産を差し押さえられて破産し、やがて多くの同胞と共に東方の収容所へ送られたんだ。それともうひとつ、ウーファの映画配給ビジネスとブランドとの連動のようすも見ておく必要がある。あの晩、ペクラーを宣伝のピラ貼りの仕事でライニッケンドルフへ送りこんだのは誰か、ということだ。そこでクルト・モンダウゲン、および「宇宙飛行倶楽部」と、運命的な出会いを果たしたのだからね。それだけじゃない、アハトファーデン、ネリッシュ、その他の「Sゲレート」に関わった技術者それぞれとも、別個のつながりをブランドは持っていたんだ。まだわれわれの頭に本格的なパラノイアが生じる前の話だよ。残念ながら、一九四五年の技術水準ではデータ検索によってこうしたコネクションを割り出すのはとても無理だったし、たとえそれができたとしても、ブランド（またはその後継者・指名者）がプログラマーをそっくり買収して、データの発表前に、無害なものに改竄してしまっただろう。あくまでも真実を追究するスロースロップのような者は、夢、霊的な閃き、予兆、暗号、ドラッグ認識等々に頼るしかないわけだ。それらが恐怖と矛盾と不条理の上でゆらゆら踊るのを見つめることしか彼にはできない。

ブフラウムバウムの火事の後、ブランドとドイツのコネクションとをつなぐ力線は引き直しが必要となり、それに数年の時を要した。その間の一時期、ブランドは大不況期のセントルイスで、アルフォンソ・トレイシーという男（プリンスストンを一九〇六年に卒業した、セントルイス・カントリークラブ会員）と会って、石油化学業界に大々的に乗りだすための相談事をしていた。トレイシー夫人は腕一杯の花を抱えておろおろと家を出たり入ったり、毎年恒例の「ヴェールの預言者の舞踏会」の準備に追われている。亭主はといえ

7 セントルイスで一八七八年以来行われる壮麗な舞踏会。労働者の大規模なストライキの後、資本家側の権力誇示を目的に計画されたという面がある。「ヴェールの預言者」に選ばれたその年の名士が、社交界にデビューする少女から「愛と美のクイーン」を指名する。「ヴェールの預言者」といえば、フリーメイソンの間ではイエス・キリストを意味する。

ば、シカゴからの客人たちのことで頭が一杯だった。派手なビンストライブの背広にツートン・シューズを履き、スナップブリムのフェドラー帽を被って、トムソン式機関銃の銃声のようなスタックカート調子で喋る連中だ。

「優秀なエレクトロニクス技師がどうしても必要なんです……」トレイシーはうめいた。

「マフィア連中が相手だから交渉もなんもありません。届いた機械のすべてが不良品、なのに引き取ってもらえない。これだけのヘマをやらかしたとなると、私はまず消されます。メイベルは輪姦され、それから闇夜の晩に連中はプリンストンに戻って、せがれのタマを切り取るでしょう！ ライルさん、こいつは陰謀だ！」

趣味のよい応接間に、血の復讐や、宝石付きの手袋、隠微な毒物のイメージが滲みこんでいく。ピアノの上にはハーバート・フーヴァーの写真、ニーマン・マーカスの水盤にピンの花、パウハウス様式の家具は、さながら雪花石膏で造った模型都市のようだ。ダヴエンポートのソファの下から今にもH O^{*10}が出てきて、タンク車や冷凍車がモーター音をうならせながら灰色のカーペットの低地の上を走りだしそうな気配もあるのに。……アルフオン・ソ・トレイシーの面長の顔の、鼻の両脇から口髭の回りは皺だらけだ。心配の種ばかりで、過去三十年、心の底から笑ったことのないせいだろう（「もうね、ローレルとハーディのドタバタにも笑わなくなりました」）。安楽椅子で不安を抱え、脅えてばかりいる人生。これにはさしものライル・ブランドも、気持ちを動かされずにはいなかった。

「うってつけの男がいるんだがね」と言って、同情の手のひらをトレイシーの腕に置く。エンジニアを抱えておくのはいいことだ。その男は折り紙付きだった。まだ体制を整えつつあるF B I^{*11}の注文で、最高級品の電子監視装置を作っている。ヘブランド研究所へは数

8 拷問道具。

9 テキサス州ダラスを本拠地にする高級調度品のチェーン。

10 ソファの代名詞ともなった、マサチューセツの往年の家具メーカー。

11 一九二〇年代発売以来人気のあった八七分の鉄道模型。

12 さまざまな前身を

年前にFBIとの間で協定を結んでおり、一部その下請けを、ドイツのジューメンス社に回してあった。「明日、その男をシルバー・ストリート号で来させるから。ノー・プロブレム、アル」

「どんな具合か、見てくださいよ」トレイシーはため息をつく。ふたりはバックカードに乗りこみ、ミズーリ州の緑なす小さな川沿いの町マウスオーガン¹³へと向かう。町といっても、鉄道の駅となめし革工場に、木造の家がバラバラとあるだけだ。そしてこの辺一帯を威圧するフリーメイソンの巨大なホール。それには窓が一つもない。まさに巨大なモノリス。

入口での煩雑なチェックに手間をとったが、ひとたび中に入るとブランドは、玉突き部屋のビロード張り賭博室のつややかに仕上げた木目調の空間を通り、クロームメッキのバーとソフトな寝室を抜けて、奥の大きな倉庫スペースへ案内される。そこはピンボール・マシンが何重にも積み上がっていた。これほど大量のピンボール・マシンの群れを見るのはブランドとしても初めてだ。ヘー・ボーイ¹⁴にヘグラントスラム、ヘワールドシリーズ¹⁵もヘラッキー・リンディン¹⁶もある。

「これがですね、どれ一つとしてまともに動かない」トレイシーが沈痛な声を発する。「見てくださいよ」。それはヘフォーリーズ・ベルジェール¹⁷で、そこら中、カンカンと踊る四色顔の美女があふれている。数字のゼロが、目と乳首とアソコの位置に符合するというなかなかキワモノは、ご婦人方の饗宴は買うにしても、いや、楽しい！「五セント玉、ありますかな」ゴスン、ブオーンボールが飛び出す。高得点のホールをわずかに外した。チーム、あれは永遠のワープみたいだぞ、ガアアアアング10000ポイントのフラッシュチャーに当たったのに、なんだよ、ボードの表示は50ポイントだと？」「はら、これなんです

経て、「連邦捜査局」がフーヴァー長官のもと、現在の名前と体制で成立するのは一九三五年のこと。

13 「ハーモニカ」を意味する架空の町。

14 ヘー・ボーイは水着の美女を、次のふたつはベイスボールをテーマにしたマシン（実際はどれも戦後の製品）、ヘラッキー・リンディンはヘグラントスラムの飛行機ものと思われるが、実在のものは不明。

15 バリーの有名な「ベイスボール」の名称をつけたマシン。1930年代に実際に製作された。

「よし」トレイシーが叫ぶ一方で、ボールは石のように、真下へ落下。弾き返そうとボタンを押したらフリッパーが逆向きに跳ねた、そしてボードに「TILT」の反則ランプが点灯する。

「ティルトって……」ブランドは頭を掻く。「ほとんど台に触ってもいないじゃないか」
「すべての台がこんな具合なんです」トレイシーの顔にはイライラの汗。「試してみてください」

だが二発目の玉が出ていく前に、また「TILT」の明滅が始まった。今度もボールにスピンをかけてさえないのに。三発目はどうしたわけか、電磁石にハマりこんでしまった（かすれた金属音が苦痛を訴える、ヘルプヘルプ、感電死しちゃうよ……）ガンゴングン、ゴングの音、ボードの数字が猛烈に上がる。400000、675000、ボッコーン、1000000点！〈フォリーズ・ベルジェール〉として前人未踏のスコアだろう。それでも停まらない。哀れな球形クリヤーチャーはソレノイドに叩きつけられるたびに、悲惨にも筋肉を痙攣させる（かれらはちゃんと感覚を持つ、小惑星カットシュビールからの生物なのだ。とても平たい楕円軌道をもつその惑星は、太古の昔、薄暗闇の辺境で一度だけ地球とすれ違ったが、カットシュビールの現在位置を知る者はなく、いつ戻ってくるか、いや実際戻ってくるかどうかともわかっていない。再訪と一度限りの飛来とを分かつ境界線上にカットシュビールは位置しているのだ。もしもそれに太陽系を永久に離れるだけのエネルギーがあれば、これらのやさしい球形生物を永遠に置き去りにしたことになる。もはやふるさとの地を転げまわる可能性は奪われ、あとはボールペアリングや、無数のビー玉遊びにおける鉄玉に身をやつして生きていくしかない——そしてキオカック、バヤラップ、

オイスター・ベイ、イングルウッドの偉大な親指たちを知ることになる——ダニー・ダレ
サンドロの、エルマー・ファーガソンの、ピーウィー・ブレナンの、フラッシュ・ウォー
マックの親指たち……みんな今どこにいるんだ？ どこにいると思うね？ 戦争に取られ
たんだよ。硫黄島で撃ち殺されたり、アルデンヌの森の雪の中で壊疽にかかったり。彼ら
の親指たちもひどい目に遭った。G Iの基礎訓練でM1の掃除をやらされ、汗でカムから
すべった小指がライフルの握りから外れた拍子に、尾筒の中の親指が奥までグイと差し込
まれた。被動歯車の奥のブリーチへ、ジャキッ！ 電撃ショオオオック！ 激痛が走って、
負け知らずの、伝説の親指がまた一本消えていった、永遠に、あの夏の日の土埃と、ビー
玉袋のチャカチャカした音と、大足のバセット犬と、熱くなった日向の運動場の鉄製滑り
台の臭いとともに記憶されるだけの世界に戻っていった。ほうら、あのカンカン嬢たち
の出番だぞ。ヘフォリーズ・ベルジェール^{マイナス}の巫女たちが獲物を仕留めようとやってきた。
口紅を塗りたくった大口が歯をきらめかせて笑ってる。オッフエンバックのギャロップが、
マシン内蔵のスピーカーから軽快なテンポで流れた。ガーターから伸びる長い脚がキッ
クする。哀しき球体、悶える永遠の無断離隊兵に蹴りが入る。マシンの底で出番を待つ仲
間たちは、心配と愛情とで打ちふるえている。彼の苦痛を感じていながら動けない。ハス
ラーの手で、バネによって打ちだしてもらわないかぎり、彼らは不能なのだ。そびえるコ
イルを尻目に、鉄球がみずからの軌道パターンを刻むには、酔っぱらいの男性機能も、グ
レイの帽子とカラの弁当箱での真空タイムも、何から何まで必要なのだ。深い穴に落ちて
休めると思いきやすぐにまた蹴りだされる、あとは重力のなせるまま。ときたま昔の仲間
が素晴らしい疾走を演じたときにつけた軌道のかすかな痕跡を見いだすことがある（十二

- 16 このうちニューヨーク郊外のオイスター・ベイはピンチョンが高校に通ったところ。シアトル郊外のバラヤップは、大学卒業後足かけ三年勤務したボーイング社の近場。ロス空港の東に位置するイングルウッドは『LAヴァイス』の舞台のひとつで、六〇年代後半のピンチョンの生活圏の一部と目される。アイオワ州キオカックとの関わりは不明だが、次ページのヴァージニア・ビーチ周辺には、海軍除隊前の一九五六年に住んでいた。
- 17 第二次大戦中の米軍の標準的ライフル銃。
- 18 2-4拍子のテンポの速い輪舞曲。オッフエンバック作「天国と地獄」を指している。

分間もだぜ、一九二七年の独立記念日のヴァージニア・ビーチで、酔っぱらい水夫だった、レイテ湾^{*19}で船もろとも消えた男……そいつが鉄球を宙に打ち上げた、初めての三次元トリップ——ってことは、きみのベスト・トリップだろ。着地したらもう前と同じきみじゃない。落下したときにつけた微細な窪みのわきを通るたび、勢いを増す……覚醒する。きみらの中には、ソレノイドの中心を覗き込んで、磁力のとぐろを見た者もいる。エネルギーの裸の姿をだ。見ただけで自分に変化が訪れた。穴底でのたうつ力線から、パワーとの親近性を得たのだ。ガラスの下の魂のバッドランドと共鳴して、パワーの次元を上げたのだ——ロンドンのテイト・ギャラリーでマイケル・ファラデー^{*20}の肖像画を見てくるといい。タンティヴィ・マッカマフィックは見てきた。女のいない侘びしい午後の時間つぶしに。そして不思議に思った——恐怖と不可視に囲まれたこの場所で、人びとの眼はどうしてこんな、うっすらと不吉な知性の輝きをたたえることができるのかと……）だがいま聞こえるのは、殺しを目撃しているお姉さんたちの、色っぽい金切り声だ。それは刃先のようににまます鋭く、音楽もキーを変え、音程がぐんぐん上がる。フリルのパンティをはいた尻はますます激しく突きだされ、はためくスカートはますます赤くデニムに、あたりを広く覆ってついには流血の渦となり焦熱のフィナーレへと向かう。追いつめられたヘカトトシユピール・キッドに脱出の道ははたしてあるのか。

いやあ、この最悪の状況で起こるんだねえ、こういうことが。神の意図でしょう、電源がショートしたのは。パチパチパチッ！ ライトが消える。ダンサーたちの破滅的な官能ダンスの前で身を固めていた二人の男の、つるんとシェーブした頬と顎から、赤い残光がゆっくりと消えていく。ソレノイドはジリジリと沈黙に向かう。解放されたクローム

19 一九四四年十月、フィリピン沖の日米海軍の「決戦」の現場。特攻隊によるカミカゼ攻撃が、ここで始まった。

20 円筒に導線を巻いたコイル（ソレノイド）を使った磁力線の研究等により電磁気学の基礎を確立、人間が電氣を利用するための道を拓いた。

玉は、内に抱えたトラウマと共に、仲間たちの慰安の中へ戻っていく。

「このマシーンの山、すべてが、こうなのかね？」

「つかまされてしまったんだ」とアルフォンソ・トレイシーのうめき声。

「来た厄災は去っていくものだ」と、ブランドが慰めの言葉を口にしたとき、ゲアハルト・フォン・ゲールの「闇の市に光あふれて」^{*21}がまた鳴りだした。時と場所と色を違えたヴァージョンだ――

21

190ページ参照。

いつでもそこに、新たな一ドル

運のよしあし関係なし

向こうが不意をついてくるなら

草露と共に目を醒ませ

そうすりゃ敵も退散さ

もう一ドルが手に入る

ピラミッドの第三の眼が

(ほれ、聞け、キッド)

おまえにウィンクしているぞ――「やりたい放題やりまくれ」とね

やる気があれば道は開ける

そりゃ毎日は無理だろうが

頭をちゃんと使うなら

夜行列車の警笛も

おまえの夢を消しやしない、ヘイ――

もう一ドル分、コインを投げな

表か裏かで、騒ぐじゃないよ

一度のバトルに負けたって

素敵な「戦争」まだまだ続く

ドルの後さえ追えばいい、ヴォーディー、オードウドゥー！

バギーパンツの外野手も、カーキの服着た兵隊も、静かになったカンカン娘、水着の美人は言うに及ばず、カウボーイらにシガー・ショップのインディアン、ぎよろ目の黒人、リング売りの男の子、ラウンジの伊達男に映画女優、トランプ詐欺師、道化師たち、街灯にもたれた斜視の酔っぱらい、空の勇士、モーターボートの船長さん、猛獣狩りする白人ハンター、黒人みたいな類人猿、巨漢の男、シェフ帽かぶった料理長、ユダヤ人の高利貸し、密造酒の土瓶をつかんだヒルベリー、コミックブックの猫・犬・ネズミ、拳闘選手と登山家とラジオスターと小人さん、見世物小屋のフリークさん、貨物列車の浮浪者さん、マラソン・ダンサー、スイングバンド、上流社会のパーティ客、競馬の馬とそのジョッキ―、タンゴのプロのパートナー、インディアナポリスのレーサー、陸に上がったセーラーと腰裏つけたハワイの娘、臍の張った五輪ランナー、\$印付きの大きく膨れた袋をもった億万長者、その全員が二番目の大合唱に加わる。ピンボールの全マシンで点滅しているポ

ードの原色の色合いは幻覚剤と境を接し、フリッパはカタカタ、ベルはチンチン、負けじと五セント硬貨がジャラジャラ溢れだし、それぞれの音と動きが複雑なアンサンブルの中で完璧なハーモニーを醸し出す。

フリーメイスンの社の外には、シカゴからやってきた組織の男たちがたむろしている。

モラに興じる者、尻のポケットから銀のフラスコを出してカナダ・ウィスキーを飲んでい
る者、38口径の銃に塗油して磨く者、行動の節々に敵意をにじませ、切り立った皺と影多
き顎はいかにもカトリックらしく計り知れない。どうなのだろう、どこかの木製ファイ
ル・キャビネットの中に、ピンボール・マシンの配線を変えるのに使った青焼きの図面が
残っているのか。これらすべては偶発的な故障と見せかけた、策謀だったのか。それとも
真正正銘のランダムな出来事だったのか。〈機能不全〉というものが、いまだへかれら
の統御の手に完全に落ちてはいないと信じていいのだろうか……個々のマシンが単純に、
悪にも触れず、ただ調子が悪くなっただけのことだと。ロードハウスで幾千夜も働き、世
界の果てのワイオミングできみの無帽の頭に叩きつける雷雨にも耐え、ハイウェイのトラ
ック休憩所のアンフェタミンにも、瞼の中を引っ掻くようなタバコの煙にもさらされ、一
年間休みなくこづき回されたうえにいきなり殺人的な手につかまれた……見ず知らずのピ
ンボール・プレイヤーが、それぞれ別個にマシンをポンコツにしていたのか。そう信じ
てもいいじゃないか。みんなの汗とキックと叫びと殴打が、マシンのバランスを永遠に狂
わせたのだと——きみの聞いたこともない単一の〈動き〉が存在するのさ。意識もされず
一つにまとまり、沈黙の中を動いている。それらは事典風の歴史の記述が組織の名やイ
ニシャルや代弁人や赤字額等ですっかり埋め尽くしてしまっていて普通は見えない……とこ

22 ジャンケンに似た
イタリアの賭けゲームで、
好きな本数の指を折った
手を出しながら、グー
(5) からパー(0) ま
で、隠れた指の総計を予
測する。

ろが今、マフィアとフリーメイソンの仰々しい介入の手を通して、ここマウスオーガンの
テンプルに凝集し、その優雅な混沌の姿をさらして、ブランドの雇いいれたエキスパ
ー・エンジニア、ベルト・フィーベルの創意を打ち砕こうとしている。フィーベルは今、
大地に銀色の筋を走らせながら、全速力で駆けつける最中だ。

われわれが最後に目にしたフィーベルは、グライダーで大気の気流観察していたころの
ホルスト・アハトファーデンをアシストして、ショックコード^{*24}を引っかけ、延ばし、発射
させていた。フィーベルは地上に留まり、アハトファーデンがペーネムンデへ向けて飛
んでいくのを見送った——ん？ その表現は、パラノイアにしても少々過剰かな。行き先
が見えていたわけではないだろう——まあ、お望みとあらばへブランドがアハトファーデ
ンとも関った件に向けて」と言い換えてくれてかまわない。フィーベルが雇われていた時
分のジーマネスはまだシュティネス・トラストの一部で、彼は企画の仕事しながら、同
時にシュティネスのために諜報活動を行ってモいた。その「合 同 製 鋼」への忠誠
を継続しているフィーベルの、現在の仕事場が、マサチューセッツ州ピッツフィールドに
あるゼネラル・エレクトリック社の工場であるわけだ。パークシャーにエージェントを持
つことはブランドの利益とも合致した。理由はわかりかな？ ご名答！ タイロン・ス
ロースロップ少年を見張るため。元来の契約期間が切れてから十年を経て、IGファルベ
ンはまだ、事を簡単にすますため、タイロンの監視をライル・ブランドに下請けさせてい
たのである。

無表情のドイツ人フィーベルは、ソレノイドとスイッチに関して天才である。どんな
理由でマシンの——あちら流の言い方で——「糊がとれて」しまったのか、などを問うの

23 一九三四年、流線形の高速列車バイオニア・ゼファー号は、シカゴ・デンバー間を平均時速一二四キロで疾走し、全米を興奮させた。「ゼファー」はその後、各路線に採用され、それぞれの呼び名をもった。357ページでも言及されていた「シルバー・ストリーク・ゼファー」は、リンカーン（ネブラスカ州）とカンザスシティ（ミズーリ州）を往復した。

24 113ページ、〈黒の軍団〉に捕まったアハトファーデンが、雷雲のシステムを観察したときのことを回想するシーンに登場。なおショックコードは、パンジー・コードとも呼ばれるゴム製の索で、曳航索の先端に取り付けて、発進時の衝撃をやわらげる。

は、この男にかかれれば罪深い思考の浪費。全体の位相幾何学とカラー・コードを見てとるや、いきなり、ハンダ付けのベーストの臭いが玉突場やバーにまで流れて、そこちこちにクズがころがり、「ああそう」のつぶやきが一つふたつ出てきたあとは、ほとんどのピンボール・マシンが正常に再稼働している。というわけで、ミズーリ州マウスオーガンのメイスンたちがたいへんお喜びになったことはうけあいである。

見事な働きをしたブランドはその返礼として、フリーメイスンの会員資格を与えられた。断る理由はなく、その結果、男たちの友情と、みずからの男盛りが心にしみるよう計画された慰安の数々と、ビジネスに直結する知遇もいろいろ得たのだった。それ以上のことを知るのはきつい。それは「ビジネス諮問委員会」にしても同じだろう。〈事の仕組み〉に關して、会員外の人間はほぼ完全に暗闇に置かれるのだ。ときどき何かが飛び出てくることはある。そいつはちよつとだけおのが身をさらすと、笑いながらまた駆け戻ってしまうのだ。具体的な情報はほとんど残さず、〈恐ろしい疑念〉の方はたんまりと置いていく。たとえば合衆国建国の始祖の何人かはフリーメイスンだったとか。世に流布しているある学説によれば、アメリカ合衆国自体が、かつて今も、壮大なメイスン組織の陰謀であつて、その大元で「ヘイルミナティ」として知られるグループが最終的にコントロールしているとか。²⁵一ドル紙幣に描かれたピラミッドの天辺についた奇妙な目を見つめていれば、その説をまったく信じないわけにもいかなくなる。十九世紀のヨーロッパのアナキストの大部分が——バクーニンも、ブルードンも、サルヴェリオ・フリッシアも——フリーメイスンだったのは偶然とは考えられない。²⁶世界を覆う陰謀の話は、カトリックの信者でなくてもファンが多いが、他のネタはともかくとして、フリーメイスンに限っては、寒気と空恐

25 「ヘイルミナティ」とは「光を得た」一握りのエリートたちの秘密友愛組織。アメリカという国の建国に、T・ペイン、B・フランクリン、G・ワシントンらのメンバーを通じ、どれだけフリーメイスンの組織が絡んでいたのかという疑念は、『重力の虹』の次に書き始めたらしい『メイスン&ディクスン』（一九九七）に持ち越される。

26 第一インターナショナルやバリ・コミュニティでマルクスと対立・対決するロシアのミハイル・バクーニンは一八六〇年代のイタリアで、フリーメイスンと関わっていた記録がある。『財産とは何か』（一八四〇）を著して無政府主義の父とも呼ばれるフランスの

ろしさの感覚をたっぷり味わえること請け合いである。ヘメイスン奇譚の古典のうちベ
ストに属するひとつに、リヴィングストン博士（生ける石とはまたすごい……）の話が
ある。博士が「暗黒アフリカ」の、闇の奥（ハート）というより闇の意識下（サブコンシャス）とい
うべき暗部に分け入
っていくと、そこに見たことのない部族がいた。静寂の中で薪が燃え、意味の読み取れぬ
土人らの凝視を浴びながら、リヴィングストンがおもむろに酋長に近づき、メイスン流の
挨拶を送ると、なんと酋長はそれを認知して、同じ挨拶を返し、そして満面の笑みで、見
知らぬ白人の兄弟のためにあらゆる歓待を行なうように命じたのだ。しかし、ドクター・
リヴィングストンはヴェルナー・フォン・ブラウンと誕生日が近く、どちらも「春分」の
あたりの生まれ——ってことは、十二宮図の特異点の中でも際立って特異な地点から世界
と向かいあってきたわけだ^{*28}。もうひとつ、こういう「フリーメイソン秘話」のそもそ
もの出所を考えないといけない（イシュメール・リード^{*29}に聞いてみるといい。ここで聞き
出せる以上のことを知ってるから）。

メイスンといえば、ミズーリ出身のハリー・トルーマンの名は絶対に落とせない。今ま
さに一九四五年の八月、大統領は死の執務にいそしんでいる。指令の指をエノラ・ゲイ^{*30}
嬢の原子の陰核に置いて準備万端。小ぶりの黄色人間が十万人、瞬時に蒸気に変じ、内
海に面した都市の融けた瓦礫の上の、ぶ厚い焼き豚の皮として蒸着する時が近づいてい
る……

ブランドが参入した頃には、フリーメイソンはとつくの昔に、単なるビジネスマン・ク
ラブになり果てていた。なんと恥さらしなことだろう。そしてその世俗的な見せかけのパ
ワーのみが固着化すると、ビジネスの営みは、いかなる種類のものであらうと、人間から

ビエール・ジョゼフ・ブ
ルードンは、一八四七年
にパリでフリーメイソン
になったらしい。

27 手のひらを開いた
左手を挙げる、平等と友
愛のサイン。

28 魚座が牡羊座に転
じる春分の日、西洋占
星術における「元旦」と
いえる。リヴィングスト
ンは一八一三年三月十九
日、フォン・ブラウンは
一九一二年三月二十三日
が誕生日。

29 リードの戯画的な
小説『マンボ・ジャン
ボ』（一九七二）は、世
界史を黒人に対する白人
集団の陰謀として見る史
観に貫かれ、人種差別的
ヴィジョンの維持にフリ

ある種の魔術を施し、観客のある部分を退かせ、しまうのか。その結果、会員のほとんどはそれに従って、現在も続く儀式は単なる空虚な虚礼でしかない（あるいはそれ以下か）。そして、あつても、中には例外もいるのだ。ときどき先祖返りするものが、ライル・ブランドはそのひとりだった。

フリーメイソンの儀式に登場する魔法は実に古いもので、ずっと昔、その魔法は現実に効力を持った。時が経ち、見世物が注目されて、その精気は失われ始めたが、とはいえ、呪文や仕草、仕掛けなどは、数千年もの間、粛々と合理化が進んでいく〈世界〉をくぐり抜け、だいたいにおいて忠実に伝えられてきた。魔法は失われてはいない。奥に引っ込んでいただけであつて、まっとうな感受性に出会いさえすれば、ちゃんと姿を現わすのである。

集会の後の夜更け、ブランドは眠れぬまま、ビーコン・ヒル³¹の自宅へ戻りつつある自分を意識した。家の書斎のソファの上に横になろうとして、特に何も考えずにいたが、いきなり体に衝撃を感じて我に返った。心臓が高鳴っている。自分がたった今どこかへ行っていたことは分かっているのだが、いっとうやってと考えるとわからない。廊下で古い帝国様式の時計が、反響のよい通路で時を告げる。何代にもわたってブランド家に伝わるジランドール・ミラー³²は、水銀のたまりにまだ像を映すが、ライルに覗き込む勇氣はない。別の部屋で眠っている、緊張症の信心深い妻がうめき声をあげた。夫に何が起こっているのか？

次の集会から戻った晩、すでに内容は全部知っている『ウォール・ストリート・ジャーナル』を手に、いつものソファに仰向けになっていたライル・ブランドは、自分の身体から浮き上がった。顔を上に向けたまま一フィートほど上昇。自分がどこにいるのかを分か

フリーメイソンが活躍したようすを描いている。上岡伸雄訳、国書刊行会。

30 広島に原爆投下したB-29機の名。

31 ポストンの由緒ある住宅街。アメリカにおける「ヘカレラ」の象徴的な居住地。

32 ナポレオンの第一帝国風を意識した「アメリカン・エンパイア」と呼ばれる家具の様式。

33 照明のために壁に配した、燭台つきの凹面鏡。

「た彼は、アッソッ、シューン」とばかり——ふたたび鞘に収まった。こんな恐ろしい経験は初めてだ。ベロリの森の戦いでも味わったことがないほどの恐怖が彼を襲った——幽体離脱の体験そのものよりも、これがほんの第一歩にすぎないということに震えがきた。次の段階では空中を一八〇度回転して下を見ることになるだろう。古き魔法が自分に宿ったのである。自分は修行の旅に出ることになったのだ。このまま進むしかないことを彼は悟った。

回転のコツをつかむのに一、二ヶ月ほどかかった。それをやりのけたとき、それは空間での回転というより、自らの人生がぐるりと回るという感じだった。もう戻ることはできない。下に見たのは腹を上にしてソファに死んだように横たわっている白い肉体。その容れ物にふたたび収まったブランドは、数千年の歳月の営みを目にした男として、永遠に変わったのである。

まもなく、かれは書斎のソファに横たわったまま時間を過ごし、ステイト・ストリート³⁵にはめったに顔を見せなくなった。何ひとつ質問をしない妻は、ただ無表情で部屋と部屋とを歩きまわし、家中のことだけを話した。ブランドが彼の中にいるときは答えをもらったが、たいていは無返答だった。奇怪ななりをした男たちが、電話もせずに、戸口に現われるようになった。気味悪い顔の外国人、色つきの脂ぎった肌、瘤のついた、麦粒腫の、囊腫の、喘息持ちの、ひどい歯をした、足を引きずって歩く、そんな輩がジロリとこちらを見つめている。しびきり気味悪い、へ不思議な遠い微笑を浮かべて。妻が全員を家に通し、書斎へ案内する。彼らはすーっと中に入っていく。彼女の前でドアが閉まった。中から驚くようなのは低く抑えた声ばかり。彼女の耳にはどこかの外国語としか聞こえない。

34 一九一八年、米海兵隊がドイツ軍のフランスへの侵攻を阻止した第一次大戦の激戦。

35 ポストンの金融と商業の中心を走る通り。

かった。彼らは夫に船出の術を指南していたのである。

稀にはあるが、極北の地への旅が、地理的空間において実践されたことがある。冷えて切って流水を浮かべる、炎のごとくに青い海を北へ進む。行き着く先は氷の壁だ。われわれは致命的な勘違いをしていた。帰還したピアリー隊とナンセン隊にばかり注目し、さらに悪いことには、彼らのなしたことを「成功」と伝えた。失敗だったにもかかわらず。名声と賞賛を得るために戻ってきたことが、すなわち失敗なのである。ジョン・フランクリン卿とサロモン・アンドレー^{*36}に対してわれわれは涙しただけだった。その墓代わりに積み上げた石と骨とを悼んだだけで、その凍てついた亡骸に記された勝利の宣言を読み取るところをしなかった。テクノロジの発達によって極北への旅が容易になった頃には、勝利と敗北を見分ける能力など、言葉にすっかり塗りつぶされて久しかった。

アンドレーは極地の沈黙の中に何を見いだしたのか。われわれは何を聞きとるべきだったのか。

修行見習い中のブランドは、幻覚への愛好を振りきれずにいた。かの地へ行ったとき、そこがどこであるのかはちゃんと自覚していたのに、戻ってくると自分は歴史を抜けて、時の底を旅していたのだという想像に走ってしまう。歴史というものは「地球」の精神^{マインド}であって、ちょうど地球の身体^{ボディ}が石炭や石油の層をなしているように、歴史が層をなしているという気がしてしまう。応接間にすわった外国人の訪問者らは、歯の間から息の擦れる音を出し、触るものすべてに不快な手脂の薄膜をつけながら、新米修行者のレベルを見透かし、その下劣な放浪趣味にイライラを隠さない。この男は日常に帰ってくると、向こうで何を見たか、興奮してまくしたてるのだ。アチラにもIGの者がいて、その使命は――

36 イギリス海軍の少将。太平洋から北米大陸の北を通って大西洋へ抜ける「北西航路」を拓こうとして一八四七年に遭難。

37 北極を気球で飛行中に遭難したスウェーデンの気球パイロット。事故から三十三年後の一九三〇年、広範囲に遺体が発見された。

実際ラーテナウが霊媒ベーター・ザクサを通して伝えようとしたように——世俗の善悪を超越している、その種の区別はあちらの世界では意味がないのだ……

「それはそうなのだがね」みんなの目が彼に注がれている、「しかしそれならなぜ精神や身体という言葉を使う。ん……？　なぜ区別する？」

なぜなら、長年ずっと物言わぬドデカイ岩の塊みたいに考えてきた〈地球〉が、命を持つ生き物だということを知った驚き、そのボディにサイキを見いだした興奮があまりに強烈で、それからなかなか立ち直れずに、子供のような心の状態に戻ってしまったから。執着はよくないということは頭ではわかっている、しかしこの驚異の感覚がこの歳になって自分に戻ってきたことのうれしさを振りはらうことができずにいる——じきに手放さなくてはならないことはわかっていても……〈重力〉というものも、長年何の疑問も持たずにいたが、なんとも得体のしれない、救世主的な、〈地球〉の心、体の中の超感覚的なものと知った……死滅種の残骸を集めて地球の聖なる中心に届けるものとして、そこで凝固・変成・再編し組成を変えた分子をふたたび彼方のコールタール・カバリスト——ブランドが自らの旅の中で見いだした彼ら——に供する。彼等はそれを採掘し、煮立て、崩し、ほぐしてあらゆる応用魔術の可能性をしらみ潰しに調べていけば、何世紀も前にすべての可能性は枯渇したと思われたなかからまだまだ新しい分子が出てくる、結合と再結合によって新たな合成物質を作ろうと——「関わるな、そんなもの、クリフォートと同じだ。死者の抜け殻と変わらない。そんなものに時間を浪費してはならん……」

教習を授かる選択に漏れたわれわれは、〈地球〉の表面に取り残され、〈重力〉に対して、それを探知し測定することができるようになったばかりで対抗する術をもたない。わ

38 地上のIGの人間に宛ててラーテナウが喋るシーンは、上巻316〜320ページ。

れわれの前頭葉的思考に引っかかる「きれいな対応」を信じるのみ。〈地球〉の魂から得られるオカルト的合成のそれぞれに対応して、こちら側に、世俗的な、比較的ありきたりの、名前のついた分子が存在すると期待するのが関の山だ。プラスチックの些末な日常を四六時中行き交いながら、その中に〈より深い意味〉を見いだそうという奮闘。それらを寡級数のようにつなげていけばいつの日か、えも言えぬ、神の名のような、いくら文字を並び替えても発音できない神秘の「関数」へと収束していくと信じて？ こんな具合に？ ……プラスチックのサックスのリード…不自然な音、シャンブー容器…自己イメージ、クラッカー・ジャックのおまけ…その場限りのお楽しみ、家電ケース…認識の風の風よけ覆い、哺乳瓶は鎮静作用、肉のパッケージ…屠殺の覆い、ドライクリーニングの袋…嬰兒絞殺、庭のホース…終わりなき砂漠への給水？ ……だが神に見放されたわれわれが意味を読み解こうとしても、プラスチックの光沢に跳ね返されるのがオチだろう…大量生産のレブリカが排泄物のようにあふれるなかで、真理の小さく尖った欠片がひとつでも落ちていないか探しまわるのか？ ……

幸いブランドは解放の日を迎えた。ある晩彼は、家族全員を書斎のソファのまわりに集める。息子のライル・ジュニアもヒューストンからやってきて、エアコンを必須としない地域の空気にふれて流感にやられ、その初期症状でブルブル震えていた。クララはヴァーモント州ベニングトンから車で、バディはケンブリッジ³⁹から鉄道でやってきた。「みんなも知っていようが」と、父親が話す、「わたしは最近、ちょっととした旅を繰り返していて、な…清楚な白のスモックを着て、手に赤いバラ、その出で立ちは非現世的だったと、後日、みんな口を揃えて語っている。ブランド氏の肌と目の透き通りようは、春の朝、夜明け前

39 従兄のタイリントンも通っていた、ハーバード大学の所在地。

「定の緯度の地方でのみ見られる種類のもんだ。」そして気がついたんだが」と彼は続ける。「出かけることに、しだいに遠くまで行っている。今夜は永遠の旅となるだろう。ここに帰ってくることはあるまい。そこでおまえたちに別れを告げたい。今後のことでは心配はいらないと伝えたかった。彼はすでにス・ライト・ストーリーの法律事務所サリ・テイ・リ、ノード、デ・ジョー、デ・ジョー・ストーリーの二員であるクーリッジ・ホット・ストーリーと会って、家族全員、金銭面での不安がないように手はずを整えてきたのだ。わかっている。おまえたちを愛している。別れずにすむのならいいのだが、行かねばならない。それもわかっている。」

家族の者が、人ずつ彼に近づいてお別れをした。その抱擁とキスと握手が終わると、ブランド氏はいつものダウ・ポートのソファに深く身を横たえ、ほのかな笑みを浮かべて目を閉じた。……しばらくして、自分が浮きあがるのが感じられた。それが厳密にいつだったか、その場にいた者たちの考えは一致していない。九時半頃にバディは『フランケンシュタインの花嫁』を見に出かけ、ブランド夫人は、いつも趣味に合わない物ばかり贈ってくる従姉妹から贈られた地味な更紗の掛け布で夫の顔やかな顔を覆ったのであった。

40 蕭蕭十字団にと、夜明け、は、復讐の象徴、永遠の生へ旅立つときには、赤いバツと十字架を手にする。

41 これらの名曲は、トマス・ホップズが『リヴァイアサン』で、自然状況下の人間の状況として挙げた、フリタリー（孤独）、ノア（貧困）、ナスティ（卑劣）、ノル・アイ・ノル（粗暴）、ストーリー（不充足）をもっている。



今夜の風が、練兵場のゴミ街の蓋を金属音とともに転がしていく。歩哨がだらだらとアン女王の敬礼の稽古をし、ときたま吹く突風が、ジープの車体を揺らす。空の二トン半トラックや軍属の平台トラックも揺れる。緩衝のバネがギーギーと不快そうに軋る……強風のピークには、北海へ最後の坂をなして落ちていく砂地の松も動く……

大型トラックが散在するここには、かつてクルップ兵器工場があった。その敷地を快活に、チグハグに歩くドクター・マフェッジとドクター・スポントゥーン。陰謀に手を貸しているとはとても見えない。ふたりのふるまいは、どう見ても「ロンドンの紳士風」が、ここクックスハーフェン^{*3}に上陸拠点を見いだしたかの趣きだ——血の噴出とシレット^{*2}と止血帯の上にサルファ剤^{*3}を撒くジャンキーの軍医とサディスティックな衛生兵が治療に当たる、未だ文明化途上のコロニーにやってきたツーリストの医師ふたり。このコロニーは彼らに分け与えられたものである。マフェッジの兄はとある「省」の高官なのだ。スポントゥーンは奇妙なヒステリー性出血斑^{ステイグマ}の症状があって、正式には医療を行う資格を失効している。彼の左頬には、ストレスが高じるとスペードのエース（色もほとんどそれ）が現れ、

1 Queen Anne Salute
と呼ばれるもので、銃を
かっいで前進、停止、銃
を回してひざまずく一連
の動作からなる。

2 使い捨ての注射器。

3 抗生物質ができる
以前の抗菌剤として第二
次大戦中の傷病兵に多く
投与された。

同時に強度の偏頭痛に襲われるのだ。ほんの数ヶ月前まで、ふたりは戦意に燃える英国市民だった。政府の求めには、よほどのことがなければ応じる気持ちでいた。だが、今回のこの任務に対しては深い疑念を抱いている。時の変転の、なんとあわただしいことだろう。「彼が、よりによってわれわれに依頼してきた。理由がわからん」顎先の皇帝ひげを撫でながら（強迫衝動的にしか見えない仕草）、その体格から想像できないメロディアスな声で話す。「こういう手術からは一九二七年以来遠ざかっている。それは彼も知っているはずだろうに」

「わたしはインターン時代に二、三例、手伝いましたがね」スポントゥーンが記憶をたどって、「当時の精神病院じゃ、大流行だったでしょ」

「国立の機関じゃ、いまだに流行しているところがあるな——いくつか名前も挙げられるがね」ふたりのドクターがクツクツ笑う。イギリス風の厭世気分^{ヴェルシユメルツ}に満ちた笑みが、苦悩の浮かんだ顔を、居心地悪そうに覆った。「それでは、スポントゥーン君、今回はわたしのアシスト役に回りますかな？」

「それはどちらでもかまわんのじゃないですか。だれかその場でノートを取ってるってわけでもないでしょうし」

「それはどうか。わたしにはそう言い切れんがね。きみも聞いてただろう？ 気がつかなかったかい……」

「すごい熱意」

「あれは憑依^{オブセッション}だ。思うんだが、ポインツマンの頭のネジは、だいたい、ユルンできているね……」このしゃべり声は、ジエイムズ・メイソンに驚くほど似ている。「ああたまのネ

4 ヨークシャー出身の俳優だが、アメリカ的な、間延びしたしゃべりで知られる。

5 ここはイギリス占領地区。クックスハーフェンの工場跡の、かまぼこ兵舎の並ぶ場所には、ロケット関連の技術吸収を目的とした「バックファイア作戦」の本部が置かれていた。

6 第二次大戦中の、BBCでよくかかったオルガン奏者。「GRU」

スジが……

互いの顔を見つめる二人。かまぼこ兵舎、駐めてある車、それら夜景をなす、互いに隔絶された物たちが、ふたつの顔の後景を過ぎ去る。風が、潮と浜辺とガソリンの臭いを運びこむ。BBCの軍用総合放送にダイヤルを合わせた遠くのラジオから、サンディ・マクファースンのオルガン演奏が聞こえている。

「それは、われわれみんな……」とスポントゥーンが言いかけて口をつぐんだ。
「さあ、着いたぞ」

明るい室内の壁には、ペティガールのピンナップの紅い唇やソーセージのような脚。隅でコーヒー・メーカーが蒸気音を発している。靴クリームのむかつく臭いもある。机に脚を乗せた伍長が、アメリカの「バッグス・バニー」の漫画本を読みふけているのだ。

「スロースロップって」伍長はマフェッジの質問に答え、「ああ、あの豚の着ぐるみを着たヤンキーっすね。ハイハイ、しょっちゅう出入りしてます。まったく変なヤツで。おたくは、M16とかの方ですかね？」

「それは言えん」とスポントゥーンがきつぱり、ちよつとネイランド・スミス気分で言いはなつ。「ワイヴァーン大將の居所はご存じかな」

「夜のこの時間なもの、きつとアルコールの貯蔵庫っすよ。線路沿いに歩いて行けば、騒ぎが聞こえます。おれも勤務中でなければ行くんだけどさ」

「豚の着ぐるみとは」マフェッジが顔をしかめる。

「デカくてド派手なやつっすよ。黄色、ピンク、青。ウソみたいでしょ、でも本当なんだから」と伍長、「間違えっこない、すぐ分かります。ところで、どちらかタバコとかお持

は、『タイムズ』の番組欄をチェックした上で、小説の現在を、八月五日の夜の十時十五分頃（英国サマータイム）としている。その通りであれば、日本列島はすでに朝日が昇り、深夜に飛び立ったエノラ・ゲイは広島へ接近中。

7 戦時中の『エスクワイア』誌でイラストを描いていたジョージ・ペティによる、露出の多い女性画像。

8 「ミリタリー・インテリジェンス、第6セクション」は、外国での諜報活動を専門としていた。

9 怪人フー・マンチューに対抗する刑事。ポインツマンの妄想に出てきていた（上巻531ページ）。

ちじゃないすかね」

線路に沿っていくと、からっぽの三層貨車とタンク車の先からドンチャン騒ぎが聞こえてきた。「アルコール貯蔵庫とね」

「ナチスのロケットを打ちあげる燃料だそうですよ。まあ、一機でもちゃんと組み立てられたらの話ですけど」^{*10}

裸電球の点いた冷たい傘の下に、陸軍の人間に、アメリカの水兵、軍厚生施設^{N A F I}の女子およびドイツ娘が凝集し、その全体が、破廉恥な親睦にいそしんでいる。もつれる集団の端っこにマフェッジとスポントゥーンが加わったときには、騒ぎは合唱に変わった。中心には、酔いの回った赤ら顔を電球の光で激昂のモーヴ色に染めた男がいて、両隣りのにこやかに乱れた恰好の女の子に腕を回し、みずから合唱の先陣を切っている。その男こそ、まさしく^{トウエルフス・ハウス}〈第十二宮〉のポインツマンのオフィスで最後に見かけたワイヴァーン^{*11}大將だ。

タンク車の胴体には、ステンシル文字で白くくつきり「75%エタノール溶液」と表示され、そちこちに蛇口がつき、その下におびただしい数の軍のメタルカップや陶器のマグカップ、コーヒーポット、クズ缶、その他あらゆる容器が差し出され、戻っていく。ウクレレ、カズー笛、ハーモニカ、音の鳴る金物すべてによる伴奏で歌われるのは、素直に〈戦後〉を祝う歌だ。欠乏はもう終わり、〈忍耐〉の闇が明ける、夜明けは近いと――

さーあーさー

口で、トリップ・し、まーしよー。イッツ
マウス・トリップ・ピング・タイム！

¹⁰ イギリスの〈バツクファイア作戦〉はこの年九月、V2型ロケットの打ち上げ実験に成功。

¹¹ V2の燃料はまさしくエタノール（エチルアルコール）と水とを3対1の割合で混ぜた溶液。

アイスボックスの、戸を開けて――

オーイエス、イッツ

マウス・トリッ・ピング・タイム!

マウス・トリッ・ピング・タイム!

ひと口入れたら、もっと欲しくなった!

ああ、マウス・トリッ・ピング・タイム!

マウス・トリッ・ピング・タイム!

大昔からおんなじだ、

生きるって美味しすぎる

マウス・トリッ・ピング・タイム!

みんな・口を・揃えて・ねー!

次のコーラスのところは最初の八小節を陸兵と水兵が、続く八小節を女声が担当、ワイヴ
アーン大将が次の八小節をソロで歌い、最後は全員合唱^{トゥッティ}でしめる。続いてのコーラスはウ
クレレとカズー笛が担当し、みんな踊りまくる。セーラー服の黒いネッカチーフがならず
者の癲癇患者の口髭^{ヒゲ}みたいにはためき、繊細なスヌードの縛りがゆるんで、ほつれ毛が束
ねた髪からこぼれ、スカートの裾がふわり上がって、電球の灯りの下、白い膝が目眩し
い。戦前のクリューニー・レースで縁取りしたスリッパは、弱々しく飛び回るコウモリの、
煙る翼のようだ……最後のコーラスで、男子は時計回りに、女子はその反対に、回る全体
が花開いてバラの花のパターンを作ると、中央からふしだらな流し目を送る飲んだくれの

E・バッターズ号のリーダー係は、ジャンパーの秘密のポケットから白い錠剤の詰まったガラス壺を取り出す。「コデインだよ、ほら。見てくれって、この美しさ」

ボーディーンが一発激しいクシャミをし、垂れた鼻水を袖で拭いた。「風邪には効きそうもないな、クリプトン。けっこうだ。で、アヴェリーのやつこさんは見かけたか？」

「ああ、元気モリモリだね。船底ポンプの近くで最後の筋トレやってたよ」

「聞け、相棒」商売熱心な船乗りが仕事にかかる。三オンスのコカインを意味する暗号が伝えられた。ボーディーンはしわくちやの札を取り出す。「間にあうなら深夜零時に来てくれ。試合が終わったらヘプツィの館で会おうと、やつには伝えた」

「了解。ところで近ごろ、兵舎の地下を覗いてみた」CBIからの帰還兵が集まって、アヘン玉のおはじき大会だそうである。腕のいい者は、数百個をせしめることができる。リーダーマンのクリプトンは金をポケットにいれると、札を握ったまま、親指の関節をほぐしながら計画をめぐらすボーディーンを残して、歩を進めればおさわりを、足を止めればグラス代わりの葉莢から穀物性アルコールのグレイプフルーツジュース割りを失敬しつつ、コデインの錠剤を売りさばく。そこに赤い帽子の憲兵二人の姿が見えた。と、一時的にクリプトンにパラノイアの幻覚が生まれる。憲兵が警棒をさすりながら自分の方を意味ありげに睨んでいるのだ。戸外の暗がりへ抜けだし、夜空の下の土手を歩く。行く手に待つのはクリプトン・ブルーの名で知られる、特許つきの混合薬。そこへ向かう彼の頭はクラクラだ。完全に我を忘れているときもある。

そこでは、クリプトンのコネクションである薬剤師バードベリーが、ラジオ・ルクセンブルクから雑音混じりで入ってくる『運命の力』の最終幕の演奏に合わせ、指揮をとりな

14 大戦末期には連合軍による反ナチ情宣活動の本拠となったが、軍の撤退後、商業放送局として英語放送を再開。BB C一局体制下のイギリス人にとって、貴重な「民放」の役割を担った。

15 かなわぬ恋の悲劇の結末を描く、ヴェルディのオペラ作品（一八六二）。

から歌っている。クリプトンの図体が現れた瞬間、バードベリーの口がボタンと閉じた。

一緒に、巨大な、多彩色の豚とおぼしきものが入ってきたからだ。着ぐるみのフラシ天のケバが、そちこちで逆転して、色彩のバリエーションを広げている。「マイクログラムだぞ」クリプトンは大袈裟に頭を叩いて、「そう、マイクログラムでな。ミリグラムじゃない。バードベリー、たのむ、何かくれ。おれ、やりすぎちゃった」

「シー！」施薬人の広い額に刻まれた横じわを、オペラチックな縦じわがときどき横切る。クリプトンは薬品棚の間に戻り、アヘン安息香チンキの壺を通して、明りのついた部屋を透かして見ている。オペラが終わった。バードベリーのところに行くと、豚が質問をしている。「行き先として他に考えられるところがあるのか？」

「オレは人が聞いたのを又聞きしただけだ」バードベリーは指揮棒の皮下注射器を置いた。「そのクリプトンに聞いてみな。あちこち顔を出してる男だ」

「みなさん、こんばんは」とアルバート、「予防接種はいかが」

「シュプリンガーが今夜現れるって話じゃないか」

「最初におれはそう聞いた。だが〈ブッツィの館〉で確かめたらどうだ。そういう情報はあそこで仕入れるもんだらう」

豚は壁にかかっている時計を見上げる。「今夜のスケジュールは、ずいぶんおかしいことになってるぜ」

「おい、クリプトン。SPOGのお偉いさんが今にもここにやってくるっていう話だ。だから、それが何であつたにしろ……コカイン三オンスの値段交渉の間に、豚男は丁重にその場を離れ、ベニニューズ・オブ・ザ・ワールドの古い号のページをめくる。やがて結

16 強調はそれが暗号であるためだろう。

17 上巻522ページに既出。ロケットの部品と技術を取り戻し、「バタック」に自分た

晶を詰めた壘を素足にテーズで留めたクリプトンは、みんなを先割れスプーン剣法の試合に招く。「ボーディーンの収益は相当なもんだろう。ヘゾーン」中から大勢集まってくるしな

「あの船乗りのことか？」びっくりしたフラシ天の豚が尋ねる。

「クックスハーフェンの王さね、豚くん」

「おれ、ベルリンで一度あいつの使いをしたよ。伝えておいてくれ、ロケットマンがよろしくって」

クリプトンはセーラーのラップズボンを引っ張りあげ、壘を一本あけて中身を確認すると、表情を固めてギョロ目を見開いた。「使いつて、あんた、あのハッ、シシの？」

「そうさ」

クリプトンは白い薄片を指の間にたんまりつまむと、左右の鼻孔から吸いこんだ。世界がくつきりクリアになる。苦い鼻水が喉の奥で握りしめた拳の形に凝固する。ヘポツダムの宝^{ハッレン}獲り」はすでに「ヘゾーン」の伝説だ。この豚助は、ヘロケットマン（その実在性についてはクリプトンも確信がない）の栄光を、横取りしようと企んでるのか——コカインの作用で疑惑は、ドブネズミのようにうす汚なく身をすくめる……棚の壘が千の違った色に輝き、ラジオから声が流れ、ケバ立った豚の着ぐるみは触れてみると独特のコシと手触わりがして……いいや、こいつは何も企んじやいない。捜査員でもなきや、商売人でもない、人をだまくらかそうなんてことはしていない。……「わるいね、ちょっと感触を確かめたくてさ」クリプトンが言った。

「ああいいよ」と、突然戸口に、赤帽・皮革・真鍮が群がった。クリプトンは片手に開い

ちの武器にすること——をめざす。

18 スロースロップはこの週刊タブロイド新聞の熱心な読者（上巻41ページ）。

たコカインの壘の蓋を握ったまま立ちつくす。

「スロースロップはいるか？」指揮をとる軍曹は、腰の短銃に手を乗せたまま、ジワリジワリ部屋の中へ進みいる。豚が見やるとバードベリーが、まるで本気に、首を横に振っている。チガウ、ワタシじゃない。

「おれでもないから」クリプトンも、言いそえる必要を感じたのか。

「タレこんだヤツがいるな」と豚男も、本気で傷ついたようすを見せる。

「スタンバイ」クリプトンは小声で告げると、MPに向かって「エクスキューズ・ミー」、そのまま進んで壁のスイッチをバチンと切った。隙をついてスロースロップが走りだす、叫び声上がる、バードベリーの机のわきを走りぬけたと思いきやそのまますすぐ高い薬棚にぶち当たり薬のお腹がバネとなって弾きとぶ、棚は誰かの上に倒れる、つんざく悲鳴、ガラス壘の割れる音——一面の暗闇で、前へ伸ばした腕をたよりに裏口まで進んだらクリプトンがいた。

「ありがとう」

「急げ」

夜気のなかを一目散に東へ向かう、エルベ河を、波止場を目ざす、足が地面を打ち、水たまりを滑り、トラックの轍にけつまずく。左右にかまぼこ兵舎の続く道を吹き抜ける風が顔を叩く。クリプトンのラップバズボンの左の裾から白い粉がかすかに吹きでている。背後にやかましい追っ手の声、懐中電灯の光、だが、一安心、彼らは獲物を見失ったようだ。「フオロー・ザ・イエロー・ブリック・ロード」アルバート・クリプトンは鼻歌気分。「黄色いれんが道を進め」——なんだよ、こいつ、ホンキかね、スキップなんか踏んでる

あがてふたりが息を切らして波止場に着くと、そこにはバツダース号とその分艦隊をなす霞灰色の子豚が四隻停泊していて、軍人と市民混成の酔っぱらいが取り巻いて囃し立てるなか、先割れスプーン剣法の試合がいまちょうど始まったところだ。青ざめた灯りの下で、筋張った細身の剣士アヴェリー・パーフルの毛皮のようにツヤツヤしている。喉ぼとけが一分間に四、五回のサイクルで振動するようすから緊張ぶりがうかがえる。対する聖ジョン・ブラデリーは、雄牛のように鈍重な構え。その回りをパーフルがすり足で回る。先をヤスリで尖らせた先割れスプーンが二本ガードの構えにあってキラリ輝く。

クリプトンはスロースロップをゴミ箱の中に隠し、船乗りボーディーンを探している。瞬時のきらめくフェイントが数回、身をひるがえしながらパーフルが闘鶏の素早さで切り込んだ。ブラデリーはサードの構えで防御しようとするが、パーフルのハイ・スラッシュュが、コマンド隊員ブラデリーのシャツを切り裂き血に染めた。が、パーフルのアメリカ製の低い紳士靴が、策士ブラデリーの軍靴に踏みつけられて飛びのくことができない。釘付けである。

興行師ボーディーンとふたりの剣士は、覚醒の結晶クリスタルを燃やしている。だが観ているほうには、毒気に染まった灰色の集団だ。その半分以上は無意識の山麓に横たわり、残りの者も目の前で何が起きているのかきちんと把握できていない。パーフルとブラデリーがお互い本気のケンカをやっているとと思う者もいれば、喜劇を演じていると勘違いして妙な場面で笑いだす者もいる。ときどき、夜の高みで小さな眼球がキラリとする。だれか軍艦の船楼

使いで、ドロシーにオズの国への道を教えるマンチキンたちが歌う。

20 フェンシングで防
御の型は九つあり、「パ
リー3」またはフランス
語で「ティエルス」と呼
ばれるのは、ガードを低
くしたまま剣を外向きに
して立てる。

から見つめてゐるのか……

パーフルとブラデリーが同時に突いて、今や組み合いの状態——三つ又のスプーンは擦れ、ぶつかり、咬み合ったまま、張った肘も動かない。結果は、瘦せのパーフルのトリックの才にかかっている。ブラデリーは一晩中でもこの姿勢でいる覚悟だ。

「ロケットマンが来てるんだ」ボーディーンの湿ってしわの寄った襟をクリプトンが引く張って、「豚の、ス、ーツを着てな」

「後にしてくれ。おまえ、持ってるか、その——」

「MPが追ってきてるんだよ、ボーディーン、どこに匿ったらいい？」

「うるせえ、どこかのニセモノに決まってるわ、ロケットマンがこんなところにくるか」パーフルは先割れスプーンを横にひねってブラデリーのスプーンと噛み合わせたままグイと引っぱり相手を充分よろけさせて、踏まれていた足をサッと抜き去るや、武器の先を巧みに外してヒラリ身を引きはなした。よろけたブラデリーは体勢を立て直し、ジャブで探りを入れながらジワリジワリ迫っていった、いきなりスプーンを反対の手で持ち替えるのと斜めに切りかかった。矛先が水兵の頸動脈のすぐ脇をかすめていく。パーフルをびくりさせるが、白いジャンパーの中に滴りおちた血は、アーク灯の下で黒く見える。汗と冷氣の影が、男たちの腋の下を暗く染めた。痛みのせいで向こう見ずになったか、パーフルがめったやたらにブラデリーを突き、斬りかかる。ブラデリーは一步も動くことなく、膝から上のウィーピングでかわしている。どっしり構えた大きなブディングが身を揺らすかのような。とうとうパーフルの手首が、スプーンもろともブラデリーに捕まった。シルバの踊りのようにその腕をクルリと回して相手を正面に引き寄せたブラデリー、パーフルの

「何んがこれに月を突き立てて今にも揺き切ろうという構え。激しく息をし、汗を流したならせながら視線を回して、どこかの指示者が親指で、次にすべきことを伝えてくるのを待つ。

何も来ない。あたり一面、眠りと吐き戻しと震えばかりだ。亡霊のごとく花開いたエタ

ノールの香りと、何にも動ぜず金を数えているボーディーン姿があるだけ。こっちを見ている者など一人もない。その瞬間、先割れスプーンの前でつながりあったブラデリーとバーフルは、ふたり同時に認識した。ふたりの世界を死で染めるのにはあと一突きですむというところにまで来て気がついた。誰も戦いを完遂せよとは言っていない、よな？ どっちが勝とうと、みんなそれぞれの分け前を手にするだけ。だったらここでブレークして、一緒にボーディーンの野郎から金を取り立て、どこかでバンドエイドとヨードチンキを手にするのが賢いやり方ではないのか？ それでもふたりは組み合ったまま。《死神》はその場を去らず、ロマンティックな歌を流して誘い続ける。おぬしら、そんな弱虫なのかね……そこで停まって先に進まんのかい？ それであんたら、生きているというのかね？

MPの車が一台、クラクション、サイレン、ライト、全開で近づいてくる。バーフルとブラデリーはししぶと緊張を解き、膨らませた頬から大きくため息を吐いて体を離す。三メートルほど離れたボーディーンが、眠りから覚めつつある群衆の頭ごしに、分厚い代用紙幣の束を投げてよこした。それをコマンド隊員のブラデリーがキャッチ。カードを切るように二分したその片方が、すでに灰色の母豚ことジョン・E・バッドース号のタラップへ向かっていたバーフルに渡った。艦の後甲板で見つめる眼が生きかえる。洗濯室のトランプ・ゲームも打ちきり、みんなして大捕物の見学だ。陸の酔っぱらいはひしめき合い、方向性を失ってモゾモゾと動くばかり。青ざめた電灯の光の向うから、身をふるわせ、欲

情し、衣服を乱した一群の娘たちが押し寄せてきた。嬌声と、美しいパステル調の合成繊維の布で聖ジョン・ブラデリーを包みこみ、連行しようという魔女軍団。ボーディーンとクリプトンは腰をくねらせ、悪態をつきながら群衆の間をかきわけ、寝ている者にも眼をさました者にもつまずきながら、スロースロップを匿っているゴミ箱のもとへ走る。卵の殻、ビールの空缶、黄色い肉汁つきの鶏肉、コーヒー滓と紙くずの中から、スロースロップが起ち上がる。豚の仮面を持ちあげ、ヨオとボーディーンに微笑みかける。

「ロケットマンじゃねえか。こいつあたまたげた、本物だぜ。おまえ、なんでこんなところにいるんだ」

「仲間に裏切られた。〈ブッツィの館〉まで乗せてつてくれ」トラックが次々と現れる。そのキャンパスの影の中へ、群衆が無雑作に詰め込まれる。憲兵より動きのにぶい者全員がだ。そこへやってきた平服の二人組。栈橋を大声で駆けてくる。顎ひげをはやした方が「豚の着ぐるみ、豚の着ぐるみ。見ろ、あれだ」。そして「おまえだ——スロースロップだな——そこを動くな」

うるせいやい。ガンガラグシャグシャ騒々しくゴミの中から転がり出たスロースロップは、ボーディーンとクリプトンの後を必死に追う。左右に鶏の脂が飛び散り、背中から卵の殻が落ちる。駆逐艦隊の次の停泊地に、赤十字クラブの車だか酒保のトラックだかが停まっている。アスファルトの上に真四角のライトが伸びる。窓枠に囲われて、ディアナ・ダーピンの髪型をした美女^{*21}がいて、キャンディと煙草と、蠟紙に包んだ分厚い三角のサン

ドイッチの山に寄りかかっている。
「ねえ、あなたたち、コーヒーは？」ニコリと、「サンドイッチもどうぞ、もうハム以外

21 ミュージカルでは
アリア風の歌もよく歌っ
た上品なタイプの歌手で、

は売り切れですけど」と言ってからスロースロップを見て、「あら、なんてことに……」
「トラックの鍵をよこした、ねえちゃん」ボーディーンがジェイムズ・キャグニー²²の冷笑
とニッケルメッキの短銃をもって近づく。「ほら」カチッと撃鉄が立った。

娘は動ぜずきびしい面で、パッド入りの肩をすくめる。「鍵なら、差してあるわよ」ア
ルバート・クリプトンが後部座席で彼女と同席し、スロースロップとボーディーンが前に
飛びのる。タイヤをきしらせUターンをしたそのとき、背広のふたりが追いかけてきた。
「あいつらいったい誰なのよ」窓の後ろに遠ざかっていく、叫ぶ姿をスロースロップは見
つめながら、「ひとりは頬にスピードのエースをつけてるぜ、見たか？」

ジョン・E・バッドース号の前の人だかりを荒々しいハンドルさばきで避けたボーディ
ーン、眼にするすべての人間にいちいち中指を立てている。スロースロップはシートにも
たれ、騎士の兜の顎あてを外すみたいにしてビッグ・マスクを上にあげ、ボーディーンの
ジャンパー・ポケットに手を伸ばし、煙草の箱を抜きとって一本に火をつけた。もう疲れ
たよ、眠いんだ。……と、突然、後部座席から赤十字娘の突然の金切り声。「ウワッ、な
に、それ！」

「見てみろよ」クリプトンは動ぜずに、「あんたの指先に少しつける。そうだ、そして鼻
の穴をひとつ閉じる。はい、そしたら——」

「コカインでしょ！」娘の声はしだいに警報のように張りつめる。「そうよ！　ヘロイ
ン！　あなたたち、麻薬魔！　わたし、誘拐された！　オーマイゴッド！　大変よ、これ
赤十字クラブの車なのよ！　赤十字の所有物！　だめ、絶対、わたし赤十字の人！　だれ
か助けて！　麻薬魔よ！　オー・ブリーズ！　助けて！　車を停めてわたしを出して！

カールした髪を後ろにや
って、額を広く出す髪型
が印象的。

22 上巻424ページ参照。

トラックならあげますから、中のものも全部もってって、でもお願い、わたしを——」
「ちょっとハンドル代われや」と言ってボーディーンは後ろ向きになり、びかびかメッキの銃口を娘に向ける。

「撃てないくせに」金切り声。「何てワルなの、赤十字をハイジャックするなんて、何様のつもりよ、どっか行って鼻の穴から粉でも吸いこんでなさいよ——あたしたちに手出しなんかしてないで！」

「おいアマ」船乗りボーディーンの忠告は静かな、説得力ある口調だ。「残念だがな、おれには撃つことができる、だろ？ あんたがいる組織ってえのは、なにかい、くそバルジの戦いで、コーヒーとドーナツに十五セントの値段つけて売りつけたってとこかい。だれがだれを強奪してるってえのよ、ったあく」

「誰が誰から強奪してるか、でしょ」言葉遣いをたしなめる声に、さっきの元気はない。下唇がふるえていそう。小うるさい、可愛い顔を見なくなったスロースロップは、ボーディーンにハンドルを渡して、バックミラーを覗きこんだ。

「オーヤ。こいつはなんだい」クリプトンが娘のケツを見つめている。「なんだね、ここにあるの」立ち上がり、突っ張っている脚の上で、カーキ色のスカートに包まれたそのおケツは、ボーディーンの異様なハンドルさばきに耐えながら右往左往している。車は時速一〇〇キロか一一〇キロは出ているだろう。タイヤを軋らせながらのコーナリングも、なんだかカッコつけた自殺スタイルみたいに見える。

「きみ、名前はなんていうの？」スロースロップの笑顔は、やさしい豚の叔父さん風。

「おれ、タイロンです。こんちは」

「トゥラ・ラーラ」クリプトンはレジの中身を収奪し、ハーシー・チョコをほおぼり、靴下に煙草を数箱詰め込みながら「愛の花がひーらく」と声を発したそのとき、ボーディーが急ブレーキを踏んだ。すさまじい滑行。トラックのケツがグルリと回って氷の光に凍えたかのような歩哨たちの活人画の中へ突っこんでいく。歩哨のヘルメットの白いステンシル文字、白いベルト、白いホルスターが目飛び込む。バリケード封鎖された道路。背を丸めてジープにかけ寄り、携帯無線機に向かって怒鳴っている将校の姿。

「道路封鎖かよ？ クソヤロウめ」ボーディーはギアをガキガキさせてバックに入れる。トラックの急な動きに、棚から兵士への贈り物が落ちる。足をとられてつんのめったシャーリーの体を支えようとクリプトンの腕が伸びる。身を屈めてダッシュボードの拳銃をつかんだスロースロップが、窓側へ身体を起こしたら、フロントシートにシャーリーの上半身が乗りだしていた。「ローギアはどれなんだよ。どうなってんだ、この赤十字のギアボックス、五セント玉入れねえとギアが入んねえのか、どうなんだ、シャーリー」

「もう、何やってるの！」シャーリーがシートを這いのぼってふたりの男の間に割って入り、ギアシフトのレバーをつかむ。「こうやるんでしょ、ドジ」背後に銃声。

「ありがとよ」とボーディー。ゴムの悪臭を伴った煙にもかまわず、タイヤを軋ませる。

「ホットだよねえ、ロケットマンは、ワオ」後部座席に身を横たえたクリプトンは、足首にテープでとめたコカインの塊を足ごと差しだし、ニッコリ。

「これはこれは」

「いいりません」とシャーリー、「仲間にならないで」

「んなこと言わずにさ……ほら……」

「あれはイギリスの憲兵だったのかな」スロースロップは前方のランプの灯りに細くした目を向ける。「それともアメリカのGIか。GIがイギリスの占領区で何してるんだろう」「GIじゃねえだろう」ボーディーンが想像で言う。「ただの沿岸パトロール²³だろう。おい、これ以上バラノイアはゴメンだぜ……」

「ほら、これ（シュッと鼻から）やっても、牙とか（もう一度鼻から）生えてこないから……」

「それはどうかしらね」シャーリーは膝をついて後ろ向きの姿勢、座席の背もたれに乳房が乗っている。田舎娘の大きなスベスベした手のひらがひとつ、支えを求めてスロースロップの肩にかかる。

「なあ」ボーディーンがたずねる。「紙幣^{カネ}のことかい、それともドラッグか。何で追われるのかわかんねえと、こっちも困るぜ——」

「おれだよ、おれを追ってるんだ。取引とか関係ない。それとは全然別の追跡さ」

「だーれも住まない土地に咲く、あの娘は薔薇の花²⁴ア」アルバート・クリプトンが猫なで声で歌う。

「なぜ〈ブツツイの館〉に行く？」

「シュプリンガーに会わなきゃならないんだ」

「へえ、アイツが来るんだ。知らなかった」

「なんでみんなその同じセリフを吐くんだ」

「ねえ、言ったでじよ」シャーリーが片鼻だけ通じている声で、「それ多すぎ、アルバー

23 陸に上がった水兵の行動を専門にとり締まるため、警官の権限を与えられた兵員。

24 赤十字の看護婦を讃える第一次大戦期のうた“The Rose of No Man’s Land”の1節。

ト、ちよっぴりにじて」

「しばらく誰も会ってないってことだろ」

「さあ吸い込んで、いい子だ。ほうら、よし。ふむ、まだ少し、えと、その鼻くそみたいなのがじゃましてるね……もう一回、フンって。よし、じゃあ今度はこっちの穴からだ
よ」

「アルバートったら！　ひとつだけって言ったのに」

「おい、ロケットマン、もしおまえ、捕まったら——」

「考えたくもない」

「あん、すごい」シャーリーの声もれる。

「気にいった？　ほら、もう少しだけ」

「どうすんのよ」

「どうもしないよ。SPOGのだれかと話をして事情を知りたいと思ったただけなんだ。今夜、クスリ部屋で話をする事になってたんだ。オフレコで、どっちの陣営でもないところで。そしたら官憲が踏みこんできた。かと思ったら今度は気味の悪い、背広の男もふたり」

「おまえさん、スパイかい？」

「スパイならまだしもね。あーあ、見通し甘かったか」

「なんか、つらい話があるみたいだな」と言っ船乗りボーディーンはつらそうに運転している。表情も曇り、感傷的になった。ややあって、「なあ、もしも、おまえがなんちゅうか、追いつかれちゃったら、おふくろさんか誰かに連絡してやろう」

「おふくろ——」一瞬眼を光らせて、「いや、そりゃ無理だ」

「だれか、いるだろ」

「ひとりも思い浮かばんな」

「恐れ入ったぜ、ロケットマン……」

〈ブツツィの館〉は、だだっ広い、半分要塞のような前世紀の荘園領主の邸宅だった。ドルム街道から海の方へ小道を曲がると、砂利っぽい轍が二本伸びて、その間に葦や、砂地に強い草が生えている。浜辺からカーブを描いて盛り上がる巨大な碎け波のような砂丘があつて、館はそのてっぺんに浮かぶ筏のようだ。海辺はほとんど勾配がなく、気づかぬうちに突然海が始まる。塩の白さをたたえた静寂の水が北海まで何マイルも、厚くたれこめた雲のように延びていく。ところどころ濃い銀色に輝いているところは、長い細胞か皮膚のような、薄い生体組織のよう、月光を受けて静まり、ヘルゴラント島の方へ延びている。

この建物は一度も徴用されたことがなく、だれも主人の顔を見たことがないし、²⁵「ブツツィ」という名の人物が実在するのかどうかとも知られていない。ボーディーンはかまわずトラックを以前の家畜小屋へ乗り入れ、一行は車を降りる。月の光にシャーリーの歓声がかかる。クリプトンは女の釣り餌を吸い込んだ口で「オー、オー」とつぶやいている。豚の着ぐるみが悪かったのか、入口で合言葉とセキュリティのちよつとしたトラブルがあつたけれども、スロースロップが白いプラスチックのナイトの駒を見せるとそれもあっさり解決。中は照明がきらつき、コンピネーション・バー、アヘン窟、キャバレー、カジノ、売春の間と続き、どの部屋にも陸兵、水兵、商売女とそのお客、勝者と敗者、奇術師、デ

イーラー、麻薬吸い、覗き魔、ホモ、フェティシスト、スパイ、そして単に相手を求める

25 アメリカ兵に配給される煙草や糧食が、暮らしの窮迫したドイツの女性を買うための通貨になったところから生まれた、ひどいスラング。

者たちで勝っている。だれもがしゃべり、歌い、ハメを外すその騒音レベルは高いが、サイレントな壁が騒音を外へ漏らさない。香水と紫煙とアルコールと汗が、目にも鼻にも捕えられないソフトな乱流となって部屋から部屋をめぐっている。ここで行われているのは、だれも終えようとはせずにただ漂流する祝祭なのだ。永続する、新参者も古い常連も自由に交じり合う祝賀会。いったい何の勝利を、いつの戦争のことを祝賀しているのかもわからない。

シュプリングアの姿は見えない。スロースロップは手当たり次第たずね回るが、どうやら来るにしても遅くなりそうだ。ところで今日は、グナープ夫人の船でシュトラールズントに入港するさい話をつけた、例の「除隊」の届く日である。その日を選んで、ここ一週間は動きのなかった警察が、スロースロップを追い回すことにしたのだろうか。そうさ、その通りだよ、シンシンシンシン今晩ワ、たいろんするーするっぶ君、ワレワレハ君ヲ待ッテイタ。モチロンサ。ワレワレハココニイタヨ。消エタト思ッタリナドシテナイダローネ。モチロン、ワレワレハ消エタリシナイ。たいろん君。君ガアンマリ馬鹿ヲスルナラ、マタ痛い目ニ遭ッテモラワントナ。何度デモダ。ソウ、たいろん君。君ニハモウ希望ガナイ。愚カナウエニ、運モ尽キテイル。君ハホントーニ何カラ突キトメルツモリデイルノカ。探ッテイッタ先ガ死ダトシタラドウスル、たいろん君。ワレワレガ君ノ探求ヲ阻止スル気ナラ、ドウナルダロー。ワレワレガ君ニ除隊ヲ与エタクナイトシタラ、君ハ永遠ニ今ノママ進ムシカナイ、ソウダネ? ドウダ、ワレワレハ君ガズットコノママ進ムコトヲ望ンデイルカモシレナイ。ソレハ君ニハワカラコトダネ。ドウシテワレワレト渡リアエルナドト思ウノダロウ。ナゼカ自信ガアルヨウダガ、実ノトコロ君ガタダノ糞ッタレデアルコト

ハ、ワレワレミンナ知ッテイル。君ノ身上調査書ニモ、糞ッタレト書イデアルンダ。(笑イ。はみんぐ)

コート用のクローゼットの中で尻をつき、豚マスクのビロードの耳を嚙っていたらボーディーンに見つかった。「ひでえ顔してんな、ロッキー。こっちの彼女はソランジっていうんだ。マッサージしてもらえ」ほほえんだ顔に、不思議そうな眼。さながらヘンテコな豚小屋に連れてこられた子供の顔だ。

「すまん、すまん」

「お風呂に行きましょう」女の声は早くも石鹸のついたスポンジのよう、悩める心をやさしく撫でる。「とても静かで、休まるわ……」

「おれは一晚ここににいるから」ボーディーンがいう。「シュプリンガーが来たら教えてやる」

「これも仕組まれたことなんだよな、そうだろ？」ビロードのケバの間から、スロースロップが唾液を吸いとる。

「仕組まれていないことって、この世にあるかい」と言っただけボーディーンは笑う。

「それはそう、でも矢印はあらゆる方向へ伸びているの」ソランジは、先端の赤いヴェクトルの指をあちこちへ踊らせた。スロースロップには初耳だ。自分に対する陰謀のことしか考えてこなかった。それ以外にヘゾーンは多数の陰謀を抱えうるのだという事実……ここへロケット・シティにおいて、陰謀は高架鉄道やバス交通路のように張り巡らされているのであって、その複雑さはボストンの交通システムを凌ぐのだという事実——たったこれだけで乗り換えるのを知って、各支線を通りかかれば進むことが許される。進め方向

に進んでいられると思えても、最低限の自然さを失わずに乗りこなしていれば、この陰謀の全ネットワークは彼を自由へ導いてくれるかもしれない。だったらボーディーンかソランジカの企みを恐れる必要はなく、ふたりが用意してくれた地下の乗り物がどこへ行きつつか試してみるのもいい——と合点した。

ソランジがスロースロップを風呂へ連れていく。ボーディーンは顧客の男を探し続ける。アンダーシャツの下で、腹に冷んやりするコカイン入りのボトル三個が（一個の中身は半分消えた）チリチリと音を立てる。少佐の姿は見えない。ポーカーやクラブのどのゲームにもいないし、フロアショーにも——ベビーオイルで身体中がテカテカの金髪娘ヨランダが、客のテーブルを踊り回ってフロリン銀貨やポンド金貨を集めていく（ときどき悪戯好きの客がジッポ・ライターを陰唇にくわえさせて火を点ける、熱い熱い）——いない。

バーにもいない。マトラッセ織りの服を着て葉巻をくゆらせている「プッツィの館」の愛想のよいマダム、モニカにも聞いてみたが、女を抱いてもいないようだ。^{*26}ピアノ弾きを脅して無理やり「サン・アントニオ・ローズ」を弾かせることすらしていない。三十分ほど探しまわった挙げ句、ボーディーンは、両開きの便所の扉のところであらうしているマ—ヴィ少佐と鉢合わせした。原因は、悪名高き鉄の蝦蟇と接触したこと。この「アイゼンクレーテ」なる便所蝦蟇は、究極の「男らしさ」の試金石だ。勲章も昇進も勝ちえたドイツ兵殺戮者も、^{クラウツ・キラー}「ヘゾーン」で最悪の営倉から脱走してきた（刃先に血をつけ珍鋒の先に糞をつけた）パッドな強者も、こいつの前では縮みあがり、気絶し、怖じ気づいて逃げ出す。中にはその場で嘔吐するやつもいる。というのも、「アイゼンクレーテ」は文字通り、写實的に鑄造された、千個のイボを持つ、ほのかな笑みを浮かべたとも噂される鉄の

26

311
ページ参照。

蝦蟇で、体長は最長部で一フィート、翼のこびりついた耐えがたい臭いの便器の底に潜んでいる。可変抵抗器を通して（欧州電力網）とつながっている。小便を垂れる男に流れる電流の強さはそのときどきで変わるが、致死量以下には抑えてある。背後で制御している者がたれなのかは知られていない（ブッツィその人だという説もあるが、この男、存在するかどうかも不明）。自動タイマーに接続されているだけかもしれないし、必ず感電するというわけでもなく、蝦蟇に小便をかけても何も感じないというケースもあるのだ。だが予断は許さない。やられる確率は充分高い。そのときは、しだれ落ちる金色の尿の滝を鮭がのぼり、ピラニアが襲う。あんたの体から、裏切者の塩と酸の溶液がハシゴのように降りていって（母なる大地）と接触するとき、巨大な、惑星大の電子プールから飛び出たエレキが、あんたをあんたの元型と同じにするのさ。あの伝説の酔いどれ男だよ。グデングデンに酔っぱらって、どこかの古い第三軌条に小便をひっかけた途端にバリバリと黒焦げになった。まるで夜そのものが癲癇発作を起こしたみたいな叫びを発して。だがそれは肉声じゃない、エレキの叫びだ。彼の人体をバリバリに引き裂く電流の叫びだ。最初の一声を上げる間もなく破壊された彼の容器を通して、無音から解放された電流が壮絶に叫ぶ。どのみち誰も聞いてないさ。線路脇をコツコツ歩いている警備員も、眠れぬ夜の時間を外をぶらついて過ごす老人も、無数の黄金虫が緑色の光雲をなす街灯の下でベンチに寝転び夢のまにまに首筋を引きつらせては緩めるホームレスも。おや、猫が交尾したのかい。強風に揺られて教会の鐘が鳴ったか。どこかでガラスが割れたんか。どっちの方から聞こえたのかもわからない、脅威の響きすらもない音。すぐまた太古からの、石炭とガスとリゾールの静寂にかき消されるだけの音。犠牲者は翌朝、別な誰かが発見する。とい

うか、〈ブッフィの館〉に來れば、いつの晩にも見つかる——もしあんたに、あの〈蝦蟇〉の上に小便をかける勇氣があるならね。今夜の少佐は軽いビリビリッですんだのだった。いま彼は、そのことで自分を褒めたい気分である。

「あのガマヤローも、それなりにがんばった」と、ボーディーンの首に腕をまわし、「だが今夜はヤツも懲りたろう、あのイボイボのケツに、おれは引導を渡してやったぞ」

「マーヴィ少佐、約束の『スノー』²⁷ですがね、壘半分、減っちゃいまして、すいません、でもそれで精一杯でした」

「気にすんな。ヴィースバーデン²⁷からここに来るまでに、鼻癖の悪いのがゴマンというだろ。三トンの粉も一日で吸っちゃうようなヤツラがな」消えた分は差し引きますというボーディーンの申し出にもかかわらず、少佐は全額を支払う。「ちよっと色をつけただけだ、ラニヤッブ²⁸ってえんだよ。これがデュエイン・マーヴィのやり方だ。コンチクシヨ²⁸め、蝦蟇の野郎に刺激されて、おれさまのチンコ、ウズウズしてしかたねえ、コンチクシヨ、どっかのかわいい娼婦²⁹に突っ込みたくなってきたわ。おい！ 船乗り、この辺でいいオンナがいるなあどこだ？」

船乗りは階下の遊女ハウスへと通じる階段を教える。そこにはまず個室スチームバスのような部屋があつて、やる気なら、特別料金なしに本番もできる。入口にいるマダムが——なんだよ、ハッハ！ この女、安葉巻くわえて、レズの男役かよ——マーヴィが「黒いの」をご所望だと聞いて、ピクリと眉を動かすが、大丈夫、ひとり当てがありますわ。「〈万国の娼館〉²⁹をめざしてはいませんが、バラエティには自信があつてよ」葉巻用パイプの先で各自のコールの書き込みをたどる。「サンドラは陳列会²⁹で、今ふさがっている

27 ドイツ南西部、フランクフルトに近い中核都市。

28 スペイン語に由来するルイジアナ州のクレオールで「ちよっとした心付け」の意味。

29 英語では House of All Nations。パリのシヤパネ通りのホテル内にあった高級娼館。十八世紀以来の歴史を一九四六年に閉じる。

おれ。帰つてくるまで。この子がお相手します。悦ばせのマヌエラよ」

マヌエラが身につけているのは頭上にかざした櫛と黒いレースのマントイラだけ。レースの影が黒い花となつて尻にしただれかある。口もとにプロの笑みを浮かべている。口元のアメリカ人少佐は早くも軍部を脱ぎだした。

「ウーッッッッッ！ 朋がけっころ焼けてんな。あんだ、黒い血がちょっぴり入ってねえか。メヒカーノの血か？ スペイン語、ワカル？ ユー・サベ・エスバニョール？ ユー・サベ・オマンヨ？」

「レ」今夜は地中海の女に決めよう。「あたしスバニョシタ。バレンシアから来た」

「バレンシアアア」同じ頭名の有名なメロディでマールヴィ少佐が歌う。「セニョリータ、マヌエラ・マヌエラ、サマキ・サマキ、シタステイナアアイン、ラーラ、ラーラ、ラーラ、ラーラ、ラアア……」彼女の手を取り、思ひ込んだ顔をしたマダムの周りを、ユー・スアッブで踊り回る。

マヌエラはどうしても調子を合わせる気にはなれない。バレンシアは、フランコに最後まで抵抗した都市である。彼女自身は、アストゥリアスの出身。その人々は、スペイン全土が内乱に巻き込まれる二年前に、すでにフランコの残虐な仕打ちを知らされていた。

彼女はモヒカに金を払うマールヴィの顔を見つめる。支払うこと。これは何にも増して根元的なアメリカ的行爲だ。そのときの顔はイタときの顔より、寝顔より、死んでいく時の顔よりももっと、おのれの本質を明かしている。彼女にとってマールヴィ少佐は、まったく切実ではないが、ほぼ最初のアメリカ人客だった。ここノブマフインの客はほとんどがイギリス人。戦中の客は——三八年に囚えられてから、彼女はいくつものキャンプを回りを回つ

30 マヌエラのヒット曲「バレンシア」を、

アメリカではポールのワイルマンの楽団が一九二六年に流行させた。マールヴィはそれを、無類な歌詞で歌い替えている。

31 一九三四年十月、

北部アメリカノア山地の山麓、方角のメーライキを築き、フランシス・マヌエラ少佐の指揮の下、マヌエラは、

ただろ——もうばらドイフ人だった。ファリスト一派が北部全域を占領してからは、寒い故郷の緑の山中に隠れ、撃つて逃げる戦いを続け、国際旅団³²に会いそこねた——たくさん外国語が飛び交ったバルセロナにも、バレンシアにも、行ったことはない。花も、子供たちも、口づけも知らずに戦った。そのバレンシアを今夜自分は故郷にしよう。……ジャ・サリモス・デ・エスパリーニャ……パ・ルチャール・エン・オストロス・フレンテス、アイ、マヌエラ、アイ、マヌエラ……

軍服をきちんとクローゼットに吊すと、マヌエラは客の後ろについて、熱気のなかへ、眼にまぶしいスチームで壁も見えない空間へ案内する。少佐の毛深い足、特大の尻、背中が蒸気でだんだん黒くにじんていく。他の客の姿は見えない。スチームに遮られてため息やうめき声が聞こえるだけ。ここ地下にあって、次元というものは無意味なのだ——部屋のサイズもどこまでも大きくなりうる。ひとつの街全体³³の大きさにも。タイルの敷かれた床には、穏やかとはいえない二回転対称の鳥の模様、その足の、黒みを帯びた黄色と青が、湯気立つ薄明のなかに見える唯一の色味だ。

「ウウウ、クソ熱い」浴槽のタイルの縁に汗でヌメヌメする巨体を滑らせ、マーヴィが香ばしい湯に浸かる。軍隊流に切った四角い足の爪が一番最後に入る。「ほおれ、みんなプールの中だ」陽気な大声で咆えながらマヌエラの足をつかんで引っぱった。以前に一、二度、タイルの上に転がされているマヌエラは——慰安婦仲間のひとりが骨折して運ばれるのも見ている——優美な身のこなしで接近し、股を開いて、尻から少佐の腹の上に思いきり倒れ込む。少しでも痛い思いをさせてやろうと。だが相手は笑いを崩さない。湯の温もりと浮力と包み込む騒音にすっかり身を委ねている——互いの名も知らぬファックと、と

の地域を制圧した。三六
年に全土に広がるスベ
イン内戦の序章となった出
来事。

32 スペイン内戦で、
ドイフ・イタリアのファ
リスト政権の援助を得た
フランコの軍に対抗すべ
く、各国から参加した人
民戦線の義勇軍。

33 訳は「我等はスベ
インの聖域を出た……別
のフロントで戦うため
に」。「アイ・マヌエラ」
と呼ばれるスペイン市民
戦争の共和国軍が歌い
いだ。メロディは古く、
十九世紀初頭に遡る。題
名もいろいろあって、
「³²」
「³³」
「³⁴」
「³⁵」
「³⁶」
「³⁷」
「³⁸」
「³⁹」
「⁴⁰」
「⁴¹」
「⁴²」
「⁴³」
「⁴⁴」
「⁴⁵」
「⁴⁶」
「⁴⁷」
「⁴⁸」
「⁴⁹」
「⁵⁰」
「⁵¹」
「⁵²」
「⁵³」
「⁵⁴」
「⁵⁵」
「⁵⁶」
「⁵⁷」
「⁵⁸」
「⁵⁹」
「⁶⁰」
「⁶¹」
「⁶²」
「⁶³」
「⁶⁴」
「⁶⁵」
「⁶⁶」
「⁶⁷」
「⁶⁸」
「⁶⁹」
「⁷⁰」
「⁷¹」
「⁷²」
「⁷³」
「⁷⁴」
「⁷⁵」
「⁷⁶」
「⁷⁷」
「⁷⁸」
「⁷⁹」
「⁸⁰」
「⁸¹」
「⁸²」
「⁸³」
「⁸⁴」
「⁸⁵」
「⁸⁶」
「⁸⁷」
「⁸⁸」
「⁸⁹」
「⁹⁰」
「⁹¹」
「⁹²」
「⁹³」
「⁹⁴」
「⁹⁵」
「⁹⁶」
「⁹⁷」
「⁹⁸」
「⁹⁹」
「¹⁰⁰」
「¹⁰¹」
「¹⁰²」
「¹⁰³」
「¹⁰⁴」
「¹⁰⁵」
「¹⁰⁶」
「¹⁰⁷」
「¹⁰⁸」
「¹⁰⁹」
「¹¹⁰」
「¹¹¹」
「¹¹²」
「¹¹³」
「¹¹⁴」
「¹¹⁵」
「¹¹⁶」
「¹¹⁷」
「¹¹⁸」
「¹¹⁹」
「¹²⁰」
「¹²¹」
「¹²²」
「¹²³」
「¹²⁴」
「¹²⁵」
「¹²⁶」
「¹²⁷」
「¹²⁸」
「¹²⁹」
「¹³⁰」
「¹³¹」
「¹³²」
「¹³³」
「¹³⁴」
「¹³⁵」
「¹³⁶」
「¹³⁷」
「¹³⁸」
「¹³⁹」
「¹⁴⁰」
「¹⁴¹」
「¹⁴²」
「¹⁴³」
「¹⁴⁴」
「¹⁴⁵」
「¹⁴⁶」
「¹⁴⁷」
「¹⁴⁸」
「¹⁴⁹」
「¹⁵⁰」
「¹⁵¹」
「¹⁵²」
「¹⁵³」
「¹⁵⁴」
「¹⁵⁵」
「¹⁵⁶」
「¹⁵⁷」
「¹⁵⁸」
「¹⁵⁹」
「¹⁶⁰」
「¹⁶¹」
「¹⁶²」
「¹⁶³」
「¹⁶⁴」
「¹⁶⁵」
「¹⁶⁶」
「¹⁶⁷」
「¹⁶⁸」
「¹⁶⁹」
「¹⁷⁰」
「¹⁷¹」
「¹⁷²」
「¹⁷³」
「¹⁷⁴」
「¹⁷⁵」
「¹⁷⁶」
「¹⁷⁷」
「¹⁷⁸」
「¹⁷⁹」
「¹⁸⁰」
「¹⁸¹」
「¹⁸²」
「¹⁸³」
「¹⁸⁴」
「¹⁸⁵」
「¹⁸⁶」
「¹⁸⁷」
「¹⁸⁸」
「¹⁸⁹」
「¹⁹⁰」
「¹⁹¹」
「¹⁹²」
「¹⁹³」
「¹⁹⁴」
「¹⁹⁵」
「¹⁹⁶」
「¹⁹⁷」
「¹⁹⁸」
「¹⁹⁹」
「²⁰⁰」
「²⁰¹」
「²⁰²」
「²⁰³」
「²⁰⁴」
「²⁰⁵」
「²⁰⁶」
「²⁰⁷」
「²⁰⁸」
「²⁰⁹」
「²¹⁰」
「²¹¹」
「²¹²」
「²¹³」
「²¹⁴」
「²¹⁵」
「²¹⁶」
「²¹⁷」
「²¹⁸」
「²¹⁹」
「²²⁰」
「²²¹」
「²²²」
「²²³」
「²²⁴」
「²²⁵」
「²²⁶」
「²²⁷」
「²²⁸」
「²²⁹」
「²³⁰」
「²³¹」
「²³²」
「²³³」
「²³⁴」
「²³⁵」
「²³⁶」
「²³⁷」
「²³⁸」
「²³⁹」
「²⁴⁰」
「²⁴¹」
「²⁴²」
「²⁴³」
「²⁴⁴」
「²⁴⁵」
「²⁴⁶」
「²⁴⁷」
「²⁴⁸」
「²⁴⁹」
「²⁵⁰」
「²⁵¹」
「²⁵²」
「²⁵³」
「²⁵⁴」
「²⁵⁵」
「²⁵⁶」
「²⁵⁷」
「²⁵⁸」
「²⁵⁹」
「²⁶⁰」
「²⁶¹」
「²⁶²」
「²⁶³」
「²⁶⁴」
「²⁶⁵」
「²⁶⁶」
「²⁶⁷」
「²⁶⁸」
「²⁶⁹」
「²⁷⁰」
「²⁷¹」
「²⁷²」
「²⁷³」
「²⁷⁴」
「²⁷⁵」
「²⁷⁶」
「²⁷⁷」
「²⁷⁸」
「²⁷⁹」
「²⁸⁰」
「²⁸¹」
「²⁸²」
「²⁸³」
「²⁸⁴」
「²⁸⁵」
「²⁸⁶」
「²⁸⁷」
「²⁸⁸」
「²⁸⁹」
「²⁹⁰」
「²⁹¹」
「²⁹²」
「²⁹³」
「²⁹⁴」
「²⁹⁵」
「²⁹⁶」
「²⁹⁷」
「²⁹⁸」
「²⁹⁹」
「³⁰⁰」
「³⁰¹」
「³⁰²」
「³⁰³」
「³⁰⁴」
「³⁰⁵」
「³⁰⁶」
「³⁰⁷」
「³⁰⁸」
「³⁰⁹」
「³¹⁰」
「³¹¹」
「³¹²」
「³¹³」
「³¹⁴」
「³¹⁵」
「³¹⁶」
「³¹⁷」
「³¹⁸」
「³¹⁹」
「³²⁰」
「³²¹」
「³²²」
「³²³」
「³²⁴」
「³²⁵」
「³²⁶」
「³²⁷」
「³²⁸」
「³²⁹」
「³³⁰」
「³³¹」
「³³²」
「³³³」
「³³⁴」
「³³⁵」
「³³⁶」
「³³⁷」
「³³⁸」
「³³⁹」
「³⁴⁰」
「³⁴¹」
「³⁴²」
「³⁴³」
「³⁴⁴」
「³⁴⁵」
「³⁴⁶」
「³⁴⁷」
「³⁴⁸」
「³⁴⁹」
「³⁵⁰」
「³⁵¹」
「³⁵²」
「³⁵³」
「³⁵⁴」
「³⁵⁵」
「³⁵⁶」
「³⁵⁷」
「³⁵⁸」
「³⁵⁹」
「³⁶⁰」
「³⁶¹」
「³⁶²」
「³⁶³」
「³⁶⁴」
「³⁶⁵」
「³⁶⁶」
「³⁶⁷」
「³⁶⁸」
「³⁶⁹」
「³⁷⁰」
「³⁷¹」
「³⁷²」
「³⁷³」
「³⁷⁴」
「³⁷⁵」
「³⁷⁶」
「³⁷⁷」
「³⁷⁸」
「³⁷⁹」
「³⁸⁰」
「³⁸¹」
「³⁸²」
「³⁸³」
「³⁸⁴」
「³⁸⁵」
「³⁸⁶」
「³⁸⁷」
「³⁸⁸」
「³⁸⁹」
「³⁹⁰」
「³⁹¹」
「³⁹²」
「³⁹³」
「³⁹⁴」
「³⁹⁵」
「³⁹⁶」
「³⁹⁷」
「³⁹⁸」
「³⁹⁹」
「⁴⁰⁰」
「⁴⁰¹」
「⁴⁰²」
「⁴⁰³」
「⁴⁰⁴」
「⁴⁰⁵」
「⁴⁰⁶」
「⁴⁰⁷」
「⁴⁰⁸」
「⁴⁰⁹」
「⁴¹⁰」
「⁴¹¹」
「⁴¹²」
「⁴¹³」
「⁴¹⁴」
「⁴¹⁵」
「⁴¹⁶」
「⁴¹⁷」
「⁴¹⁸」
「⁴¹⁹」
「⁴²⁰」
「⁴²¹」
「⁴²²」
「⁴²³」
「⁴²⁴」
「⁴²⁵」
「⁴²⁶」
「⁴²⁷」
「⁴²⁸」
「⁴²⁹」
「⁴³⁰」
「⁴³¹」
「⁴³²」
「⁴³³」
「⁴³⁴」
「⁴³⁵」
「⁴³⁶」
「⁴³⁷」
「⁴³⁸」
「⁴³⁹」
「⁴⁴⁰」
「⁴⁴¹」
「⁴⁴²」
「⁴⁴³」
「⁴⁴⁴」
「⁴⁴⁵」
「⁴⁴⁶」
「⁴⁴⁷」
「⁴⁴⁸」
「⁴⁴⁹」
「⁴⁵⁰」
「⁴⁵¹」
「⁴⁵²」
「⁴⁵³」
「⁴⁵⁴」
「⁴⁵⁵」
「⁴⁵⁶」
「⁴⁵⁷」
「⁴⁵⁸」
「⁴⁵⁹」
「⁴⁶⁰」
「⁴⁶¹」
「⁴⁶²」
「⁴⁶³」
「⁴⁶⁴」
「⁴⁶⁵」
「⁴⁶⁶」
「⁴⁶⁷」
「⁴⁶⁸」
「⁴⁶⁹」
「⁴⁷⁰」
「⁴⁷¹」
「⁴⁷²」
「⁴⁷³」
「⁴⁷⁴」
「⁴⁷⁵」
「⁴⁷⁶」
「⁴⁷⁷」
「⁴⁷⁸」
「⁴⁷⁹」
「⁴⁸⁰」
「⁴⁸¹」
「⁴⁸²」
「⁴⁸³」
「⁴⁸⁴」
「⁴⁸⁵」
「⁴⁸⁶」
「⁴⁸⁷」
「⁴⁸⁸」
「⁴⁸⁹」
「⁴⁹⁰」
「⁴⁹¹」
「⁴⁹²」
「⁴⁹³」
「⁴⁹⁴」
「⁴⁹⁵」
「⁴⁹⁶」
「⁴⁹⁷」
「⁴⁹⁸」
「⁴⁹⁹」
「⁵⁰⁰」
「⁵⁰¹」
「⁵⁰²」
「⁵⁰³」
「⁵⁰⁴」
「⁵⁰⁵」
「⁵⁰⁶」
「⁵⁰⁷」
「⁵⁰⁸」
「⁵⁰⁹」
「⁵¹⁰」
「⁵¹¹」
「⁵¹²」
「⁵¹³」
「⁵¹⁴」
「⁵¹⁵」
「⁵¹⁶」
「⁵¹⁷」
「⁵¹⁸」
「⁵¹⁹」
「⁵²⁰」
「⁵²¹」
「⁵²²」
「⁵²³」
「⁵²⁴」
「⁵²⁵」
「⁵²⁶」
「⁵²⁷」
「⁵²⁸」
「⁵²⁹」
「⁵³⁰」
「⁵³¹」
「⁵³²」
「⁵³³」
「⁵³⁴」
「⁵³⁵」
「⁵³⁶」
「⁵³⁷」
「⁵³⁸」
「⁵³⁹」
「⁵⁴⁰」
「⁵⁴¹」
「⁵⁴²」
「⁵⁴³」
「⁵⁴⁴」
「⁵⁴⁵」
「⁵⁴⁶」
「⁵⁴⁷」
「⁵⁴⁸」
「⁵⁴⁹」
「⁵⁵⁰」
「⁵⁵¹」
「⁵⁵²」
「⁵⁵³」
「⁵⁵⁴」
「⁵⁵⁵」
「⁵⁵⁶」
「⁵⁵⁷」
「⁵⁵⁸」
「⁵⁵⁹」
「⁵⁶⁰」
「⁵⁶¹」
「⁵⁶²」
「⁵⁶³」
「⁵⁶⁴」
「⁵⁶⁵」
「⁵⁶⁶」
「⁵⁶⁷」
「⁵⁶⁸」
「⁵⁶⁹」
「⁵⁷⁰」
「⁵⁷¹」
「⁵⁷²」
「⁵⁷³」
「⁵⁷⁴」
「⁵⁷⁵」
「⁵⁷⁶」
「⁵⁷⁷」
「⁵⁷⁸」
「⁵⁷⁹」
「⁵⁸⁰」
「⁵⁸¹」
「⁵⁸²」
「⁵⁸³」
「⁵⁸⁴」
「⁵⁸⁵」
「⁵⁸⁶」
「⁵⁸⁷」
「⁵⁸⁸」
「⁵⁸⁹」
「⁵⁹⁰」
「⁵⁹¹」
「⁵⁹²」
「⁵⁹³」
「⁵⁹⁴」
「⁵⁹⁵」
「⁵⁹⁶」
「⁵⁹⁷」
「⁵⁹⁸」
「⁵⁹⁹」
「⁶⁰⁰」
「⁶⁰¹」
「⁶⁰²」
「⁶⁰³」
「⁶⁰⁴」
「⁶⁰⁵」
「⁶⁰⁶」
「⁶⁰⁷」
「⁶⁰⁸」
「⁶⁰⁹」
「⁶¹⁰」
「⁶¹¹」
「⁶¹²」
「⁶¹³」
「⁶¹⁴」
「⁶¹⁵」
「⁶¹⁶」
「⁶¹⁷」
「⁶¹⁸」
「⁶¹⁹」
「⁶²⁰」
「⁶²¹」
「⁶²²」
「⁶²³」
「⁶²⁴」
「⁶²⁵」
「⁶²⁶」
「⁶²⁷」
「⁶²⁸」
「⁶²⁹」
「⁶³⁰」
「⁶³¹」
「⁶³²」
「⁶³³」
「⁶³⁴」
「⁶³⁵」
「⁶³⁶」
「⁶³⁷」
「⁶³⁸」
「⁶³⁹」
「⁶⁴⁰」
「⁶⁴¹」
「⁶⁴²」
「⁶⁴³」
「⁶⁴⁴」
「⁶⁴⁵」
「⁶⁴⁶」
「⁶⁴⁷」
「⁶⁴⁸」
「⁶⁴⁹」
「⁶⁵⁰」
「⁶⁵¹」
「⁶⁵²」
「⁶⁵³」
「⁶⁵⁴」
「⁶⁵⁵」
「⁶⁵⁶」
「⁶⁵⁷」
「⁶⁵⁸」
「⁶⁵⁹」
「⁶⁶⁰」
「⁶⁶¹」
「⁶⁶²」
「⁶⁶³」
「⁶⁶⁴」
「⁶⁶⁵」
「⁶⁶⁶」
「⁶⁶⁷」
「⁶⁶⁸」
「⁶⁶⁹」
「⁶⁷⁰」
「⁶⁷¹」
「⁶⁷²」
「⁶⁷³」
「⁶⁷⁴」
「⁶⁷⁵」
「⁶⁷⁶」
「⁶⁷⁷」
「⁶⁷⁸」
「⁶⁷⁹」
「⁶⁸⁰」
「⁶⁸¹」
「⁶⁸²」
「⁶⁸³」
「⁶⁸⁴」
「⁶⁸⁵」
「⁶⁸⁶」
「⁶⁸⁷」
「⁶⁸⁸」
「⁶⁸⁹」
「⁶⁹⁰」
「⁶⁹¹」
「⁶⁹²」
「⁶⁹³」
「⁶⁹⁴」
「⁶⁹⁵」
「⁶⁹⁶」
「⁶⁹⁷」
「⁶⁹⁸」
「⁶⁹⁹」
「⁷⁰⁰」
「⁷⁰¹」
「⁷⁰²」
「⁷⁰³」
「⁷⁰⁴」
「⁷⁰⁵」
「⁷⁰⁶」
「⁷⁰⁷」
「⁷⁰⁸」
「⁷⁰⁹」
「⁷¹⁰」
「⁷¹¹」
「⁷¹²」
「⁷¹³」
「⁷¹⁴」
「⁷¹⁵」
「⁷¹⁶」
「⁷¹⁷」
「⁷¹⁸」
「⁷¹⁹」
「⁷²⁰」
「⁷²¹」
「⁷²²」
「⁷²³」
「⁷²⁴」
「⁷²⁵」
「⁷²⁶」
「⁷²⁷」
「⁷²⁸」
「⁷²⁹」
「⁷³⁰」
「⁷³¹」
「⁷³²」
「⁷³³」
「⁷³⁴」
「⁷³⁵」
「⁷³⁶」
「⁷³⁷」
「⁷³⁸」
「⁷³⁹」
「⁷⁴⁰」
「⁷⁴¹」
「⁷⁴²」
「⁷⁴³」
「⁷⁴⁴」
「⁷⁴⁵」
「⁷⁴⁶」
「⁷⁴⁷」
「⁷⁴⁸」
「⁷⁴⁹」
「⁷⁵⁰」
「⁷⁵¹」
「⁷⁵²」
「⁷⁵³」
「⁷⁵⁴」
「⁷⁵⁵」
「⁷⁵⁶」
「⁷⁵⁷」
「⁷⁵⁸」
「⁷⁵⁹」
「⁷⁶⁰」
「⁷⁶¹」
「⁷⁶²」
「⁷⁶³」
「⁷⁶⁴」
「⁷⁶⁵」
「⁷⁶⁶」
「⁷⁶⁷」
「⁷⁶⁸」
「⁷⁶⁹」
「⁷⁷⁰」
「⁷⁷¹」
「⁷⁷²」
「⁷⁷³」
「⁷⁷⁴」
「⁷⁷⁵」
「⁷⁷⁶」
「⁷⁷⁷」
「⁷⁷⁸」
「⁷⁷⁹」
「⁷⁸⁰」
「⁷⁸¹」
「⁷⁸²」
「⁷⁸³」
「⁷⁸⁴」
「⁷⁸⁵」
「⁷⁸⁶」
「⁷⁸⁷」
「⁷⁸⁸」
「⁷⁸⁹」
「⁷⁹⁰」
「⁷⁹¹」
「⁷⁹²」
「⁷⁹³」
「⁷⁹⁴」
「⁷⁹⁵」
「⁷⁹⁶」
「⁷⁹⁷」
「⁷⁹⁸」
「⁷⁹⁹」
「⁸⁰⁰」
「⁸⁰¹」
「⁸⁰²」
「⁸⁰³」
「⁸⁰⁴」
「⁸⁰⁵」
「⁸⁰⁶」
「⁸⁰⁷」
「⁸⁰⁸」
「⁸⁰⁹」
「⁸¹⁰」
「⁸¹¹」
「⁸¹²」
「⁸¹³」
「⁸¹⁴」
「⁸¹⁵」
「⁸¹⁶」
「⁸¹⁷」
「⁸¹⁸」
「⁸¹⁹」
「⁸²⁰」
「⁸²¹」
「⁸²²」
「⁸²³」
「⁸²⁴」
「⁸²⁵」
「⁸²⁶」
「⁸²⁷」
「⁸²⁸」
「⁸²⁹」
「⁸³⁰」
「⁸³¹」
「⁸³²」
「⁸³³」
「⁸³⁴」
「⁸³⁵」
「⁸³⁶」
「⁸³⁷」
「⁸³⁸」
「⁸³⁹」
「⁸⁴⁰」
「⁸⁴¹」
「⁸⁴²」
「⁸⁴³」
「⁸⁴⁴」
「⁸⁴⁵」
「⁸⁴⁶」
「⁸⁴⁷」
「⁸⁴⁸」
「⁸⁴⁹」
「⁸⁵⁰」
「⁸⁵¹」
「⁸⁵²」
「⁸⁵³」
「⁸⁵⁴」
「⁸⁵⁵」
「⁸⁵⁶」
「⁸⁵⁷」
「<

ろけるようなゆったり感に。少佐のペニスが太く赤々と勃起するや、さっそく女の股間に滑り込んだ。こわばった女の顔が、黒っぽく湿ったスパニッシュ・レースの雲に半ば隠れる。視線は決して彼に向けない。故郷を夢見るふたつの瞳が、風呂場の湯気の中をさまよう。

それはかまわない、目とファックしてるわけじゃない、女の顔など見えなきやそれに越したこたあないのだ。褐色の肌と閉じた口と、甘美なニグロの従順さだけあればいい。女はこっちの言うがまま。頭を水の中に押さえつけてそのまま溺れさせたってかまやしねえし（こないだ、フランクフルトの売女でやってみたが）手を反らせて指をへし折るのも思いのままだ。ピストルで殴打してもいいし、噛みついて出血させるんもいい……想像は多数の暴力シーンであふれかえるのだがそこには思うほどエロスの味わいはない——少佐の頭を占めているのは突進し、衝突し、貫通する、その種の軍事的な利得なのだ。だからといって少佐が行為を普通に愉しんでないってことじゃないし、それをいうならマヌエラだって、赤くて硬いシャフトの上で、滑り上がったたり降りたりする運動を、気楽なアスレチック感覚で楽しみ始めてもいる——もっとも心はここにあらず、無数の思いをさまよっている。サンドラの着ている素敵なワンピースのこと、いろんな歌の歌詞、左の肩胛骨の下が痒いこと、夕食時のバーを通ってきたとき目にした背の高いイギリス兵の、肘までまくりあげたシャツの下の褐色の腕が、亜鉛のテーブル面に映えていたこと……

湯気の中で声が沸きおこった。警告の声。シャワーシューズで逃げていく足音。去っていくシルエツト。くぐもった灰色の撤退。「何の騒ぎだ」絶頂の寸前まできていたマーヴイ少佐は氣勢をそがれ、両肘をついて身を起こし、あっちこっち見透かしている。勃起が

けて更衣室を去り、階段を昇り、バーに入ったところで赤帽子の連中と鉢合わせした。まゐるまゐる、簡連隊が足取りを合わせて彼に向かって行進してくる。おい、まじか。

「諸君、逃げ出した豚がここにいたぞ」あばた顔、ふんにやりしたゲジゲジの口髭。その男がビーストルで少佐の頭に狙いをつけた。隊全体が駆けよる。周囲を押し分け、背広の男が一人前に出てきた。つるりとした頬にスベードがダークに燃えている。

「よろしい。ドクター・マフェッジが医療搬送車とともに待っている。曹長、われわれに危険がなくなるまで、ちょっとした間、兵士を二人ほど貸していただけないか」

「もちろんです」スチームと慰撫とで力の抜けた両手首を、巧みに捻って腰の上にもっていく。怒声を浴びせる暇もないほどの早業だ——冷たい鋼がカチャカチャ動く。深夜の電話のダイヤルのようだ。その呼び出しに地獄のだれかが応えたとでも……

「べらぼうめ」絞りだした声は仮面のマフラーに抑えつけられ、耳にいたく反響する。

「この野郎、気が違ったか、わしが誰かもわからんのか」

いや、ちょっと待った。自分の身分証とコカインが同じポケットに入った軍服が見つかってしまったるわけだ。いま名前を名乗り出るのは、あんまり賢いこととは……

「スロースロップ中尉に間違いないな。さあ、一緒にきてもらおう」

少佐は黙ったままだ。スロースロップか、よっしゃ。今は様子見だ、事情を知ること、ヤクの件は後で解決を図る。無言で通す。濡れ衣を着せられたことにする。腕のいいユダヤ人の弁護士が見つかるだろう。こいつらに誤認逮捕の罪を着せられるのが。

ドアを抜け、外に出るとマーヴィはエンジンをつかして待機中の搬送車に乗せられる。ドアを抜け、外に出るとマーヴィはエンジンをつかして待機中の搬送車に乗せられる。搬送車の運転手は顔隠しにキラリと夜をみやうて、クラッチをつなぐ。もうひとりの背広

とMP二人が、マーヴィの膝と胸のところをストラップで担架にくくりつける。抵抗を考
える間もないほどの素早さだ。

停車したのは一度。軍用トラックの前でMPを降ろしたあとは、ひたすら走る。クック
スハーフェンへ行くのか。一面の闇、車の外も月光に薄められた闇夜。マーヴィには何も
わからない。

「鎮静剤、いま射つときですかね」スペードのエースがマーヴィの脇に屈み込む。医療カ
バンの注射液のアンブルにポケット懐中電灯の光を当てる。注射器と針とがカチカチ揺れ
る。

「そうだな。射つところか。もうすぐだろうから」

「わからんなあ。どうしてどこかの病院とか、用意してくれなかったんだろう」
運転席の男が笑う。「そりゃあ、理由があるのさ」

注射器に液がゆっくり上がっていく。「まあ、われわれは命令を受ける身だから……つ
まるところ、できるのは——」

「まあねえ、これは手術といっても、そう見てくれのいいもんでもないしねえ」

「おい」マーヴィ少佐は頭を起こそうとする。「手術だ？ どういうことなんだ、えっ」

「しー」豚衣装の片方の袖が引き裂かれ、マーヴィの腕がむき出しになる。

「やめろ、注射はいらねえ——」だが、もうひとりが抑えつけるまでもなく、針先が血管
に刺さった。液が入っていく。「本当だ、人違いなんだぞ、わかってるのか」

「もちろん、わかってますよ、中尉さん」

「ほれみろ、ヘイ、人違いだ。おれは少佐だから」もっと威厳をもって強調したい点で

はあるが、くそいまいましい豚の仮面が邪魔しやがる——発声のすべてが、平べったい、メタリックな声になって跳ね返ってきてしまふ……こいつらに聞こえてないのか。「おれはデュエイン・マーヴィ少佐なんだぞ」彼らは信じない。彼の名前を信じない。名前すらも信じない。……いまだ鎮静作用が届いていない深みでパニックが始まった。本物の恐怖にかられ、暴れ馬のように跳び上がるとしたら、ストラップの巻いてある胸の小さな筋肉が意味なく疼いた。なんてことだ。あらん限りの叫びを発する。言葉のない、ただの叫び。紐で締め付けられた胸に最大限可能な音量の叫び。

「頼むから」運転手席でため息がもれる。「おとなしくさせられないか、スポントゥーン君」

スポントゥーンはすでに豚の仮面を剥ぎとり、その顔に片手でガーゼを押し当てた。もう一方の手から——のたうつ頭が真下に来たとき——エーテルの液が落ちる。「ポイントマンもとうとう気が触れたな」彼はそう言わずにはいられない。イライラが限界に達したのだ。「こいつの性格を『おとなしく騒ぎ知らず』と言ってたろう」

「オーライ、岸辺についたぞ。どこにも人影はないな」マフェッジは水辺に向かって車を走らせる。浜辺の砂は搬送車が走れるくらいには締まっている。小さな月は今がちょうど南中時、すべてが白く照らされている……完全な凍てつき。

「オオ」マーヴィがうめく。「オオ、ファック、オオ、ノオ。オオ・ジーザス」その言葉は、クスリのせいだんだん弱く、マフェッジが車を停める頃には、縛り紐への抵抗もだいぶ衰えた。くすんだ車体が、広大なビーチに遺棄されたオリイヴの粒のよう。海面の巨大な滑らかさが月へと伸びる、北風の地の鳴居まで。

「時間はたっぷりある」時計を見ながらマフェッジが、「C-47³⁴が飛ぶのは一時だ。ちょっとなら延びてもいいと言われている」業務の前に安堵の一息。

「この男の交友関係ときたら、まったく」スポントゥーンは首を振りながら、消毒薬に浸した道具を取りだして担架の横の殺菌ずみの布に並べる。「なんというべきか、犯罪人生に足を踏み入れないことを願うしかないね」

「ファック」マーヴィ少佐の静かなうめき。「オー、ファック・ミー」

男ふたり、すでに手洗いを済ませ、マスクをし、ゴム手袋をはめた。マフェッジの点けた車内灯が見下ろす。ソフトな明るい眼玉。戦場の急務に慣れたプロの技術屋ふたりが、迅速な仕事を黙々とこなしていく。時折、横たわる男の口から、言葉が、ささやきが漏れる。エーテルに浸かった闇の中を後退していく光の点に、失われた自己の残りの一点に、すがりつこうとするかのような。

作業としては簡単なのだ。ピロード地の股の部分を裂いて穴を開ける。陰囊は剃らずに進めるのがマフェッジの判断だ。ヨードチンキをつけ、それから赤い血管の浮きでた陰毛つきの袋もろとも睾丸をギュッと絞り、皮膚と回りの薄膜を手早くスパッと切開する。傷の中からあふれ出す血とともに睾丸をポンと出し、それをつないでいる硬軟の紐状の組織がしっかり見えるように左手で引っ張り出して、灯りの下にピンと張る。いささか月光の狂気に染まった男の手が、ひと気ない浜辺に弦琴の音を鳴らそうというのか、彼の手が一瞬止まった。が、次の瞬間には、職務遂行の意識に駆られ、気乗りせぬまま、ぬんめりとした玉から適切な距離にメスを当てる。スパッ。切開箇所にはすぐに消毒薬。二つのきれいな切口は最後に縫い合わされる。摘出した睾丸はアルコールの壺の中へ、ポチヨン。

34 米軍の輸送機。ダグラスDC-3と同型。

「ポイントマンへのお土産だ」マフェッジはため息ながらに手術用手袋を外す。「こいつにもう一本注射を打っておこう。眠ったままにしておいた方がいい。ロンドンに戻ってから、誰かが説明してくれるさ」

マフェッジはエンジンをかけ、半円を描いてバックし、さっきの道をおもむろに戻っていく。後景をなす大海は静止したまま。

〈プッツィの館〉。ベッドの中、ノリの効いたシーツの間で、スロースロップがソランジの横に丸くなって眠り、ツヴェルフキンダーの夢を見ている。ビアンカが微笑んだ。ふたりは今観覧車の中だ。そのコンパートメントが部屋になった。見たこともない部屋だ、ひとつの都市ほどもある巨大なアパート複合体の一室。その廊下を車も自転車も走っていくことができる。両側に木々が立ち並び、枝で鳥がさえずっている。

不思議なことに「ソランジ」も一緒に、同じビアンカの夢を見ている。同じといっても別な相に生まれた、イルゼという彼女自身の子供の夢だ。³⁵イルゼは永遠に停まりそうもない長い貨物列車に乗って、〈ゾーン〉の中を当てもなくさまよっている。不幸というわけでもなく、ことさら父親を探し求めているのでもない。だが娘に対してレニが以前に夢みたことは変えられようとしている。彼女はだれにも使われるまい。変化はあり、旅立ちもある。だが同時に、まったく思いがけない援助もある。日々の見知らぬ出会いのなか、この流れゆく〈屈辱〉の偶然の出来事のなかに、助けになるものが潜んでいる。永遠に消滅しない、小さな、稀少な、慈悲の可能性が……

上の階ではメルナーという男が、カバンに夜の宝物——アメリカ人少佐の軍服と書類、そして二オンス半のコカイン——を詰め込んで、毛むくじやらの米海軍の水兵に説明して

35 ビアンカとイルゼの「同一性」については343ページにも記されていた。

いる。フォン・ゲール氏は非常に多忙な方で、自分の知るかぎり、今夜は北でビジネスにかかり切りだ。クックスハーフェンまで持ってくるよう託された書類は一つもない。除隊証明書もバスポートも、何一つ預かってはいない。お気の毒だが、あなたの友人が、何か勘違いをされたのではないか。あるいは、単にちょっと遅れているだけのこともかもしれない。偽造に時間がかかるのは了承していただけないか。

ボーディーンはメルナーが去るのを見つめる。そのカバンの中身は不明である。アルバート・クリプトンは酔いつぶれている。シャーリーが部屋にふらりと入ってくる。黒のガーターベルトにストッキング姿、目を輝かせ、落ちつきがない。それっぽい顔をして、「フン」と言った。

「フン」とボーディーンが返す。

「言っときますけど、バルジの戦いときは、たった十セントしかとってませんからね」

□ □ □ □ □ □ □

きて——オランダからヴァイスマンの砲兵隊を追って、海浜の沼地とルピナスの草むら、牛の死骸を踏み越えた彼がついに見たもの、それがこれなのか。迷信を信じない男でよかった。さもなくば、預言された光景として受けとっただろう。もちろん、目の前のシーンをまったく合理的に説明することも可能なわけだが、しかしチチエーリンは『マルティン・フィエロ』を読んでいなかった。

低い丘の上に杜松の群生したところがあって、チチエーリンはそこを仮の司令所にしてゐる。双眼鏡の中に、ギターを持った男がふたり見える。ひとりには白人、もうひとりには黒人。その回りを町の人々を取り囲む。楕円の視野に切りとられたこの図は、構図的に十年以上も前に中央アジアの平らな草原の中で見た男／女の歌のマッチと変わらない——対極にある二者が一つに交わる図だ。それはあのとき、チチエーリンにとって、ヘキルギスの光へへの接近のシグナルとなった。こんどのこれは、何のシグナルなのか？

頭上の空は筋模様で大理石のように硬い。彼は確信する。ヴァイスマンがヘSの装置を破壊した000000号を発射したのはこの近くだと。エンフィアンもまもなく打ち上げ

1 上巻 732 ページ参照。

るだらう。その場所はずっとここだ。

だが、チチェーリンは待たねばならない。以前ならそれは耐えられないことだったろう。が、マーヴィ少佐が姿を消して以来、チチェーリンは少々用心深くなった。マーヴィは鍵の人物だ。ノブソンには対抗勢力が存在する。森の空き地への襲撃が見事に失敗した、その直前に現れたソヴィエトの情報部員とは誰なのか？ 誰が「ヘシュヴァルツコマンド」に襲撃を漏らしたのか？ 誰がマーヴィを消したのか？

「ロケット・カルテル」の存在を、彼はつとめて信じすぎないようにしていた。啓示がおとずれた晩、マーヴィが酔っぱらい、ブラッディ・チクリッツがハーバート・フォーヴァーの美徳を語ったあの晩から——証拠を待つことに決めていた。ゲアハルト・フォン・ゲールは、鎧足を持つ企業のように、およそ買収可能なすべてのものを抱きこもうとしている。この男は、本人にその自覚があるかはともかく、カルテルの一味と考えていい。チチェーリンは先週、モスクワに帰るはずだったのが、直前に取りやめた。というのも、V I A Mの一員であるムラヴェンコと、ベルリンで短時間会ったのだ。ティーアガルテンで、陽光のなかをふたりの将校が散策しているふりをして。舗道にあいた穴に、作業員が冷たい土砂を入れてはシャベルで叩いて平らにしていた。骨組みだけの自転車をカチャンカチャンと操って通りすぎる人たちがいた。市民も軍人も少人数が固まって、木々の下や倒れた幹、トラクタの車輪に腰を降ろし、袋や書類カバンの中をまさぐりながら取り引きをしていた。「マズイことになったぞ、君は」とムラヴェンコが言った。

ムラヴェンコも三〇年代の中央アジアに派遣され、外地の生活をしていた仲間である。彼は当地においては比類のない、マニアックな、定石を無視するチェスを指した。趣味は

2

322 ページ参照。

3

上巻 522 ページ参照。

最悪で、「目隠しチェス」すら平気でやるのだから、ふつうの感覚のロシア人には正視に耐えない。チチェーリンの頭の中は、盤に向かうたび、前回以上にひっかかり回されるのだが、それでも努めてニコヤカに、相手が理性的なチェスを打つよう粘り強くつきあった。ほとんどのゲームでチチェーリンは負けた。だがムラヴェンコを避ければ七河地方の冬と向かいあうしかない。

「一体何が起きているのか、君にわかるか？」

ムラヴェンコは笑った。「わかるやつがいるのかい。モロトフはヴィシンスキーに話していない^{*4}。だが連中は君については調べているぞ。へキルギスの光の件があったよな。忘ればすまい。そう、そのことが彼らに知られたんだ。俺がしゃべったんじゃないぞ。それでも誰かから聞きだした」

「そんな大昔の話を、どうしていま持ちだすんだ？」

「あんたは『使える』と見られてるからな」とムラヴェンコ。

ふたりはしばしの間、見つめあった。「使える」と言われることは、死刑の宣告と同じだった。その「有用さ」は公式声明^{コミュニケ}と同じで、すぐに無用のものとなる。ムラヴェンコは恐れていた。チチェーリンひとりの運命だけでなく。

「君の方はどうするつもりなんだ、ムラヴェンコ」

「せいぜい使えない男でいるさ。だが、彼らも完璧ではない」恐怖を減じるための発言だ。ということとはわかったが、まるで気休めになっていなかった。「何が人を有能にするのか、というところは把握していない。統計に基づいて決めていくんだ。あんたが、戦争中

4 ヴァチエスラウ・モロトフは、戦時外交におけるスターリンの片腕。一九三九年から四五年までソ連の外務人民委員を努めた。アンドレー・ヴィシンスキーは検察のトップとして「大粛清」を指揮した男。

「クがきつゝなるな」

「それでもお生きのびるかもしれないぞ」モスクワへ飛ぼうという考えが浮かんだのはそのときだった。しかしほとんど同時に、ヴァイスマンの砲兵隊の跡が「荒野」で途絶えたという報せが入ってきた。エンフィアンに会えるかもしれない——よみがえった期待が、モスクワ行きにストップをかけた。期待とともに強まる誘惑。エンフィアンと出会って後、なお自分が生きのびるなどということは日に日に考えにくくなっていった。もとより生きのびるとは思っていなかった。問題は、自分が彼らにやられる前にエンフィアンをやることのできるかどうかだ。……そのための、わずかな時間さえ得られればいい……彼らがエンフィアンをも探しているなら、期待が持てる。あるいは、*ヘSゲレート*を探して、その目的にエンフィアンを利用してゐるのなら——チチエーリンがスロースロップを利用してゐるのと同じように……

地平線はまだはつきり見える。今日は一日中晴朗だった。糸杉の形をした杜松は錆色にかすむ遠景で記念碑のごとく動かない。今年初めて、ヘザーの花が紫色にはころび始めている。あたりの静けさに晩夏のせわしさはない。これは、墓所の静けさだ。有史以前、ゲルマン民族の間で、この一帯は実に死者の領土だったのだ。

国籍を数えれば一ダースほどになるだろうか。みんなアルゼンチンの牧場労働者の恰好をして、スーパ配給所に群がっている。エル・ニャートはガウチヨがよくやるように馬の鞍の上に立って、ドイツに広がるパンパスを見やっている。日向でひざまずいているフェリペは、アンデス東斜面、ラ・リオハ州の荒地に生きておわす岩に向かって正午の祈りを捧げている。アルゼンチンに前世紀から伝わる伝説によれば、マリア・アントーニア・コ

レアは恋人の後を追ひ、生まれたばかりの子どもを抱いてその荒野へ入っていった。⁵一週間後、羊飼いに発見された彼女は死んでいたが、赤ん坊は母親の屍から滋養を得て生きていた。それ以来、奇跡が行なわれた近くの岩には毎年恒例の巡礼者が訪れる。しかし、フエリベが祈りを捧げる特定の岩には知の系路が備わっているのだ。彼は(M・F・ビール⁶らと同じく)鉱物の意識というものを信じている。それは植物や動物の意識と大きくは違わないが、一点、時間のスケールが違う。鉱物の時間は異様に引き延ばされているのだ。

「一世紀に何コマという動きなんだ」と、このごろではみんなと一緒に映画の言葉を使うフェリベが言う、「いや千年紀か。フレーム・パー・ミレニアム⁷」それはすごい。岩と交感できない人にはなかなか感知しにくいことを彼は認識するに至った。それは、この世に展開する歴史というのが全体の一片にすぎない、それは単に外的で可視的な部分にすぎないのであって、真の歴史を知ろうとするなら、われわれを包む、語られざる無音の闇にも目を向けなくてはならない。歴史の層を掘り下げ、次の岩床まで至る経路⁸を探り、幾億年もの女性的な水と空気の忍耐を見すえ(そこで百年に一枚か二枚のコマ撮りをするのは誰だ?)さらなるロウ・ランドへ、きみの人間的な経路と鉱物的な経路が交わることとなる基底の国へ想いをはせる……

グラシエラ・イマゴ・ポルタレスの長い黒髪が、左右に均しく分かれて背中に垂れる。丈の長い黒の乗馬スカートに黒いブーツ姿で腰をおろし、トランプ・カードを切り、自分ひとりの慰みに、フラッシュ、フルハウス、フォーカードを配って悦に入る。エキストラは誰ひとりといっていいほど遊具を持ってきていない。彼女にはこうなるとわかっていた。かつて彼女は思っていた——ゲームにだけ使っていれば、お金はリアリティを失い、枯れ

5 アルゼンチンの内戦時(一八四〇年頃)戦場で病気に倒れ置き去りにされた夫を救おうと、赤児とサン・フアン州の砂漠を歩いて力尽きた。アルゼンチンやチリでは「亡骸のコレア Dientes Corea」として民間信仰の対象になっている。

6 ビンチョンヤリチャード・フアリーニャと同時期に同じコーネル大学の学生だった文学仲間で、共通の友人デヴィッド・シェツリン(上巻737ページ註38)と結婚した。彼女の小説Amazon Oneのカバーにビンチョンが推薦文を寄せたことがある。

7 映画で一秒のコマ数を言う“frames per second”のもじり。

果ててしまふんじゃないかと。でも、実際は、そんな考え自体が、ひとり遊びにすぎなかったようだ。この地に着いてから、彼女を見るベラウステギの目線が以前にまして強くなつたのを感じる。彼女にしても、かれの計画の脅威にはなりたくない。この堅物のエンジンニアとベッドを共にしたこともあった（最初ブエノスアイレスにいたときには、こんな男を吸うのは、銀のストローでもごめんだわと思っていたのに）。彼もまたギャンブラー。

似合いのペアだ。対面でつながっている。彼に最初に触れられたときに、回路がつながつたのだ。この人は自分のオッズを知っている。リスクの形を体で知っている——愛される肉体の親密さで。どの瞬間にも、他の瞬間の他の「手」に対して勝つ確率が数値と意識され、その値が刻々、変化している。カードのシャッフルされるとき彼は常に瞬間から瞬間へと飛びうつるのだ。他にありえた手のことを考えている余裕はない——いまここに、あの人が〈運〉^{チャンス}と呼び、グラシエラ自身は〈神〉と呼ぶものによって与えられた順列組み合わせがすべてなのだ。このアナキーな実験に彼はすべてを賭ける。それで負けたら、次の賭けに移るだけだ。ためらいがない。そこが自分には嬉しい。あの人からは力がもらえる。勝負の時間がやってきたとき、自分はどれだけ強くいられるのかわからない。しばしば彼女は夜、アルコールによる楽観主義の皮膜を破って、自分が本当はどれほど他人を必要としているかを痛感するのだった、支えのない自分などまるで役に立たないということ。撮影中の映画のセットがいくらか助けになる。建物はみな本物で、視野の中に作りものは一つもない。酒場には本物の酒が並び、売店には本物の食糧が並んでいる。羊、牛、馬、囲い柵も本物だ。小屋は風雨に耐え、中で眠ることができる。フォン・ゲールが去つたあとも——彼がここに来るとしての話だが——何ひとつ変化はないだろう。エキストラ

8 ベラウステギらと共にUボートの乗組員として登場したアルゼンチンのアナキスト（上巻725ページ）。

で来た者がそのまま居座るのも歓迎だ。多くは、次の難民列車に乗り込むまで、しばらく骨休めをしただけ、破壊される前の故郷がどのようなものであったかという幻想に浸りたいだけだ。どこかに行き着きたいと夢見る者もいる。彼らは移動していくだろう。だが他の者たちが来るのだろうか？ それに、軍が統治するまっただ中にこんなコミュニティがあることを、統治する側はどう思うだろう？

だがここが「ゾーン」で一番奇妙な村というわけでもない。旅から戻ってきたエスクアリドーシが語るところでは、イタリアに駐屯していたパレスチナの部隊が、遙か東の地に、百五十年前のパターンに基づいたユダヤ教敬虔主義のコミュニティを作ったそうだった。かつての企業城下町が、気まぐれでせっかちな「水星」の支配下に落ち、いまは町ぐるみでもっぱら郵便配達だけを行っているところがある。東へ走り、また戻り、ソヴィエト地区からその外へ、手紙一枚で百マルクの稼ぎだそうだった。メクレンブルクのある村は軍用犬——ドーベルマンとシェパード——に乗っ取られた。トレーナー以外の人間を見つけ次第殺すように条件づけられていたのだが、そのトレーナーらが死んだかあるいは行方不明になった。犬たちは群れをなして移動し、牧場の牛を襲い、死骸を何マイルも運んで、仲間のもとに届けている。あるいはリンチンチン[＊]よろしく補給品部署に入ってきて、携帯糧食^{クレシオン}を、冷凍ハンバーグを、何カートンもの板チョコを掠奪した。その「犬のくに」に通じる道々には、近隣の村人や研究熱心すぎた社会学者の死体が散乱している。誰もそのくに近づけない。ライフルと手榴弾で武装した一軍が派遣されたが、狼のようにほっそりした犬たちは、夜間に散り散りに逃げ回っていた。軍人のなかに、家々や店を破壊してしまおうといきり立つ者も、村の占拠を望む者もなく、軍は去って犬たちが戻ってきた。群れの中に権力の序列、

9 一九二〇年代にハ
リウッドの人気者となり、
その後長く親しまれた
名犬リンチンチン[＊]は、
爆撃後のドイツ軍の塹壕
でうずくまっていた子犬
の実話をもとにしている。

「調にだ」

「計画を進めますよ」クライヴは答える。できるだけ感情を殺して（いるつもりだが——このごろ妻スコルピアとの関係があまりに耐えがたい）。「^{ハイアー・レベルズ}高位」の方々に対して釈明に大わらわなんです。私も少しは骨休めが必要です」

「おう、あの犬の男か。ねえ、君はセントバーナードを考えてみたことはないかね。でっかくて、毛むくじゃらで、すばらしいぞ」

「ときどきは」クライヴは調子を合わせつつ、「ですが、考えるのは、たいていポイントマンのことです」

「君のタイプじゃないだろう。やめときなさい。あんな年寄りがお気に入りでとは、かなしいねえ」

「マーカス卿！」最後の手段だ。いつもはこのひょろりとした勳^{ナイト}爵士のことを、アンジェリックの名で呼ぶように言われているのだが、今はそれを破るしか、相手の注意を引く方法が見あたらない。「もしこの件で不覚をとるとですね、国家が危機に直面するんです。わたしのところには党内の活動グループからジャンジャン電話がかかってきてますし、郵便箱も昼夜満杯なんですよ——」

「うーむ、君の男性箱を満杯にしてみたいなあ。どうかね、クライヴ君——」

「——おまけにですね、一九二二年委員会の攻勢がやかましいったらありません。ブラッケンとビーヴァーブルック^{*10}も相変わらずです。まるで選挙の敗北などなかったかのような活動ぶりです——」

「ねえ、きみ」^{アンジェリック}天使のように微笑しながら、「危機なんてことにはならんのだ。労働党も

10 共に保守党の大物議員にしてチャーチル首相の腹心。ブレンダン・ブラッケンは戦時中に情報相として政権を支え、ビーヴァーブルック男爵マックス・エイトキンは、航空機製造と物資調達の最高責任者として信頼を得ていたが、七月の選挙で保守党は敗北した。

同じだ。あのアメリカ人を見つけ出すことを、わしら同様望んでおる。あの男を送り出したのは例の黒人集団を壊滅させるためだったんだが、その役に立たんことはもう明白だろう。ドイツをほつき歩いてるだけで、どんな悪さができるというんだ。わしらが把握している限りでは、南米行きの船に乗ったそうだな。小さな口髭をはやした愛らしいやつらの国へ向かってる。しばらくは放っておくのがいいだろう。その時が来たら軍を出せばいい。問題を穏便に解決するためにスロースロップを使ってみたのは試みとして悪くはなかった。だが、最後に出ていくのはいつも軍隊、そうじゃないかね」

「そんなことをしてアメリカが納得するという自信がおりなんですか？」

長い、不気味な忍び笑い。「クライヴ君、きみはほんとに幼いね。アメリカ人というものがわかってない。わしは知ってるぞ。アメリカさんは取引先だからね。彼らはだね、イギリスが自分らの黒いアニマルちゃんをどう扱うか、楽しみに観ておるのだよ——しかし、アフリカというところは、いつもいつも驚かせてくれるねえ。まやに *ex Africa semper aliquid novi*¹¹だ。ビッグだし、遅いし——そのやり方を、後で、アメリカ自身の、何とか、標的グループに使ってみることを考えている。だから、我々の失敗に対して、口ではああだこうだ言うだろうが、制裁を科したりすることにはならんのだ」

「我々は失敗するんですか？」

「我々は失敗するさ、いつもだよ」巻き毛を指先で整えながらマークス卿、「しかしへオペレーション¹²に失敗はないのだ」

そうか！ モスムーンは飛翔の感覚に包まれる。些事の焦燥と政治の懸念と金銭の問題の沼地から浮き上がり、へオペレーション¹²の醒めた岸辺に迎えられのを感じる。足下

11 ラテン語で、From Africa always something new.

12 企業活動、軍事作戦、その他へかれらによる操作の全体を単一の動きとして捉える言葉。

の確かなそこから見れば、自己などは、生のぬかるみの中で、わあわあ喚んでいるアニマルのようなもの。一方、ここへオペレーションの内部に、泣き事などありえない。劣位の自己は存在しない。個我が関わるには、事の進行スケールが大きすぎるのだ。マーカス卿のお屋敷の「機の間」という急須の間で営まれる前戯にしても同じである。あれは、真の権力がつねに誰のもとにあるのか、知らしめるゲームなのだ。鎖につなぐれ、コルセツトで締められながらも、拘束の壁の外側を支配しつづけてきたのは誰なのか。綺麗な「アンジェリーク」の辱めの度合を決めるのは、彼らの気まぐれであって、そこには喜びも、リアルな降伏もない。あるのは「オペレーション」の要求だけ。人にはそれぞれの席次がある。座る人間は変わろうとも、席のオーダーは不変である……

昔からそうだったわけではない。第一次世界大戦下の塹壕で英国兵士は、恥も空想も交えず、お互いをきちんと愛しえていた。突然の死が簡単に襲ってくる状況で、若き同志らの顔に天からの訪問の跡を見いだしていた。泥も糞も腐りゆく人肉もすべて贖ってくれるかもしれないささやかな希望の跡を見いだそうと……あの戦争で世の中が終わった。あれは全面的な革命だったんだ（ヴァルター・ラーテナウが宣言した革命とは方向が違っていたがね）。毎日、新旧の貴族が幾千人、それぞれの信念の光輪に包まれながら、フランダースの、爆音つきのギロチンへ向かったのさ。一日たりと止むことなく落ちてくるギロチンの刃、それを操っていたのは誰だ？ その見えない手が、人民の手でないことは確かだ。ひとつのイギリスの階級が、一定の割合で皆殺しになっていった。志願した者は死んでいった。事情を少しは知りながら志願しなかった者の代わりに死んでいった。にもかかわらず、志願した者たちは、そのうちのある者は、裏切られたことを知りながら、愛し

た、男同士、ヨーロッパが自らの糞泥のなかで死んでいくなかで、愛したのだよ。しかしその生きた愛の叫びは今や遠くかき消され、怠惰で性悪な男色行為があとに残った。最新の〈戦争〉では、死は敵ではなく、きみのコラボレーターになった。高位の者は、いまでも肉のうすきを思い出したかのように同性愛に走るけれども、本物のファッキングはそこにはない。きみが本当にファックされるのは書類の中なんだ……